

『深碧のアンダードッグは神のいる世界で何を思うか？』

rairaibou (風)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世間はグリーンと新しいポケモンチャンピオン誕生の興奮から冷めつつあった。

悲劇の殿堂入りトレーナーグリーンはカントー最難関トキワジムのリーダーとして日々を過ごし、彼もあの敗北を受け入れつつありようやく前を向いて生きていこうとしている。

ある日、グリーンはレッドの相棒であるピカチュウを傷だらけの状態で保護し、レッドがシロガネ山から消えていることを知る。

神を中心とした混沌の中で、グリーンは何を思うのか。

目次

プロローグ

1. 1

1 | アローラの男

1 13

2 30

3 43

4. 59

2 | コガネの少年達

1 76

2 88

3. 107

3 | 『教皇』クワノ一世

1 125

2 129

3 133

4 138

5 144

6 153

7. 160

4 | 復活のR

1 164

2 175

3. 193

5 | エンジュの決戦と『神の子』

4.	3	2	1	6 — クリムゾン レッドの 負け犬	4.	3	2	1
277	272	260	254		239	224	213	202

プロローグ

1.

その夢は、彼の栄光の象徴であり、彼の没落の象徴。彼にかけられた、決してとけない呪い。

彼は、ドラゴンと言われるポケモンたちが、炎や電気も受け付けないう強靱な体を持ちながらも、その実、寒さに弱いことを知っていた。そして、自らの手持ちであるポケモンが、彼らを打ち倒すことのできる寒さを作り出す事ができることも知っていた。

彼は、強靱な体格を持ち、一見すればどんな攻撃も跳ね返しそうに見えるギャラドスが、水と飛行の複合タイプ故に、自分の相棒であるサンダースが繰り出す電気攻撃に太刀打ち出来ないことも知っていた。

彼は、プテラと呼ばれたそのポケモンが、化石から復活したポケモンであり、空を飛びながらも、岩のような肉体を持っていることも知っていた。

彼は、ポケモンに関する殆どのことを知っていた。祖父に託されたポケモン図鑑を完成させるためにカントーを冒険した結果によるものかもしれないし、携帯獣学の祖父を持つ彼の、血筋的な要因もあったかもしれない。

とにかく、彼はセキエイ高原で、四天王最後の一人であるワタルを目の前にしても、その冷静さを失うこと無く、勝つために練り込まれたパーティで彼を撃破した。それは彼が、ポケモンリーグチャンピオンであることの証明するのに十分な結果だった。

チャンピオンと認定された彼は、すぐさま家族にそれを知らせた、特にそれを喜んでくれたのは、祖父だった。祖父はすぐに自分のもとに行くと言って、電話を切った。

そして、彼の元には一人の挑戦者が――

『深碧のアンダードッグは神のいる世界で何を思うか?』

その夢が悪夢へと変貌する前に、グリーンは小さな叫びと共に目を覚ました。

息苦しかった。鼓動は激しく高鳴り、額には汗がにじむ。

その夢を見るのは、ずいぶんと久しぶりだった。ジムリーダーとしての新しい生活を忙しくこなし、気がつけば数年が経っていた、世間は自分をトキワジムのジムリーダーとして受け入れていたが、心はまだ、それを引きずっているようだった。

それを忘れることなど到底出来はしないことだと薄々理解してはいたが、理屈でそれを理解できても、精神はまだそれを受け入れられてはいない。

額と同じように、シャツとパンツも、汗によって不快な湿り気を帯びていることにも気づく、ひどく寝汗をかいていたようだ。冬が明け、そろそろ本格的に春が訪れようかとしているとはいえ、こう汗をかきほど暑くはないはずだった。

大きく、自分が息をできることを確かめるように呼吸をしながら、彼は枕元の時計を手にとる。暗闇でも時刻が確認できるように作られたそれは、今が普段起きるべき時間よりも一時間ほど前であることを、ぼんやりとした発光で表している。

一瞬、もう一時間寝る余裕があるなど彼は思った、だが、それはすぐに否定される。体にまとわりつく寝汗と、寝床にこもっている不快な暖かさは、もう一度体を預けるのを躊躇させるに十分だった。

とても二度寝をする気にはならなかったグリーンは、二匹の同居人を起こさないように静かに背伸びをしながらベッドを後にし、陽の光を迎え入れるためにカーテンを開く。まだまだ自然の残るトキワシテイの空には、まっさらな青空が広がっていた。

『昨日昼頃、タمامシデパート内に野生のポケモンが現れパニックとなった事件について、タمامシ警察局は特に事件性のあるものではなく、単純に野生のポケモンが紛れ込んでしまったただけだろうと発表しました』

シャワーで寝汗を流したグリーンは、歯ブラシをくわえながら朝のニュース番組を眺めていた。別にそれが日課なわけではない、あの悪夢によって作られてしまった一時間を、なんとなく消費しようとしているだけ。あわよくば気を引くようなニュースがあつて、その記憶を塗り替えてくれることも期待していたが、どうやらそれも望み薄だった。

「先日アルフの遺跡で発見された古文書、通称『アンノーン手稿』について、コガネ大学研究チームは、その一部を一般公開する予定であると発表しました」

そのなんとか手稿とやらの詳細をニュースキャスターが説明するよりも先に、グリーンは泡立った歯磨き粉を吐き出しに洗面台に向かっていた。なんとも、平和な時間が流れていた。

☆

本来ならば、トキワジムリーダーとしてそこを管理しているはずの彼は、その日は朝からジムを閉め、生まれ故郷であるマサラタウンを訪れていた。別にそれが職務怠慢になるわけではない、元々トキワジムはカントー最難関で挑戦者も少ない、それに、前任者と比べてしまえば、一日休んだくらいどうってことはない。

それに、あのオーキド博士に呼ばれたと言い訳すれば、大抵のことは許してもらえるだろう。

かくして彼は、カントーで最も携帯獣学が進んでいる場所、オーキド研究所の扉を開いた。

「おい、じーさんー」

オーキド研究所内に、グリーンの声が響いた。携帯獣学の権威に対

して、とても許されるような言葉ではなかったが、研究員達は全員それを微笑ましく聞き流していた。彼らの中にグリーンとオーキドの関係を知らぬものはなく、それを知っていれば、その言葉遣いがただの照れ隠しであることが容易に理解できるからだ。

「おお、グリーン！ よく来たのおー！」

研究所の一番奥でグリーンを迎えたオーキドは、自慢の孫の肩を叩いてその逞しさが増していることを喜びながら続ける。

「早速じゃが、これをお前に預けよう」

そう言つてオーキドがグリーンに差し出したのは、赤く薄い、液晶画面がつけられた機械だった。

勿論グリーンは、それが所謂ポケモン図鑑と呼ばれているものの亜種だろうとすぐに理解した。かつて自分たちが持たされたそれによく似ていたからだ、だが、自分たちが持っているものとは違う。

「新型か？」

「そのとおりじゃ、従来のカントーだけをカバーするものではなく、世界中で存在を確認されているポケモンのデータが入つておる。当初ワシが想定した数は遥かに超えてしまったが、その分、より正確なものになつとる」

へえ、と、グリーンはオーキドから手渡されたそれを手にとつた。自分が持つているものよりも薄く、頑丈そう。何より目を引くのは、液晶に映るポケモンたちの姿かたちが、より鮮明に、そしてカラーで表現されていることだった。

「科学の力つてのは、すげーんだな」

思わず感心して、どこかで聞いたようなセリフをつぶやいたグリーンに背を向けながら、オーキドはその新型ポケモン図鑑をもう一つ手にして、それをグリーンに差し出した。

「後はこれを、レッドに渡しておいてくれ」

その言葉に、グリーンは一瞬口端を歪ませたが、それにオーキドが気づくよりも先に親しげな苦笑いに変えて、それを受け取つた。

「全く、仕方ねえよなあいつは」

しばらく、彼はじつとそれを眺めた。そして、それを持つ親指に、必

要以上の力が加わり、繊細な精密機械を守るための保護をしているプラスチック樹脂が、その役目を果たしている事に気づいた彼は、目障りなものを視界から消すように、それをポケットに収めた。

「なあ」と、グリーンは小さく、小さく呟いた。

だが、新しい図鑑の説明書に夢中であつたオーキドは、それに気づかない。

それに続く言葉を頭の中に浮かべながら、グリーンは、オーキドがそれに気づかないことにいらだちを覚えながらそれを飲み込んだ。

だが、それに気づいてほしければ、簡単なことだ、もう一度、今度はこの研究所の中に響き渡るような大声で、それを伝えればいい。

だが、グリーンはそれをしなかった。

グリーンは、オーキドがそれに気づかなかつたことに、今度は安堵しながら、彼に背を向ける。

孫に要件のすべてを伝えた祖父は、多くの老人が孫にそうするように、軽い挨拶だけを放つ。

ああ、まただ。と、グリーンは思う。

ポケモンリーグを制覇した幼馴染に対する感情を、彼はまだ完全に整理しきれてはいなかった。

もし、自分がポケモンバトルと何の関係もない、祖父と同じように研究者としての道を歩んでいる学生であつたら、レッドは自慢の幼馴染であり、彼に誇りを感じ、道は違えど自分も彼のような素晴らしい人物になろうと決意を新たにしたかもしれない。

だが、彼が栄光を掴むための踏み台として、噛ませるための犬として存在した自分は、素直にそうは思わない。

今でも付き合いは続いている、仲は悪くはないと思う、二人で一つの時代を作った存在として、尊敬もしている。だが、心の奥底のどこかでほんの少し、彼に対する複雑な感情は存在する。

今でも、あの日を思い出せば、あいつさえいなければ、と考えてはならないことが一瞬脳裏をよぎる。そのたびに彼は、自分自身を激し

く嫌悪することになる。無口だが人のいい、尊敬すべきチャンピオンにそんな感情を持つことが、とても浅ましく、恥知らずなように思う。

自らの誇りに纏わりつくその悪夢は、いつまで経っても自分を解放してくれやしない。まるでそれを楽しむかのように、それは心の中に巣食っていた。

☆

祖父の判断は、何も間違っではない。

カントー地方とジョウト地方の間、シロガネ山に続く山道を一人歩きながら、グリーンはできるだけ客観的な思考を試みながら、それを考えていた。

普通のトレーナーならば、それは容易なことではないだろう。カントージョウト近辺では、ハナダの洞窟に次ぐ危険地帯であるシロガネ山付近は、街の中に存在する草むらとは文字通りレベルの違う野生のポケモンたちが生息している。彼らのうち一匹が、気まぐれに山を降りるだけで、人々はとたんにパニックなり、それを山に返すためだけに、バツジを八つ集めたトレーナーやジムリーダー、それに準ずるトレーナーが出動することだってある、当然その背景には、かつて彼らによって人間に被害が出たという事実がある。

それほどまでに危険な山道を、考え事をしながら歩くことは、グリーンが優れたトレーナーであることの証明だった。そもそも、シロガネ山を自由に闊歩することを許されたトレーナーが、彼を含め、この世界に何人いるだろうか。

そう、だからこそ、オーキドの判断は、何も間違っではないのだ。シロガネ山にいるトレーナーに用があるとして、自分ではそこに行

くことはできず、そのトレーナーの幼馴染で、実力のある孫がいるとすれば、ほとんどすべての人間が、彼にその要件を託すだろう。

彼の聡明な頭脳が、そうやって私情を抑えようと抑えようと考えるたびに、考えてはならぬはずのその記憶が、脳内をフラッシュバックする。

果たしてあの時、祖父の視界に、自分は入っていたのだろうか。

チャンピオンとして、幼馴染であるレッドに立ち向かい、敗北し、元チャンピオンとして祖父を迎えた自分を、彼は、どのような目で眺め、そしてそれは、きつと今にも続いている。

逆だつてあり得たのだ、と、グリーンは草むらから様子をうかがっていたドンファンを目で牽制しながら思う。

自分がチャンピオンとしてシロガネ山に君臨し、レッドはオーキドの小間使いとして、自分のもとに訪れる。そんな今だつて、あり得た。全ては、あの時の敗北がすべて。

慢心したことが罪なのか、自分の知識を過信したことが罪なのか、ポケモンを信じなかったことが罪なのか。

否、きつと違うのだろうか。

あの時、あの一番に、敗北したことそのものが罪なのだ。

果たして、何が間違っていたのか、時を巻き戻してやり直せるのなら、どこからやり直せばいいのか。

チャンピオンとしてレッドと戦ったあのときか。

シルフカンパニーでレッドを戦ったあのときか。

ポケモンタワーでレッドと戦ったあのときか。

サントアンヌ号でレッドと戦ったあのときか。

ハナダシティでレッドと戦ったあのときか。

トキワシティでレッドと戦ったあのときか。

オーキド研究所で初めてレッドと戦ったあのときか。

それとも、レッドからイーブイを横取りしたあのときか、あのとき

素直に待っていたら、あのピカチュウが自分のものになったのではないのか。

一瞬脳裏にそれが浮かび、グリーンは強烈な自己嫌悪に陥りながら頭を振った。あの悪夢の影響で、とんでもないことにまで考えが及んでいるに違いない。

そう考えることが間違っていることはよくわかってはいるはずだった、今の自分の状況は、決して恵まれていないわけではない。社会的な地位を考えれば、レッドよりも遥かに進んでいるかもしれない。たとえそれが一瞬だけであろうと、チャンピオンであつたということの素晴らしさだって、理解していないわけではない。

だが、それをどれだけ自分に言い聞かせようとも、あの時の、あの敗北で感じたすべての感情を無にすることはできなかつた。

☆

「おーいー！ レッドー！」

シロガネ山。その少し奥に難なく進んだグリーンは、あらん限りの大声を上げて幼馴染の名を呼ぶ。

それは、山道での考え事で抱えたストレスを発散しているからではない。

シロガネ山の深部は、一々人を探していたらうんざりするほどに広い、当然レベルの高い野生のポケモンたちの縄張りでもあるから、いくらグリーンが優れたトレーナーだとしても、事あるごとに彼らの相手をするのはうっとおしい。

別にレッドは地縛霊のたぐいではないのだ、呼べば普通に現れる。だったら呼ばばいい、それだけのこと。

「jeeさんから新しい凶鑑を預かってんだ！ すげえぜー！ 薄いし、なんとと言っても液晶がカラーだ！」

とりあえずそう叫んでから返答を待ってみるが、何も反応がないこ

とにグリーンは少し驚いた。そりやあレッドは人に比べて口数が少ないが、礼儀を知らないわけではない、少なくとも客人を無視するよ
うな人間ではないはずだった。

一瞬、グリーンは不吉な予感を感じたが、すぐさま小さな笑いとともにそれは飲み込まれる。過去に一度だけ、同じようなことがあったことを思い出したのだ。そう言えばあの時は、インスタントラーメンを食べている途中だったレッドが、それが冷めて伸びてしまうことを嫌って、こちらに反応しなかったのだ。

「今からそつちに行くからな！」

ひとときわ目立つ高台に向かってそう叫んだグリーンは、頭をかきながらそれに向かって歩を進める。

あたり一面を見下ろすことができるその高台は、レッドがシロガネ山での生活の拠点をおいている場所だった。

☆

「おい、レッド」

スキを伺う野生のゴルバット相手に、微塵のスキも見せずにその高台を登りきったグリーンは、その頂上に設置されていたテントに向かってそう言った。頂上に誰もいなかったのだ、自然とレッドはその中にいるのだろうと考えたのだ。

だが、それに返事は返って来なかった。それどころか、何の音も聞こえない。

「おい」

グリーンはテントに近づきながらも一度そう言った。だが、やはりそれにも返事は無い。

グリーンは、先程の不吉な予感は、間違っていないか、焦り始めていた。よく考えてみれば、それは当然のことだ。こんな誰も来ないところで一人で暮せば、もしも、もしもの時が起こったときにどうするといふのだ。

「開けるぞー」

半開きになっていたテントの入口を掴んで、無理やりチャックを開く。

多少のプライベートを侵略することは承知で、グリーンはその中を覗いた。

しかし、そこには誰もいなかった。中途半端に広げられた荷物とレポート、そしてそれらを収納したであろうリュックサックが、半開きになって倒れている。

グリーンは、胸の中を、冷たさを帯びた風が駆け抜けるような感覚を覚えた。彼は慌てふためいてそこからあたり一面を見下ろし、声を張り上げる。

「レッドー」

鼓動が早くなるのを感じた。暑くもないのに、汗がじわつと染み出してくる。それが冷や汗と呼ばれるものだろうと、彼は思った。

何かが、幼馴染の身に起きているのだと、彼は確信していた。こんなこと、あり得ない、荷物もレポートもほっぴりだしてシロガネ山を離れるなんて、あいつがそんなことをするはずがない。

「出てこいー」

焦りと怒りの混じった声とともに、グリーンはモンスターボールを二つ宙に放り投げた。すぐさまそれからピジヨットとサンダースが飛び出す。

「レッドを探すぞ」

そう指示して、グリーンはすぐさま高台から駆け下りた。

☆

ピジヨットのけたたましい鳴き声が耳に届いたグリーンは、すぐさまサンダースの名を呼びながらそこに向かっていった。

やがて視界の中にピジヨットが入る。彼は大きな岩の上に止まっているようだった。

「いたかー」

少し遠くからグリーンがそう叫ぶ、しかしピジヨットはそれに好意

的な反応は返さず、それでいて、彼の視線は大きな岩の根本にある。少なくとも、よく知る人間と一緒に仲良くと言った状況ではなさそうだった。

ようやくそこについたグリーンは、最悪を想定しながらそこを覗く。

「嘘だろ……」

その光景は、彼の思う最悪ではなかった。

しかし、それは、彼が思いもよらなかった最悪だった。

そこにあつたのは、体中に傷を作り、ぐったりと地面に体を預けているピカチュウだった。

すぐさまに、グリーンはそれがレッドの手持ちであるピカチュウだと理解した。そもそもシロガネ山のピカチュウは生息していないはずだし、ピジョットやサンダーズの反応を考えると、それ以外にありえない。

だが、同時にそれが信じられない。レッドの手持ちの中でも最強格であつたピカチュウが、このような姿になっているなど、考えられないことだった。

否、全く考えられないことではない。いくらレベルが高かろうと、シロガネ山の野生のポケモン達と連続で戦い、それを回復する暇がなければ、こうなる可能性はある。

つまりそれは、ピカチュウを回復してやる人間のパートナーが、存在しなかったことを意味していた。

「一体何が……」

言葉を失いながら、グリーンはピカチュウに手を伸ばす。

傷のない部分を撫でると、そこはまだかろうじて温かく、そして何より、わずかにではあるが呼吸と鼓動を感じる事ができた。

「生きてる」

誰に言うでもなくそうつぶやいたグリーンの次の行動は素早かった。

彼は上着を脱いで地面に広げると、血で汚れることを一切気にせず、ピカチュウを優しく持ち上げてそれに包む。

「急ぐぞ」

今度は二匹の相棒にそう伝えた彼は、なるべく急いで、それでいて激しい動きでピカチュウに刺激を与えないように注意しながら、シロガネ山の出口に向かった。

そして、今、シロガネ山にレッドがいらないことを確信する。

あのレッドが、最も古い相棒であるピカチュウを見捨ててどこかに行くなんてあり得ない。それは、立場を逆にしても同じだろう、ピカチュウがレッドの傍を離れるはずがない。むしろこれらの傷は、レッドを探しながら、野生のポケモンたちと戦った証拠だ。

なにかとんでもないことが起きていることだけを理解しながら、グリーンは胸の中で小さくうごめくその生命をなんとか繋ぎ止めなければと、レッドとの戦いを、胸の中のそれが自分のポケモン達を倒していく光景を、なんとか胸の奥に押し込めて、シロガネ山を後にした。

1―アローラの男

1

その男は、次を待ち構える相棒をボールに戻し、対戦相手のトレーナーに憐れみの視線を飛ばしていた。

「カントーは進んでいる土地だと聞いていたが、どうやら勘違いだったのかもしれないなあ。都会を神聖化する愚かな田舎者たちがそう言ったのか、はたまた、自分たちを優れた人間であると信じたい都会人の選民思想がそうさせたのかはわからんが、私もその思想に感化されていたことを考えると、これは笑えない冗談だな。屋敷の守衛の者たちのほうが、もうちよつとまともな戦いをする」

相手のトレーナーは、その明確な侮蔑に対し、頬の内側を噛むことでしか不服の表現をすることができなかつた。カントーバツジを八つ集めている自分が、ここまで無様に敗北するという現状は、その男にそう言わせるのに十分すぎる結果だった。それに対して声を大にして反論するには、自身の強さが、あまりにも不釣り合いだった。

押し黙る相手に呆れの感情も覚えつつあったその男は、雲ひとつない空を見上げて呟く。

「やはり、あの男しかいない」

雲ひとつない空は、その男を笑顔にした。

「レッドしか、レッドしかいないのだろう」

その空を、神と共に眺めていることを、その男は疑いもしていない。

「彼こそが、神への供物にふさわしい」

☆

もう時代遅れになりつつあるブラウン管テレビには、四人の少年が線路の上を歩いている映像が写っていた。時間としては、テレビ局が最も力を入れている番組が流れていても不思議ではない夜の時間帯にあまりにもふさわしくないはずいぶんと古いその映画は、持ち主の好みなのだろう、ビデオテープで流されている。

「なにか、連絡はありましたか？」

グリーンは椅子に座っている女性、レッドの母親に向かってそう言った。いくら小生意気な少年でも、年上の大人に対して敬語を使うくらいの常識はあったし、何より男というものは、それが誰であれ、母親というものには弱い。

「いいえ、なにも」と、レッドの母親は答える。

シロガネ山の騒動から二日が経っていた。ピカチュウを保護したグリーンは、なんとかレッドと連絡をとろうと試みていたが、このご時世にポケギアすら持つておらず、住所があるわけでもないレッドを捕まえることはできなかった。

唯一レッドの連絡先と考えることができる彼の実家にもシロガネ山の騒動は伝えたが、日にちが経つてもレッドからの連絡はないという。

今日も、レッドの足取りをつかめなかったことに少し焦りを感じるグリーンに、レッドの母親は「ねえ」と声をかける。

「そんなに焦る必要は無いと思うの」

それは、意外な言葉だった。少なくとも、グリーンはそれを予測していない。

返答に詰まる彼に、レッドの母はさらに続ける。

「あの子がふらつといなくなるなんていつものこと、冒険に出たときだって、私に何の連絡もなかったのよ。だから、今回もきつとそうよ、あの子なら、またひよつこりと帰ってくるような気がするの」

それは、あまりにも楽観的な感覚だとグリーンは少し驚いて思っていた。

確かに、レッドは少し突発的で、周りに何も言わずに突っ走る傾向があったかもしれない。だが、今回のことはただごとではない、あの

レッドがピカチュウを置いてどこかに行くだなんて、考えられない。母親ならば、それがわかりそうなものなのに、と、グリーンがそれを説明しようとした時、彼は、目を伏せたレッドの母親の足が、少し震えていることに気がついた。

それを見て、グリーンは気づく。

レッドの母親は、決して楽観的な感覚から沿う感じているのではない。彼女は、自分の息子がどこかで無事であつて欲しいと願うばかりに、自らに都合のいいような考えを、妄信的に信じ込んでいるのだと。

だからグリーンは、それ以上彼女を責めなかった。

「確かに、そうかも、しれませんね」

彼は感情を押し殺み、少し微笑んでそう言った。

☆

「じいさんー」

オーキド研究所内に響いたグリーンの声に、研究者達はそれまでと違って少しピリついた雰囲気を作った。グリーンの今の心境を考えれば、研究者たちがそうなるのも無理はなかった。

憔悴しきったピカチュウを保護したグリーンは、それをポケモンセンターではなく、オーキド研究所に連れて行った、研究所にポケモンセンターと同じ回復施設があることを知っていたし、何より、そこにはポケモンの関する最高峰の知識が揃っていることも知っていたのだ。

「おお」

オーキドはそれに険しい表情で振り返り、すぐさまにその傍にあつた簡易的で小さなベッドに視線を戻した。

そこにあつたのは、一面の白の中にうごめく、白と黄色のまだらだった。体の半分以上を包帯に巻かれたその黄色は、小さくではあるが、確かにゆつくりと膨らみ、そしてゆつくりとしぼむのを繰り返す。

「もう、回復したのか？」

グリーンは祖父のもとに歩み寄り、そのベッドの中、眠っているピカチュウを覗き込み、包帯の隙間から見えるその表情が、幾分か穏やかになっている。それを確認して、グリーンの中にあつた大きな不安が、ほんの少しだけ和らいだ。

グリーンの判断は、結果的に大正解だった。『死と瀕死の間』にあつたピカチュウは研究者達によって適切な処置をなされ、気力と体力の回復を待つてから回復施設を利用するという判断がなされた。

「いや、まだじゃ、回復したあとのことを考えて、お前が来るのを待つておつた」

「俺を？」

予想外の返答に、グリーンが聞き返す。

だが、オーキドの言葉は変わらずだった。

「お前がいなくてこのピカチュウはコントロールできんじやろう。この子を止めるトレーナーがいなければ、またレッドを探すために無茶をする」

オーキドの言葉にグリーンはハツとした。確かに祖父の言う通り、他人のポケモンでありなおかつかなりの高レベルであるピカチュウを扱えるのは、この近辺では自分しかいないだろう。そして、自分がその役割を果たさなければ、ピカチュウが再びシロガネ山に向かうかもしれないこともそのとおりだ。

心の何処かで、そのピカチュウもまた一匹のポケモンであるということが頭から抜け落ちていた。

「頼んだぞ」

オーキドは、空のモンスターボールをグリーンに手渡した。グリーンはそのの意味するところを今度はすんなりと理解する。

「ピカチュウ」と、グリーンはそれをピカチュウの視界に入れて揺らす。

ピカチュウは、一瞬それから顔を背けるような素振りを見せたが、もう一度グリーンがその名を呼ぶと、今度はわずかに頷いて、ボールの中に吸い込まれていく。

その仕草を見て、やっぱりレッドの手持ちだなど、グリーンは再び確信した。そのピカチュウは、ポケモンにしては珍しく、モンスターボールに入ることを嫌っていた。いつも傍らにピカチュウを連れていたレッドが、ポケモンセンターでは大変なんだと苦笑いをしていたのを思い出した。

「じいさん」

グリーンの言葉に、オーキドは彼からモンスターボールを受け取り、それを回復装置にセットした。

「リスクはあるのか？」

「わからん、手は尽くしたが……」

回復装置が起動し、聞きなれた音楽が流れる。本来であれば手持ちのポケモンたちが元気を取り戻す喜びのその音楽が、今は緊張と、不安を煽る。

回復装置が意味をなさなければ、それは、そのポケモンがもうどうあがいても助からないことを意味している。その絶望感は、味わったものにはわからない。例えばそう、グリーンのように。

音楽が鳴り終わり、回復装置が停止する。技術の進歩は、彼らが緊張と不安に体をなれさせることを許さなかった。

「俺が」

グリーンはオーキドを手で制し、自らが回復装置からボールを取り出した。別に深い意味があるわけではない、ただ、オーキドよりも彼のほうが、より早くその息苦しさから開放されたかったのだ。その先にあるものが、安堵なのか、より深い苦しみなのかは、そのときはまだわからない。

だが、その安堵は予想よりも早くやってきた。そのモンスターボールは、グリーンが装置から取り出してすぐにカタカタと震え、次の瞬間には、勝手に開いて中からピカチュウが飛び出してきたのだ。

それに驚きの声を上げながら、グリーンはピカチュウを胸に抱えた。いい反射神経だった。

その様子見を見て、オーキドが「おお」と、感嘆の声をあげる。

「良かった、治療は成功のようじゃ」

腕の中でジタバタともがくピカチュウをなんとか抑えながら、グリーンもオーキドと同じことを感じ始めていた。これだけ動いているのだ、少なくとも先程よりかは元気に違いない。

「よーしよし、落ち着け、落ち着けよ」

グリーンは腕の中で暴れるピカチュウをなんとかなだめようとした、ピカチュウが落ち着かない理由はよく分かる。彼はレッドを探すために再びシロガネ山に向かおうとしているのだろう。もしかしたら、自分が今どこにいるのかもわかっていないのかもしれない、ほんの少し前まで、彼は意識すら朦朧としていたのだ。

グリーンが少しそれに手を焼き、思わずピカチュウがグリーンの手からこぼれそうになった時、グリーンは腰にあったボールが震え、彼の手持ちであるサンダースが飛び出して一つピカチュウに何かを語りかけるように鳴き声を上げた。

それがどのような意図のあるものかはグリーンたちにはわからなかったが、ピカチュウはそれに我に返ったように動きを弱め、少し周りをキョロキョロと見回した。その途中で、抱えているグリーンとも目が合う。

「どうも」と、グリーンは言う。

ピカチュウは、ようやく今の状況を理解しようとする始めたように、周りに集まって研究員たちやオーキドを視界に入れ、そこが懐かしき場所であることを飲み込んだ、彼は今度は短くチツチとグリーン相手に鳴き声を上げ、腕をバタつかせて自分を下ろすように要求した。今度はグリーンもすんなりと彼を下ろす。

ピカチュウは鳴き声を上げながらサンダースに近づいた。サンダースも鳴き声でそれに答えて、二匹は何らかの意志の交換を行い始めた。

「ひとまずは、安心だな」

「そうじゃのう」

グリーンとオーキドは、ようやく一息ついた。

「この先はどうするのじゃ？」

オーキドの言葉に、グリーンは少し考えて答える。

「レッドが見つかるまでは、俺が預かろうと思うんだけど」

「ああ、それが一番いいじゃろうな」

見れば、ピカチュウの耳と尾が、先程と違って悲しそうに垂れ下がっていることに気づいた。サンダースが、うまく状況を噛み砕いて説明してくれたのだらう。

「安心しろよ」

グリーンがピカチュウを後ろから抱え上げながら言う。

「警察にも言ったし、知り合いにも声をかけてある。俺だって、時間がある限りはあいつを探すさ。今日はもう遅いから、ゆつくりと休もう」

ありがとうな、とサンダースにも語りかける。彼女は少し心配そうな目線をピカチュウに向けた後に、自らグリーンのパールに戻っていった。

「じゃあ、俺は帰るよ。ありがとなじいさん」

「おお、気をつけて帰りなさい」

「この埋め合わせは、またどこかで」

「無粋なことを言うな、いつでもワシを頼ってくれ」

笑顔を見せるオーキドに、グリーンは更に言う。

「じゃあさ、虫除けスプレーを一本なんとかしてくれよ、別にここらへんのポケモンに苦戦するわけじゃねえけどさ、今日はちよつと気分じゃねーわ」

☆

「ただいま」

カード式の鍵をポケットに収めながら、扉の向こうの暗闇に向かってグリーンが言う。誰かが返事をするわけでもない、誰もいないのだから。

短い廊下を渡ってから馴れた手付きで壁のスイッチを押し、一日ぶりに部屋に明るさが戻る。

ポケモンと暮らすために作られた必要以上に壁のない一体型の部

屋は、主であるグリーンの年齢を考えれば不自然なほどにきつちりと片付いている。それは、予告なしに訪れる姉の存在に頭を悩ませたグリーン少年の、精一杯の抵抗だった。

「ちよつと待ってな」

抱えていたピカチュウをひとまずベッドの上に下ろすと、グリーンはベッド下の収納を引き出して漁る。

「確かこの辺に、予備の籠が……」

グリーンがかがむのと同時に、彼のボールから二匹のポケモンが飛び出した。ピジョットとサンダースだ。

彼らは一旦ベッドの上に降り立ち、まだ少し慣れない部屋に緊張しているピカチュウに頬ずりした後、籠と毛布で作られた彼らの寝床の中に飛び込んだ。それはずいぶんと安作りだったが、彼らはそれが気に入ってるようだった。

「そいつらも、家ではボールから出るんだよ」

目当ての籠を見つけたグリーンは、同じくベッド下の収納から、それに入れるための毛布を取り出してピカチュウのための寝床を作った。

「じゃ、お前ら、新入りにも優しくしろよ」

彼らの寝床の直ぐ側に新しいそれを置いたグリーンは、冗談っぽく二匹に言った。二匹は機嫌よくそれに鳴き声で答え、ピカチュウのために作られた寝床を少し弄って整え、ピカチュウを呼んだ。

ピカチュウもそれに答えてトコトコとその寝床に向かう。グリーンの手持ちの中でも古参のサンダースとピジョットは、レッドのピカチュウとはほとんど顔なじみの存在だった。

身体的には回復したとはいえ、精神的には相当参っていたのだろう。ピカチュウはそれに入って少し体を捻って毛布を整えると、すぐにスヤスヤと寝息を立て始めた。

グリーンはそれを見届けてから、自身も寝る支度を整えるために浴室に向かった。彼もまた、ひどく疲れた一日だった。

☆

家に帰ってからは特に何のトラブルもなかったな。それがベッドの中で今まさにまどろみに身を任せようとしていたグリーンが思っていることだった。

しかし、小さな鳴き声と共に彼の頬に触れるものがあることに気が付き、彼は全く想定のできない何かが起きたのではないかと一抹の不安を覚えながら目を開く。

暗闇に慣れたグリーンが目についたのは、新入りのシルエットだった。

「どうした?」

ピカチュウの頭や耳の付け根を撫でながらグリーンが彼に問う。見れば、彼の耳は垂れ下がり、しっぽも元気がない。聞けば、何かを懇願するように、小さく小さく鳴いていた。

グリーンは、ピカチュウが求めているものがなんとなく理解することができていた。もしそれが勘違いならばとんだうぬぼれだなど考えつつ、彼はピカチュウと向き合うように体を横向きにし、掛け布団をめくってスペースを作る。

ピカチュウはそれに耳と尻尾を少し反応させると、グリーンが誘うままにそのスペースに赴き、彼の胸の中でクルリと小さくなった。

それに掛け布団をかけてやりながら、グリーンはピカチュウを抱えるように腕を回し、ピカチュウはそれを拒絶しなかった。

グリーンはポケモンではない、だからピカチュウの心境すべてが分かるわけではないし、彼の置かれている境遇のすべてを理解できるわけでもない。

だが、ポケモンを残して去るということが、トレーナーとしての倫理観から大きく外れたものであり、その理由が、残されたポケモンの心境を察することにある事は知っているし、だいたい想像ができる。「寂しかったよな」

本当は、それ以上の苦しみを、ピカチュウは感じていただろう。だが、人間であるグリーンは、それ以上のものを想像できない。

何やってんだよ。

グリーンは、幼馴染に対してそう思った。

ピカチュウを落ち着かせるために体を撫でてやると、彼の毛並みがひどく乱れていることによく気がついた。明日、実家によって姉にトリミングしてもらおうと思った。

「心配すんな」

サンダースやピジョットを起こさないように、小さな声でピカチュウに語りかける。尤も、人間よりはるかに優れた聴覚を持つ彼らにとって、それは意味を成さないことなのだろうが。

「もう少し待ってりゃ、きつとひよつこり帰ってくるさ」

本心からの発言ではなかった。だが、彼を安心させるためには、そう言わざるを得なかった。もしかしたら普段より高鳴っているかもしれない鼓動に、彼が気づかないことを、グリーンは祈っていた。

その言葉が、レッドの母に言われた言葉とほとんど変わりがなく、とに彼が気づいたのは、その言葉が、寂しさに震える自分への愛から生まれたものだと思ったのは、夢の中で、彼がワタルを倒した頃だった。

☆

「貴女のような素晴らしい女性に出会えたことを、私は神に感謝せねばなりません。我が故郷のアローラにも、貴女のように美しい光景は存在しないでしょう。アローラの神々が美しさに嫉妬しないことに、今日ほど喜びを覚えた日はありません。貴方の存在への感謝に送るべきグラデシアの花すら、貴女と並べられることを恥じて薄紅に染まるに違いないでしょう」

経験者ならば容易に理解できる感情だが、身内の人間が口説かれて
いる場面に遭遇するのはキツイ。できれば今すぐに踵を翻してその

場を後にしたくなるだろうし、その後その身内と二人きりになったときに、悪態の一つも付きたくなるかもしれない。

実家の玄関を開いたグリーン少年を待ち受けていたのは、そのようなたぐいの試練だった。彼はこれに言葉をなくして立ち尽くし、彼の後について玄関をまたいだピカチュウも、全く見覚えのないその男に戸惑っているようだった。

テーブルを挟んで姉の対面に座る今にも姉の手を握ってしまいそうなその男は、グリーンの登場にも全く動揺していないようだった、何なら彼の前でもう少し口説き文句を重ねようとしていてもおかしくはない。こなれた着こなしのダークスーツは、彼の余裕を感じさせた。

「やあどうも」

その男は勿体ぶった動きで立ち上がると、そのままグリーンに右手を差し出した。

グリーンはようやくその状況を理解しようとする始め、その男が自分より長身で、よく日に焼けた肌色をしていることを認識した。

「トキワジムリーダー、グリーン君だね。私はサケイ、一つ君に頼みたいことがあって、家にお邪魔させてもらったよ」

戸惑いながらも、グリーンはサケイの右手を握る。分厚いながらも少し硬さのある感触は、サケイがグリーンやナナミのような若い人間ではないことを物語っていた。

するとサケイが突然にその場にかがみ込んだので、グリーンは驚いて一瞬身構えたが、サケイは彼の足元にいたピカチュウ相手に視線を合わせる努力をしながら、同じく右手を差し出して、ピカチュウの小さな手を握った。

「俺が目的のようには見えませんでした」

どうやら悪い人間ではなさそうだとグリーンは判断し、本気半分戯れ半分に冗談を言った。勿論、先程のナナミに対する口説きへの皮肉だ。

グリーンの冗談に、立ち上がったサケイは笑顔を見せながら答える。

「それが礼儀さ、女性の努力を尊重しなければその国に未来はない。突然の訪問にもかかわらず私を招き入れて入れた君のお姉さんに対する感謝もあるがね」

「トキワジムに来ればより確実だったのに」

「私もそう思ってた昨日トキワジムを訪れたんだが、あいにく留守だったようですね」

ああ、と、グリーンは唸った。

「それはすみません。ここのところ空けることが多くて」

グリーンは謝罪に、サケイは手を振りながら笑って答える。

「構わないさ、私がバッジを集めようと躍起になっているカントーのトレーナーなら話は違ったかもしれないが」

その言葉を、グリーンは不思議に思った。彼はサケイがジムバッジ取得のために自分に挑戦しに来たのだとほとんど確信していたからだ。八つ目のジムバッジであるグリーンバッジには、中年の挑戦者も多い。

「早速だが、レッドというトレーナーが今どこにいるのかが知りたい」

サケイはその言葉を、まるで初めて入ったアパレルショップで店員にジーンズの場所について問うように、なんでもなく言った。

しかし、グリーンとナナミ、更にピカチュウはそれに表情を固くし、家の中に緊張感が生まれる。

尤も、こればかりは仕方がない、サケイと彼らの中にある『今のレッド』の認識の違いがありすぎる。

その認識のギャップをサケイも感じたのだろう。彼は少しだけ考えるような沈黙を作った後にグリーンに問う。

「これは聞いたらまずいことだったかな？」

それは何も間違えていることではなかったが、グリーンは「いや」とそれを一旦否定してから続ける。

「今はちよつと連絡が取れなくなってるんですよ、あいつはポケギアも別荘も持つてるわけじゃないから、今すぐにつてなると難しい」

グリーンの返答に、サケイは「ふうん」とため息のように鼻を鳴らした。

「そうか、それなら仕方がない。だが、そうなれば、私もかなり計画を変更しなければならなくなるなあ」

「計画？」

グリーンはサケイの言葉の一部を返して彼に問う。計画と言うその単語が、彼には少し物騒に聞こえたからだ。

「そうとも、これは個人的な話だがね」

サケイはそう答えてから一拍置き、グリーンたちがそれを語ることを拒否しないことを確認してから続ける。

「新しい事業を起こすことになったんだ。私の故郷、アローラ地方を大きく変えることになる通信事業、アローラと世界をつなぐポケモン転送システム。できれば、いや、絶対に失敗したくはないし、失敗する訳にはいかない」

グリーンは、彼の言葉に頷いたものの、心の中では首を捻った。そのこととレッドとのことがまだ結びつかなかった。

しかしそれは、サケイの次の言葉で繋がりを持つ。

「だから私は、レッドとの戦いを神に捧げることにした」

尤も、それはあくまでサケイの中だけでの繋がりであり、グリーン達はそれを唐突なものだと思った。

「神？」

彼らを代表して、グリーンが一番の疑問をぶつける。

「そう、神だ」

サケイがなんでもないのでそれを繰り返したので、室内にはまた別の緊張感が漂う。

しかしサケイは、その緊張感にすら笑顔を作った。

「勿論、君たちカントーに住んでる人々からすればそれが不自然で理解の中にはないことだということとはわかっているよ」

だが、と言って続ける。

「これはジンクスのようなものだよ、例えば私が神を尊重することなく事業を始めれば、それをしなかったことが生涯の懸念になるかもしれないし、もしそれに失敗してしまえば、神への尊重を失っていたことを生涯悔いるだろう。つまりはこれも、新しい何かのために行うべき下準備のひとつなんだ。やれることは全てやってから何かに望みたいと思うのは、君たちも同じだろう？」

グリーン達は、まだその説明に釈然とはしていなかったが、ひとまはらずは頷き、そしてサケイは続ける。

「私達の故郷であるアローラ地方は、それぞれの島に四匹のポケモンを神として祀っている。私の生まれたメレメレ島が祀っているのは戦いの神カプ・コケコ。その神は何よりも戦いが好きで、私達アローラのトレーナーが、ゼンリヨクの戦いを捧げることが望んでいる。だからこそ私は、最高のトレーナーであるレッドとの戦いをコケコに捧げるために、今日、ここに来たというわけさ。見事に空振りだったけどね」

一瞬、サケイは心底残念そうな表情を見せるがすぐに持ち直し「まあ、それでもこんなにも美しい女性と知り合うことができたのだから後悔はしていないよ」と、ナナミを口説く。

「それじゃあ、失礼しようかな。ナナミさん、お茶と笑顔をありがとう」

そう言って玄関に向かおうとしたサケイに向かってグリーンが言った。

「この後は、どうするつもりなんですか？」

「この後とは？」

「その、神への捧げ物は、どうするつもりなんですか？」

「さあね、それは今から考えることにするよ。心配してくれてありがとう」

サケイはグリーンの言葉を自らへの心配だとして受け取ったが、しかしグリーン你真意はそうではなかった。

それを証明するために、グリーンは言う。

「どうして、俺じゃダメなんですか？」

サケイを見上げる瞳には、刺すような非難と、そして戸惑いがあった。少しトーンの変わったグリーンという言葉に、ピカチュウは小さく鳴いて彼のズボンの裾を引くが、彼はそれに気づかない。

神に捧げる戦いの相手にレッドを求めろ。サケイのそのような考えは理解ができる。そして、そのあてが外れて落ち込む気持ちもわからないでもない。

だが、ここまで、ここまで明らかに、サケイの視界に自分自身が入っていないことを、グリーンは屈辱的に思っていた。

サケイはそれに困惑の表情を見せ、そして、自身の失態に気づいてグリーンから目をそらした。

「申し訳ない、年甲斐も無く舞い上がってしまったって周りが見えていなかったようだ。許してほしい」

それは誠意ある謝罪だった。だが、グリーンはそれに納得はしていない。

「俺が、レッドに負けたからですか？」

サケイはグリーンの言葉に返事をつまらせる、それは紛れもない事実だったからだ。そして、その沈黙は、サケイがそれを肯定していることを意味している。

それまで彼らのやり取りを黙って聞いていたナナミは、その沈黙を破らなければならぬと考えた。だが、どうすればそれをなすことができるのかわからない。

そしてサケイは、それ以上の沈黙よりも、すべてを包み隠さずグリーンに打ち明けることを選んだ。

「私はこれまでカントーで数多くのトレーナーと戦った。その中にはカントーでは有名なトレーナーもいたし、君の管轄であるグリーンバッジを所持しているトレーナーもいた。だが、彼らは私とカップ・コケコを満足させるような全力の戦いをするとはなかった。私はね、彼らにカントー最強のトレーナーは誰なのかと聞いたんだ、彼らは一様にレッドの名を出し、彼の威を借りて私を睨むんだ。まるで、彼ならば自分の代わりに私を倒すのではないかと期待しながらね」

彼はそこで一拍置いて、グリーンが異を唱えないことを確認してから

ら続ける。

「誰も、君には雪辱を委ねなかった」

屈辱的な言葉のはずだった。だがそれは、カントーのトレーナーであるならば誰もが理解している、あるいは理解できる言葉だった。

だからと言って、ハイそうですかと引き下がれるはずもなかった。もしグリーンが、そこらへんにいる取るに足らないようなトレーナーだったならば、苦笑いをしてそれを肯定することができただろう。サケイは、彼にそれを求めていた。

だが、グリーンには実力があつた、地位があつた、それに基づくプライドもあつた。

だから彼は、それに噛み付いた。

「もし、あんたがレッドを倒したとしよう」

表情こそ変えなかったが、サケイはそれに疑問を含んだ相槌を打ちながら、グリーンの口調が変わつたことに内心苦笑した。若い、彼はあまりにも若すぎる。

「もし、あんたがその時にレッドに同じ質問すれば、きつとあいつはこう答える。最強のトレーナーは、グリーンだと」

ふふ、と、サケイ今度はその笑いを隠さなかった。

「仮定の話はあまり好きじゃない。だけど、悪くない誘いだね」

彼はベルトに手を伸ばし、そこにセットされているモンスターパールをそつと撫でた。

その時グリーンは、彼の右手に腕時計のような腕輪がはめられていることに気がつき、それを不思議に思った。サケイの左手には、ずいぶんと高そうな腕時計が自己主張していたからだ。

しかしその疑問は、サケイの返答によって一旦かき消される。

「じゃあ、戦ってみよう。私達のゼンリョクの勝負が、戦いの神、カプ・コケコに届くことを願いながら」

グリーンはそれに頷きを返して、サケイに道を譲る。戦いにうつつけの場所、トキワジムがグリーンの支配下にあることは、サケイも知っているだろう。

「それじゃあ、お先に待っているよ。ああ、そうだ、もしよろしければ、

貴女も見に来ていただけると嬉しいな」

ナナミに一つ会釈してから扉を開いたサケイの背中を、グリーンは睨みつける。

陽気な南国の島々、アローラ地方からやってきた能天気で礼儀を知らない色ボケを、どの様に倒すことがより良いのか、彼は考えている。考えを巡らせる彼の裾を引っ張るピカチュウに、グリーンはようやく気がついた。

「姉さん」と、彼は姉を呼び、足元のピカチュウを指差して続ける。

「こいつ、ちよつと毛並みが乱れちまつてるんだ。俺はちよつと席を外すから、整えといってくれよ」

ナナミは、ピカチュウの毛並みを確認した。それは、これまで見たことがないほどに酷いものだった。

それを最高の状態にまで戻すには、弟の戦いを見るわけにはいかなかった。

トキワシテイ、トキワジム、ジムリーダー控室。

サケイを対戦場に待たせ、グリーンはパソコンの前で考え込んでいた。

インターネットを経由するポケモン預かりサービス、ポケモン転送システムと共に世界に革命を起こしたこのサービスの利用者は、実はこの世界中のトレーナーの全体からの割合を考えると、非常に少ない。そのサービスの対象者が、一人では手に余る数のポケモンを所持することを許されている人物であることを考えるとそれは当然だった。

そして、グリーンはジムリーダーという業務上、それを許される立場にあった。対戦相手のレベルに合わせて使うポケモンを選ぶ彼らは、何体ものポケモンを所持している。

サケイを相手に、どのレベルのパーティを使うかを考えていた彼は、そうやってしばらく考えた後に、一つ決意をするように短く息を吐くと、ディスプレイに浮かぶあるボックスを選択した。

「三体のポケモンを選ぼう」

トキワジム対戦場中央、ルール確認のためにジムリーダーグリーンと対峙する。それは、カントーバッジを集めているトレーナーならばそのすべてが緊張し、萎縮し、自分が自分でいられなくなる恐怖と向かい合う、そんな光景であるはずだった。

だが、高い身長からグリーンを見下ろすサケイは、そのような緊張とは無縁のような澄ました表情で、自らの望むルールを提示する。

もちろん、カントーのトレーナーたちと、サケイの今の状況は全く違う。サケイはジムバッジを集めてはいないし、人が誰もいない観客席は、自らの戦いを品定めされる恐怖を軽減するだろう。

しかし、サケイの心理的余裕は、そういう部分ではないのだ。もっ

と根本的な部分で、彼はグリーンを、あるいはカントーのトレーナー達を見下ろしている。

「タイプの有利不利が気になるなら、先にお互いのポケモンを提示してもいいけど、どうする？」

「いや、構いませんよ」

腰のベルトに装着された六つのボールを手に取りながらサケイが言った言葉をグリーンはかぶせるように拒否する。

「そう」と、サケイは特に興味なさげに相槌をうち、グリーンから距離を取るように背を向けた。

だが、二歩ほど進んでから「ああ、そうだ」と、振り返る。

「一匹ほど、持ち物を持ったポケモンがいるんだが、構わないかな？」
グリーンは「いいですよ」と、それを肯定し続ける。特に不思議な提案ではなかった、挑戦者の中には、ポケモンそれぞれに持ち物をもたせるトレーナーだっている。

「そのかわり、こっちも一匹のポケモンに『オボンのみ』を持たせます」
その選択に少し引っかけたのか、サケイは一瞬だけ言葉をつまらせたが、すぐさまそれに頷いてグリーンに背を向けた。

ボールが対戦場に落ちると共に現れた暴れ牛は、サケイの『すてみタックル！』という命令と共に、同じく対戦場に現れようとしていたグリーンのパケモンに突っ込む。

それを食らったポケモンが体重の軽い軽量級のポケモンであったら、なんの抵抗もなく吹き飛ばされジムの壁に激突していただろう。

だが、どつしりとした体つきを持つやしのみポケモン、ナツシーは、地面に跡を作りながらもなんとかそれをこらえる。

『トリックルーム』

グリーンの手指示とともにナツシーが放った技に、サケイは目を見開いた。

ナツシーから距離を取ろうと後ずさるケンタロスの動きが、その滑らかさを失い、コマ送りのように不自然に映る。

ナツシーのテレキネシスによって作られた特殊な空間は、遅いものを速く、速いものを遅くする。それは、常識に囚われたポケモンの運用をするトレーナーを揺さぶる、ジムリーダーグリーンが課す試練であった。

しかしサケイは、それに動揺する様子はない。彼はすぐさま次の行動を取る。

「もう一度だ！」

その声の届いたケンタロスは、体格に似合わぬスプリントを発揮して再びナツシーに襲いかかろうとする。

だが、ケンタロスが踏み込んだ次の瞬間、ナツシーはその鈍足さを発揮して一気に距離を詰めた。

『だいたいはつ』

その技の選択を、サケイもケンタロスも当然あるとして認識していた。事実、ケンタロスはナツシーとの距離を詰めようとステップを踏もうとしていたところだったのだ。

だが、そのステップがトリックルーム内に反映されるより先に、ナツシーの爆発がケンタロスを巻き込んだ。

信じられない、といった風の表情を隠そうともせず、サケイはケンタロスをボールに戻す。

同じくナツシーをボールに戻したグリーンは、間髪入れずに次のポケモンをトリックルーム内に放り込んだ。

そのポケモンが繰り出されると同時に、対戦場に風が巻き起こる。砂をまとったそれはあつという間に『すなあらし』となって、対戦場に吹き荒れ、現れたポケモンを視界に捉えづらくさせる。

だが、そのポケモンがバンギラスであることは、それなりの知識を持って知っているトレーナーであればすぐに理解することができる。そのシルエツト、そして、巻き上がった『すなあらし』が、バンギラスの特性である『すなおこし』によって巻き起こされた事を、知識のあるトレーナーは知っている。

そして、サケイもまたそれを知るトレーナーであったようだ。彼は無然と口を真一文字に結んで、『すなあらし』吹き荒れる『トリックルーム』の中にボールを投げ込む。

現れるポケモンに、グリーンは速攻をかけた。

『ストーンエッジ』

遅いものが速くなる『トリックルーム』内で、バンギラスがサケイのポケモンに襲いかかった。腕から隆起した尖った岩で、相手を切り裂きにかかる。

『ねこだまし』

だが、サケイが繰り出したポケモン、ハリテヤマは、バンギラスをギリギリまで引きつけてから、顔の直ぐ側で両手を叩いた。

突然のことに、バンギラスは一瞬ひるんだ。そして、ハリテヤマはすり足ですばやくバンギラスのサイドに回り込む。

まずいな、とグリーンは思った。相手のハリテヤマは巨大な体格を持つゆえに、当然遅い、それはつまり、この特殊な状況下に於いて速い事を意味している。

『じしん』

来るべき技を迎撃するような意味を込めながら、グリーンはそう指示を出す。しかし、『トリックルーム』の中で先に動いたのはバンギラスの方だった。

その事実が、サケイと、彼のポケモン達のレベルの高さをグリーンに知らしめた。

『まもる』

ハリテヤマは迫りくるバンギラスの体を手のひらで器用にはたき、攻撃を空振りに終わらせた。視界が悪い中、的確な対処だ。

グリーンはサケイの考えを読み取った。タイプ相性は圧倒的にサケイに分があり、これほどのレベルを持つハリテヤマならば『けたぐり』を使えばバンギラスを転がすことくらい容易だろう。

それをせずに『まもる』を選択した意図、おそらくそれは時間稼ぎ、『すなあらし』はともかく『トリックルーム』の効力が切れるのを待っているのだろう。

そうならば、グリーンが目指すのは素早い決着だ、サケイの三体目を『トリックルーム』に引きずり込む。

『つばめがえし』

ハリテヤマの腕を掴んで引き込むようにしながら、バンギラスが腕の尖った岩をハリテヤマに突き立てた。

手応えのある攻撃だった。だが、ハリテヤマはそれで膝をつくことはなく、逆にぐいと腕を引き込んでバンギラスと取っ組む。

特殊な体勢だ、その体勢の意味を、グリーンとバンギラスは理解できなかった。だが、ハリテヤマが自らの意思で作ったその体勢をバンギラスは嫌がって腰をひこうとした。

だが、それはその体勢における大きな失敗だった。

『けたぐり』

ハリテヤマから距離を置こうとしていたバンギラスが突如体勢を崩す。

ハリテヤマが、バンギラスの足を思い切り蹴飛ばし、彼の体重を支えるバランスを大きく崩したのだ。

そして、ハリテヤマは組み付いたままバンギラスの体勢をコントロールし、そのままのしかかるように、自らの巨体をバンギラスに浴びせながら地面に叩きつける。

通常の『けたぐり』よりも、大きく、そして効率の良いダメージがあるように見えた。グリーン達は知らなかったが、それはサケイの故郷の格闘技、アローラ相撲からヒントを得た独特の動きだった。

「戻れ」

以外にも、先にポケモンをボールに戻したのはサケイの方だった。しかし、その判断は間違っではない。バンギラスの『つばめがえし』によって、彼はバカにならないダメージを受けている、これからさらに『すなあらし』のダメージを受けると考えれば、戦闘不能の状態になっってしまうと判断してもおかしくない。

グリーンもバンギラスをボールに戻す。あくといわの複合タイプであるバンギラスが、自身の体重が仇となる格闘技『けたぐり』を食らってしまえば、もはや起き上がることを期待はできないだろう。

「グリーン君」

『すなあらし』の向こうにおぼろげに見える影、サケイがグリーンにそう叫んだ。

力強い声だった。そして、棘のある声だった、少なくとも、お互いの健闘を称え合うような、そのような角のない声ではない。

そして、その次に出た言葉が、サケイの意志をはっきりと伝える。「がっかりだ」

影がボールを投げるのと同時に、グリーンもポケモンを繰り出した。

グリーンの三体目は決まっている。というより、この戦い方を選択した時点で、グリーンが繰り出すべき三体目は固定されざるを得ない。

対戦場の『トリックルーム』そして『すなあらし』これらの状況の恩恵を最大限に受けることのできるポケモン。ドサイドンは、大きな地響きとともに現れた。

対するサケイが繰り出したポケモンを、グリーンは目を凝らして確認しようとした。

二本足で立ち、前足には爪が見える。首と尾が長く、鱗のようなものも確認できる。

「ドラゴンか」

思考を整理するために、そう呟いた。だが、自分がこれまで見てきたどのドラゴンとも違う。おそらくはサケイの故郷、アローラ地方のドラゴンだろう。

それに対する対策を考えようとしたグリーンの目に、ある影が留まった。

そのドラゴンの向こう側に見える、サケイの影だ。それは対戦をしているトレーナーの体勢とは大きく異なり、ゆっくり、時に激しく体を動かしていた。

踊っているのか、と、グリーンは驚きと共に息を呑んだ。彼はその意図がつかめない、そんな事を考えたこともなければ、実行したこともないからだ。例えば演出を絡めたショーのような、あるいはコンテ

ストの延長線上に存在する何かなどではあり得る光景かもしれない。しかし、このような戦いの場でそんな事をするなんて考えられない。

一瞬グリーンに頭に浮かんだのは、挑発だった。そして、その次に浮かんだのは、陽動。

グリーンは、それを陽動だと断定した。『トリックルーム』での速さをカバーするための陽動だと。

『じしん！』

だからグリーン達は、速攻で相手のポケモンを潰すことを選択した。ドサイドンは遅さという速さを活かし、一気に間合いを詰めて相手のポケモンに両腕を振り下ろす。

ジムは大きく揺れ、対戦場にヒビが入る。『じしん』の衝撃を全身に受けたサケイのポケモンは一瞬ぐらついたが、倒れはしない。

グリーンはそれに驚いた、戦闘不能までとは行かずとも、膝をつくほどのダメージは与えられるだろうと思っていたからだ。

グリーンの脳裏に、持ち物、という単語が浮かんだ。試合前にサケイが持たせると言っていたアイテムが、もしかすれば物理攻撃や地面タイプの攻撃を抑えるものだったのかと考える。

しかしそれ以上の想像は、対戦場に響いた音によってかき消された。

不気味な音だった。鋼タイプのポケモンが、羽や爪などを岩にこすりつけて切れ味を増しているような、否、それよりも、ナイフとナイフを擦り合わせるような、そんな音が、いくつもいくつもいくつも重なり合ったような音。

「グリーン君」

その音の向こうから、サケイの声。

「私は、ゼンリョクを出させてもらう」

『すなあらし』の向こうに、激しい光が見えた。

サケイの腕に嵌められている腕輪と、サケイのポケモンの胸元にあがる何か、強烈に光っている。

「離れる！」と、グリーンにしては珍しくそのような抽象的な指示をド

サイドンに出す。

ドサイドンもまた、ただならぬ雰囲気を感じていたのだろう、グリーンへの指示を聞くやいなや、サケイのポケモンから距離を取ろうと地を踏む。

だが、それは遅かった。

サケイのポケモンの胸元の光が弾けると、いくつも重なったその音波が、爆発的なエネルギーとなってドサイドンを襲った。

信じられない攻撃だった。思わず浮き上がりそうになるのをこらえながら、ドサイドンは体の節々がひび割れていくのを感じる。これほどの攻撃を、食らったことがあつただろうか。

グリーンもまた、甲高く高鳴るその音による攻撃にたじろいでいた。両手で耳をふさいでも、内臓が地面を伝ってきた振動に震えているのを感じる。相手とこれだけ離れてこれならば、これを至近距離で受けているドサイドンはどうなってしまうのだろうか。

やがて、その音による攻撃が終わった。グリーンが対戦場に目を戻すと、ドサイドンはふらつきながらもまだ対戦場に立っていた。

助かった、とグリーンは思った。岩タイプのドサイドンが『すなあらし』によって特殊な攻撃に対する耐性がついていたことと、持たせていたオボンのみがあるとかが体力をつないだようだ。

だが、グリーンが相手のポケモンの状況を確認するよりも先に、それは起こった。

目にも留まらぬ高速タックルが、ドサイドンに襲いかかったのだ。

「まずい」と、グリーンは素直に漏らした。『トリックルーム』が、対戦場から消え去っていた。

常識を取り戻した空間は、サケイのポケモンの鍛え上げられた瞬発力を、存分に反映する。

「こらえろー」と、グリーンは再び抽象的な指示を出す。

そんな事言われずともわかっているドサイドンは腰を落とし、自らの体重を生かしてタックルを止める。しかし、サケイのポケモンはそれも予測していたように、ドサイドンの片膝の裏に手を回して体を捻った。

ドサイドンはバランスを崩した。大きな地響きと共に、砂煙が巻き起こる。

その時、バンギラスが作った『すなあらし』が晴れた。グリーンは、対戦場の状況をはつきりと目の当たりにし、絶望した。

そこにあつたのは、仰向けになっているドサイドンと、そのの腹の上に馬乗りになったサケイのポケモン。体全身を特徴的な鱗が覆い、体は小さくとも引き締まった筋肉を持っているようだった。

「ジャラランガか」

話では知っていた。アローラ地方に生息するドラゴンポケモン、ジャラランガ。あまり大きな種族ではないがその分突出した筋力を持っており、格闘タイプにも分類される。だが、こうして相對するのは初めてだった。

ドサイドンはなんとかその馬乗りの状況から逃れようと体をもがさせるが、ジャラランガは器用にバランスを取って状態を維持していた。圧倒的な体重差を誇るはずであるのに、ドサイドンはジャラランガの馬乗りから逃れられない。

それは、その二体のポケモンのレベルと経験の差を表していた。ジャラランガの持つその技術は、おそらく彼らの一族すべてが持ち合わせているものではないだろう。サケイとの特訓のもとで得た技術だ。

対するドサイドンに、その技術から逃れる技術はない。

もちろんそれをサポートせねばならないのはグリーンの役割ではあるが、ここまで圧倒的に不利な状況から、逃れる術が思い浮かばない。

やがてドサイドンのスタミナが消耗し、その抵抗が弱まってくる。ジャラランガは次の段階に入る。

馬乗りの耐性そのままに、彼は全身の鱗を震わせ始めた、その音に、グリーンとドサイドンは聞き覚えがある。

先程『すなあらし』の向こうから聞こえていたのは、ジャラランガが鱗をすりあわせていた音だったのだ。

そして、その動きは、いつでもドサイドンにトドメをさせるとい

宣言でもあった。サケイの指示一つで、彼は『スケイルノイズ』でとどめを刺すだろう。

しかし、サケイは、そうしなかった。

「戻れ」

彼は短くそう言つてボールを構える。

ジャラランガは一瞬ドサイドンを睨みつけた後に、指示通りサケイのボールに戻る。「命拾いしたな」と彼の目が言っていた事は、誰もが理解するだろう。

勝敗は明確だった。サケイが望めばいつでもトドメを刺せる状況であり、ドサイドン側にそれをひっくり返す手段はなかっただろう。

だが、サケイはその勝利に納得はしていないようだった。彼はグリーンを睨みつけながら対戦場を闊歩し、彼を見下ろす。

見れば、ジャケットは肩にかけられ、ネクタイは引き抜かれていた。ワイシャツもボタンが飛んで形が崩れ、髪の毛のセットは乱れていた。彼は文字通り全身全霊で、この戦いを戦いきったのだ。

「私にグリーンバッジがふさわしいことは、証明されただろう」

その言葉には、明確に怒りが込められていた。

グリーンはそれに何も返さず、ドサイドンをボールに戻す。

サケイは更に続ける。

「こんな戦い、到底神に捧げることなんてできない。それどころか、これは私達に対する最大限の侮辱だ」

グリーンは、それにも何も返さなかった。サケイの言葉を理解出来ないからではない、その逆、それを理解できるからこそ、何も言い返すことができない。

叩きつけるように、サケイは確信に迫った。

「どうしてゼンリョクを出さなかった。どうして、ジムリーダーとして私の前に立ったんだ」

それは、事実だった。

この戦いにおいてグリーンが繰り出したポケモンたちは、彼がチャンピオンとして君臨した時の相棒たちではない。ナツシーもバンギラスもドサイドンも、トキワジムリーダーとして挑戦者を向かい合う

ときに繰り出すポケモンたちだった。

勿論、だからといって彼らが弱いわけではない、現在、カントー地方のトレーナーの殆どが、彼らを倒すことを目標にしているだろう。だが、サケイは彼らとは違う。

『負ける』事が役割のパーティを出すことが、君のゼンリヨクなのかね」

そう、ジムリーダーも、ジムリーダーのパーティも、最終的には『負ける』ことこそがその役割なのだ。だからこそサケイはグリーンを選択に憤った。

この戦いを、グリーンは尊重しなかったのだ。その対に、サケイ自身はこの戦いへの尊重をゼンリヨクを出すことで表した。

「もう一度問う」

声を震わせながら、サケイが言った。

戦いの中からあつた憤りが、緊張が解けたことによつてより激しく煮えたぎりつつあつた。

戦士である事を汚されたことに憤る本能を、紳士であることを良しとする理性が抑え込んでいる。だが、それもいつ本能に飲み込まれるかわからない。

「どうして、ゼンリヨクを出さなかった」

グリーンは、なんとかそれに答えようと、考えを巡らせてはいた。

だが、それに対する答えを、グリーンはまだ導き出せていない。

バカみたいな話だ、サケイと戦うことを選択したのはグリーン自身だ。そして、彼がゼンリヨクの戦いを望んでいたことも知っていた。そして、そのときは、自分がそれをできると思っていた。

そして、彼と戦うパーティを選ぶとき、グリーンは、望みさえすれば殿堂入りパーティを引き連れることが出来る権利を有していた。

だが、彼はジムリーダーとしてのパーティを選んだ。

「違う」

いや、違う。

サケイと目を合わせることができず、うつむきながらグリーンが絞り出すように答える。

「選べなかった」

そう、彼はジムリーダーとしてのパーティーを選んだのではない。

殿堂入りパーティーを、選べなかったのだ。

その答えに、サケイは呆気にとられた。全く想像していない答えだった。それならばまだ、アローラ出身の自分の実力を舐めていたと言われていたほうがまだスツキリする。

「どうして？」

「わからない」

そう答え、グリーンは再び考えた。だが、納得できる答えを自分で用意することができない。

「でも、選べなかった」

その答えで、サケイは悟った。グリーンの経歴を、彼は知っている。元チャンピオンを縛るあまりにも強烈な呪縛を、自分は今日の当たりにしたのだと、そう納得した。

なんて憐れな少年なのだと、サケイはグリーンの境遇に同情し、これ以上、彼を苦しめない方が良く判断した。

「失礼する、もう会うこともないだろう。どうか神の加護が、君にあることを願っている」

向けられたサケイの背中を、遠くなり始めようとするサケイの背中を、グリーンは目で追った。

惨めだった。あまりにも惨めで、おおよそ考えつく全てに申し訳がなく、あまりにも情けない。もし叶うのなら、この世に存在する自分の記録すべてと、その記憶を抹消してから消え去ってしまいたい。だが、それができないから、消え去る訳にはいかない。とんでもない感覚だ、おおよそ人間であればとても耐えきれないであろう感覚だ。

そしてグリーンは、この感覚を知っている。ほとんどの人間が経験せずに生涯を終えるであろうその感覚を、グリーンは知っている。

「待つて」と、彼は言った。

少年らしい、怯えのある声だったが、彼はその言葉を、すんなりと言った。いや、言おうとしていたのではない、言ってしまったのだ。彼には実力があつた、地位があつた、それに基づくプライドも、当然あつた。

サケイの判断を、受け入れるわけには行かなかつた。否が自分自身にあることはわかつている。だが、否、だからこそ、それを受け入れるわけにはいかない。

サケイは、ため息をこらえながらグリーンに振り返る。戦士として、グリーンは壊れているとサケイは確信していた。そして、それでも突つかかってくる愚かなプライドを、どうすることが最も慈悲あることか、それも知つている。

それは心苦しくなるだけでなんの得もない貧乏くじだつた、それをする義理は、サケイには無い。グリーンは懇願を蹴つてその場を去る権利は、サケイにある。

だが、サケイはそれを受け入れた。神が、それを求めているのだと、これは、神が自らに課した試練なのだと、彼は思つていた。

「明日朝、またここに訪れよう。その時、もし君がここにいれば、私はそれを神に捧げるために、君と戦う」

無茶苦茶な理屈だつた。ここはグリーンが管轄するトキワジム、それなのに、サケイが主導権を握る。

頷いたグリーンに、サケイはさらに続ける。

「私はその戦いに全力を尽くし、持ち得る技術をすべてを君にぶつけるだろう。もし君がそれでもゼンリヨクを尽くさないのならば、私は君の心を折る」

欠陥のある戦士に出来る最も慈悲のある選択は、戦いの中で、その心を折ることだ。サケイはかつて師に言われたその言葉に、なんの疑問も持つていなかった。

そしておそらく、明日自分はそれをすることになるだろうと、彼は確信していた。

負けたのね。

それも、手ひどく。

あのときのように落ち込んでしまうほどに、手ひどく。

玄関のドアを開け、その姿を見せた弟を見て、ナナミはそう思った。十数年、共に暮らしてきたたった一人の弟のことなど、手に取るようにわかる。

膝の上のピカチュウを撫でる手が止まっていた。それを口に出す訳には行かなかった。弟のことを手に取るようにわかっても、弟を救えるとは限らない。

「おかえり」と、ようやく絞り出すように言って、再び手を動かす。

「ただいま」

なるべく自然を装うようにそう言った姉に、なるべく自然を装うようにグリーンが返した。そして、それをお互いが分かっている。

弟のことをよく知る姉に、姉によく知られていることを知っている弟。それに触れぬなど到底無理な話なのだ。それに触れまいとすることで、彼らはそれに触れている。

「ピカチュウを迎えに来たんだ」

「そうね、でも、今この子寝ちゃってるから」

彼女の膝の上に寝転がるピカチュウは、ピーピーと寝息を立てていた。あまりにも無防備な姿だったが、それほどまでに彼女の膝の上が心地いいのだろう。

「一晩くらいなら、預かってもいいわよ」

それは、何気なく、なんの不思議もない提案だった。ナナミはポケモンの扱いに慣れているし、グリーンには疲労がある。

「そうだな」と、グリーンも、それを肯定した。

だが、それによって生まれた一瞬の沈黙が、彼の脳裏にその考えを浮かべるスキを作った。

敗北のショックに飲み込まれていたただけだった意識に、自身の人生

を照らし合わせる、なんの意味もない、ただただ自己嫌悪を強めるだけの行為を、彼は行った。

そして、彼はそれからの救いを、家族である姉に求めた。それもまた、自然なことだった。

「今日、負けたんだ」

「そう」

「明日、また戦う」

「そう」

「レッドなら、あいつに勝つだろうと思う」

あまりにも唐突な、それでいて自然でもあつた彼の名に、ナナミは再び手を止めた。

「いや、そもそも、レッドなら、最初からあいつには負けねえだろうと思う。そのくらい、あいつはつええんだ」

それは、ナナミもよく知っていた。

グリーンは、歯を食いしばり、拳を力の限り握った。無念だった、情けなかった。だが、どうしても、それは彼にのしかかる。

「姉さん。どうして俺は、レッドのようになれないんだ。一体どうやったら、俺はあいつになれるんだよ」

反射的に、ナナミは体をビクつかせた。グリーンが、そのような弱音を口にしたのは初めての事だった。

何かを感じ取ったのだろうか、膝の上のピカチュウが小さな鳴き声を上げながら体を起き上がらせた。彼はグリーンが帰っていることに気づき、ナナミの膝から降りたが、グリーンの一瞬の雰囲気を感じて戸惑うように歩みを止める。

グリーンは、そのピカチュウに一瞬視線を合わせ、そして、外した。ありえてはならない考えが、よぎってしまった。

そのピカチュウを『使えば』あるいは自分もレッドのようになれるのではないかと。

果たしてそれをピカチュウが受け入れるかどうかはわからない。

だが、グリーンは彼の強さを世界で最もよく知る人物の一人であった。

突拍子もない話だった。だが、ズタボロに引き裂かれた彼のプライドは、あのジャラランガに対して、ピカチユウがどのような動きをすることが出来るかというところまで、その優れた戦術感を、歪んで発揮させる一歩手前だった。

「グリーン」

それにストップをかけたのは、姉の声であった。

「誰もグリーンに『レッドになれ』なんて言っていないのよ」

グリーンは感情すべてを、彼女が理解できているわけではない。だが、彼女もまた、それに苦しんだ一人であった。

「私も、おじいちゃんも、サケイさんだって、あなたにレッドの代わりを求めたわけじゃない。ただただ、あなたを、強いあなたを求めているだけなのよ」

一拍おき、グリーンが何も返さないのを確認してから続ける。

「お姉ちゃんね、本当は、グリーンが強くなってもいいと思ってる。ポケモンリーグから連絡があって、急いでセキエイ高原に向かったあの日、あなたが負けてるのを見て少しびっくりはしたけど、それよりも、グリーンとレッドくんが、無事で、立派になっていたことのほうが嬉しかった」

それは、家族として普通の感情だった。

「グリーンが強くなりたいと思ってるから、私はグリーンが強くなってほしいと思ってる。でも、そのためにレッドくんになれだなんて、私は思わない。そんな事を思うくらいなら、強くなることを諦めてくれほうが、私は嬉しいよ」

それは、悩む弟を持つ姉の本心だった。そして、グリーンがそうは思わないことを、彼女は知っていた。

「でも、強くなりたいんですよ？」

グリーンは、こみ上げる感情をこらえながら、それに頷いた。敗北の呪縛の裏にあるのは、確かに手にした栄光だ。あともう少し強ければそれを胸に抱く事ができたと言う思いは、誰よりも強い。

「じゃあ、あなたが強くなりなさい」

それが難しいことは、ナナミも十分に理解している。

だが、そのために誰かになることを望むことは、あまりにも愚かだ。ピカチュウが、グリーンズのズボンの裾を引っ張った。グリーンがそれに気がついて手を広げると、彼はぴよんと跳ね上がってその肩に登る。グリーンはずり落ちそうになった。ピカチュウを両手で抱え込む。ナナミによって整えられた毛並みが、グリーンの手ひらを心地よくくすぐった。

グリーンの鼓動が高鳴っていることに、ピカチュウは気づいているだろう。だがそれでも、彼はそれを気にしてはいなかった。彼の元にいるほうが、より安心できた。

恐ろしいことを考えていた、と、グリーンは頭の中にあつたことを全力で否定した。

「帰るよ」と、グリーンは短く姉に伝えた。

ナナミは、それに頷いただけ。

やらなければならぬのだ、彼がそうした様に、自分もまた、困難に打ち勝たなければならない。

だが、それを成し遂げることが出来るという確証は、無かった。

☆

彼の家で、グリーンは机に向かっていた。

すでに日が落ちてからだいぶ時間が経っていた。それでも彼は食事をすることも忘れてそれに没頭している。

サンダースやピジョットは、すでに眠りについていて、それが、トレーナーであるグリーンの指示だったからだ。明日の試合に向けて、手持ちのポケモンたちには十分な休息を与えたかった。

残るピカチュウは、グリーンのをそばで静かに丸まっている。まだ眠っているわけではない、ナナミの膝の上での昼寝の影響がまだ残っ

ていた。

「Z技ねえ……」

手にした資料と薄型端末の画面を交互に見やりながら、グリーンは自身の無知を痛感していた。

印刷した資料は、アローラ出身の研究者が書いたある論文。自身が手に入れた知識とアローラの文化を照らし合わせ、その地方に伝わる特殊な現象である『Z技』についてわかりやすく示してある。

トレーナーに特殊なリングとクリスタル、ポケモンにはそれと同じクリスタルを持たせることが条件となり、更にその二つが同調することにより一時的に技の威力を爆発的に向上させる。それらを同調させるためにはトレーナーが激しいダンスを踊らなければならず、連発することはできないほどの体力の消耗があるという。

そのシステムはカロスやホウエン地方で有名な『メガシンカ』に似ているが、限られたポケモンにしか与えられないメガシンカと違い、Z技は限られたトレーナーにしか与えられないと、論文には記載されている。

二つのクリスタルの同調に必要な不可欠であるリングは、アローラ地方で神とされているポケモンからトレーナーに与えられる輝く石を加工して作るとある、それゆえにその強力な連携を得ることの出来るトレーナーはアローラ地方でも限られているらしい。

普通の人間ならば、鼻で笑うような話だった。

どこまでが本当で、どこまでが伝説で、どこまでがホラ話なのか考える時間ももつたいないほどの話、もしその文末に『今ならこの素晴らしいリングとクリスタルのセットをたった五百円で提供できます！』と陳腐なアオリ文がついていれば、ほら言わんこっちゃないとなるだろう。

だが、グリーンはその論文のすべてが真実だと確信し、真剣にそれを読み込む。メガシンカだって、最初は眉唾もの話だった。何よりZ技とやらそのものの威力を、彼は痛いほど体験している。

その研究員の論文は、数は少ないこそ、グリーンに有益な情報を与えてくれた。

相手の情報を収集し、その対策を考える。それはグリーンと言うトレーナーの一つの形であった。

グリーンが若くしてトレーナーとして成功した要素の一つには、ポケモンに対する豊富な情報と、それらを知識として自由に落とし込むことのできる柔軟な発想力にあった。もともと携帯獣学者オーキドの孫で、ポケモンの情報と向き合うことに抵抗のなかった彼は、祖父に託されたポケモン図鑑片手にカントーを回り、ありとあらゆるポケモンの情報を網羅した。そのうちに彼は、ポケモンたちの相性や、どのようなポケモンがどのような強さを持つかということや、技に対する造詣を深め、遂にそれは、ポケモンリーグチャンピオンに至るまでの強力な武器となった。

薄型端末には、アローラ地方のポケモン、ジャラランガについての情報が記載してある。こちらに関してはグリーンが新しく知る情報は無かったが、やはりドラゴンらしくアローラでもかなり格のあるポケモンであるようだった。

手元のノートには、情報や対策がびっしりと書き込まれている。しかし、グリーンはそれを作ることになんの苦痛も感じていないようだった。

むしろ、調べれば調べるほどに、サケイが優れたトレーナーであることがわかってくる。そして、その誇りを汚された彼が激高する理由も、うっすらと見えてくる。

アローラのトレーナーは、カントーで言うところのジムシステムのような仕組みを持っている、それぞれの島でそれぞれの試練をこなし、それぞれの島の王に認められることで、神へとより近づくようなシステムだ。

あの強さ、そして、あの自信からして、サケイはそれらの試練を全てこなし、神に認められたのだろう。

ふと何気なく、彼はページを一枚めくって『選ばれた男』と書き込んだ。

本当に何気なくだった、その単語は純粹にアローラでのサケイの立ち位置を客観的に表した言葉で、その立場から、彼の戦いへの考え方を連想しようとした、それだけだった。

「神に選ばれた男」

それも、何気なくつぶやいただけだった。サケイはZ技を発動するためのリングを持ち、おそらくそれは、アローラで神と崇められるカプから授けられた輝く石を加工したものだろう。つまりサケイはグリーンが呟いたとおり、神に選ばれた男であった。

だからこそ、だからこそあの自信を持ちえるのだ。神に認められたという自負が、あそこまでの自我と強さを作り出している。

そこまで考えて、グリーンは、その単語は、もしかしたら自分と相反するものなのかもしれないという発想を思い浮かべた。

だが、彼は頭を振ってその発想を脳裏から追い出した。ブルーライトカットのためのメガネを取り、目頭を押さえる。

そのネガティブな発想は、あっているかどうかはともかくとして、今は必要のないものだった。

久しぶりの一夜漬けだった、サケイに勝つために、今はそれ以外のことを考える時間は無駄だった。

☆

トキワシテイは、その日も晴れていた。風がトキワの森の木々を揺らし、何匹かの鳥ポケモンが、それを合図に飛び立つ。

カントー最難関、トキワジムの前に、サケイは立っていた。昨日と同じくきつちりとスーツを着込み、昨日に比べればややおとなしいデザインネクタイを締めている。

ジムの扉に手をかけ、彼は手首をひねった。彼に手首にはめられた

リングは、ドアノブと同じように回った。ひんやりとした空気が、ジムの中から這い出てくる。扉が開いたということは、おそらくその向こう側に、グリーンが待ち構えているだろう。

扉が開いたことを、サケイは特に意外には思わなかった。たとえ戦士として死んでいようと、過去や立場が、彼を逃避させなかったのだらうと思っていたからだ。

だから対戦場の中央で待ち構えるグリーンと相対したとき、サケイは自分の考えが、ポケモンリーグチャンピオン経験者に対する敬意を欠いていたものだということをも十分に理解した。

大きく、そして、相手を見下ろすように立つはずだった。壊れた戦士は自らを恐れ、恐怖し、それでも戦士であるという足かせが、小さく、小さな存在として自分自身を見上げるはずだった。その小さな戦士がグリーンであり、今日、自分はそれを叩き潰すのだと、サケイは確信していたのである。

だが、グリーンは自身と同じ目線を持っていた。その表情から、壊れた戦士の死臭は感じられず。目には、まだ光が見えた。

しかし、グリーンがまだ完全に立ち直り、戦士としての誇り全てを取り戻したわけではなく、そこには迷いと、恐怖と、怯えがあるようだ、サケイは見抜いていた。

思わず「いい顔だ」と、サケイは開口一番に言った。

グリーンはそれを不満に思っただろう。歳上とはいえ、サケイがその様に称賛することは、まるで格付けされているような気分になる。つまりその賞賛は、サケイが格下であるグリーンを、あえて褒めるようなことだと。

半分は、正解だった。昨日の戦いにて、明確な勝利をしたサケイには、グリーンを格下に見る権利がある。

しかしもう半分は、不正解だった。むしろその逆、サケイはグリーンの特レーナーとしての格に圧倒され、思わず跪きたくなるような尊敬を覚えたのだ。そして、戦いの前にそれを悟られるわけにはいかぬと、彼なりに強がった。

神を信じぬこのカントーの地の少年が、たった一人、たった一人の

意思で大きな恐怖に打ち勝とうとそこに立ち、自身を迎え撃とうとしていることに、彼は感動していたのだ。

戦士としての誇りを持ち、確かな希望を持ちながらも、そこに恐怖と怯えが存在していること自体を、サケイは愚かとは思わない。

むしろ、それが普通なのだと、彼は思っている。戦いながらも、そこに恐怖と怯えが存在しない人間を、人も自分も、狂人と呼ぶだろう。そこにそれが存在するのは、当然のことなのだ。

そして、自分たちアローラのトレーナーの多くは、神を信じることによつてそれを克服している。神に認められたこと、神に祝福されていること、神に捧げる目的があること、それを強く信じているからこそ、自分達はそれに打ち勝つことが出来る。

だが、目の前の少年は、神を強く信じぬカントーの民であるのに、それに打ち勝つていまここに立っている。彼の表情から恐怖や怯えが感じられるのは、彼が狂人ではないことの証だった。

「ルールは、昨日と同じでいいだろうか？」

それに頷くグリーンに背を向けながら、サケイは観客席をみやつた。

たった一人、そこには観客がいた。小さなピカチュウを抱えてこちらを眺めているその女性を、サケイもよく知っている。

彼女が、彼を立ち直らせたのだろうか。

いや、違つたろうかと、サケイは苦笑いしてそれを否定した。それが出るなら、とうの昔にそれをしていただろう。

サケイは、それに自身が関与しているということに、全く気づいていないようだった。

彼はグリーンから離れながら微笑む。

この試合に、全く期待はしていなかった。壊れた戦士に、自身が壊れていることを気づかせるための、あまりにも実りの無い、虚しく、悲しい試合を淡々とこなすだけだと思っていた。

だが、この戦いは、そうはならないだろう。

グリーンが持つ希望が、自分の持つ武力を上回るかどうかはわからない。あるいは、彼が持つ希望すらも、自分が食らい付くしてしまう

ことも、十分にありえる。希望すべてが、野望を果たすような簡単な世界を、神は作っていないだろう。

十分な距離をとったサケイは、振り返ってグリーンを見た。

自分と同じように対戦場の中心から離れていた少年は、自分と比べてまだ低い身長のせいか、まだこちらに背を向けている。

ジムの窓から差し込む朝日が、彼を照らしていた。どこからか吹いた風が、ガタガタと窓を揺らし、グリーンはそれに気を取られるように振り向く。

「風が、吹いている」と、サケイは呟いた。

彼の故郷アローラでは、風は変化をもたらすものとされている。きつとこの風は、アローラにも届くだろう。そして、神も、この風を感じるに違いない。

サケイは、ジャケツトから腕を抜いた。汚れることを気にすることなくそれを床に放り投げると、今度はネクタイを雑に首から抜き、シャツのボタンをいくつか外す。

左腕に嵌められた腕時計も外し、ポケットに収めた。最近の技術の向上は、腕時計を大分頑丈にしていたが、彼はそれを、自分達のゼンリョクに耐えることの出来るものではないだろうと考えていた。

サケイが繰り出したペルシアン of 異質さを、グリーンはすぐに理解することができた。

尤も、グリーンのように知識のある人間でなければ、繰り出されたそのポケモンが、種族的にはペルシアンに位置することすらわからなかっただろう。グレーの毛並みは見てわかるほどに上質で、まるまると太った顔立ち、四足であることと、その額にきらめく宝石があることを考慮しても、カントーやジョウトの人間が普段見慣れているペルシアンとは全く違う姿だ。

だが、昨晚の『予習』にて、グリーンはアローラの一部のポケモンたちの特殊な生態を知識として吸収していたのだ。

カントーからアローラに渡ったポケモンたちの中には、それまでとは違う環境に適応するために、独自の進化を遂げた種類もいる。そして、ペルシアンもそのようなポケモンの一つだった。

そして、それを知る他地方の人間は少ない。ペルシアンはアローラでは高貴で美しいポケモンとして嚴重に保護されている、他地方に連れて行く場合には嚴重な検査が必要なほどに。

『ねこだまし』！』

『まもる』！』

ペルシアンと同じく四足のサンダースは、ペルシアンが敢行した奇襲から身を守ってすぐさまに距離をとった。ポケモン全体を通してもトップクラスの俊足は、間合い取りに関しては他の追隨を許さない。

その様子を見て、サケイはグリーンがこの戦いのために自分達アローラ地方についての見聞を深めている事を察知し「なるほど」と呟いた。

サケイはそれを卑怯だとは思わない、全力というものは、その試合の中でのみ発揮されるものではない。その戦いのための備えを怠らないことも、グリーンが発揮することの出来る全力の一つだろう。

ペルシアンとサンダース、それぞれ四足のポケモンが、一定の距離を挟んでにらみ合う。

速さではわずかにサンダースに分があるだろう、だが、かと言ってグリーンから積極的に動くわけではない。サケイほどのトレーナーならば、下手なスキを見せれば容易に迎撃するだろう。

故に、サンダースは一旦離れた間合いをギリギリと詰めるようにして得意な距離に身を置こうと動いている。『かみなり』などの大技が攻撃として計算できる間合いに。

そして、ペルシアンもじりじりとそれから離れるように距離を取りながら、サケイの指示を待っていた。

距離を詰められれば距離を取ればいい、だが、それが永遠に続くわ

けではない、それを続ければ、彼らはやがて対戦場の隅に追いやられてしまおう。グリーンと彼の最も古い相棒であるサンダースは、そのスピードを以ってサケイとペルシアンに圧をかけ続けているのだ。先に動かなければならないのは、ペルシアンの方。

やがてペルシアンは、意を決したように前足を跳ね上げる。

それを合図に、二人にトレーナーは動いた。

『すてゼリフ！』

サケイの指示とともに、ペルシアンはけたたましい鳴き声を上げながらバックステップして彼の持つボールに戻った。

その技は、相手にやる気を削ぐような酷い鳴き声を逃げながら放つ特殊な技で、『とんぼがえり』や『ボルトチェンジ』のように攻防の中でサイクルを回しつつ、相手のやる気が削がれた状態で意図したポケモンを降臨させることの出来る強力な技だった。

そしてサケイは、二番手であるハリテヤマを対戦場に繰り出した。

ここまでは、サケイの想定どおりに事が進んでいた。あとはやる気の削がれたサンダース相手にハリテヤマを暴れさせるのみ。

だが、対戦場にサンダースはいなかった。

想定が外れたサケイが睨みつける対戦場に、新たにフリーデインが繰り出される。

グリーンは、その消極的ながら強力な連携を読み取り、サイクルを駆使することによって『すてゼリフ』をかわしていた。

それもまた、彼の持つ知識のおかげだった。

すてゼリフと言う技そのものの知識があつたわけではない、もともと持っていたペルシアンという種族の熟練した捌め手の意識、そして、アローラ地方に適応し『悪』タイプに進化していたことから、そのような一癖あるが強力な連携があるのでないかという予想からの行動だった。

格闘タイプであるハリテヤマとエスパータイプの大本命であるフリーデインの対面。グリーンにとっては最良、そしてサケイにとっては最悪の状況となっていた。

だが、サケイとハリテヤマはたじろがない、アローラ、そしてカン

トーで、このような状況はいくらでも体験し、そして打ち勝ってきた。それだけの實力は、確固たる自信を作っていた。

むしろその対面を理解したその瞬間に、ハリテヤマは一気にフリーデンとの距離を詰めるために地面を蹴った。この対面で時間をかければかけるほどより不利になってしまいうからだ。

しかしグリーン、そしてフリーデンも、このような状況はいくらでも体験してきた。

『まもる』

フリーデンはハリテヤマを十分なほどにひきつけてから、サイコパワーによる防御壁を作った。ハリテヤマの『ねこだまし』を警戒した選択。瞬発的な動きで迫るハリテヤマの本命はこの『ねこだまし』を確実に決めることだろうとグリーンは予測した。

ハリテヤマの攻撃が防御壁を叩く、フリーデンは防御壁を消して攻撃に意識を割いた。

だがその次の瞬間、ハリテヤマがその隙間を突いてフリーデンを小突いた。ハリテヤマの巨体と力強さを考えればそれは軽い攻撃だったが、体力と防御力に乏しいフリーデンにとってはバカにならないダメージとなる。

『フェイント』と、グリーンは奥歯を噛み締めながら反射的に呟いた。

フェイント、と言う技は、相手の反射神経を利用するような高度なテクニックで『まもる』などの防御態勢を取っている相手のタイムミングを外す事も目的とされている。サケイはハリテヤマの思い切りとプレッシャーをかけながら露骨な『ねこだまし』をちらつかせ、それにグリーンとフリーデンが反応して正確に『まもる』事を信頼しつつ、その裏をかく選択肢『フェイント』で体力のリードを取ったのだ。

一瞬だけ、グリーンは自身の判断ミスを後悔した。昨日の対戦の中で、サケイが人間同士の格闘技の動きを上手く伝え、それをポケモン同士のバトルにも応用できていることはわかっていたはずだ。それならば、どうしてこの『フェイント』の連携を予測できなかったのか。

その後悔をすぐさまに振り切って、グリーンはフリーデンに指示を

出すことを考える、いつとき有利な展開にされたが、それでもハリテヤマではフリーデインの速さを上回れない。

『サイコキネシス』！』

『バレットパンチ』！』

しかし先手を取ったのはハリテヤマの方だった。弾丸のようなスピードの『バレットパンチ』がフリーデインの顔面をとらえる。

その技そのものも威力の高いものではないが、やはりフリーデインは打撃に弱い、体から力が抜け、仰向けに倒れようとする。だが、彼はすんでのところでそれをこらえ、両手のスプーンを構えてグリーンの指示通り『サイコキネシス』を放った。

ハリテヤマは当然それに備え、それを受ける覚悟を決めていた。ケントロスやジャランガとのぶつかり稽古の中で、覚悟さえ決めてしまえばどんな攻撃が来ても倒れることのないタフネスを、彼は手に入っていた。それが来ると分かっている。それを覚悟する、そうすればまだ戦えるはずだ。

体を貫く衝撃、そして痛み。

それを覚悟していたハリテヤマはそれをこらえようとする。少しだけ耐えられるということは、永遠に耐えられるということだと彼は思っている。

事実、彼の精神はその技に負けてはいなかった。しかし、肉体は、生物としての構造は、それを許さなかった。

尻餅をついたフリーデインに対し、ハリテヤマはピンと背筋を伸ばしたままに、仰向けに倒れた、大きな地響きがジム中に響き渡る。

サケイは、信じられない思いでそれを眺めた。これまでの経験では、あの『バレットパンチ』でフリーデインは倒れていたし、あの『サイコキネシス』も、覚悟を決めたハリテヤマは耐えるはずだった。

これこそが、殿堂入りトレーナーのゼンリヨクかと、サケイは感激する。

そして、次の瞬間には、尻餅をついていたフリーデインに、ペルシアンの『ねこだまし』が炸裂していた。それに感激しながらも、サケイの判断は速い。

そして、それはグリーンも同じであった。

瀕死のフリーデインを残していても、あくタイプであるアローラ地方のペルシアンに対しては無力、ならばせめて最後の抵抗に『きあいだま』などの大ダメージを取ることの出来る選択をするのが正しい。

結果としては『ねこだまし』でフリーデインが戦闘不能になったが、それでいいとグリーンは判断していた。もしここで『ねこだまし』を警戒した『まもる』を選択して、『つめとぎ』や『わるだくみ』などで能力を引き上げられるとそれこそどうしようもなくなる。

フリーデインをボールに戻しながら、グリーンはすぐさま次の行動を取る。

繰り出されたサンダースは、すぐさまに体全身を光らせ、様々な色が練り込まれた『シグナルビーム』をペルシアンに放った。

虫タイプの要素がある『シグナルビーム』は、あくタイプのアローラペルシアンに対して効果が抜群だ。更にサンダースの速さを以つてすれば、さすがのペルシアンも避けきけることはできない。

『『いばる』！』

それが直撃したペルシアンは足元をふらつかせながらも、鼻息荒くサンダースを挑発する。それは怒りで我を忘れさせる催眠術の一種で、相手の凶暴性を引き上げる代わりに相手を混乱させることが出来る技だった。ペルシアンが得意としている相手の攻撃を利用する技『イカサマ』との相性が抜群にいい。

だが、その狙いは無いだろうとグリーンは判断する。ペルシアンは『イカサマ』でサンダース相手に先手を取ることにはできないからだ。そして、もう立っているのがやつとといった風なペルシアンに、そこまでの役割を期待するとは思えない、彼が出来る仕事は殆どやっていゝるはずだ。

だとすればやはり、これは後続をより有利にするための作戦なのだろう。

『『でんこうせっか』！』

万全を期すために、サンダースの速さをより活かせる攻撃でダメ押しに行く。

『フエイント！』

サンダースの前足がペルシアンをとらえるより先に、ペルシアンの長い前足がサンダースを叩いた。ペルシアンが本来持っている俊敏性と柔軟性、そしてサケイの技術が、最速を捉えるテクニクを習得させていた。

だが、最速はそれでは止められない、サンダースはそのカウンターに臆することなく、右腕をペルシアンの顔に届かせる。

それは軽い攻撃だったが、ふらふらのペルシアンにダメ押しするには十分だった。だが、ペルシアンは満足げに微笑みながら地面に倒れる。彼の生まれであるアローラは、イーブイが生息する、よって、彼はその進化形態であるサンダースとの対戦経験は豊富だった。

強烈な『でんこうせっか』だった、あの種族の『でんこうせっか』で、これより良いものをもらった記憶はない。『いばる』の効果は、確実に現れている。

だとするならば、残りはアンカーであるアイツがやってくれるだろう。自分ができる限りのことはやった、あとは、アイツを信じるのみ。「よくやった」

同じことを思っていたのだろう、サケイはそう労いながらペルシアンをボールに戻した。戦いの途中でそのような言葉をかけることは彼には珍しいことだった。

「行って来い！」

短く、そしてしっかりと切りながら、彼はラストのボールを対戦場に投げた。

繰り出された小さくも強力なドラゴン、ジャラランガは、生まれ持った攻撃性を全てに見せつけるような雄叫びを上げながら対戦場に降り立った。そして、すぐさまに排除すべき敵に目を向け、そして、地面を蹴った。サンダースは迎撃の体勢を取る。

『メガトンパンチ』

ジャラランガの拳がサンダースを捉え、サンダースは地面に叩きつけられた。地面はその衝撃を逃し切ることができず、サンダースは出来損ないのゴムボールのように鈍く跳ねる。

手応えがあつた、ジャラランガは全身の鱗を震わせて刃物が擦れ合うような歓喜の音色を奏で、グリーンはサンダースをボールに戻す。運が、こちらに振れていると、サケイは神の祝福を感じていた。

ジャラランガがどれだけ瞬発性のあるポケモンであろうと、すべてのポケモンで考えても最速の部類に入るサンダースをなんの補正もなしに抜けるはずがない、事実、サケイは『でんじは』や『どくどく』などの技を食らってしまうことを必要経費として割り切っていたのに。

だが、ジャラランガは一方的にサンダースを潰した。考えられるのは唯一つ、『いばる』による混乱だ。

グリーンは動揺を見せずにボールを対戦場に投げ込んだが、内心とんでもない動揺があるだろうというのがサケイの読み。

そして、対戦場に現れたグリーン最後のポケモン、ピジョットを確認するや否や、彼はその舞いを始める。ジャラランガはすでに鱗を擦り合わせ、その準備を始めている。

気がかりなのは、グリーンが三体目のポケモンをひた隠しにしていることだった。『スケイルノイズ』をベースとしたジャラランガのZ技最大の弱点は、ドラゴン技を無効化するフェアリータイプのポケモンとの対面では意味を成さないこと。もしグリーンが自分達の連携を封じる意味合いでフェアリータイプのポケモンを隠し玉として選択していたのならば、それをする意味がない。

だが、グリーンが三体目に繰り出したのは飛行ノーマルタイプのピジョットだった。格闘タイプでもあるジャラランガにとつては決して相性のいい相手ではなかったが、そんな問題は、些細なことでは無かった。なぜならば、この一撃で、ピジョットを仕留めるのだから。「ゼンリヨクで、行くぞー！」

サケイにとつて、ダンスは儀式であり、戦いであり、娯楽ではない。腕輪に装着されたクリスタルが光り輝き、ジャラランガの胸にぶら下げられたそれも、負けないほどに光り輝く。

昨日のように『すなあらし』に覆われていない対戦場は、その光をダイレクトにグリーンに見せつける。

ジャラランガの対面に立つ者にとつて、その光は、力と、恐怖の対象であるはずだった。

だが、グリーンはそれに怯まない。

そして、その技が放たれる。ジャラランガを中心としたその波動は、対戦相手のピジョットを撃ち落とそうとする。

『まもる』！

その指示を待っていたピジョットは、両方の翼で風を起こした。本来ならば、その技術で大抵の技ならば、例えば四天王のポケモンが繰り出す大技のようなものであれば、完璧に身を守ることが出来る。だが、グリーンとピジョットは、サケイとジャラランガが放つその技も、それらと同じだとは考えていなかった。ピジョットは体を捻り、なるべくそれから離れようと努める。

そのZ技はジム全体を揺らし、グリーンもその威力に体力を消耗させる。

強大なエネルギーが放たれ終わった対戦場には、まだピジョットが地面の上に立っていた。

「捕らえろー！」

サケイはそれに驚くことなく指示を出した。そして、それが届くよりも先に、ジャラランガは地面を踏み込んでいる。

生半可なポケモンであれば、たとえ『まもる』をしていてもその上からZ技で叩き潰すことが出来る。自分達のゼンリヨクに対し、その

ようにして抵抗しようとした愚かな連中を彼らは数多く知っている。だが、グリーンとその相棒ならば、それから生き残っても不思議なことではないと、彼はこの戦いの中で評価を改めていた。

しかし、だからといって体力を全く消耗しないわけではない。ジャランガの高速タツクルからマウントポジションに捕らえてしまえば、あとは造作もない相手。

「上にー！」

地面を蹴ったジャランガが、まさにピジヨットを射程圏内に捉えようとしたその時、グリーンの指示とともに、ピジヨットは空へと舞い上がった。ジャランガのタツクルは、ピジヨットの羽を掠めるだけの不発に終わる。

「飛んだか」

サケイは、ピジヨットの体力が思っているほど消費していないことに今度は驚いていた。衰えを知らない視力で空のピジヨットを観察すれば、首元に紐のようなものが見える。おそらく、グリーンがオボンのみを持たせていたことだろう。

「飛べー！」

地を這うドラゴンに対し、とんでもなく突飛なように思える指示を、サケイが叫ぶ。

だがそれは、怒りや驚きに任せただけの無茶な注文ではない。

彼らは、空を飛んで自分達の射程から逃れようとした相手を数多く知っている。そして、鍛錬の末に、彼らは空をも射程圏内に引きずり込んでいた。

ジャランガは一度だけ浅くしゃがみこんだ後に、バネ細工のように地面を蹴って跳ね上がった。強く地面を蹴っての爆発的な移動、やっていることは高速タツクルとそうは変わらない。否、むしろこの空への攻撃を横に応用したのが高速タツクルという戦術なのだ。

『『フェザーダンス』！』

しかしグリーンは、彼らが見せた裏芸に動揺することなく、ピジヨットに指示を出す。そのようなアイデアを持っていたのは、アローラのトレーナーたちだけではない、数は少ないが、カントーや

ジヨウトにだってそのような攻撃を指摘すものはいた。

ピジョットは羽ばたきの中で自身の羽毛を抜き飛ばし、向かって来るジャラランガに対して羽の煙幕を作り出した。当然、ジャラランガの視界は白く染まり、ピジョットを確認できなくなる。

だが、ジャラランガはまだ攻撃をピジョットに当てる気満々だった。空は、自由に見えてその実不自由なフィールド、浮遊することで空中を維持しているわけではない鳥ポケモンが相手ならば、その軌道はある程度想定できる。

同じことを、サケイも考えていた。自分とジャラランガの鍛錬の延長は、それを可能にすると、信じていた。

『スカイアツパー！』

ジャラランガが、羽の煙幕を突き抜くように拳を振り上げる。その途中に、わずかに何かを擦った感覚が残る。

だが、ピジョットの顎を捉えるはずだったその拳は大きく空振りした。

しかし、ジャラランガはまだ諦めない。むしろ二の手三の手、その次を放とうと鱗を鳴らす。

避けられたとしても、微かに手応えはあった。まだ空に残っている相手に『スケイルノイズ』を打ち込めば、十分に勝機はある。

羽の煙幕を抜けたジャラランガは、上にいるはずの、もしくは同じ目線にいるはずのピジョットを探した。

だが、それはいない、それは確認できなかった。

「下だー！」

サケイの呼び声によく気づいたジャラランガは、体を捻って地面を見る。

そこには、地面に立ってこちらを見上げているピジョットの姿が見えた。

下、どうして。

ジャラランガは一瞬困惑した。自分が空から鳥を見下げ、鳥が地面から自分を見上げている。全く経験のない異質な光景、これではいつもとあべこべではないか。煙幕を撒いて、わざわざ地面に逃げるなど

見たことがないし考えたこともない。

そして、ジャラランガがピジョットを捉えるまでの、そして、その状況を飲み込むまでの時間は、確実にスキとなっている。

それはサケイも同じだった。彼はピジョットが地面に降り立つのをジャラランガよりも速く確認していたが、その意味がつかめず、一瞬ではあるがスキを作っている。

そのスキを埋めるために、サケイ達は即断した。相手が空にしようが地面にしようが関係なく、もともとのプランで突き進む。

跳ね上がったエネルギーが重力に負け始めていたジャラランガは、体を捻って攻撃の体勢を取る。

それに合わせるように、ピジョットも翼を大きく広げて攻撃の体勢を取った。

『スケイルノイズ』！』

『ぼうふう』！』

ジャラランガは空から音波を、ピジョットは地上から風を巻き押してそれぞれ攻撃する。

相性だけで言えば、ピジョットのほうが圧倒的に有利だった。だが、生まれ持った能力を考えれば、その威力は五分五分といったところ。

サケイは、その打ち合いに自信を持っていた。彼とジャラランガが打ち出すZ技は、その威力以外にも、全身の鱗を研ぎ澄ますことすべての能力を引き上げる複合的な効果もあった。それにより、自身の『スケイルノイズ』はより強く、そして、相手の『ぼうふう』はより弱く受けることが出来る。

その証拠に、音を叩きつけられたピジョットは、対戦場に跡を作りながら吹き飛んだ。

その様子を、ジャラランガは空から見下ろしている。

そう、見下していた。

ジャラランガは、それができていることの違和感にようやく気がついた。

本来ならば、そろそろ地面に着地する頃合いだった。だが、自身の

目線はいつまでも空にあり、地面はいつまでも近づいてこない。

否、それどころか、どんどんと離れていつている。

サケイは、それを信じられないといったふうに眺めていた。

サイズこそ小さいが、ジャラランガの肉体に詰まる筋肉は、その体重を、見た目よりもずつと重くしているはずだった。

それが、こんなにも簡単に吹き飛ばされている。

おそらく、ジャラランガが地面で踏ん張ることができれば、それに耐えることができたかもしれない。だが、空中という状況は、踏ん張るための地面を失わせる。

そして、技を打つ際に地面で踏ん張ることができ、さらに、自分達の戸惑いによって生まれた僅かなアドバンテージが、ピジョットにこれほどの威力の『ほうふう』を打つ要素を与えた。

そのためのあべこべな配置、そして、そのための『フエーザーダンス』による煙幕、そして、そのための『そらをとぶ』、そして、そのための『まもる』、そして、そのためのピジョットという選択。

ジャラランガとピジョットの対面から今に至るまでを思い返せば、全てはグリーンの意のままのように感じた。さらに言えばその状況を実現させるための前二体の戦いも、もしかすればグリーンの手の上の上だったのかもしれない。

実際にはそうではない、グリーンはサケイがペルシアンを所持している事を確信はしていなかった。だが、サケイの思考からそれを抜け落とさせるほどに、グリーンは戦略にガツチリと嵌っていたのである。

丁寧に舗装されているジムの対戦場と違い、ジムの天井は、他の施設と同じように、鉄筋がむき出しの乱雑なものだった。それは、高く設定されているジムの天井は、ポケモンバトルに影響を及ぼさないだろうという予想のものだ、

だが、鈍い音と共に、ジャラランガの背中が、天井に激突した。薄く作られた天井がきしみ、予想外の威力に彼は呻く。

しかし、それで終わりではなかった。

風によるその攻撃が収まるその直前に、今度はけたたましい音と共に

に、腹部から胸にかけて鋭い痛み。

痛みによつて体が動かないことを自覚しながら、ジャラランガはようやく重力に従順に落下を始める。もちろん、そのまま地面に叩きつけられることは避けたく、受け身のことを考えなければならぬ。このようなときにどのような受け身を取ることが最善であるか、彼はトレーナーであるサケイとの鍛錬の中で学んでいた。

だが、それ以上に、その技を受けてしまったことの動揺のほうが、彼の中では大きかった。その攻撃は、鳥が使える攻撃では無いはずだった。当分食らうことのなかったその痛みは、数限られた自分の同胞にしか打たれたことのない痛み。それは、自分のように鋭く特殊な鱗を持つドラゴンしか扱えることのできない技だった。

『オウムがえし』か』

サケイは、そう呟いて苦い表情を見せた。『オウムがえし』は鳥系のポケモンの一部が扱うことの出来る特殊な技で、自分が食らった技をそのまま相手に返すと言う能力を持つ。

ピジョットが『ぼうふう』の目的はジャラランガを吹き飛ばすことだけではなかった、その真の目的は、風によつてジャラランガの『スケイルノイズ』を『オウムがえし』する事にあつたのだ。

あそこで『スケイルノイズ』を選択した自身の判断が大きく間違つていたことをサケイは痛感していた。否、そうではない、あの場面、あの状況ならば、おそらく何十何百回でも『スケイルノイズ』の判断を下していただろう。グリーンへの戦術感が、その状況を作り出し、それを最大限利用しただけのこと。

「受け身を」と、サケイは自然落下を見せるジャラランガに言った。

しかし、ジャラランガはいまだ動かず、重い頭が下へ下へと傾き始めている。サケイは、彼が動揺と混乱の中にいる事に気づいた。

「受け身をー」と、彼は声を張り上げてもう一度言った。

トレーナーの声は強い、ジャラランガはその声でようやく自分を取り戻すと、空中で体を捻りながらなんとか背中から地面に落ちようと試みる。だが、落下までの僅かな時間は完璧な軌道修正を許さず、ジャラランガは左腕を地面に振り下ろすようにしながら不格好に着

地を試みた。

鈍い音、肉が地面に叩きつけられる鈍い音。

ピジヨットも、ジャラランガも、共に地面に突っ伏している。二階席でピカチュウを抱えていたナナミは、勝負が引き分けに終わったことを確信していた。

だが、サケイはそうは思っていない。確かに、この試合においてグリーンは素晴らしい戦術感を、勇気を、強さを、ゼンリヨクを發揮した。今思い返せば、自分がコントロールされる側だったことも間違いないだろう。すでにこの戦いは、カプ・コケコに捧げるに十分すぎるほどの格がある。

だが、それでも、勝利したのは自分達だ。

右腕に力を込めながら、ジャラランガが体を起き上がらせる。受け身をとった左腕にはまだ痛みとしびれが残り、使い物になりそうになかった。

ドラゴンとして生まれもった体の強さは、重力の衝撃に打ち勝っていた。なんとか、ギリギリ、そして根性で、彼は戦う姿勢を見せる。そして、それは対面のピジヨットも同じだった。白い羽毛を土埃で汚しながら、立ち上がる。

『かえんほうしゃ！』

痛みを覚え始めた喉を更に使いながら、サケイは荒ぶる声で指示を出した。

当然、まだピジヨットが動けることに対する驚きはあった。いくら『まもる』とオボンを駆使したからといって、乙技に『スカイアツパー』そして『スケイルノイズ』やりすぎと言っても良い攻撃だ、とてもではないが耐えられるはずがない。

だが、考えるのは後にすることに決めた。グリーンのゼンリヨクは、すでにサケイの想像の中にいるトレーナーを遥かに超えていた。気づかぬうちに、サケイはグリーンというトレーナーを大きく見上げる立場にあった。それを自覚してもなお、彼らは目の前の相手が倒れるまで戦う。すべてのトレーナーを見上げる立場にあるときから、彼らはそうであった。

同じく目の前の相手を倒すことだけにすべての知性を費やすことを決めたジャラランガは、喉の奥につかえている血反吐を一息で吐き出すと、大きく息を吸い込んでから『かえんほうしゃ』を放つ。遠距離からでも攻撃が可能なその技は、近距離戦を得意とする彼の裏芸の一つだった。

『まもる』

ピジヨットもまた『スケイルノイズ』で地面に叩きつけられたことよって傷を負っていた。左の翼が思うように動かず、羽ばたくことができない。

それでも、ピジヨットは右の翼を大きく振ることよって『かえんほうしゃ』から身を守った。特殊攻撃とはいえ、その攻撃をまともに食らってしまえば力尽きてしまうだろう。

そして、振り払った炎の向こう側から、ジャラランガが猛然と迫ってくる。

サケイ達は『かえんほうしゃ』が振り払われることを当然のように予測していた、それを食らって敗北するような位置にグリーン達がないことを理解していた。故に、彼らは、その大技を相手の視界を一瞬だけ奪う煙幕として使ったのである。左腕を犠牲にしてまで守った両足は、まだ十分な爆発力を持っている。

二度目の高速タックルは、空へと逃げられないピジヨットを確実に捉えた。肩口で突き刺すようにピジヨットを抱え、半ば押し倒すようにテイクダウンを取る。

その胆力に、グリーンは息を呑んだ。動かぬ左腕、痛むであろう全身、プライドの高いドラゴンならば、トレーナーの指示よりも自己の判断を優先しても何ら不思議のない状況だった。それなのに、彼はこの状況でほとんど完璧な素晴らしいタックルを決めた。おそらく自然の中では覚えることのなかった、トレーナーとの鍛錬と技術の結晶を、彼はこの状況でも選択したのである。

絶望的な状況だった。ジャラランガはピジヨットのそれぞれの翼

を膝の下に敷き、血走った目で動けないピジヨットを睨みつける。

『インファイト!』と、サケイは最後の攻撃を指示した。残った右腕で、ゼンリヨクでピジヨットを叩き潰すことで、この長い試合を終わらせるつもりだった。

ジャラランガが右腕を持ち上げ、振り下ろそうとする。だが、ジャラランガはその指示を完遂することはできなかった。

その右腕は力を失いだらりと垂れ下がった。ピジヨットを見下ろしていた状態はついた膝を視点にゆっくりと倒れる。仰向けのピジヨットに覆いかぶさるように、ジャラランガは気を失った。

力を失ったジャラランガの下から、ピジヨットがなんとか体をねじって潜り出た。ボロボロになりながらも、ピジヨットは一つ、誇らしげに鳴いた。

ジャラランガの右腕がピジヨットを捉えようとした寸前、グリーンが出した『でんこうせっか』の指示は確かにピジヨットに届いていた。彼は足を振り上げ、ジャラランガの顎を蹴った。

その時点で、勝負は決していた。サケイほどのトレーナーがそれを見逃すはずもなかった。

だが、ジャラランガは常軌を逸した精神力を以って、ピジヨット相手に必勝の体勢にまで持ち込んだ。そして、サケイは彼の精神力を最後まで信じきり、その時最善の指示を出したのだ。

なんと優れたトレーナー達なのだろうか、グリーンは本心から思っていた。

そして、それに勝った、生き残ることができた自分達の勝利の実感が、ようやく心の奥底からじわじわと湧き出てくる。

その時だ、対戦場の向こう側から、大きな叫び声が聞こえてきた。「素晴らしい! 素晴らしい戦いだっただけ!」

その声の主であるサケイは、倒れているジャラランガをボールに戻し、両手を広げてはるか天井を見上げていた。無骨に鉄骨の並ぶそれは、彼の神と共有する光景ではないだろう。だが、今のサケイにとってそれは些細な問題でしか無かった。

グリーンはピジヨットをボールに戻しながらそれを眺める。それ

ほどの感情の爆発を、まだ受け入れられていない。

サケイは、ひとしきり思いつく限りの大声をあげていた。やがて思いついた限りのそれが尽き、喉の痛みが無視できなくなってくると、彼は落ち着きを取り戻そうと努めながら、放り投げていたジャケットを手に取り、二、三度適当に泥を払いながらグリーンのもとに歩み寄った。

「申し訳なかった」

グリーンの目前に立つてすぐ、彼は頭を下げて言葉にして謝罪した。当然それはグリーンに対して取ってきた態度に対するものもあつたが、それ以上に、彼の実力を大きく見誤っていたことに対する自戒の意味もあつた。

「君に対する敬意を、大きく欠いていた。許してほしい、私は、君に対してあまりにも無知だつた」

グリーンの返答を待つよりも先に、サケイは「そして」と、右腕を差し出しながら続ける。

「素晴らしい戦いを、心より感謝する」

グリーンは、誘われるままにサケイの手を握った。二、三度それを振ったサケイは、最後に両手でグリーンの右手を握ると「本当に素晴らしい戦いだつた」と、もう一度言う。

「どうも」と、グリーンは短くそれに返す。サケイがあまりにも喜ぶものだから、湧き出ていたはずの勝利の実感は一瞬姿を消していた。

「私のゼンリョクを、君は全力で受け止め、そして勝利した。戦いの神カプ・コケコは、この戦い捧げられたことを大いに喜ぶだろう」

更にサケイは続ける。彼の興奮は、まだ収まっていはいないようだつた。

「これだけの戦いを捧げたのだ、私の事業は、必ず大成功する！」

実際のところ、それは彼の願望であり、かならず訪れる未来ではない。

だが、サケイはこの戦いによって、それを神に捧げたという実感によって、そのような確信に近い自信を得ていた。

サケイはようやく落ち着きを取り戻したようだ。彼は「すまない」

と微笑んでから続ける。

「これを問うことは、無粋だと思う。だが、一つだけ聞きたい」

この戦いについて、どうしても聞きたいことがあった。そして、それを問わなければならぬことが、トレーナーとしては無粋で惨めであることも知っていた。

しかし、それでも、サケイはグリーン達のゼンリョクを、より深く理解したかった。

「どうぞ」

「私はあの『スケイルノイズ』で勝負はついたらと思っていた」

彼らの脳裏に、あのあべこべな光景が浮かぶ。

ジャラランガの『スケイルノイズ』にピジョットの『ほうふう』そして『オウムがえし』、確かにそれらは大きなダメージだったが、同時にジャラランガの『スケイルノイズ』だってピジョットに大きな、サケイの感覚ではピジョットを戦闘不能にして余りある威力だと思っていた。

「どうして、ピジョットはあの攻撃に耐えることができた？」

ああ、と、グリーンは小さく頷いた。そして、それをどう伝えればいいのかを少し考えた後に、呟くように答える。

「願いたい事、ですよ」

サケイは、一瞬その返答に顔をしかめた、なにか触れられたくない質問をすっばかすような、オカルトめいたような答えだったからだ。

だが、サケイも優秀なトレーナーだ、グリーンがそのようなすっばかしをするような人間ではないことを念頭に、その答えの意味を探ると、途端にふふふ、と、笑みがこぼれた。

「なるほど、『ねがいごと』か」

そのポケモンについてよく知っているはずのサケイですら、その発想に至るのに時間を要した。

この勝負の運命を分けたのは、グリーンの最も古い相棒、サンダースの精神力だった。

ジャラランガの『メガトンパンチ』を受ける寸前、サンダースは『かみなり』で抵抗することも可能だった。サケイが通したと思っていた

『いばる』は、サンダースの強烈な精神力の前に無力と化していたのだ。

そしてサンダースは、迫り来るジャラランガの拳をしつかりと見据えながら『ねがいごと』という技を放った。

その技『ねがいごと』は、時間差でポケモンを回復させる特殊なもので、サンダースはその恩恵をうけることができない。

そして『ねがいごと』によって、ジャラランガの乙技を受けた直後のピジョットの体力が回復された。『ねがいごと』とオボンのみによる回復、その時点でピジョットはその後を戦うのに十分な体力を回復していたのだ。

それもまた、グリーンとサンダースの信頼関係の結晶のような戦略だった。もし、サンダースが少しでもジャラランガの拳に怯えてしまえば、その指示は通らなかつただろう、そして、グリーンもまた、サンダースと自らの絆を最大限に信頼しているからこそ、それを戦略として組み込むことができた。

グリーンと比べて、サケイがトレーナーとして大きく劣っているわけではなかった。彼はポケモンの強さを引き出す知識を持っていたし、ポケモンに最速を与え、そしてそれを捉えることの出来る動体視力と判断力も持ち得ていた。そして、ポケモンたちを信頼し、そして信頼されるだけの人間としての格もあった。

ふう、と、サケイはため息をつく。それは、自身への憂いと、グリーンに対する感服と、二つの意味があった。

「考えもしなかつたな」

サケイは、イーブイとその一族への知識について、カントーやジョウトのトレーナーよりも優れている自信があった。だが、あの時あの瞬間、『ねがいごと』の可能性だなんて考えもしなかつたのだ。自身の戦略がハマっていることへの羨望か、それともそれまでそれを成してきたことの慢心か、とにかく彼は、それを見逃した。

大きな差だった。

「私は、アローラに帰るよ」

ジャケツトを肩に引つ掛け、サケイはグリーンに背を向けようとし

た。目的が達成された今、彼がカントーにいる意味はない、明日にでも、彼が求める事業のためにアローラに帰る必要があった。

「待って、ください」

グリーンが、それを引き止めた。彼はサケイに向かって頭を下げる。

「ごめんなさい。俺も、あなたに失礼なことをしました」

サケイとの初対戦を、グリーンは敗北という結果以上に悔いていた。これだけの戦いを出来るトレーナーにとって、それは屈辱的だっただろう。

「なんだ、そんなこと」と、サケイは白い歯を見せる。

「今更そんな事言われなくても、あの戦いの中で、君の気持ちは伝わったさ」

その言葉に、グリーンは憑き物が落ちたように微笑んだ。そして「俺も、一つ、聞きたいことがあります」と続け、サケイがそれに好意的な相づちを打ったのを確認してから言う。

「あなたは、ゼンリヨクを出して負けたら、どうやって前を向くんですか？」

それは、勝者が敗者に問うて良い質問ではなかった。あまりにも挑発的で、不躰なものと捉えることだって、十分にできる。

だが、サケイはその質問をそのようには捉えなかった、むしろその逆、彼はその質問にやや目を伏せ、目の前の少年に複雑な感情を抱く。その少年の経歴を、彼はよく知っていた。

「私は、神を信じている」と、サケイは言った。

「いや、正確には、神を信じることを信じている。メレメレの神カプ・コケコは実際に存在し、神についての言い伝えも多く存在する。だから私は、優れた戦いを神に捧げるその行為そのものに意味があると信じる事が出来る。私はこの戦いに負けたことを悔いてはいない。この戦いを、ゼンリヨクを出すことに意味があり、絶対に負けてはならない戦いだとは感じていなかったからだ」

グリーンが何も言わないのを確認してから続ける。

「だが、君たちは明確な神を信じず、そして、ゼンリヨクを出して負ける事を、肯定されることが少ない」

サケイはそこで言葉をつまらせた。それより先にいうべき言葉が、果たしてグリーンにとっていいことか悪いことなのか判断することができなかつた。

その時だつた、ジムの窓が揺れるほどの大きな風が吹いた。サケイは、思わず軋む窓を確認してしまったほどだ。

「風か」と、サケイは呟いた。変化をもたらす風が吹いたことの意味を、彼ははかりかねている。

「続きを」

その声に、サケイは再び少年の目を見た。グリーンは、その言葉の先が、必ずしも自分にとって良いものであることではないことを理解しながらも、それを求めている。

強い目だつた。

そして、サケイが口を開く。

「結論から言えば、君が前を向く方法を、私は知らない」

それは、かなり急いだ結論だつた。文面上、グリーンへの質問はグリーン自身が前を向くにはどうすれば良いものかではない。

だが、グリーンはそれに相槌を打つた。サケイが、自分の質問から、その質問が自分の境遇から生まれたもので、その実救いを求めている質問であることを彼が理解していることを理解していた。

「君の感情を、君の負けを理解できる人間は、もしかしたらこの世界には存在しないのかもしれない。神を信じると、無責任に言うことすら私にはできない、君と同じ境遇なら、私は神を信じることを疑うだろう」

更に一拍置いて続ける。

「この試合も、私はゼンリヨクを出す事が目的で、こうして負けた後にも満足している。だが、おそらく君がこの試合に負けていれば、多くのものを失つただろう。この試合において、私達は背負っているものがあまりにも違いすぎた」

だが、と言つて続ける。

「だからこそ、私は君を尊敬する。それでも私の前に立った勇氣は君だけのものだし、それでも私に勝利した誇りも、君だけのものだ」

サケイは、ちらりと二階席を見やった。小さなピカチュウを抱えた彼女は、まだそこに座つて自分達を眺めている。自分達二人の会話を優先しているのだろう。よくできた女性だと、もう一度サケイは思った。

「君のお姉さんに、貴女の言つたとおりだったと伝えておいてほしい。確かに貴女の弟は、比類ないほどに優れた戦士だったよと、ね」

その言い回しの意味を理解したグリーンは、サケイと同じくちらりと二階席を見やった後に、少しだけ頬を染め「わかりました」と答える。

さて、と、サケイが伸びをした。

「君のために祈っても？」と、彼はグリーンに問う。

グリーンは少しキョトンとした後にそれに頷く。

サケイはグリーンの頬に手をやった。

「太陽のもとに続くこの地の少年にも、カプの御加護があらんことを」
そう言つてしばらく目を閉じたサケイは、やがて目を開いて微笑むと、グリーンに背を向け、二度と振り返らなかつた。

☆

「グリーン」

ジムに備え付けてあるポケモン回復装置を起動させていたグリーンの背中に、姉の言葉が投げかけられた。彼女は、グリーンが傷ついたポケモンの回復を優先できるように、あえてそれまで、彼の前に姿を見せていなかった。

薄暗い部屋だった。回復装置の発光だけが目立っている。その装置の操作に慣れているグリーンは、部屋が暗いことが気になつていなかった。

グリーンはそれに振り返らずに、うん、と小さく返事を返す。

「勝ったよ」と、グリーンは背中越しに姉にそう伝えた。

それは、わざわざ伝える必要がないことだった。彼女が二階席から自分達の試合を眺めていた事は当然グリーンも知っている。

「勝ったんだ」

だが、彼はもう一度、そう言った。

回復装置の聞き慣れた音楽が終わり、安全装置が外れる音がする。

グリーンは、そこに乗っていた三つのボールをいとおしげに撫でた。

「こいつらと、勝ったんだよ」

それは、体の奥底から、頭の中までようやく浸透した、勝利の実感から来る、小さな小さな勝ち名乗りだった。

その事実を知っている人間は、グリーンを含め、たったの三人しか存在しない。

だが、彼にとって、それは大きな問題ではなかった。自分自身が、その勝利を最も必要としていた観客であった事を彼は理解している。

「あんなに、強い人に」

その声が、小さく、震えている理由を、姉はよく知っている。

ナナミは、彼女の足元でグリーンを心配そうに眺めているピカチュウを抱えあげると、仕上げた最高の毛並みを撫でて彼を落ち着かせながらグリーンに言う。

「二晩くらいなら、預かれるわよ」

グリーンは、背を向けたままそれに頷く。

彼らの話の内容を理解しているのかどうかはわからないが、ピカチュウは小さくグリーンに鳴き声をかけ、大人しくナナミの腕の中に収まった。

これから来るであろう夜は、彼らが勝利の実感を分かち合い、互いの健闘を讃え、そして、あの時彼らを選ばなかったことを悔い、そして、それを許すために存在しているのだろう。

2—コガネの少年達

1

そこは、薄暗い通路だった。

「僕は、必ず強くなります！」

子供と呼ぶには少し年を取りすぎ、少年と断定するにはまだ年が足りないような気もするその少年は、手を広げ、くるりとステップしながらそう叫ぶ。その声は反響して不気味なうねりとなったが、誰もそれを咎めなかった。

「そうだとも！ 君は必ず強くなれる！」

薄暗さの向こう側から、少年とはまた違う声が響く。

「はい！ 僕は、必ず強くなります！」

「そうだとも！ 君は必ず強くなれる！ なぜならば、君はとても頑張っているからだ！」

向こう側からの声は、更に続ける。

「頑張ってる君が、強くないわけがない！ なぜならば、神様はそれを見ているのだから！」

「はい！」

「神様を信じれば、いつかきつと、夢は叶う！」

向こう側からの声に、その少年は恍惚のような表情を見せる。

薄暗く、空気の重いその通路に、彼らの幸せそうな笑い声は、いつまでも響いていた。

☆

「いひゃい、いひゃい！ いひゃいつて！」

ピカチュウは、その青年の頬を掴んで引つ張っていた。痩せ気味のその青年の頬は思っていたよりもよく伸びたが、それに比例して痛みも強くなる。

ピカチュウはしばらくその青年、マサキの頬を引つ張っていたが、どうやらその皮が剥がれることがないようだという当然の結論に至ると、安堵のようなため息を付いて彼から離れた。そして、「ピカチュウちゃん」とその名を呼ぶ小さな女の子をあやすために再び戻っていく。

「あいつまだワイがポケモンとひつついとると思つとんか」

赤く腫れ上がった頬をなでさすりながら、マサキはピカチュウの動きを目で追いながらそう言った。

だが、呆れこそあったが怒ったような口調ではなかった。事実姪のもとに向かうピカチュウを追っている彼の目線は懐かしさと愛おしさに満ちている。趣味が高じてポケモン通信業界の覇者となったその青年の根本には、未だにポケモンたちへの慈愛が満ちているようだった。

「話には聞いてますよ」

椅子に腰を下ろしたマサキと机を挟んで対面、グリーンが笑いを噛み殺しながら言った。その世界のカリスマ、業界の覇道を行く若き青年実業家にはあまりにも不釣り合いなエピソードを、彼はレッドから何度も聞かされていた。

マサキはその言葉に顔全体を頬の色と同じように赤くさせたが、それにプライドを汚されていると言うよりも、過去の過ちを反省しながら思い返しているようだった。

「アホみたいな話やけど、レッド君には命救われてるからなあ」

かつて、マサキはポケモンと一つになった。馬鹿みたいな話だが、彼の身に起きたことを簡潔に説明しようとするればそう言うしかない、その現象を馬鹿ではないように単語化するには、起きた事象があまり

にも少なすぎる。とにかく、彼はまるで低予算のエスエフ映画のように、ポケモンと一つになってしまったのだ。

そして、それを救ったのはレッドとピカチュウだった。救ったと言っても対して大きな事をしたわけではない。ポケモンと一つになったマサキの指示に従い、スイッチを一つ押しただけ。大して大きな事をしたわけではないと言っても、実際それでマサキの命は助かったわけだから、大したことはあるのだが。

初めは共通の知り合いが犯したヘマとしての話題だったが、マサキの名前が大きくなる度に、その話の硬さは比例して増していった。その失敗を自分達以外に漏らすほど無礼ではなかったが、故にレッドとグリーンが共有する秘密の一つだった。

「だが、ワイはただじゃ転ばん。『転んだらそこにあつた石を持って立ち上がる』、ジョウトとホウエンの間にある地方の商人に伝わる生き様や。ジョウトの商人として、負けるわけにはいかんのや」

そう言つてマグカップを傾けたマサキに、グリーンは、へえ、と、それに興味を示して身を乗り出した。知恵者のマサキが、散々ネタにされたその失敗をどう活かそうとしているのか興味があつた。

その質問を期待していたマサキは、コーヒートの温かさを口から吐き出した後に答える。

「ポケモンと人間が一つになることができ、ポケモンと人間を二つにすることもできたっちゅーことは、つまり人間の中にあるポケモンの要素を分離させることは科学的に可能やっつーこっちゃ」

うんうんと、グリーンは頷いた。彼にしては珍しく、わかりやすい説明だった。

「例えばここにポケモン由来の毒に侵されとる人間がおるとする、そこでワイの身に起きた現象を応用すれば、人間と、ポケモン由来の毒を分離させることも理論上十分可能や」

なるほど、とグリーンは本心から感心した。

「確かにそれなら、未発見のポケモンによる毒にも対応できる」

「せやろ? 『どくけし』で対応できない毒への対抗策になりうるんや」

大衆的には役に立ちそうではないが、開発することに意味のない技術ではなさそうだった。

アイデアを肯定されたマサキは随分と上機嫌だった、ニコニコと笑みを隠すことなく、マグカップを揺らして砂糖をより溶かそうとしている。

グリーンは再び笑いを噛み殺した。可愛らしい人だなと、グリーンは幾分か年上のマサキにそう思った。感情に表裏があまりなく、子供のように喜ぶ。こういう憎めないところが、偉大な功績の割にあまり敵を作っていないところなのだろう。

「まあ、まあええわ。お喋りはこのへんまででええやろ」

マサキはマグカップを机において両手をひらひらさせた。年下の、弟分と言っていい少年相手にあまりにもはしゃいでいたことを多少は自覚したのだろう。

「君が言ってたことやけどな」

本題に、グリーンは表情を引き締める。

「結論から言えば、動きは無かったで」

ふう、と、グリーンは背もたれに体重を預けた。

「そうですか」とだけ答えて、暫しの間、マサキの実家の天井を眺める。また一つ、あてが外れた。

レッドのポケモン預かりシステムの使用履歴から、彼の足取りを追う。ポケモンを六匹以上所有しているレッドは、他のトレーナーに比べてそのシステムを利用してはいる頻度が高い。もしその履歴を追うことができれば、彼の居場所を突き止めることができる。アローラで通信事業を手がけるあるトレーナーとの関わりからひらめいたその狙いが、グリーンがマサキの実家のあるコガネシティにまで赴かせた理由だった。

「二番最後にレッド君の名義から預かりシステムが使用されたのは一年以上前や、グリーン君と違って頻繁に利用してるわけじゃないからなあ」

一般人なら到底できるはずのないそれを、グリーンは人脈を用いることで簡単に成し得ていた。そもそも彼はマサキとは知り合い同士

であったし、マサキもレッドとは知り合い同士であった。

しかしなあ、と首を捻ってからマサキが言う。

「グリーン君で二人目やで」

二人目、と言う単語に、グリーンも同じく首を捻った。その単語が、何にかけられているものなのかわからなかった。

その疑問を理解していたのだろう、マサキは間髪入れずに続ける。「まったくおんなじやねん。知り合いが行方不明になったから、その足取りを調べるためにそいつの預かりシステム履歴を調べてくれて言ってきたのがもう一人おるんや」

突然の情報に、グリーンは「どういうことですか？」と身を乗り出した。その勢いで机が揺れ、二つのマグカップが音を立てる。

マサキもまた、その情報をグリーンが欲することを分かっていたのだろう、それに驚くことなく答える。

「ゴールドって知ってるか？ ジョウト出身の殿堂入りトレーナーや」

グリーンはすぐにそれに頷いた。

「ええ、戦ったこともあります」

それは、印象深いトレーナーだった。

グリーンやレッドが殿堂入りトレーナーとなった数年後、自分達と同じように突然現れ、自分達と同じように殿堂入りを搔つ攫った少年トレーナーだ。

グリーンは、トキワジムリーダーとしてゴールドと戦ったときのことを思い返した。どこことなくレッドの面影がある無口で物静かな少年で、その実力も、殿堂入りトレーナーにふさわしい素晴らしいもので、心よりグリーンバッジを送ることのできた数少ないトレーナーだった。

「そのゴールドが、行方不明になったらしいねん。最も、ワイのところに来た奴がそう言ってるだけで実際にどうかはわからんぞ？ どこか別の地方に行つとるかもしれんし、たまたまそいつと連絡がつかんだけかもわからん。所帯を持たないトレーナーの行方なんて、ある意味誰もわからんからな」

同じだ、と、グリーンは息を呑んだ。状況が、自分とまったく同じだった。

「結果は」と、グリーンはマサキに言った。そこで一瞬息をつまらせて、その言葉の意味を説明しようかどうか考える。

だが、マサキはその意味を汲んだ。

「おんなじや、まったくおんなじ、だいぶ前から預かりシステムを使っていた。手がかりは無しや」

そうですか、と、失念から背もたれを鳴らしたグリーンに、マサキが言う。

「しかし妙な話やな。レッドにしろゴールドにしろあいつら殿堂入りトレーナーやで？ 誰かに連れ去られたつちゅー事は考えられんし、かと言って自分の意志でいなくなつたとも思えんしなあ、ポケモン残して」

マサキは、手遊びに飽きた姪にもみくちやに弄ばれているピカチュウを眺めた。美しいもふもふの毛並みを、まだその価値をそんなに知らないであろう姪は楽しんでいる。

そのピカチュウが、レッドの手持ちであったことを、マサキはグリーンに説明されるよりも前に気づいていた。ポケモンに氣遣つて作られ、おそらく最高に居心地のいいであろうモンスターボールに収まることを拒否する非野生のポケモンなんて、そうはいないだろう。

あれ程に懐き、殿堂入りの力にもなったポケモンを残して去るなんて、トレーナーとしては結果を残していないマサキにだってわかる。

「連絡したるわ」

不安げな視線を虚空に投げかけていたグリーンに、マサキが言った。

「なんか変化があつたら、いの一番に連絡したる」

その微笑みに、グリーンもつられて笑い「ありがとうございます」と頭を下げた。

☆

ジョウト地方のコガネシティ、そして、カントー地方のヤマブキシ
ティ。

それぞれの地方の最も栄えている街の一つと言っている街の
街は、公共交通機関であるリニアで繋がった。

それまでは飛行能力を持った大きなポケモンか、クチバとアサギの
二つの港町をつなぐ連絡船で両地方の行き来は可能であったが、この
リニアの開通によって、多くの人間が、二つの地方を楽しめるよう
なっていた。

ピジョットを手持ちに行っているグリーンは、リニアがなくとも二つ
の地方を股にかけることができたが、それでも、公共交通機関の充実
は、彼にとつてもありがたいことだった。例えば今日のように、たま
たまコガネシティに帰省していたマサキと気軽に会うことができる
のもリニアのおかげだった。

リニアパスを指先で弄びながら、グリーンはリニアを待っていた。
彼がコガネシティを訪れたのは、マサキにレッドの連絡システムの履
歴を確認することだけが理由で、それが終わってしまったら、すぐにト
キワジムに戻るのがジムリーダーとして正しい行動だろう。滅多に
挑戦者の現れないジムとはいえ、あまり開けっ放しにするのも前任者
のようで気持ちが悪くなかった。

「結局、進展は無しか」

落胆を吐き出すように、グリーンがそう呟くと、まるでそれを待つ
ていたかのよう、リニア到着のアナウンスが鳴り響く。

マサキの協力を得られるとはいえ、元々動きのなかった預かりシス
テムの監視に多くの期待ができるわけではないだろう。

何も手がかりのない日々が続いていた。手がかりがなければ、動く
こともできない。たまにシロガネ山に赴いて手がかりを探すが、す
でに回収したレッドの手荷物以外、何かが見つかるわけでもない。

焦りと動揺は今でも続いている。だが、グリーンは極力それを表に
出さないように努めていた。自分が慌てふためいたところで解決す
る問題でもないし、保護しているピカチュウもそれに心を痛めるだろ
うから。

今はグリーン隣の隣にちよこんと座っているピカチュウも、オーキドの研究所で回復したあの日以来おとなしいもので、独断で行動を取ることなければ、笑うことだってある。ナナミにトリミングされれば気持ちよさにうたた寝することだってあるし、マサキの実家でそうしたように、自分に興味を持った子供をあやすこともある。

それも自分と同じなのだろうと、グリーンは思った。自分だけが慌てふためいたところで何も解決しないことを、ピカチュウは痛いほどに理解しているだろうから。

空を切るような音を鳴らしながら、リニアが駅に到着した。軽快だがどこか古めかしいメロディと共に、その扉が静かに開く。

旅行者やサラリーマンが淡々とリニアから降りていった。焦ることはない、その扉が再び閉まるまでには、幾分か時間がある。

それに乗り込む人々も、特に焦っているわけではない。実に落ち着いて、規律正しく乗り込んでいる。

「行くぞ」と、グリーンが声を掛けるより先に、ピカチュウが彼の肩に飛び乗る。ポケモンを引き連れている彼は、できる限り人の流れが落ち着いてからそれに乗ろうとしていた。

「あー！ おったー!!!」

その時、オクターブの高い声が駅構内に響き渡った。若い男でも到底出すことのできないだろう高い声。

行き交う人々はその声の持ち主が誰かとその方を眺め、そしてその声の持ち主を探していたであろう誰かが、もしかしたら自分ではなからうかと困惑している。

だが、グリーンは彼らとは違った。彼はその声の持ち主が誰であるかだいたい予測できていたし、そして、おそらくその声の主が『見つけた』のは自分なのだろうということも理解していた。そして、小走りと言うにはあまりにも大きく速すぎる足音が自分に向かっていくことにも気づいていたし、行き交う人々の視線が、段々と自分に集まってきていることも痛いほど理解している。

そして、だからこそ彼は、その声を無視した。

「行くぞ」

こちらは正真正銘の小走りで、グリーンは扉の向こうへ消えようと急いだ。こういうときになりふり構わずバタバタと駆け抜けるほど大胆な行動は、彼の性分では無かった。

そして力強く、それでいて小さく細い指が肩に食い込んだ時、彼は自分のそのような性分を恨んだ。

「ちよつとー、逃げることはないやんかー。ウチを無視するなんて贅沢なことあんたしかせーへんで！　ちゅーかピカチュウ手持ちに入れたん？　めっちゃかわいいわー！　これトリミングどこやったん？　めちやもふもふやわー」

コガネ弁でまくしたてるその少女は、グリーンの肩に乗るピカチュウの毛並みを楽しみながら、もう片方の手でグリーンをリニアの扉からどんと離れるように誘導するという器用なことをしていた。

行き交う人達は、その様子を見て再び日常、もしくは非日常へと帰っていった。ここコガネシティではグリーンの知名度はさほどではないが、その少女、コガネジムリーダーのアカネは抜群の知名度を誇っていたからだ。何だ、また彼女が騒いでいるだけかと、彼らはそれを不思議に思わなかった。

グリーンは、ズルズルと引きずられるように駅構内へと引き戻されていった。勿論単純な腕力だけならばグリーンの方に分があるだろう、だが、いくらうつとおしいとはいえ、女性の手を振り払うような乱暴なことを良しとする教育を、彼は受けてはいなかった。

だから彼は、思いつきり不機嫌を含めた返事で、それを表現しようとした。

「なんだよ」

しかし、それもアカネ相手には不発だった。むしろそれは、彼女の感情をより高ぶらせる結果となる。

「なんだよ、じゃないわ！　あんたがいつまで経ってもポケギアの番

号教えてくれないからこんなめんどくさいことせなあかんねんで!」
そう言った後に、アカネは「ちよつとピカチュウ借りるわ」と、グリーンの肩に乗るピカチュウをヒョイと胸に抱えて、「いやー可愛いわあ、ホンマにどしたん? グリーンのキャラちゃうやろ」としつつちやかめつちやかにピカチュウを撫で回す。

当のピカチュウは、その状況にまだ混乱しているようだった。ただでさえ丸い瞳を更にパチクリさせ、アカネとグリーンを交互に見ている。

これが例えばグリーンの手持ちであるサンダースであつたら、彼はどこか諦めたような表情をしてアカネの手に身を委ねていたのであろう。だが、ほとんどレッドの交友関係の範囲でしか人間を知らないピカチュウにとつて、アカネのその行動の是非が読めないのだ。

悪いやつじゃない、グリーンはそのような意図のある目線をピカチュウに送った。一応それに安心したのか、ピカチュウは甘んじてアカネに身を委ねる。

「いやーあんたがコガネにいつて噂を聞いたときにはほんまかと思つたけど、探してみるもんやねえ。こうやってプライベートで会うのは久しぶりやろ」

アカネが見るからにウキウキとした目線をグリーンに飛ばす頃には、リニアの出発時刻を知らせる間の抜けた音楽が駅構内に流れる。グリーンがどれだけ優れたトレーナーであつても、公共交通機関の出発時刻を捻じ曲げられる権力があるわけではない。彼の願いは虚しく散り、遂にリニアの扉が閉まった。

「そうだな」と、遂にグリーンはアカネとのコミュニケーションを決意し、そう答える。

トキワジムリーダーのグリーンと、コガネジムリーダーのアカネ。熟練したトレーナーが務めることが比較的多いジムリーダーという職種において、彼女はグリーンに同じ若手の一人として親近感を持つていた。

「そうだな、じゃないわ! ほんまあんたはレディの扱いつてもんを分かつてないなあ。あんたモテへんやろ?」

だが、グリーンは彼女の事をあまり近い存在としては見ていなかった。別に嫌いなわけではない、トレーナーとして優れていることは間違いないだろうし、人間的に問題がないことだって知っている。むしろ彼女の扱うポケモンたちを見れば、彼女が人並み外れて優しい人間であることがわかるというもの。

しかし、マサラタウンという田舎で、穏やかな姉と、同じくおとなしい女性研究員しか知らなかったグリーン少年にとって、都会的で洗練された、自己主張と押し強いアカネのような人間は、異質で、受け入れるのに時間のかかる存在だった。グリーン少年は、そういうところは見た目相応に少年的であった。

「いやー、いいタイミングやったわ。ちょうどあんたに相談したいことがあったんよ」

ピカチュウを片手で抱える格好になりながら強引にグリーンと腕を組んだアカネは、ニコニコと満面の笑みを浮かべながらグリーンを引きずるようにエスコートする。

「もうカードめくりのことには答えないからな」

かつてコガネゲームコーナーでアカネと遊んだカードめくりの記憶が蘇り、グリーンは苦い顔をした。あまりにも野生の勘でカードをめくるアカネに多少効率の良い考え方を教えたばかりに、その日一日なんの自由もなかったことがある。

「そういうことちゃうわ、今日のは本業本業。ちよつとばかり悩んでる子に、アドバイスしたってーな」

「それはお前の役割だろ」

「んー、まあそうなんやけどな、今回の子はちよつと特殊やねん。あたしよりもあんたのほうがいいアドバイスできそうやからな」

アカネは少しだけ真剣な表情を見せたが、すぐさまニコニコ顔に戻り、ピカチュウの毛並みの話やらグリーンの話やら、はては自分が朝に食べた食パンの焦げの話やらを一方的にまくしたてる。

ハヤトの苦勞が手に取るようにわかるな、と、グリーンは適当な相槌を打ちながら心の底から思っていた。自分と同じく若くしてジムリーダーを務めるハヤトのポケギアには、アカネからの着信がどっさ

りとある事をグリーンは笑い半分呆れ半分の本人から聞いていた。彼がアカネに未だにポケギアの番号を教えていない理由の多くがそこにある。尤も、アカネがその気になれば他のジムリーダーからグリーンのポケギアの番号を聞き出せるだろうから、彼女自身はあくまでもグリーンの意志を尊重していると言えなくもない。

「一体どんな悩みなんだ」

グイグイと引っ張られるようにリニア駅から引きずり出されたグリーンは、半分も聞いていなかった最近新調したブーツの話を遮って問うた。

「それがな、友達が心配やーって相談してきた子がおってん、だからウチも直接あったわけじゃないんやけどな」

不意な話題転換だったはずなのに、アカネはなんの苦もなくそれに対応した。

「なんかその友達、旅に出ようとしてるんやって」

そういったアカネが思い出したようにポケギアを取り出しどこかに連絡を始めたのを眺めながら、なるほどな、と、グリーンは一人で納得した。

生まれも育ちもコガネで、今でも全身全霊でそれを楽しんでいる彼女には、その悩みは到底務まらないだろう。

待ち合わせは、リニア駅から歩いて数分程度のファミリーレストランだった。グリーンはもう少し気取った喫茶店に入りたかったが、相談してきたトレーナーは自分達より年下なのだから、このくらいの店のほうが良いと言うのがアカネの主張で、それが彼女の主張なら、グリーンがそれに逆らえるはずもなかった。

「ウチがこの店に来るとな、絶対に窓際のボックス席に通されんねん」何かを含ませたような笑顔を見せながら、対面に座るグリーンにアカネが言った。膝に乗せたピカチュウは、レストランからサービスされたポケモンフーズをカリカリと食べている。

「そりゃまあ、ジムリーダーだからな」

彼女がどんな言葉や反応を求めているのかグリーンには手に取るようにわかったが、絶対にそれを言っただけになるものかという固い決意でアイスコーヒーにミルクとシロップを溶かす。

だが、グリーンは素直でない反応にすら満足げなアカネは、何も入っていないアイスコーヒーをくるくるとストローで弄んだ。きつとこの会計も、自分が払わされるのだろうか、グリーンは遠くを眺めながら思う。

ちょうどその時、「あの」と言う声が彼らに投げかけられた。

見れば、ウエイトレスに連れられた少年と少女が、アカネ達に小さく頭を下げていた。その腰にはそれぞれモンスタールボールがあるから。彼らはトレーナーだろう。

自分達よりも少し年下だろうなど、グリーンはその二人を見て思った。

「おー、早かったなあ、さき、こっち座りいな。ほらグリーン、よってよって」

その二人を確認して飛び跳ねるように席を立ったアカネは、二人に自分が座っていた席を勧めると、自分はグリーンが座っている席に無理やり潜り込んだ。アイスコーヒーをぐいと奥側に持っていかれてしまえば、グリーンもそれに抗うことはできず、渋々と席を詰める。

二人は、その様子を目を丸くして眺めていた。自分達の相談相手として、あの難関トキワジムリーダーのグリーンを呼んだことは彼女との通話で知っていたが、こうして実際に目の前に本人が現れると、まるでそれまで空想の世界の領域であったはずの幻のポケモンが目の前に現れたときのような興奮が多少は起こる。

アカネにしろグリーンにしろ、年齢で言えば自分達より少し上程度のものであろう。だが、それでもジムリーダーという責任の重い立場を任される根拠となる実力が彼女らにあることを、彼ら二人のトレーナーは尊敬していた。

だが、そのグリーンが、さも親しげにアカネとコミュニケーションを取っていることに、彼らはそれ以上の驚きを覚えていた。あの伝説のトレーナーであるグリーンですらも、アカネさんには敵わないんだと。

☆

「相談というのは、私達の友達についてなんです」

少女の方のトレーナー、ミズホは、アカネが注文したホットケーキには見向きもせずに、グリーンの目を見てそう言った。

「コウタというトレーナーなんです、突然カントーに武者修行に行くって言い始めて。私達は止めさせようとしたんですけど、どうしても行くと行って聞かないんです」

「行くとなにか問題でもあるのか?」

グリーンの間いには、もうひとりのトレーナー、ヨウイチが答える。「コウタはまだそういう事をするような段階ではないと思います。基礎もあまり出来てはいないし、ポケモン達のレベルもあまり高くありません。まだまだコガネシティやコガネジムで十分です」

ふうん、と、グリーンはハッキリとはしない風に鼻を鳴らす。

「でもなあ、人それぞれってこともあるで」

二人が来てからはまったくアイスコーヒーに触れもしないアカネが答える。グリーンはその返答を意外に思った、コガネジムリーダのアカネは、それを否定する側だと思っていたからだ。

「お前はそのコウタってトレーナーと会ったのか？」

グリーンは、そのトレーナーについての情報を求めた、旅だの武者修行だのと言われても、その少年がどんな人物で、どの程度の実力があるのかを理解しなければ、進められる話ではない。

「いいや、この相談受けたん昨日やからな、ほんととは今日会ってみようかと思ってたんやけど。その前にあんたがコガネにおるって話聞いたからそつちを先にしたんや。ウチよりよりあんたのほうがこういう話には強いかなあ思うて」

なるほど、とグリーンはそれに頷いた。

「まあ確かに、アカネよりは俺のほうが良いかもしれないな」

「せやろ？ グリーンはどうやったん？ 旅」

その席三人の視線が、グリーンに注目する。彼はそれを感じながらその質問に答えた。

「どうだったと言われてもな、ハッキリ言っただけそのコウタってトレーナーと俺とじゃ立場が違う」

「どゆこと？」

アカネは首をひねった。グリーンが立場と言う単語を持ち出す理由がいまいちわからなかった。そりゃあ今でこそ立場は違いうだろうが、グリーンにだって、何も知らぬ少年時代があったはずだ。

グリーンは少し鼻を鳴らすようなため息を吐いてからそれを説明する。都会出身のアカネに、言葉なくそれを理解しろという方が無理な話だった。

「俺は生まれがマサラタウンだからな、自分で言うのもなんだがあの爺さんの研究所以外は本当になーんにもない所だから、外に出るしか選択肢が無かったんだ。コガネのように、求めればだいたいのが手に入るような都会とは、そもその前提が違う」

ミズホとヨウイチはグリーンの答えに頷いた。共にコガネ生まれのコガネ育ちではあるが、グリーンの故郷マサラタウンが、もしかす

ればジョウトでも田舎であるワカバタウンよりも未発展の土地であるかもしれないことを彼らはなんと知っていた。

「そんなら」と、アカネがグリーン顔を覗き込むようにして問う。

「もしあんたがコガネの生まれやったら、旅には出なかつたんか？」

「出ただらうな」

グリーンがあまりにもあつさりそう答えたものだから、アカネを含む三人のトレーナーは一度言葉を失い、そして、その沈黙を維持することによって、その先を求める。

「俺がどこで生まれていようと、俺がオーキドユキナリの孫である限り、どこかで必ずトレーナーとしての道に進むことになっていただろうと思う。そうなれば、いずれはアサギやタンバのジムに行かなくちやならなくなるだろうから、その時は旅に出てただらうな」

それは、彼の血筋を考えれば納得のいく説明だった。携帯獣学の権威であるオーキドの孫という血は、ポケモンとかかわらない人生を送るには、あまりにも濃い。

「あまり強くないんだろう？」と、グリーンは二人に問う。

「もし強けりや、必然的にこの街を出なければならなくなる。強いトレーナーが、バッジ一つじゃ満足しない」

ヨウイチは、それに頷いた。

「よくあることだ」と、グリーンは続ける。

「なかなか強くなれなくて、ああでもないこうでもないといろいろなことを考えていった先に、あまりにも現実的ではない選択肢を、まるで正解のように思い込んでしまう」

決めつけるようなグリーンに、口調に、「でも」と、うつむきながらミズホが呟く。

「そんな子じゃ、無かつたんです」

その言葉に、ヨウイチも頷く。

「たしかに今は強くないけど、それをちゃんと受け入れて、コツコツと努力してるような、そんなトレーナーなんです。だから俺達、コウタが急にそんな事を言い出した理由がわからなくて」

ふうん、と、グリーンはそれに鼻を鳴らした。そして、ここで話す

べきことは全て話し終え、これ以上は誰の得にもならない口論にしかならないだろうと判断した。

「じゃあ、行こう」

そう言つて、グリーンは席から立ち上がった。アカネやピカチュウに目配せしながら、同じく席を立つように求める。

「会いに行こう。それで全てはつきりするさ」

☆

大人しそうなやつだな。

件のトレーナー、コウタの第一印象を、グリーンはそう感じていた。子供と呼ぶには背が高く、かと言って少年と呼ぶにはまだ年齢が足りていないように見えるその少年は、グリーン達を見て目を丸くしていた。まるで信じられないと言った風に、ジロジロとグリーンを眺める。

三十四番道路。コガネシティとウバメの森をつなぐその道路は、地元のリレーナー達の遊び場でもあった。コウタも、ミズホやヨウイチも、きつとこの道路で遊び、トレーナーとしての自我を確立させていったのだろう。

「コガネジムリーダーのアカネや、こっちはトキワジムのグリーン、よろしく」

アカネから差し出された手を、コウタは少し動揺しながら握った。同じく差し出されたグリーンの手も同じく。

「ウチらな、この二人から相談受けてん」

コウタの縄張りに四人がかりで押し掛けたことを気遣っているのか、アカネはグリーンにするのとは打って変わった声色で彼に言っ

た。最も、それこそが、グリーンの知らない教育者としてのアカネのあり方なのだろう。

「相談?」

甲高いが、少し掠れた声でコウタが返した。グリーンは、彼がミズホやヨウイチと比べて少し下の年齢であることを確信する。

「旅に出たいんやろ?」

その言葉に、コウタは目を輝かせて「はい!」と答えた。

「そうかあ、強くなりたいんやなあ、ええことやと思うで」

同じく笑顔でアカネがそう言う。やはり「はい!」と目を輝かせてコウタが答える。

真つ直ぐな目をしているんだな、と、グリーンは何となくそう思った。

「まだ早い」

それを遮るように、アカネの背後からヨウイチが言った。それは、コウタとコミュニケーションを取ろうとしたアカネの邪魔をする行為だった。しかし、まるでアカネがそれを肯定するような素振りだったから、ヨウイチがそれに焦ってしまったのだ。

「まあまあ」と、アカネはヨウイチとコウタを交互に見やりながらお互いをなだめた。その対応にグリーンは思わず感心する、例えば自分なら、それに対して不服な表情をヨウイチに見せてしまおうだろう。

「コウタくんは、コガネジムに挑戦はしてくれたん?」

アカネの質問に、コウタは気まずそうに首を横に振った。武者修行を求めるのに、コガネジムのバッジを持っていないことの矛盾を、彼も理解しているようだった。

「そうかあ」と、アカネはそれを強く指摘することはなく続ける。

「旅に出たいと思うのはええねんで? でもな、せっかくコガネに住んでるんやから、はじめてのバッジがウチじゃなかったら寂しいわ。せやから、まずはウチに挑戦してほしいねん」

うまいな、とグリーンは再び感心した。コウタの意志を尊重しながら、それでいてトレーナーとしての最低ラインである一つ目のバッジを与えるかどうかの判断を自身が行うとしている。

しかし、コウタはそれにも首を横に振った。

「それは出来ません、俺はカントーのバッジを集めます」

「コウタ」と、今度はミズホが一步前に出て彼に何かを言おうとした。だが、彼女がそれ続けるよりも先に、グリーンがそれを遮って言う。「ちよつと、よくわからないんだが」

コウタがアカネからグリーンに目線を変える。やはり大人しそうな少年にしか見えないのに、その目は、妙にギラついているような気がした。

「この街は、いい環境だ。ここみたいに特訓におあつらえ向きの道路や森もあれば、トレーナー達が集まる自然公園だってある。公認ジムであるコガネジムだってあるし、片田舎じゃ手に入らないような道具を扱ってる百貨店もあれば、質の高いトレーナーズスクールだってある。そりゃあいずれは遠方のジムに腕試しに行く必要もあるかもしれないが、どうして一つ目のバッジすらカントーで取る必要があるんだ？」

コウタは、その質問に困ったような表情を見せた。それは、ここまでは言い出しづらいことなのだろう。

しかし、時折彼がミズホとヨウイチに目線を変えるのを、グリーンは見逃さなかった。

そういえば、と、グリーンはその二人の方を向く。

「お前らはバッジ持ってんのか？」

二人はそれに頷き、ヨウイチがそれを言葉にする。

「はい、どっちも二つ持っています」

更にそれを補足するように、アカネも声を上げる。

「この二人は、ウチのバッジ持ってるで」

それら一連の会話をコウタが不服そうな表情で眺めているのを確認してから「なるほど」と、グリーンは頭をかいた。

彼は、コウタという少年が置かれている立場を大体理解した。

そして、最も手っ取り早い方法も考えつく。

「それじゃあ、ここでジム戦やっちゃおうか」

その提案に、グリーン以外の四人が一斉に驚いて彼を見た。ジム

リーダーが自分の管理外の街でジム戦を行う。それが全くありえないわけではないが、やはりかなり異例なことに違いはない。

「別にいいだろ」と、グリーンは困惑の目で自身を見るアカネに言った。

「理由はわからんが、とにかくコウタはコガネジムバッジはいらねえようだし、俺はこいつが望んでるカントーのジムバッジを管理してる」

「そりやそうやけど」

それを強くは否定しなかったが、やはりその急な提案に戸惑いはあるようで、その後もなにか言葉をつなごうとしたが、グリーンがそれより先に言う。

「それに、俺なら旅に必要な能力もある程度知っている」

その言葉に、アカネはひとまず口をつぐんだ。旅に必要な能力を知っている、それはアカネがグリーンに求めた助言そのものだった。

「それでいいか？」と、グリーンがコウタに問う。

コウタはまだ困惑した表情を見せながらも「はい」と答える。自分の実力を示し、それを周りに認めさせるには絶好の機会だった。

「出てこい」

グリーンが投げたボールからは、彼の最も古い相棒、サンダースが繰り出された。

コウタとグリーンはそれぞれ距離を取り、ジム戦で使われる対戦場と似たような間合いを取る。これから始まるであろう対戦を邪魔しないように場所をとったアカネと二人のトレーナーは、それがどう動くのがまったく想像ができなかった。

単純な実力だけで考えれば、コウタはグリーンの足元にも及ばないだろう。それは考えるまでもない、あまりにも明確だ。

だが、グリーンがコウタを一人前のトレーナーとして認めるかどうかというのはまた別の問題。そして、ジム戦というものは、ジムリーダーというものの仕事は大体そんなもの、挑戦者がジムリーダーの本当の実力を上回っている必要はない。

アカネは、グリーンがどのようにしてこの戦いを、ジムバッジ認定戦を成立させるのか、まだ想像できていなかった。

ふつうジム戦というものは、ジムリーダーが挑戦者のレベルに合わせた強さのパーティを選択する。だが、グリーンが繰り出したのは彼の本来の手持ちであるサンダース。

サンダースとグリーンがトレーナーとして立ち回ってしまえば、それはただの強豪トレーナーそのものだ、未成熟のトレーナーだけでなく、バッジを八つ以上所持しているトレーナーですらも容易にはペースを握れないだろう。

地面をならしながら背筋を伸ばすサンダースを指さしながらグリーンが言う。

「今からサンダースは『たいあたり』しか技を出さないし、俺も指示を出さない。多少知恵のついた野生のポケモンと同じだ」

体を揺するサンダースを視線に捉えながら、コウタがそれに頷く。「三体までポケモンを使っている。そして、そのうち一匹でもいいから、こいつにダメージを与えることが出来たらバッジをやるよ」

ミズホとヨウイチはその条件に驚き、アカネの方を見た。それは、あまりにも簡単な条件のように思えたのだ。

だが、アカネは「なるほどな」と一つため息を吐くように呟いて腕を組んだ。そして視線を投げかける二人に向かって呟くように「これは厳しいで」と言う。

二人は、その意味がわからなかった。アカネの反応を見ても、やはりその条件はあまりにも簡単なように思えたのだ。

だが、二人はその考えがあまりにも甘かったことを知ることになる。

コウタがボールを放り投げた。サンダースの前にねずみポケモンのコラツタが現れる。

サンダースはまだ動かない、最も無防備である繰り出された瞬間を、彼は狙わない。相当挑戦者に対して譲歩された行動だったが、それに気づいたのはアカネだけだった。

『でんこうせっか』！』

先に動いたのはコウタとコラツタの方だった。

バツジを持っていないとはいえ『でんこうせっか』が相手の先手を取れるほどに瞬発力のある技であり、それを打つことのできるポケモンに限られていることくらいはコウタでも知っている。命中率にも優れるその技が、自身が認められるための特急券であり一撃必殺であることが分かれば、それをしない理由がない。

コラツタの小さく軽い体は、その技を繰り出すのうってつけだった。同じく小さな足が地面を蹴り、サンダースに向かって突っ込む。

だが、その攻撃がサンダースに当たることはなかった。すんでのところ、とか、ギリギリに、とはとても言えない。かなりの余裕を持ってサンダースはそれをかわした。

コウタとコラツタがそれに驚くよりも先に、サンダースの前足がコラツタの顎を捉える。サンダースは決して逃げたわけではない、コラツタの『でんこうせっか』をかわしながらも、自身の『たいあたり』を万全の体制で打つことのできる間合いは維持していたのだ。

コラツタは吹き飛び、地面を跳ねる。だが、彼は揺れる視界をなんとか堪えながら、小動物らしい瞬発性で身を捻って再び立つ。

手加減をしているな、と、アカネは気づいていた。いくら威力の低い『たいあたり』であろうと、グリーンのサンダースほどの強力な存在が放てば、生半可なレベルのポケモンであれば一撃で沈めることができるだろう。

コウタとコラツタはそれには気づかない。彼らはサンダースが一撃で自分達を倒さなかったことを半ば当然と思いながら、追撃に備える。

だが、コラツタが自分の視界にサンダースがいないことに気づくと、サンダースが彼の背後から追撃の『たいあたり』を打ち付けるのはほとんど同時だった。コラツタは意識の外からの打撃に驚くより

も先に意識を手放す。

当然、コウタはサンダースがコラツタの背後を取るのを視界に捉えてはいた、だが、コウタはそれに対して適切な指示をコラツタに告げることが出来なかった、否、適切な指示が浮かびもしなかった。彼はサンダースがコラツタの背後を取るあまりのスピードに圧倒され、さらにサンダースの行動の意図が読めなかった。

軽快にステップを踏みながら、サンダースはコウタから距離をとって、彼を正面に見据える。それは大きな動きを取った後のスキを嫌い、次のポケモンへの迎撃を少しでもいいものに行おうとする位置取りだったが、コウタがコラツタをボールに戻したのは、その動きをしつかりと見据えた後だった。

「すごい」

口元に手をやりながら、ミスホが小さくそう言った。サンダースの一切無駄のない動きに、彼女は先程までの考えが甘かった事を痛感し、多少の恐怖すら覚えながらそれを見ていた。

ヨウイチは言葉にこそしないが、口を真一文字に結んでにらみつけるように戦況を眺めている。

彼は、コウタの戦い方がまだまだぬるいことが理解できていた、自分ならば、もつと違う動きをしていたらう。だが、それでも、グリーンのサンダースに一撃を入れるところをイメージすることが今では出来ない。

この戦いは、あまりにも厳しい現実をコウタに見せつけるものだと、ヨウイチは思っていた。

コラツタをボールに戻したコウタは、今日の前で起こったことを多少シヨックに思いつつも、それに対する悲観的な考えはそれを観戦している人間ほどに持つてはいなかった。コラツタは自分の手持ちの中で一番レベルの低いポケモンであったし、一撃を入れればいいという勝利条件に対する楽観的な感覚がまだある。

コウタが次に繰り出したのは、ことりポケモンのオニスズメだった。タイプの相性的にはあまり有利ではなかったが、この試合形式ならあまり気にならないだろう。

オニスズメは小さく飛び上がったサンダースとの距離を離そうとした。それはコウタの指示ではなかったが、オニスズメはサンダースの瞬発力を嫌い、本能的にサンダースの間合いを嫌った。そして、コウタもオニスズメの行動をまずいものだと考えていなかった。至極当然の動き。

だが、サンダースはその行動を見逃さなかった。彼はオニスズメの迂闊な飛び上がりを目にした瞬間、優れたスプリントで地面を蹴ると、一気にオニスズメとの距離を詰める。

コウタは、それに反応することが出来なかった。サンダースの脚力が自分達の想定を超えていることへの驚きもあったが、それ以上に、サンダースの反応とスピードについていけなかった。

そして、着地も出来ず、羽ばたきによって軌道を変更できるほどの高度もないオニスズメに『たいあたり』を叩き込む。

オニスズメは俺に痛みを覚えるより先に、地面に叩きつけられたことで意識を手放した。手加減一切なしの強烈な一撃、低レベルのオニスズメに耐えられるはずなかった。

サンダースは再び距離をとってコウタを正面に見据える。そして、コウタはやはりそのスキにはつけ込まない。より良く考えを巡らせることでそれに対抗しようと彼なりに考える。

オニスズメを犠牲にして得た情報は、サンダースが自分達の想定以上の射程距離を持っているということだけだった。そして、その範囲を考えれば、どこに次のポケモンを繰り出しても、安全な場所はないだろう。

『『まるくなる』！』

次のポケモンを繰り出すとほとんど同時にコウタはそう叫んだ。かわすことが不可能ならば、その分守りを固めればいいという考えだった。

繰り出されたポケモン、サンドはコウタの指示を素早く理解し、体を丸めさせる。

「へえ」

それまで黙って戦況を眺めるだけだったグリーンはサンドのその

行動に声を漏らした。繰り出されたスキをつこうと猛然とサンドに迫っていたサンダースも、それを見て一旦攻撃をやめ、ステップでサンドとの距離を取る。

サンドの防御力を警戒したわけではない、だが、コウタとサンドの動きのラグの無さが、それまでもポケモンとは一段階上のレベルだったのだ。

サンドの耳が良いとかそういう単純な話ではない、『まるくなる』という選択が優れていたわけでもない。

彼がコウタの指示から淀みなく『まるくなる』を選択できたということはつまり、サンドもまた、考えの中に『まるくなる』があったという事、戦術の是非はともかくとして、サンドとコウタの考え方がリンクしていたという事を、グリーンとサンダースは高く評価したのである。逆に言えば、これまでの二匹には、それすらもなかったということ。

『あなをほる』！』

理由はわからないが、サンダースが攻撃を仕掛けなかつた事を、コウタは最大のチャンスと捉えたようだ。地面タイプの『あなをほる』攻撃が電気タイプのサンダースにとって最大の弱点攻撃である事はコウタも理解している。だからこそその攻撃、それも一時的に相手の視界から消えることのできる『あなをほる』は、優れた選択肢であるように思える。

ミズホとヨウイチも、その選択を良いものとして疑ってはいなかった、本来彼らはグリーンが勝利することを望んでいるのにもかかわらず、その一手がなんとか届かないものかと願う心すらあった、

「あかん」

アカネは小さくそう言って下を向いた。だがそれはグリーンの敗北を悲観的に捉えているわけではない。むしろその逆だった。

サンドは『まるくなる』の体勢を解くと、急いでその場に穴を掘ろうと手を動かす。彼は、その行動があまり良くないことを感覚的に理解していた。だが、それでもトレーナーの指示だからと手を動かす。

しかし、サンドの体が穴を掘り終えるより先に、サンダースの『た

「あたり」がサンドを襲った。サンドはせつかく掘った穴から離れるように吹き飛ばされる。

なんとか体勢を立て直したサンドは、サンダースの次に備えて防衛態勢を取ろうとする。

だが、それを指示するはずのトレーナーの声が聞こえてこない。

コウタは、サンドに攻撃された衝撃をまだ受け入れられてはいなかった。いや、たしかに今日の前で起きていることを受け入れられてはいる。だが、彼は今どうすべきかという事を、サンドの『あなをほる』が失敗に終わったときにどうすべきかという想定をこれっぽっちもしていないかったのだ。

『まるくなる』！

だから、彼の指示が大きく遅れた。彼がその指示をようやく口にできたその時には、すでに追撃の『あたり』がサンドを戦闘不能に追いやったその後だった。

「終わったな」

サンダースをボールに戻したグリーンは、足早にコウタのもとに歩み寄る。

アカネもそれに続いてコウタのもとに歩を進めた。それに遅れてミズホヨウイチも我を取り戻す。

圧倒的な差だった。

最後の繰り出されたポケモン、サンドは判断力と瞬発力に優れ、戦いへの理解もあり、ある程度はグリーン達とのポケモンと対等に渡り合えるだけのスペックがあった。

だが、それと共に戦うはずであるトレーナーの能力が、サンドの足を引っ張った。コウタはサンドに『あなをほる』の指示をしたことに満足しきり、その次を考えなかった、想定しなかった。防御の体制を取りたいサンドが『あなをほる』の指示を受け取るのが遅れ、その結果それを『あたり』で咎められることを想定していなかった。

「考え直したほうが良い」

サンドをボールに戻して俯くコウタに、グリーンは遠慮なくそう言った。

「ポケモンもお前も、とてもじゃないがその水準に無い。まだまだこの街で十分だな」

言い方つてもんがあるやろうが。と、アカネはその言葉を飲み込みながらも歯を食いしばった。

コウタの実力が明らかに足りていないのは間違いない、彼は野生のポケモンのレベルが高い草むらから生きて帰ることは出来ない可能性が高い。そして、住み慣れた街を出て旅をするということには、そのようなリスクが当然付きまとう。

旅を経験したトレーナーらしい、実戦感覚により近い条件だった。だが、教育者として、グリーンその言いようは、あまりにも事実をむき出しにしすぎている。

なんとかフォローをせねばとアカネは考えを巡らせた。グリーンを適役な相談相手としてここに連れてきたのは自分だ、それならば、最後までその責任を取る義務というものがある。

だが、適切な言葉は思い浮かんでこなかった。

コウタはしばらくグリーンその言葉を噛み締めていたが、やがて意を決したように顔を上げて言った。

「だけど、あんなに強いポケモンを相手に」

「諦めろ」

しかし、コウタがそれを言い終わるより先に、グリーンがそれを遮った。それは、彼の中では言うてはならない言葉だったのだ。

「自分に襲いかかろうとしている野生のポケモン相手にもそう言うつもりか？」

その言い訳が通用するのはトレーナーとの戦いだけ、トレーナー同士の戦いにこそ慈悲があり、成長もある。野生相手にはそうはならない。

「だからな」と、アカネは半ば強引にグリーンとコウタとの間に割って入った。その間に割って入れる事は、彼女が素晴らしい教育者であることを証明している。

「コガネジムで練習して欲しいねん。確かに今日はあかんかったけど、いい動きもあつたで。この二人と一緒に練習して、もっと強くな

れば、いつかはこの街を出ることもできるはずやから」

ヨウイチはそれに頷いてコウタの肩を撫でようと右手を差し伸ばした。

だが、コウタはそれを跳ね除けて言う。

「嫌だ！ 俺はこの街を出るんだ！ 俺には、神様がついているんだ！」

大声でそう叫んだコウタは、グリーンとアカネの間を抜けるように駆け抜けた。アカネは突然のことに呆気にとられ、グリーンは自分から離れていく背中を視線で追う。

そして、ヨウイチとミズホは、コウタの名を呼びながらその後を追おうとした。

「おい」と、グリーンはその二人を引き止める。

「家族じゃないんだろ？」

グリーンのその問いに、二人は頷きつつも、否定的なニュアンスを込めながら答える。

「でも、私達にとっては弟のようなものです」

手短にそう答えた彼女らは、グリーンの反応を待たずにコウタを追いかけた。

「もうちよつと言いつてもんがあるやろ」

ヨウイチとミズホが完全に見えなくなり、グリーンとアカネが三十四番道路にいる必要がなくなった頃。アカネはグリーンに厳しい視線を投げかけながら言った。

グリーンの耳にそれは届いていただろうが、彼はすぐには返事をせず、まだじつと彼らが消えた方向を眺めている。

「何も変わらないだろうな」

自分とはまったく違う方向に放たれたその言葉に、「なんやて？」と、アカネが問う。

グリーンはようやくアカネの方に顔を向けて答えた。

「あの二人がついてる限り、何も変わらない」

「どーゆことや？」

アカネは首をひねってその説明を求めた。あの二人は、コウタのことを心配していたはずだから、グリーンはその説明に、納得ができない。

だが、グリーンはその明確な答えを持っていた。

「歳上のトレーナーはどんな強くなるのに、自分は強くなれない。年齢的なことを考えれば歳上のヤツのほうが上にいるのは常識的なことのはずなのに、より親しい友人関係ってのが、それを分からなくさせてしまうんだ」

アカネがそれに何も返さないのを確認してから続ける。

「コウタの年齢なら、あの程度の実力でもなんの不思議でもない。いや、本来ならトレーナーとしての技量ってのは才能の面も大きいから、もつと歳上でもあの程度の実力のトレーナーはいるだろう。だけど、身近に結果を出しているトレーナーがいるから、それを受け入れられないんだ。だからより現実感のないものに救いを求める。知りもしない地方とか、神様とかにな」

グリーンは、アカネの腕の中にいるピカチュウに声をかけると、彼を肩の上に乗せた。

「よくあることだ。その気持ちだが、まったくわからないわけじゃない」
心が痛まないわけではない、だが、それが最も真実に近いものだろう。トレーナーとして高いレベルにいながらも、まったく同じ経験を持つ彼は、本質的にはコウタの苦しみをより理解できる人間の一人だった。

「あとは、お前の仕事だろ」

ポケギアで時計を確認すれば、一時間もしない内に次のリニアの発車時刻だった。手短に別れを告げ、グリーンは三十四番道路を後にしようとする。

だが、襟元を掴む手に、その歩みが妨げられる。

少し息苦しそうに振り返ったグリーンが目に入ったのは、満面の笑みのアカネだった。

「ぎよーさんいーたいーことがあるけど、まーええわ」

彼女はグリーンから再びピカチュウを剥ぎ取ると、やはりそれを片

腕で胸に抱えて、もう片腕で器用にグリーンと腕を組む。

不思議と、ピカチュウはそれを受け入れていた。

「せっかくコガネに来たんやから、今日はパーツと遊ぼうや。ゲームコーナーもあるし、ボウリングもあるで、最近できたでつかい遊び場があつてな、そこに行けば何でもあんねん。カーリングって知ってるか？ 氷の上に石投げるんや」

アカネは軽いステップでグリーンの前に出ると、そのまま彼を引きずるように先導する。

グリーンからは、その表情は見えなかった。

「晩御飯はウチがおごつたるからお好み焼きたべてってーな。その後はカラオケやな、久々にグリーンの『ラプラスに乗った少年』聞いたいわあ。今日は帰さへんでえ」

グリーンは、その気になればそれに抵抗することが出来ただろう。リニアの時間があるとか、明日は外せない用事があるとか、そのようなことを言ったり、もしくは強引にその腕を振り払うことだって出来たかもしれない。

だが、彼はそれをしなかった。そのかわりに、表情を見せぬアカネに向かって言う。

「つまり、明日もあいつらと会えてことだな」

アカネは少しの間それを無視して歩みを進めた。スニーカーが土を踏む音だけが二人の間に流れ、お互いが、お互いの言葉を待っている。

しばらくしてから、アカネが歩みを止めて振り返る。微笑みを蓄えながら、真剣な眼差しで自身を見つめる強い視線に、グリーンは一瞬息を呑んだ。

「ウチらはな、責任とらなあかんねん」

グリーンがそれにどんな表情を返すか確認するより先に、アカネは再び振り返ってグリーンを引きずる作業に戻る。

「そうだな」と、半ば強引に、グリーンが呟いた。

☆

ミズホとヨウイチは、ポケモンが全て戦闘不能となったコウタが、ポケモンセンターに駆け込むであろうことを信じて疑っていなかった。

だから、コウタがポケモンセンターを通り過ぎ、大通りをファイと逸れ、裏道へと入っていった時、彼女らは少し動揺した。もしそれぞれが一人だけだったなら、彼を追うことをやめたかもしれない。

だが、彼女らもその裏道を通ってコウタを追った。

彼女らがコウタに持っていた疑惑が、その強気な追跡を続けさせた。

あんな子じゃなかった。それが、彼女ら二人が持っていた最近のコウタへの共通認識だった。確かに強いとは言えないトレーナーだった、だが、それを自覚して小さくとも努力を積み重ねている弟のような自慢の友人だった。それが、急にあんなことを言い始めた。

それに何か理由があるのなら、その方が納得ができる。

コウタの後を追って、二人もどんと裏道に行く。

やがて彼らの前に現れたのは、地下へと続く階段。

眠らない街コガネが開発されていく中で取り残された、地下通路へと続く階段だった。

彼女らは、どうして今更コウタがそこに足を運ぶのかまったく分かっていなかった。なぜならば、そこには、地下通路にはなにもないはずだったからだ。そこで出店している店はその殆どが新しく出来たショッピングモールに移転し、ロケット団との癒着が判明した倉庫も、今では使われていない。

だから彼女らは、なんの疑いもなくその階段に足を踏み入れた。そこにはなにもないはずだったから、何も警戒はしていなかった。

埃っぽく、息苦しく感じる地下の空気を吸うことになっても、彼らはその先を進んだ。

その翌日、グリーンとアカネは再び三十四番道路に向かっていた。夜遅くまでさんざん連れ回されたグリーンは、まだ少しボーっとしている頭になんとか酸素を送り込みながらアカネの歩みについていく。まだまだ若いとはいえ、流石に僅かな睡眠時間ではまだ体に疲れが残っている。その先を行くアカネの体力が人並み外れて異常なだけだ。

アカネはまだピカチュウを胸に抱えていた。昨日から今日にかけてメイクアップされまくったピカチュウの耳にはリボンとイヤークラフがつけられまくり、いつの間にかサイズがピッタリの可愛い服まで着せられている。

「あー、おったわー」

三十四番道路の奥に、コウタと二人のトレーナーを見つけたアカネは、大きく手を振りながら駆け足で彼らのもとに向かった。

「いやー、連絡つかんかったから心配したんやで」

ミズホとヨウイチを視界に捉えながらアカネが言う。アカネは今朝彼女らに連絡を入れようとしたが、二人共ポケギアの電源が落とされており、連絡がつかなかったのだ。

後からそれに追いついたグリーンは、コウタを含める三人を見て少し違和感を覚えた。彼らが自分を見る目に、異質なものを感じる。

「昨日はちよつときついこと言ってもーてごめんなー、あれからウチらもつと考えたから、ちよつと聞いてーな」

お好み焼き屋での説教を思い出し、グリーンもそれに合わせてコウタと目線を合わせるために膝を折ろうとした。

だが、それより先に、コウタの言葉が、彼らを緊張を与えた。

「ああ、もう大丈夫ですよ」

コウタは微笑んでそう言った。ミズホとヨウイチはそれになんのも唱えず、ニコニコと微笑んでいる。

「大丈夫って、なにがや？」

戸惑いながら首を傾げたアカネに、今度はミズホが答える。

「私達、仲直りしたんです」

そして、それにヨウイチも続く。

「お互いが話し合うことで、ようやく理解したんです」

その不自然さに、アカネは妙な胸騒ぎを覚えながらも、ひとまずは彼らを肯定しようとする。

「そうなんや、ほんなら、いつでも待つてるからな」

その肯定を、ヨウイチが「いや」と否定して続ける。

「俺達も、コガネから出ることにしたんです。俺はシンオウに」

「私は、ホウエンに」

そう言つて向けられた目に、アカネは思わず一步後ずさつた。なんの不安も悩みもない、ただただ真っ直ぐな目が、彼女を見ていた。

グリーンはそれに合わせるように一步前に出てアカネを後ろに下がらせる。

「何があつた。お前ら一体、何をされたんだ」

その質問に、彼らは答えなかった。

そのかわりに、彼らは腰のボールに手をやりながら言う。

「どうせまた、自分に勝てればどうだとかこうだとか言うんでしょう？」

「そうやって、コウタの夢を否定しようとするんだ」

「コウタくんの努力を、私達も、神様も知っています。だから、コウタクんの武者修行は絶対に成功するんです」

無遠慮に草むらを踏みつける音がいくつもグリーン達の耳に届いた。

アカネとグリーンがそれを見回せば、いつの間にか彼らを囲むように集まった何人もの少年、もしくは少女のトレーナー達が、ボールを片手に、明らかな敵意を彼らに向けている。

それに驚きもせず、ミズホが更に言った。

「私達の邪魔をするのなら、私達の実力を、思い知らせてあげます」

アカネの胸に抱かれていたピカチュウが、無理矢理に暴れてそこか

ら飛び降りた。その衝撃でイヤークフがいくつか外れ、舞い上がった砂埃がめかされた服を汚すが、彼はそれを気にしない。むしろそれが邪魔だと言わんばかりに手足をばたつかせる。

アカネは、まだその状況を受け入れられていないようだった。あたふたとトレーナー達とグリーンとで視線を泳がせ、何かを言おうとはするが、何も言葉とならない。

ピカチュウは、そのままグリーンと背中合わせになるようにポジションを取り、頬袋からの放電でトレーナー達を威圧する。

グリーンもピカチュウに背中を預けていることを感じながら、モンスターボールを手にとった。殿堂入りトレーナーが今まさにポケモンを繰り出そうとしているのに、トレーナー達はそれに怯える様子もなく、むしろより前のめりになっているように見えた。

「アカネ！」と、コウタ達から視線を外すことなくグリーンが叫ぶ。「なんやー！」

その呼びかけがきつつけとなったアカネがようやく自分を取り戻した。

「今すぐ逃げてポケモンセンターと警察に連絡取れ、後はエンジュのマツバさんにもだー！」

グリーンがそう叫ぶや否や、トレーナーの一人がオニスズメを繰り出して襲いかかってきた。

だが、グリーンが繰り出したピジョットがそれを『つばさでうつつで迎撃する、ピジョットはそのまま飛び上がって空からトレーナー達を威嚇した。』

しかし、トレーナー達はそれでは怯まなかった。むしろそれを皮切りにどんどんとポケモンを繰り出し、彼らに襲いかかる。

「早く行けー！」

「あんたはどうするんやー！」

「お前を逃がすんだよー！」

サンダース、フーデインと次々にポケモンを繰り出しながら、グリーンが更に叫んだ。

アカネは一瞬だけ不安な表情を見せたが、すぐに切り替えて三十四

番道路を後にしようとしてグリーン達に背を向ける。

その時、一人も逃がすまいと先回ったトレーナーが、アカネにオオタチをけしかけた。

逃げることに意識を取られていたアカネはそれに対して反応が遅れる、それでもなんとか身を守ろうと彼女はポケモンを繰り出す体勢を取ったが、間に合いそうにもない。

アカネが目をつむろうとしたその時、ピカチュウの鳴き声と共に強烈な『10まんボルト』がオオタチに襲いかかった。オオタチはその一撃で戦闘不能となり、電撃によつて膨らんだ体毛を泥で汚しながら地面に突っ伏す。

「ありがとなー」と、ピカチュウとグリーンに礼を言いながら、アカネは彼らの方に振り返らないまま三十四番道路を駆け抜ける。その後、アカネに襲いかかろうとするトレーナーは現れなかった。

地面を蹴りながら、あれ、と、アカネの中に一つの疑問が生まれた。あのピカチュウに助けられた時、グリーンは自分達に背を向け、三体のポケモンを相手していたはずだ。だとするとピカチュウは、トレーナーの指示もなく『10まんボルト』を放ったということになる。勿論それが出来ないわけではない。アカネのポケモン達だって、その気になれば各自の独立した意思によつて技を打つことくらいはできるだろう。ポケモンたちのそのような自立性を重要視する考え方があることも知っている。

だが、一度そのような疑問が生まれてしまえば、様々な違和感がい浮かぶ。

そもそも、サンダースという絶対的な相棒がいるはずのグリーンが、どうして今更ピカチュウをパーティに加える必要があるのか。そして、なぜあの時、ピカチュウはグリーンと背中合わせに体勢をとったのか。

もしかして、と、ある程度のことを予想したアカネは、今度はそれを振り切つて、今自分がすべきことを優先した。

☆

その地下通路は、コガネシティの裏の部分として、その街が成長を続ければ続けるほどに、その影をより一層濃く反映していた。

人々の目が高層ビルが支配する上空に、そしてリニアが支配する遙か遠く地平線の向こう側に向かえば向かうほどに、地下は彼らの視界から離れていく。

ほとんど店の入っていないテナントを、時代遅れのオレンジがかった電灯が薄暗く照らしている。人が殆ど入らず空気の入替えの起こらないために空気は埃っぽく、カビのような臭いがする瘴気が漂っている。

その瘴気をかき分けると、遙か向こうに一軒だけ、開かれている店がある。だが、そこにその店があることを知っているのは、コガネに住む、年齢の若いトレーナーだけだった。

テーブルの上に置かれた短いうろうそくだけが照らすその店は、占い屋の雰囲気作りと言ってしまえばそれまでだが、フードをかぶってそこに座る占い師の表情は確認できず、その向こう側に何があるのかもよくわからない。

占い師は、地下通路の床をスニーカーが踏みしめる足音を耳にした。その足音から、それが近づいてきていること、そして、それが今まで自分が相手してきた少年少女たちに比べれば、もう少し年齢が上なことも理解する。

占い師は、慌てふためくことなく、その足音が自分の前で立ち止まるまで冷静を保った。逃げる気などサラサラなく、むしろそれが自らの前に現れることを望んでいた。

瘴気の向こう側から、その足音の持ち主、グリーンが現れた。

「いらっしやう」

占い師の低い声が地下通路によって不気味に反響したが、グリーンはそれに動揺することなく、そこに用意されている丸イスに腰を下ろした。

「何が知りたくて、ここに来たのかね？」

占い師の問いに、グリーンはその周りを確認しながら答える。

「あなたの目的が、さっぱりわからない」

単純な問いではなかった。その含むところの意味を占い師も理解しているが、あえてそれには乗らなかつた。

「私はただの占い師、目的だなんてそんな」

グリーンは、フードの奥をじつと睨みながら叩きつけるように言う。

「洗脳のかかりが甘かつた。ミズホとヨウイチが、このことを覚えてたんだよ」

その言葉に、占い師は沈黙を作つた。そして小さく笑いながらそれに答える。

「目的なんて、ありはしないさ。私はただ、子ども達がこの街を出るように仕向けるだけ。ただそれだけ。尤も、実力も知識もない子ども達が、旅先で野垂れ死にそうになることを望んでいる誰かがいるかも知れないことは確かだがね」

「ただ、それだけのためにか？」

「ああ、どうしてもそれに理由が欲しいというのなら『それが神の啓示だったから』とでも答えよう。なに、それほど間違っているわけでもないだろうさ」

「何人、何人のトレーナーを洗脳したんだ」

「さあ、答える義理があるわけでもない。もう覚えていないとでも言うおうか」

グリーンは、不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「さぞ、簡単だったんだろうな」

瘴気の向こう側から、占い師の楽しげな声。

「ああ、簡単だったとも。私の可愛い少年少女たち、彼らの心の中には幾らでも隙間があり、現実を投影すべきスクリーンには、まだ空想が映し出されている。彼らの中に神を住ませ、根拠無き虚栄心を作り出すのは、楽しくもあり、痛烈でもあつた」

グリーンがそれに何も返さない内に、更に続ける。

「特に、強さというものを求める彼らのなんと罪深く、なんと純情なところか。強さなど、最強になりたいなど、この世全ての人間が望んだと

しても、それを叶える事ができる人間はたった一人だというのに、彼らは根拠なくそれを求め、そして、意味もない努力を繰り返す。それを肯定する神さえ作り出してしまえば、後は全て思いのまま」

更に占い師は一つ満足気に笑って続ける。

「私の可愛い少年少女達は、神を信じたのではない。神の存在を望んでいたのだよ」

なるほど、と、グリーンは背筋を伸ばして占い師に問う。

「そうやって、コウタも洗脳したのか」

その名を聞いて、占い師は高笑いする。

「愛しく、そして哀れな少年だった！ 彼は終わりの見えぬ長い長いトンネルを恐れ、怯えていた。私達がほとんど手を加えずとも、彼はこちら側へと歩んだだろう」

酷いと思うかね。と、占い師はグリーンに語りかける。

「私のことを、悪魔だと思うか？ 悪辣で生きるべきではない鬼畜だと軽蔑するかね？ だがね、私から言わせれば、私のような男こそが、教育者の最もあるべき姿だよ。夢に生きる少年少女を、更に夢に盲目にさせてやることに、なんの罪がある？」

放っておけば、もつともつと演説を続けそうな占い師を「どうでもいいけどよ」と、グリーンが止める。

「あんたはどうするつもりなんだ？ この地下通路の出入り口はジムリーダーと警察が完全に抑えてる。まさかとは思うが、このままおとなしく捕まるってわけじゃないだろう？」

演説を止められた占い師は一瞬ムツとしたように言葉をつまらせたが、すぐさまに調子を取り戻して、新しい演説を始める。

「殿堂入りトレーナーが露払いを務めれば、なんてことのない話だ」

演説の勢いとは反対に、占い師は静かにろうそくの芯をつまんで火を消した。ただでさえ心もとない光源だったのに、それを失った地下通路は、あまりにも弱々しいオレンジ色の電球のみが照らすようになる。

その暗闇の向こう側から、再び占い師の声。

「私のように人生を長く旅した人間からすればね、コウタも君も大し

て変わりやしない子供なんだよ。そして、おそらく、コウタよりも君のほうが、より神を求めているはずだ」

グリーンは、かび臭い空気の中に、これまで嗅いだことのない甘つたるい刺激的な香りが漂い始めていることに気がついた。一瞬、彼はそれをどくポケモンの『スモッグ』によるものかと警戒したが、経験から、そうではないことを理解する。

「むしろ私は君が今でも精神を侵されずにいることを不思議に思う。それだけの血統、そして、実力を持ちながら、栄光を掴んだのは僅かな時間だけで、むしろそれよりもそれを奪われた歴史のほうが重要視される、そのような立場にいながら、精神を保つことのできる君を、私は立派に思う」

それが、精神の動揺を引き出すためのスピーチであることくらい、当然グリーンには理解できる。だが厄介なのは、占い師が暗闇から語りかけるそれは、何も間違っていない事実だということ。

「私はね、君こそが神に救われるべき人物であると確信しているよ。君の努力は認められるべきだし、神こそは、君の努力を認めてくれる、そして、君が努力を続ける限り、神様は、君に祝福を与えてくれるだろう」

占い師は、マツチを擦って火をおこした。そして、それを短い口ウソクに再び灯し、こころもとないが信頼のできる光を作る。

「君も、私と一緒に神を信じようじゃないか」

グリーンの目前に、占い師と、左右に揺れる振り子が現れた。

その振り子の持ち主、スリーパーは、丸椅子に座るグリーンを見下すような視線を送りながら、ブツブツとなにか小さく鳴き声を上げながら振り子の揺れをグリーンに押し付ける。

占い師は、それが成功することを疑っていなかった、彼の知る限り、グリーンという少年は、洗脳が成功する要素をすべて満たしていたし、これまで成功させてきた洗脳の数々が、彼に並々ならぬ自信を与えていた。

グリーンは、その振り子から目を逸らさなかった。否、むしろ食い入るようにそれを睨んでいる。

彼の脳裏には、記憶がある、心の中に暗く深い闇を作り出すには十分すぎるほどの記憶が存在することを、占い師は知っている。

洗脳は、無理矢理に記憶を植え付けるものではない。感情を落ち着かせる香を焚き、単調で、つまらない、例えば振り子のようなものをじつと視界に入れ、それが作り出す退屈の時間の間に、彼らを洗脳するのに、十分な記憶を引き出すところこそが、占い師と、スリーパーの技術だった。

振り子が、だんだんとその振り幅を小さくし始める。それは、その振り子の運動が、大分時間を食ったことの証明。事実、随分と長い時間その振り子はふれ、グリーンはそれだけの間、記憶を呼び起こし続けていた。

その振り子が止まった時、洗脳が完了する。

だが、その振り子が、スリーパーの指先と重力の間に均衡を保ち、ピョンと張ることはなかった。

瘴気の向こう側から現れたサンダーズが、スリーパーの腹に『でんこうせっか』の体当たりを決めたからである。その衝撃から、スリーパーは膝を折り、今度はサンダーズの『でんじは』によって動きを制限される。

「なんだと!」と驚く占い師に気を取られることなく、今度はピジョットが『つばめがえし』でその瘴気を作り出していたゴーストを打って取る。

その後、ピジョットが翼を羽ばたかせ『きりばらい』によって地下通路にはびこっていた瘴気を吹き飛ばす。

それでも薄暗いことに変わりはないが、オレンジ色の電灯は、それまでよりは力強く地下通路を照らす。

その光は、占い師だった男を、黒いローブで暗闇に身を隠そうとしていた惨めで滑稽な醜男へと姿を変えさせた。

「なぜだ!?!」

手持ちを失い、更に殿堂入りトレーナーの相棒達二人に囲まれたそ

の男は、体格的にはまさるであろうグリーンを、精神的に見上げながらそう叫んだ。彼は、グリーンが自分の作った城の中で洗脳に打ち勝ったことを未だに受け入れられていないようだった。

「あんたはなんにも分かってないよ」

丸椅子から立ち上がったグリーンは、呆れたようにそう言つて男に背を向けようとした。

それにすぎるように、男がさらに叫ぶ。

「お前は、お前は敗北者のはずだ！ この世で最も大きな、考えられないほどの屈辱をお前は受けているはずだ！ なぜ受け入れない!? どうしてお前のようなガキが、神を受け入れられずにいられるんだ!?」

「俺より長く生きてるのに、本当に何もわからないんだな」

見下す事を隠そうともせずになんか言い放つ。グリーンは、もうその男への興味を失っていた。

少年少女を洗脳し、ふらふらと旅立たせるトレーナー、ミズホやヨウイチからその情報を聞いた時、グリーンが真っ先に思い浮かべたのは、それらとレッド失踪の関係だった。グリーンは自分やレッドがまだまだ少年といふべき年齢にあることを理解していたのだ。

だが、それはあまりにも見当違いな考えだったとグリーンは今思っている。

チンケなトリック、人のトラウマを探るような卑劣な手口に、トレーナーとしての実力、とてもではないが、レッドを手中に収めることのできる格がその男にあるとは思えない。

当然、コガネの少年達を洗脳した事実はある。だが、この程度のトレーナーならば、警察と、法が裁くだらうと判断したのだ。

「なぜだ!? なぜだ!? なぜだ!?」

洗脳する手段も、ポケモン達も失った男は、自身の我を通す最後の手段として、そうやって大声で泣き叫びながらグリーンに問う。

だが、グリーンは彼を相手にせず、地下通路を歩いた。

遠くなる背中に、男は遂に大きな声で泣きわめくだけとなる。

それを背中に感じながら、グリーンは心の中でその答えを思い浮か

べる。

神に祈った程度で努力が全て報われるのなら、俺は、あの時負けてねえよ。と。

☆

「少し、二人で話をしたいのですが」

息子を救ったトキワジムリーダーにそう言われ、コウタの両親は、個室に息子とグリーンの二人を残して部屋を去った。

コウタは、少し緊張した様子でグリーンと目を合わせている。

洗脳されていたとはいえ、感覚がまったくなかったわけではない。明確に数に勝っていた自分達が繰り出すポケモンを、グリーンが目にも留まらぬスピードで全てなぎ倒していた時、彼が覚えたのは恐怖の感情だった。

「まだ頭がボーッとするかもしれないから、あまり無理はするな」

エンジュシテイから呼び寄せたマツバは、洗脳された子ども達を眠らせると、自身のゴーストポケモンとグリーンとのフーデインの力で、なんとか彼らの感覚をあの卑劣な男と出会う前のものに戻そうと努力した。その全てが円満に終わったかどうかはまだわからない。それに、子供達への処置は、まだ全てが終わってはいなかった。

「申し訳なかった」

突然、グリーンがコウタに頭を下げた。

「俺は気づけなかった。君の友人は、君の変化にいち早く気づいていたというのに」

グリーンは、それを悔いていた。コウタが洗脳されているかもしれないということにもっと早く気づくことができれば、ミズホやヨウイチにも被害が出ることもなく、もっと早くコウタを救うことも出来た。

だが、グリーンはそれを見抜くことが出来なかった、彼はコウタの行動を、焦る少年トレーナーの無謀で虚栄にまみれた突飛な行動と決めつけ、現実を教えることしかなかった。

神様という単語が出たときに、それを疑うべきだったのだ。

「いいんです」

コウタは、グリーンの謝罪を受け入れた。子供と呼ぶには少し年を取りすぎ、少年と断定するにはまだ年が足りないような気もするその少年は、少し目を伏せながら続ける。

「俺は、それを受け入れていたんですから」

コウタは掠れ始めている甲高い声で続ける。

「焦っていたんです。ミズ姉やヨウ兄がどんどん強くなっているのに、俺はそれを眺めているだけ。俺を氣遣って与えてくれるアドバイザーだって、半分くらいはその意味がわからなかった。あの占い師は俺の考えを無理やり捻じ曲げたわけじゃない、俺が心の中で思っていたことを、より強く主張できるようにしただけなんですよ」

コウタに対するグリーンの分析は、その殆どが的中していた。

「元々、旅には出たかったのか？」

「出たかったです。バッジを集めて、チャンピオンになってだなんて、誰だってそれを思う。ただ、俺は自分の実力がそれに見合っていないことを分かってました。ミズ姉達が出来ていることが、俺には出来ないんだから」

グリーンさん、と、コウタはグリーンと目を合わせて問う。

「ミズ姉やヨウ兄のことは好きです。大好きです。だけど、俺があの人達と同じ物を目指している限り、きつと今日のようなことが起こる気がするんです。俺が、あの人達を憎んでいたことは、確かなんです

から」

その掠れ声が、少し震えていることにグリーンは気づいている。そして、彼は沈黙をもってその次の言葉を待つ。

「グリーンさん。これって、仕方のない事なんですか？ 強くなるうと思いつけている限り、俺は、また大切な誰かを憎まなくちゃならないんですか？」

それは、ジムリーダーとして、教育者として、そして、歳上として、必ず否定しなければならぬ問いだった。それを肯定することは、トレーナーという存在の倫理性を大きく揺り動かすことになる。

だが、グリーンはそれに即答することが出来なかった。彼はコウタの問いに背筋を張り、彼から目をそらした。

脳裏にあったのは、あのピカチュウだった。

地下通路に足を踏み入れた時、グリーンは、ピカチュウを連れてはいかなかった。当然、アカネはそれに強く反対したし、ピカチュウもグリーンについていこうとした。

だが、グリーンはそれを拒否した。

彼には、自信がなかった。

レッドの相棒であるピカチュウを側に連れて、それでも占い師の洗脳に打ち勝つ自信が、彼には無かったのだ。そのピカチュウの存在こそが、彼の中に渦巻く否定すべき憎しみの根源なのだから。

コウタの問いを強く、そして華麗に否定し、教育者が持つべき倫理を迷える少年に見せつけるには、彼の経験は、壮絶すぎた。

だから。

「さあ、どうなんだろうな」

だから、彼はそれを否定しなかった。否定できなかった。肯定に相反するものが否定であることを、彼は証明できなかった。

グリーンがそれを否定しなかったことを、コウタは重くは受け止めなかった。流石に実力のあるトレーナーだけに、いろいろなことを知っているのだろうと、ある意味でグリーンを理解しながら息を吐く。

だが、本来ならば、それは絶対にしてはならないことだったのだ。もしこの場に、教育者としてはグリーンよりも優れているアカネがいれば、彼女はグリーンの手を引いて一旦その場から引き、グリーンを一発張った後に、自分達が持つべき倫理観と、グリーンが抱えている深く大きい心の傷を理解しようとする感情に板挟みになり、思わず涙を流していたかもしれない。

グリーンのおぼやかした返答によって、コウタはぼうっと天井を眺めた。彼もまた、トレーナーとしての夢と、壊したくない友情との間で、板挟みになっていた。

そして、彼は決意する。

「グリーンさん」

コウタの呼びかけに、グリーンは外していた目線を再びコウタに戻した。

「俺を、トキワジムのジムトレーナーにしてくれませんか？」

その願いに、グリーンは驚き、小さく声を漏らす。

「何いってんだお前」

「俺が、俺がもつと強ければ、こんな事は起きなかった。だから、グリーンさんの元で、俺はバトルを学びたいんです」

間違った理屈ではなかった。ただ、あまりにも突発的なことだったので、グリーンはそれに慌てふためく。

「トキワジムにはまだジムトレーナーはいないし募集もしてない。それなら手慣れたアカネの手を借りろ」

「いや、それでは駄目です。この街にいたら、僕はきつと、また誰かを

憎むようになる」

グリーンは、沈黙によつて作り出された時間で、必死に思考を巡らせた。

「お願いします。俺をトキワジムのジムトレーナーに」

再度の呼びかけにも、グリーンはまだ沈黙を貫く。

もし、コウタが才能に満ち溢れた有望なトレーナーであれば、グリーンはそれを拒まなかっただろう。だが、コウタの才能は、ジムトレーナーの教育に造詣のないグリーンが自信を持って責任を持てるものではない。

だが、その沈黙は「ええやん！」という声と、扉が開かれる音でかき消された。

やはりめかしにめかされたピカチュウを抱っこしたアカネが、病院に不釣り合いなテンションと共に現れた。

「グリーンはジムには誰もおらんのやし、いい機会や！ 両親にはウチが話つけたる！」

「ちよつと待て」

「待てもへちまもないわ、絶対に誰かが一人目にならなアカネん、それなら縁があるトレーナーのほうがええやろ」

それも、間違つてはいない理屈だった。グリーンがジムリーダーを続ける以上、いつかはジムトレーナーを受け入れるだろう。そうなれば、誰か一人目を経験しなければならぬのも間違いない。

「考えさせてくれ」と、グリーンは結論を保留しようとする。

だが、アカネはツカツカとグリーンに詰め寄りながらそれを否定する。

「いやアカネ、そもそも新米ジムリーダーのあんたが選り好みできる立場かいな」

よいしょ、とピカチュウを床に逃がし、アカネはグリーンにぐいと詰め寄ると、グリーンにだけ聞こえるように小さな声で言う。

「責任とらなアカネん」

まっすぐと自分を見るアカネの目に、グリーンは思わず吸い込まれそうになった。教育者としてグリーンの手を去る彼女は、それに関し

ても、グリーンを導こうとしている。

グリーンは、ギョツと目を閉じ、ジムトレーナーを受け入れることで起こるかもしれない事を大体想像する。

そして、自分がそれら全てに立ち向かうことの覚悟を決めた。

「条件がある」

目を開いたグリーンは、真つ先にコウタを見て続ける。

「トレーナーズスクールには必ず行くこと、ジムトレーナーだからといって、特別扱いはされないしさせない、普通のトレーナーと同じように授業を学び、トレーナーとして駄目だったとしても潰れない程度の常識は学んでもらう」

「わかりました」と、コウタはそれに頷く。

「それともう一つ」

一つ沈黙を作ってから、グリーンが続ける。

「俺が駄目だと判断したら、トレーナーとして大成する事は諦めろ。その二つが条件だ」

厳しい、と、アカネは思った。

おそらく、グリーンの言う『駄目』というのは、努力とか、やる気とか、そういう誰にでもできるような部分ではない。コウタという人間のトレーナーとしての才能の底が見えれば、彼はコウタにそれを通告するのだろう。

アカネは、声を上げて、もう少しゆるい条件にしようとした。彼女なら、それが出来ただろう。

だが、それよりも先にコウタが「はい！」と力強く言った。それが厳しい道であることは、理解しているであろうに。

「まだ洗脳が残ってるわけじゃねえよな」と、グリーンは冗談まじりに言った。その顔があまりにも真剣味に満ちていたので、コウタはブンブンと大きく首を振ってそれを否定した。

その様子にグリーンは思わず吹き出し「わかったわかった」と答える。

「まあ、やれるだけやってみるよ」

ようやくグリーンがそれを受け入れた時、再び個室のドアが開い

た。

見ると、病衣に身を包んだミズホとヨウイチが、心配そうな表情を
してコウタの名を呼ぶ。

コウタもまた、彼らの名を呼び、その三人は再開を喜ぶ。

「どこから聞いてた？」

三人がそれぞれに夢中になっているのを眺めながら、グリーンはア
カネに問う。

「何がや？」

「俺とコウタの会話」

「ああ、最後のところだけや」

「そうか」

グリーンは短くそう言うと、コウタ達三人に目を向ける。

あんな時が、俺達にもあつたんだろうか。

きっとあつたんだろう。否、きっとレッドは、いまだにそう思っ
ているはずだ。

変わったのは自分の方なのだ。

グリーンは足元のピカチュウに合図をすると、久しぶりに彼を肩に
乗せた。

「じゃあ、リニアの時間があるから」

そう言つて病室を後にしようとした一人と一匹の背中を、アカネは
目で追った。

引き留めようとした。なあ、とか、待つてや、とか、そんな何気な
い言葉でグリーンを引き止め、彼女は、ある質問を彼に投げかけよう
としていた。

そのピカチュウ、誰のポケモンなんや？

だが、アカネはその言葉を飲み込んだ、静かに病室を去ろうとする
グリーンを、彼女に似合わず静かに見送った。

きつと、あのピカチュウはグリーンの本래の手持ちではないのだら
うと、彼女は確信していた。

そして、その持ち主が誰であるのか、その想像も、ある程度は出来ている。もしそうであるならば、彼はきっと、この世界で最も有名なピカチュウだろうから。

その先のことは何もわからない。どうしてそのポケモンをグリーンが連れ歩いているのか。そして、そのピカチュウの持ち主は、一体どうしているのか。

それをグリーンに問うのは、あまりにも残酷なような気がした。そして、彼女の聡明な判断は、きっと正しかったのだろう。

3 | 『教皇』クワノ一世

1

キツサキシテイでは、季節外れの雪が吹雪いていた。

春の訪れを告げる強烈な風がはるか遠方からそれらを運び、雲の隙間から薄く照る日が、キラキラとそれらを弄んでいる。

その光景は、キツサキの最深部に存在するキツサキシんでんの前でも同じだった。そして、それは特に珍しいことではなく、人々もそれには慣れ親しんでいる。

だが、何人もの警察官、ポケモンレンジャー、そして、キツサキジムのジムリーダーであるスズナが神殿を囲むその光景は、人々の知るところではない。稀に神殿から迷いでたポケモンをスズナが少し懲らしめて神殿に追いやることはあったが、それにしてもここまでの規模ではない。

キツサキの住人は、それを分厚いガラス越しに眺めるしか無かった。警察とレンジャーは住民に避難勧告を発令し、住居が神殿に近いものはキツサキジムへ、そうでないものは家屋への避難を義務付けていた。

なにかとんでもないことが起きている。

住民たちはそう確信していたが、それが何なのかは掴めない。

人が多く避難しているキツサキジムでは、ああでもないこうでもないといと真実や偽りが囁かれていたが、そのどれもが、住民の確信を得るものではなかった。

キツサキジムリーダーのスズナは、警察とジムトレーナーに目を配りながら、不安げな表情で神殿を眺めている。普段の明るく快活な彼

女のイメージとはかけ離れているが、吹雪であるのにスカートから足を覗かせるスタイルはそのままだった。

キツサキシんでんの前に、スズナがそのような表情を見せることは、実は少ない。彼女は、若くしてキツサキシんでんに入ること許されている数少ないトレーナーの一人であるし、野生のポケモンに遅れを取ることはほとんどない。

だが、彼女は悪意を持った人間に対する対処に対してはまだまだ経験が足りてはいなかった。悪意もなく、ただ気まぐれに神殿を出てきてしまったポケモンへの対処と、悪意を持つ人間の対処は当然違う。そして、今彼女が目の当たりにしている状況は、まさにそのようなものだった。

しかし、警察やレンジャーに任せておけばいいという問題でもない、悪人に対する対処に優れた彼らも、ポケモンに対する対処がスズナと同等かそれ以上に優れているとはとても言えないからだ。今想定される『悪意を持ち、なおかつ世界でもトップクラスに優秀なトレーナー』に対して優位に立てることはないだろう。

それぞれが自分の専門分野に自信を持ちながら、対処すべき相手に完全なる自信を持つことが出来ない状況だった。

だが、そこに救世主が現れる。

「変わりはない?」

そう言ってスズナに声をかけたのは、シンオウリーグチャンピオン、シロナだった。その口ぶりこそ余裕を携えたものだったが、その節々にはやはり多少の緊張が見えた。

「シロナさん!」

だが、スズナはそれを気に留めなかった。悪人に対する対処法を持ち、更にチャンピオンとしての風格を持つシロナの到着に、彼女以上に喜んだ人間はいないだろう。

神殿入り口の前に陣取る警察やレンジャーも、シロナの登場を快く迎え、緊張ばかりだった現場に、多少の余裕が戻っているようだった。「状況は?」

説明を求めるシロナに、スズナは彼女のためにまとめていた情報を

提示する。

「今朝、何らかの集団が、キツサキシティを訪れたんです。そして、彼らはキツサキシんでんに無理やり押し入りました」

「集団であることに間違いはないの？」

「間違いありません、神殿を警備していたポケモンレンジャーが確かに確認しています」

「となるとやつぱり」

集団、押し入り、そしてキツサキシんでん、それらスズナの情報から、シロナは自らの脳内にある情報を思い浮かべる。

同じことを思っていたのだろう、スズナもそれに頷いて答える。

『『教皇』クワノ一世とその信者達で間違いありません』

その言葉で、シロナは目を伏せた。

『教皇』クワノ一世を自称する男と信者達。それらの存在について、シロナとスズナはよく知っている。

否、シロナやスズナに限らず、シンオウに生活拠点を置く人々は、意識せずとも、その名を聞く日々が続いている。

彼らは『教皇』クワノ一世を中心に世界の真実をあらわにする事を目的とする宗教色の強い武装集団で、ギンガ団残党やアウトローを吸収し巨大化、いぶんかのたてもんやロストタワーなど、信仰に関わる施設を襲撃し、破壊し続けていた。

「やはり、狙いはレジギガスでしょうか？」

「ええ、おそらくはそうでしょうね。彼らはシンオウ神話に敵意を持っているから」

シロナの脳裏に、変わり果てた故郷の姿が甦った。

クワノはシンオウ神話と、それに基づく遺跡を明確に敵視しており、シロナの故郷であるカンナギタウンも、その毒牙にかかったのである。幸い住民に被害はなかったが、それでも、歴史的に価値のある遺跡の一部が失われた。

「ここで終わらせるわ」

シロナは、顔を上げてキツサキシんでんを睨みつけてそう言った。彼女は、ここでその集団を捕縛し、それまでの騒動に決着を付けるつ

もりだった。

その宣言を聞いて、スズナも、その周りにいた警察やレンジャーも、彼女を頼もしく思った。彼女がそう願うのならば、それは確実に叶うのだろうと、彼女らは思っていた。

だが、シロナは再び視線を下げた。雪をきらめかせる陽の光が眩しかったからだけではない、彼女はまだ揺れ動く気持ちを制御しきれていなかったのだ。

もう一度顔を上げ、まだ誰もいないキツサキシんでん入り口を見つめて彼女はつぶやいた。

「クワノ先生、どうして……」

その巨大な体が石張りの床に擦れ、そのポケモンはそのまま地下室の壁に激突する。

あまりの衝撃にその遺跡全体が大きく響き、天井から塵や埃が音を立てて降り注いだ。

だが、松明を片手に地下室に集まったその集団は、それに何一つ動揺してはいなかった。彼らはフードや帽子に降り注いだ塵をうつとおしく思うこともなく、そのポケモンと、そのポケモンを吹き飛ばしたトレーナーをただ一心に見つめている。

トレーナーは、ポケモンをボールに戻す。

松明に照らされて伸びる影と同じように、その男は人並み外れて巨大な男だった。それでいてボロボロの服と外套をまとい、顔を覆う縮れた髪とヒゲには、泥と土埃が付着し、とてもではないが清潔とは言えない。

だが、松明を持った集団はその不潔な男に尊敬の念を込めた感嘆を上げた。その集団が、その男を尊重していることは、誰の目にも明らかだった。

「その目に焼き付けるといいー！」

男は、その巨体に見合う大声を張り上げ、その集団にポケモンをみることを促す。

そのポケモン、レジギガスは体をゆっくりと起き上がらせると、石畳を踏みしめながら男のもとに歩む。

集団は今度は恐怖の声を上げた。彼らの知るレジギガスは、大陸を引いてシンオウ地方北に移動させた伝説のポケモンであり、シンオウ神話に登場する神のひとりでもある。それが、ポケモンをボールに戻し無防備になっている男に向かって距離を詰めているのだ。

だが、レジギガスはその男を横切った。彼はそのまま元々自分のいた場所に戻ると、動きを止め、おとなしくなる。

それまで激しく点滅していた六つの目のようなものからは、完全に光が消えた。

男は、それを鼻で笑ってから、集団に体を向ける。

「これが、神と呼ばれるものの真実なのだ！」

その声は、地下遺跡の壁を反響し、独特の雰囲気を持つて集団に届けられる。

それまではその光景に数々の声を上げていた集団は、一斉に口をつぐんで、その男の次の言葉を待つ。

その男、『教皇』クワノ一世は、それを確認してから両手を大きく広げて続ける。

「古のときより語られ続けていた教えを、私は今、それが人の手によつて無より生み出された恥ずべき偽り……真実を知らぬ憐れな子供たちを手中に収めるための道具としての物語であつたことを証明した！」

集団、『教皇』の信者たちは、松明を振り回しながら歓声を上げてそれを歓迎した。

クワノは、それに調子づくように更に続ける。

「かつてこのポケモンが大陸を引いたなど、どうして信じることができようか！ 私達がその目で確認したのは、我々から逃げ惑うただただ無様なだけのポケモンだ！」

信者たちは、それぞれの同意の言葉を紡ぎながらそれに答える。地下遺跡を反響するそれらは、やはり大きな力のうねりとなって彼ら自信を鼓舞する。

「我らの立つこの地、シンオウの神話など、恥を知らぬ異端の穢れに

よって作られた、真実からの逃避でしか無い！ アグノムもユクシーもエムリットも、ディアルガもパルキアも、そして、アルセウスやギラティナすらもただのポケモンであり、その根本はムツクルやビツパとかわりはしないのだ！ 恥を知らぬ異端の穢れは、かつて教えられたその虚構にすぎり、今日この日まで、明らかな真実から、いびつに目を背けてきた！」

それは、シンオウに住む人々からすれば、かなり大胆な、それこそ神をも恐れぬ発言だった。

事実、現代を生きるシンオウ人全てが、シンオウ神話全てを鵜呑みにしているわけではないだろう。だが、たとえ神話をばかにするようなシンオウ人でも、ディアルガやパルキア、そしてレジギガスのように、人智を超えたはるかな力を持っていると考えられる存在を、ムツクルやビツパのようなポケモンとさして変わりはしないとわれ、それを純粹に肯定することが、果たしてできるだろうか。

だが、信者達は松明を振ってそれを肯定する。そこには、否定や困惑などかけらも存在しなかった。

彼らは、自分がシンオウやその近辺の地域の中でも数少ない、神話の真実を、本当の感覚を知っている人間の一人だということに、心の底から酔いしれていた。彼らは目の前の『教皇』がこれから自分達にそれを提示し続けてくれることをかけらも疑っていない。事実、クワノ一世は神の一人であるはずのレジギガスを子供扱いし、完全なる敗北を与えたのだ。

満足気に響き渡る歓声を感じていたクワノは、一つ表情を悲しげなものに変えてから、両手で信者たちのそれを制した。

「かつて、私もそうだった」

それを聞いた信者たちは、再びボルテージを上げる。クワノ自身も過ちを認めるそれは、それから先に紡がれるさらなる興奮への序曲であることを、信者である彼らは知っているからだ。

「かつての私も、シンオウに伝わる神の物語が偽りであるかもしれない恐怖から目をそらすことで、シンオウの教えの導師として生きていた。神の物語を偽りだとただ純粹に信じるには、私達にとって神の存在というものが、あまりにも遠い存在だった」

更に続ける。

「だが、私は神を知ったのだ！ 神が生み出した神の子の力を私は目の当たりにし、神の子の手足になることを誓った！」

なんの証明もなければ、根拠もない言葉だった、だが、シンオウの神がただのポケモンであることを知り、それが偽りだと知った信者たちにとって、その言葉は限りのない真実だった。

「皆にも、神の加護を与えよう。神の子が持つ力の恩恵を、私と同じように迷えるだけの存在だった君たちに与えることが、私に与えられた神の使命なのだから！」

信者達はそれ以上無いほどの歓声を上げながらそれに同調する。それを当然のように受け入れながら、クワノはその演説を締める。

「神の子のため、我々はカントーに向かう！」

おお、おお、と、信者たちは腕を上げ、それを肯定し、その共同体を奮い立たせることを目的とした声を上げる。

クワノは膝を突き、両手を広げたまま遺跡の天井を眺める。不揃いな両の瞳は、その先に神がいることを疑っていない。

「追うのだ、我らを導く、ことわりの会話を」

吹雪は、止んでいた。

警察隊の責任者の声が、スピーカーで拡散され、その集団に届いていた。

曰く、君たちは完全に包囲されているのだの、おとなしく投降しろだの、大体そのような言葉が、彼らの耳には入っているだろう。

だが、信者たちは、それに耳をかそうとはしなかった。彼らにとつて耳を貸すべき価値のある言葉はクワノ一世のものだけであり、それ以外の言葉などなんの意味もなしてはいなかった。

「愚かな」

信者たちをかき分け、神殿入り口に姿を現したクワノは、一言そう言つて、不揃いな両の瞳で、ぐるりと彼らを見回す。

やがて彼は、自分達の正面に陣取るスズナとシロナに気がついた。

「やあ、やあ、やあ」

シロナと目を合わせたクワノは嬉しげに笑うと、胸ほどにまで伸びた縮れたヒゲを撫でた。

それと相反するように、シロナは険しげな表情をクワノに見せる。

「愚人よ！」

クワノは大声でそう言つて、警察隊の責任者を制するようなジェスチャーを取る。

「少しの間だけでいい、その聞くに堪えない稚拙な叫びを止めてはくれないか。私は、あのお嬢さんと話がしたい」

その巨体にふさわしいハリのある大声は、スピーカーを通した警察隊責任者のものより大きく、彼は、スピーカーを持つその手を、その声を、思わず止めてしまった。

それほどの威圧、パワーが、クワノの声には宿っていたのである。

「やあ、やあ、やあ」

挨拶だろうか、それとも笑っているのだろうか、スズナは、クワノ一世のその声に身震いする。

だが、シロナはその声が、彼が機嫌がいい時に発せられるものだと知っていた。

彼女は、先陣を切る。

「クワノ先生！ 一体あなたに何があったのですか!？」

その場にいた人々はそれに驚いた。

クワノ一世がかつてシンオウで立場のある人間だったことはすでに有名だった。だが、考古学者として、そしてトレーナーとして有名なシロナが、先生と敬称をつけて呼ぶほどの人間だとは思っていなかったのである。

それは、クワノの信者達の前ではあまりいい効果のあるものでなかった。やはり、自分達の信じる『教皇』は、あのシロナに先生と呼ばせるほどの人物なのだ、その狂信に、さらなる根拠を与えるものだった。

だが、クワノはそのような小さなことを気にする様子ではなかった。

「憐れなシロナ君、私は何も変わらないさ」

「そんな事はありません！ あれほど熱心にシンオウ神話や他地方の文化に精通していたあなたが、どうしてこんな酷いことを」

シロナの記憶の中にあるクワノは、その巨大な体格に見合わず優秀な考古学者だった。複雑でいくつもの解釈が存在するシンオウ神話を専門に、各地方の神話にも精通した最も尊敬すべき学者の一人だったのだ。

そして、その巨大な体格に見合う優秀なトレーナーの一人でもあつ

た、歴史を守る番人として、ギンガ団がシンオウ地方を蹂躪しようとしていた時、先陣を切つてそれに抵抗しようとした勇敢なトレーナーのひとりでもある。

だが、今のクワノにそのような面影はなく、おそらく本人にも、そのような自覚はないのだろう。

「やあ、やあ、やあ。酷い、とはね」

クワノは笑った。人を小馬鹿にする、呆れを強調した笑い。

シロナは歯を食いしばった、そのような笑い、以前のクワノは絶対にしなかった。

「酷いのは、偽り神話を作り出した過去の人々のことを言うのだ。彼らが作り出した神話そのまま文化となり、かつての我々の生活に根付いていた。神の名を語った偽りの物語、忌むべきものだ」

一泊置いて、シロナが何も返してこないのを確認してから続ける。

「我々は今、本物の神話の中にいるのだ。本物の神と、その子が作り出す本物の神話の、その中に」

「何を馬鹿な」

「私は本物の神を見たのだー！」

突如目を見開いて叫んだクワノに、あたり一面は一斉に声を失う。

「私は、人生の大半をシンオウ神話に費やした！そこにある神の物語が、尊重すべき威厳に満ち、ポケモンとは一線を画す神聖なる生物たちの物語だと信じていただからだ！だが、現実はそうではなかった。神の物語とされていたものは、その全てが作られたものであり、私が神だと信じていたものは、ただのポケモンだった。私を裏切ったのは、シンオウ神話なのだ！本物の神に出会った今、作り物のシンオウ神話は忌むべきものでしか無い！それを後世に伝える遺跡も

また同じなのだ！」

シロナは、クワノのその言葉に、なにか論理的に答えようとしたが、だが、それはできるはずのないことだった。

クワノの言葉を否定するには、シンオウ神話の存在を真のものとして証明しなければならぬ。だが、当然それができる訳がない。

もはや説得は不可能なように思えた、かつてのシロナの知るクワノはもうそこに存在せず、そこに存在するのは、シロナの知らぬ『教皇』クワノ一世でしかない。

「先生！」

だがシロナは、それでもクワノを説得できないものかと思考を巡らせた。ここで犯罪者として捕らえ人生を終わらせるには、クワノの知性と実力は、あまりにも惜しいものだった。強さと知性を兼ね備えるシロナと、精神的に同格に付き合うことのできる数少ない人物だった、故に、彼女はまだ、クワノの精神面を信じていた。

だが、彼女の願いは叶えられそうになかった。クワノの賞賛すべき精神性はある意味でその強さをそのまま持ったまま、『教皇』クワノ一世を作り出している。

クワノは、シロナの叫びを無視して言う。

「残念だ、もし君が我らと共に新たな世界に身を投じる勇気さえ持っていたならば、私は快くそれを受け入れようと思っていたのに」

そして、彼は腰のボールに手をやって、それを神殿入り口を囲う警察やレンジャーたちに向かって放り投げる。

彼らは、本能的にボールを投げてポケモンを繰り出した。それが、ポケモンを使う凶悪な犯人に対するマニュアルであり、トレーナーとしての本能でもあった。

クワノ一世が繰り出したのは、三体のポケモンだった。それぞれが岩、氷、鋼の肉体を持ち、六つの目のようなものは激しく点滅している。

「防衛を！」

それがレジロック、レジアイス、レジスチルであることを見抜いたシロナは、全体に向かってそう叫んだ。

だが、それはもう遅く、ポケモンを繰り出したトレーナーの多くは、すでに攻撃の命令を出している。

シロナはトゲキツスを繰り出し、それに備える。

クワノ一世の声が、届く。

『『だいはくはっ』』

その瞬間、現れた三体のポケモンは、一瞬カッと光ったかと思うと、けたたましい音を立てて激しい爆音と衝撃を生み出した。

あまりの爆風に、シロナとスズナは体が浮き上がるのを感じ、次の瞬間には背中から地面に叩きつけられる。

一瞬、彼女らの肺はその機能を忘れ、膨らんで息を吸う事も、縮んで息を吐くことも出来ず、彼女らに永遠とも思える苦しみを与えた。

しかし、シロナはいち早くそれから回復して迎撃の体制を取らなければならぬと焦っていた。クワノ一世によるその次があるかもしれないからだ。

素早く繰り出したポケモンによってそれに対応した彼女たちですらそうなった。他にもポケモンを繰り出して彼らを守ろうとしたとは言え、警察とポケモンレンジャー達がどうなったかはわからないが、全くの無事というわけではないだろう。

「やあ、やあ、やあ。きげんよう」

衝撃によって生まれた土煙の向こう側から、クワノ一世の笑い声が聞こえた。

「追うのだ、我らを導く、ことわりの会話を」

トキワシテイ、トキワジム。

休日らしく朝はのんびりしていようと考えている住民たちがまだ浅い眠りを繰り返している頃、その対戦場では二人のトレーナーと、二匹のポケモンが向き合っている。

『ひっかく』！』

トキワジムトレーナーのコウタは、相棒であるサンドにそう指示を出した。

サンドはカイリキーに向かって飛び上がり、爪を振りかざす。よく手入れされたその爪で攻撃されればタダではすまないだろう。

『ビルドアップ』』

グリーンの指示によって、カイリキーは上体に力を込めた。血流を送り込まれて膨らんだ筋肉が攻撃に備える。

鍛え上げられた胸板にサンドの爪が突き立てられたが、浅い傷跡しかつけられない。

体制を崩さなかったカイリキーは、すぐさまに攻撃の準備を整える。右上腕が振りかぶられていることに、コウタもサンドも気づいた。

『まるくなる』！』

『からてチョップ』』

危機を感じたコウタの指示が一瞬早く、サンドは体を丸めて柔らかい腹を守った。

硬い外殻にカイリキーの手刀が叩きつけられる。その硬さにカイリキーは一瞬顔を歪め、グリーンはコウタの判断の速さに感心したように頷く。

コウタがトキワシテイのジムトレーナーになってから初めての朝練、初めての手合わせだった。コウタも気分が高揚し、より集中できているのだろう。本当にトキワジムに挑戦してくるようなトレーナーと遜色のない判断だった。

『ころがる』！』

カイリキーの攻撃を防いだことに気を良くしたのだろう、コウタは更に指示を続ける。

サンドは丸まったまま床を転がって勢いをつけると、カイリキーに向かつて突っ込んでいく。

カイリキーはそれをかわさない、むしろ両足で地面を踏み込み、それを迎撃する体勢を取る。

飛び込んできたサンドを、カイリキーが胸と四本の腕で受け止めた。

コウタとサンドはそれが会心の攻撃だと思っていた。だが、カイリキーはそれに表情を歪めることなく、ぽーんと、ボールになったサンドを宙に放り投げた。『ころがる』攻撃は失敗に終わる。

真上に放り投げられたサンドは、軌道を変えることが出来ない。彼はそのまま重力に従い、素直にカイリキーの思うままに落下する。

グリーン側に戦況をコントロールされていることをコウタはすぐに察した。

『ずつき』！

急な指示だったが、サンドはすぐにそれを受け入れた。遊び場の一つであるウバメの森で、木の上にいるポケモンを落とす遊びのために散々繰り返した慣れ親しんだ攻撃だった。

だが、カイリキーはその上方からの攻撃を二本の腕でガードした、コウタはそれに驚くが、そのような強行はグリーンからすれば見慣れたもので、真っ先に警戒すべきものだった。

『じごくぐるま』

カイリキーは残った二本の腕でサンドを掴み、そのまま体を大きく反ってサンドを地面に叩きつける。

サンドはすぐさま起き上がって戦闘態勢を取ったが、コウタはその一連の動きに動揺してしまい次の指示を出せない。

そこで、鳴き声とともにピカチュウがそれに割って入った、両手を広げ両者を制する。

「このあたりで終わっておこう」と、グリーンが同じように両手を広げて言った。

サンドはまだ戦えると言った風にステップしてそれに抵抗してみたが、コウタは「わかりました」と、悔しげにいいながらそれを受け入れる。

カイリキーの『じごくぐるま』がその威力をセーブされたものだったことは誰の目にも明らかだった。

「前に比べればだいぶマシンになってる」

ジム内の回復施設室でサンドとカイリキーを回復させながら、グリーンはコウタに言った。

「はい」と、コウタは少し複雑そうな表情で答える。マシンになっていると言う部分では喜ぶべきだが、前回と比べると、と、つけられると素直に喜べない。

「よく勉強したんだな」

コウタの表情に気づいたグリーンは、自身の口調に反省しながらそう言っコウタの細かい髪の毛をくしゃくしゃとかき回した。

ようやくそれで、コウタの表情に笑顔が浮かぶ。

誰でもあんなのような天才肌やと思うなや、と、アカネに耳にタコが出来るほどに聞かされた助言を、彼はまだ徹底しきれてはいなかった。

若くしてポケモンリーグを制したグリーンの才能と、標準か、もしかすればそれにやや劣るかもしれないコウタの実力と成長のバランスを上手く取るのは、彼が思っていたよりも難しかった。

成長はしているし、間違いなくそれは彼の小さな努力の積み重ねの賜物なのだろう。だが、グリーンの思う理想とは、まだそれはあまりにもかけ離れている。

「だが、知識をひけらかすような戦いをするな」

グリーンの言葉に、コウタは首を捻った。何かを咎められているこ

とは理解が出来るが、それが何を指しているのかがわからない。

音楽が鳴り終わった回復装置の安全ロックが外される。

グリーンがそれに反応するよりも先に、足元のピカチュウがぴよんとそれに飛び乗り、二つのボールをそれぞれにトレーナーに手渡した。

二人がそれぞれピカチュウに礼を言ってから、グリーンが続ける。

『まるくなる』からの『ころがる』は意識してやったろ?」

「はい」

コウタはそれに頷く。

「その方が威力が上がるので」

『ころがる』という技は、その名の通り地面を転がる勢いで攻撃するもので、当然ポケモンが球体に近ければ近いほどよりスムーズな攻撃に移行することが出来る。つまり『ころがる』攻撃の前に『まるくなる』事ができれば、その威力を増すことが出来る。コウタの故郷であるコガネシティのジムリーダー、アカネが得意としている戦術に一工夫を加えた有力な戦術だった。

だが、グリーンはそれに首を振る。

「駄目だ、カイリキーと『ころがる』は相性が悪い。確かに『まるくなる』からの『ころがる』は強力な連携だが、しっかりと相手を見て使わないと行動を縛られるだけになる」

グリーンの指摘は、ある程度のレベルがあるトレーナー達の中では正しいものだった。

『ころがる』は岩のような突進力を持つ攻撃だが、岩を砕く肉体を持つ格闘タイプのカイリキーには相性が悪い。『まるくなる』によって威力が底上げされているとはいえ、いい選択肢ではなかった。

さらに、『ころがる』という技の弱点は、勢いに任せる攻撃であるために、相手の行動を見てからの柔軟な対応が難しくなることだ。事実、先程の手合わせに置いてサンドとコウタはカイリキーの動きに対応することが出来なかった。

「戦略の豊富さを含め、知識は大事だ。だが、知識に状況を合わせるようでは駄目、状況に知識を反映させるんだ」

コウタは不安げに首をひねった。グリーンの説明の意味がいまいちつかめないのだ。

「まずはトレーナーと戦うことに慣れる」と、グリーンはコウタの方に手をやりながら続ける。

「全てを経験してまずは慣れるんだ、戦うことに慣れてくれば、知識を使う余裕もできる」

今は慣れる、との言葉に、コウタは「はい」と答えた。その先のこととはわからない、グリーンを信じる他ないのだ。

だが、彼は不思議そうにもう一つ続ける。

「グリーンさん、どうしてサンドしか使っちゃ駄目なんですか？俺は格闘タイプ相手にはオニスズメを考えていました」

それはコウタにとって当然の疑問だろう。手合わせの前、グリーンはコウタにサンドを繰り出すように言い、コラツタやオニスズメを繰り出すことを禁止していた。格闘タイプにはオニスズメのような飛行タイプのポケモンが相性が良いことを彼は知っていた。

グリーンはそれに答える。

「サンドは今のお前と一番相性がいいんだ。コラツタやオニスズメじゃトレーナーのスピードについていけないだろうが、サンドはある程度スムーズにお前の指示を守る。まずはサンドとの連携でポケモンと共に戦う感覚を覚えるんだ」

「なるほど」と、返事ではそれを肯定したが、コウタは小さくないショックを感じていた。

ポケモンと共に戦う感覚を覚える。コウタはそんな事を考えたことがなかった。彼はこれまでオニスズメやコラツタと共に戦っていたと思っていたし、それを疑ってはいなかった。だが、そのグリーンの言葉は、コウタはそれら二匹の相棒とはこれまで共には戦っていないのだとハッキリと宣告するものだったのだ。当然、腑に落ちるものではない。

本人がそれを意識しているわけではないが、グリーンはまだ優れた教育者ではなかった。

うつむいてしまったコウタのそのような気持ちを知る由もなく、グ

リーンは彼の肩を叩いて言った。

「今日はこの後ヤマブキの方に行こう。ちよつと用事を一つ済ませ
て、その後がいい肉食わせてやる」

現金なものだが、コウタは少しだけ表情を明るくさせた。

かつてのシオンタウンを知る者は、ここ数年でのシオンタウンの変わりように驚いているだろう。

町の象徴であった慰霊施設ポケモンタワーがラジオ局を含むメディア施設に改装され、流行の発信地となりつつある。心なしか空が明るくなったような雰囲気となり、数年前までは幽霊騒ぎが起こって当然の真実として語られていた町からは脱却しつつある。

「少し自由にしててくれ」

ある施設の前で、グリーンはコウタにそう言った。

「あまり、気分のいいもんじゃないだろう」

コウタは『たましいのいえ』と刻まれたその施設と、グリーンの手にある大人しめの花束を見比べて小さく戸惑った。ジョウト地方、コガネシティ出身の彼は、シオンタウンがかつて大規模な慰霊施設があった場所であることを知らず、その施設を目の当たりにする瞬間まで、グリーンの用事がそのようなことだとは微塵も思っていなかった。

「あの」と一っ呟いてから、コウタは言葉を詰まらせる。その施設とグリーンを前に、次に何を言えば良いのか分からなかった。

その様子から察し、グリーンが答える。

「ポケモンだよ」

「ポケモン、ですか」

「ああ、ポケモンだ」

「ポケモンの、お墓ですか？」

「ああ、そうだよ。ちよつと前までは、あの塔全部がそうだった」

そこからでも見えるシオンのメディア施設を眺めて、グリーンが感慨深そうに言う。

「随分と変わったんだよ、ここは」

ピカチュウを肩に乗せ、たましいのいえに入ろうと背を向けたグリーンにコウタが「あの」と、声をかけた。

「俺も、ついて行ってもいいですか？」

それがグリーンの気分を損ねるかもしれない、その後のいい肉がフイになるかもしれない言葉だということ、コウタも理解している。だがそれ以上に、殿堂入りトレーナーグリーンと、ポケモンの墓というものが、コウタの感覚からはあまりにもミスマッチだった。

興味がある、と言つてしまえば聞こえが悪い。だが、その時のコウタの心境を最もよく表そうとすれば、そうなるだろう。

グリーンは、一瞬返答に悩んだ。コウタの提案に悪意を感じたからではない。こんなものについていっても面白くないだろうにと、彼はそれを不思議に思っていた。

だが、別にそれを断る理由もない、用事の後にはコウタを探す手間を考えれば、むしろその方が良かった。

「別にいいけど、あまり面白いもんじゃないぞ」

「大丈夫です」

「じゃあ、まあ、良いけど」

不思議そうな表情をしながら、グリーンは『たましいのいえ』に足を踏み入れた。

それは、周りと比べて小さな墓石だった。欠けていたり、薄汚れていたりするわけではない、ポケモンの本格的な墓標というものを初めて目の当たりにするコウタでも、綺麗にしているんだなと思えるほどに。だが、その墓石は、周りと比べて小さかった。

その小さな墓の前に、グリーンとその手持ちのポケモンたちが並んでいた。サンダースはともかく、最終進化系であるピジヨットとフーデインが並ぶと、その墓石の小ささがより引き立つ。

グリーンは花束を解いて、それぞれ一輪ずつ、ポケモンに手渡していた、ピジヨットとサンダースはそれを加え、フーデインは二本のスプーンを一旦右手にまとめて左手にそれを持ち、それぞれその墓石の前にそれを備え、少しだけ静かに目をつむった後に、ボールの中に戻っていく。

「お前も」と、グリーンはまだ余裕のある花束の中から一輪、ピカチュウに向けて差し出した。

「あいつも、喜ぶだろうから」

ピカチュウは、一つ小さな鳴き声を上げてからそれを受け取った。そして、サンダーズ達がそうしたようにそれを備え、少しだけ目をつむり、何かを思った。

「三番目の、相棒だったんだ」

残った花束を再びまとめながら、グリーンはどこかに投げかけるようにそう呟いた。

それは当然、彼らの一歩後ろにいるコウタに向けられたものだろう。休日だと言うのに『たましいのいえ』には人がまばらで、グリーン達の周りには他の利用者はほとんどいなかった。

「グリーンさんの、手持ちだったんですか？」と、コウタは少し声を抑え、それでも驚きを含めながら答えた。

「そうだよ」

ぐるりと周りを見渡してから、更に続ける。

「元気のいい、ラッタだった」

ラッタ、という単語に、コウタはピクリと体を反応させた。自身の手持ちであるコラッタの、進化系であるポケモンだった。

「どうして」と、コウタが問う。

「ポケモンは、瀕死になっても回復できるじゃないですか」

「生きていればな」

グリーンは少しうつむいて続ける。

「いくらポケモンセンターでも、死んだポケモンを甦らせることは出来ないんだよ」

そんな事くらい、コウタだって分かっているだろう。彼が知りたいのがその先であることは、グリーンも理解している。

そして、彼は遠くを眺めるような視線を飛ばしたのちに、その先を続ける。

「イーブイやピジョン、ケーシィと違って、コラッタとラッタは、生物としての成熟が他の種に比べて早い上に、前歯での攻撃が強力だ。虫

ポケモンはそれと同じかそれ以上に成熟するが、ラツタに比べると有効な攻撃手段を持たない」

コウタは、その説明がそれとどう繋がるのかがわからない。だから、沈黙で次を促す。

「だから、アイツに頼ることが多かった。少しでも戦況を悲観的に感じれば、すぐにアイツを繰り出して、その前歯に頼った」

無理をさせすぎたんだ、と、グリーンは続ける。

「アイツの元気に、アイツのハートの強さに、頼りすぎていた。気がつけば、アイツは冷たく、固くなっていて、ポケモンセンターに連れ込んでも、首を振られた」

コウタは、それでも信じられないと行った風に、グリーンを見ていた。彼の中でポケモンというものは、どれだけ傷ついても、どれだけ弱ろうとも、ポケモンセンターの回復装置に入ればすぐに元気になる。そう考えること自体は道徳や倫理に反することを理解していても、実質的には、そのような存在だった。

そんなポケモンを、本当に冷たくなってしまうまで疲弊させてしまいうだなんて、コウタには想像することが出来なかった。どれほどのレベルの戦いを、そして、どれほどの数の戦いをこなせば、そうなるってしまうのだろう。

「全部、俺が悪いんだ」

そう言うってから、グリーンははつとしたように顔を上げた。その言葉が滑り出してしまったことに驚いていた。

それは、彼が何度も頭の中で考えながら、しかし、誰にも打ち明けたことのない感情だった。グリーンの前にはいる常識的な、不躰とは最も離れたところにいる友人や知り合い達は、そのことについて誰も触れなかったし、もしそれに触れてくるような不躰な人間を、グリーンは軽蔑し、本心では語らなかつただろうから。

参ったな、と、グリーンはため息を鼻から抜いた。付き添いがあることで、思った以上にナーバスになっているようだった。

だが、グリーンはそれより先を続けた、それを言うことで感じる痛みなんて、比べればななてことがないと思った。

「俺達は、トレーナーだ」

それをコウタがしつかりと耳に入れていることを信じながら続ける。

「もし、自分の限界を越えようとしているポケモンがいれば、たとえばいつに恨まれようとも、もしそれで戦いに負けてしまおうと、引くべき時がかならずあるんだ。なりふり構わず向かっていくことじゃない、それを受け入れることが、強いトレーナーなんだ」

コウタにそれが届いていることを感じながら、しかし、グリーンは歯を食いしばる。

それは、あのとときの自分にこそ言うべき言葉なのだ。あるいは、今の自分にも。

「俺は、あいつを失って初めてそれに気づいた。遅すぎたんだ」

「そんなことは、ありませんよ」

それは、グリーンの背後から聞こえてきた声だったが、彼はそれがコウタのものではないことをすぐに理解した。否、迷いもしなかった。

その年齢を重ねた声は、グリーンにとって世話になった声であったからだ。

「お世話になってます」

振り返ったグリーンが頭を下げた先には、一人の老人がいた。頭は禿げ、真っ白な口ひげが顎を覆う。

コウタは、突然として現れ、そして、不意にグリーンに語りかけたその老人に戸惑っていた。彼は老人というものが時折そのようになるの関係もない話に割り込んでくることがあることを知っていたし、無いより、彼の生まれであるコガネシティは、そのような老人が特に多い土地柄であった。だから、その老人が全く関係がないのにグリーンに語りかけてる可能性を感じたのだ。

だが、グリーンはその老人を自分のスペースに招き入れ、コウタに彼を紹介する。

「この施設の管理人の、フジさんだ」

それに合わせて頭を下げた老人に、コウタも慌てて頭を下げる。も

う一度顔を合わせれば、禿に口ひげとではあったが、細くなっている目は、優しげだった。

「こいつはコウタ、トキワジムトレーナーです。今日は付き添いで」「そうですか。グリーン君がここに人を連れてくるのは珍しいことだから少し驚きましたよ」

ピカチュウが、鳴き声を上げながらフジ老人の足元にすり寄った。彼はそれに気づくと、曲がった腰をさらに曲げてピカチュウを撫でる。

フジ老人は、そのピカチュウの正体に気づいているだろう。自分にも、レッドにも、関わりの深い人物だった。

「まあ、いろいろあります」

コウタとピカチュウのこと、まとめてそう説明した。

「あなたが、全てを背負う必要はないのですよ」

腰を上げながら言われたその言葉は、グリーンの言葉を否定した続きだった。

「ラッタと貴方の絆は、あなたを立派なトレーナーに成長させた。ラッタの魂も、それを喜んでいるでしょう」

それは、グリーンに肯定的な意見だったし、間違っている意見にも聞こえなかった。同じくそれを聞いていたコウタも、それに頷いて肯定した。それがあまりにも美しい意見だったからだ。

だが、グリーンはそれに笑う。

「そうだと、良いんですがね」

それが愛想混じりの苦笑いであることは、コウタにだってわかった。だが、その理由まではわからない。

残った花束を供え、静かに目をつむったグリーンの脳裏に浮かぶのは、よく見知った幼馴染の顔。

フジ老人の言っていることは、間違っていないのかもしれない。三番目の相棒の死をキツカケに、一回り成長した。その経験があったからこそ、殿堂入りトレーナーとしての自分があり、今の自分もある。そう考えることも出来なくはないし、それが自然で美しい。

だが、その経験なく頂点へと駆け上がった幼馴染の存在は、その美

しい意見を受け入れるには、あまりにも大きかった。

無駄死にはないか。

それを考える度に、グリーンはそう思ってしまう。そして、それを考える度に、ラツタの死が重くのしかかる。

きつと知らないだろう。

レッドは、この感情を知ってはいない。

だが、それでも、あいつは駆け抜けた。

☆

「墓、小さかったろ？」

シオンタウンから西に少し歩いた八番道路。ピカチュウを肩に乗せ、今はまだ人気のないそこをコウタと並んで歩いていたグリーンは、照れを隠すように笑いながらそう言った。

「えっ」と、コウタはそれに驚いて目をパチクリさせる。

正直なことを言ってしまったえば、その墓石は小さかった。周りと比べて、あまりにも。

その後には並べる言葉に悩んでいるコウタに少し笑って、グリーンはそれを肯定と捉えて続ける。

「有り金全部突っ込んだとはいえ、所詮は子供の小遣いの範疇だからな。あまり豪勢なものには出来なかった。今ならもつと良いものに出るかもしれないが、どうもその気にはならなくてな」

その説明にコウタは納得した。最も、後半のグリーンの気持ちまで理解できていたわけではない。グリーンも、あえてそうボカしている。

推測ではなく、今のグリーンの経済状況ならば、ラツタの墓をもつ

と敵かで豪勢なものにすることは可能だろう。それを許されるだけの社会的な格も、グリーンは持ち得ている。それに、それこそが、ラッタの霊に対する最大の敬意だと感じる人間だっているだろう。グリーンだって、それを思わないわけではない。

だが、それをして、ラッタの死が『過去のもの』になってしまったことを、彼は恐れていた。みそぎを済ませたと一瞬ですら思ってしまうえばもう、そこにラッタへの敬意はない。

ある意味、罪悪感に心痛めるこの状況こそが、一番いいのではないかとすら思う。

そこまで考えて、どうしてそのようなことを言ってしまったのだろうか、遅く後悔する。そもそもあの時、コウタがついてくることを拒否していれば、こんな事を考えずに済んだかもしれないのに。

はあ、と、気持ちを切り替えるためのため息を吐いてから、グリーンは一度だけ天を見上げて、今度はふう、と息を吐く。

そして、話題を切り替えた。

「ここをずっと進むと、ヤマブキシテイに行けるんだ」

コウタはカントー地方の土地勘はないが、それでも、それは理解していた。この後ヤマブキシテイに行くと言っていたのはグリーンだし、その彼がこの道を行くのだから、それはそうなのだろうと思っっている。

「今から行く鉄板焼き屋のステーキは絶品だぞ、でかい肉をな、目の前で切ってくれるんだよ」

それに元気よく返事をし、嬉しげな笑顔を見せるコウタに、グリーンも同じように笑顔を見せながら続ける。

「この道をもう少しいけば、段々とふっかけてくるトレーナーが増えてくる。この道路はトレーナー達のいい練習場なんだ」

「なるほど」と、コウタは脳天気と言った。確かにこの道路ならば、人通りも多くなり、自然も程よく残っている、自分が縄張りになっていた三十四番道路と同じような条件だ。それならば、トレーナーも多いだろう。

そして、グリーンがその次を続ける。

「お前には、そのトレーナー達と戦ってもらおう」

ええつ、と、思わずコウタは叫んでしまった。突然の宣告だった。「まあ、心配するな。もう無理だなど思ったら俺が止めるし、相手がたちの悪い奴でも俺がなんとかしてやる。せつかく高い肉食うんだ、腹をすかせていこうじゃねえか」

「そんなあ」と、コウタは珍しくその外見らしく可愛らしい悲鳴を上げた。その突然の宣告は、トキワに来て以来緊張しっぱなしであった少年の素を引き出すほどの衝撃だった。

「いろんなレベルの相手と戦うことが重要なんだ。まずは平凡な相手に有利に立てるような基本のセオリーを体に染み付かせ、その後にはセオリー破りを考えるんだ」

コウタは自信なさげに、そして少しふてくされたように「はい」と返事をした。グリーンは彼のそのような様子に安心する。ジムトレーナーになって以来彼にあった硬さが少し取れてきているような気がする。

「それじゃあ、行ってみようか」と、グリーンがコウタの肩を叩いたその時だった。

シオンタウンの方向から、大きな爆発音がした。

それに一番早く反応したのは、グリーンは肩に乗るピカチュウだった。彼はすぐさまにグリーンは彼の肩から飛び降りると、小さく何度も鳴いて、それが普通のことではないことをグリーンに伝える。

グリーンとコウタも、その音と遅れてきた地鳴りに驚き、一様にシオンタウンの方向を見た。それがシオンタウンの日常ではないことを、彼らはピカチュウがいなくても理解しただろう。

「行くぞ」

それだけ言って、グリーンはシオンタウンに向かって駆け出した。「待ってください」と、コウタもそれに続く。

ピカチュウは、その瞬発力でグリーンを追い抜くと、彼らを先導するようにかけていった。

シオンタウンの外れ。そこからでも、シオンタウンのざわつきが理解でき、そして、これまで見たこともないような、触れれば掴めるのではないかと錯覚してしまいそうなほどに密集し、どす黒く空に巻き上がる黒煙が、確認できる。

だが、彼らが足を止めたのは、その光景が理由ではなかった。

グリーンもコウタも、その男の出現に立ち止まり、コウタはそれに怯え、グリーンはそれを睨みつけている。

先導していたピカチュウは、頬の電気袋から電撃をほとぼしらせながら、その男に敵意を向けていた。そして、その男は、その敵意にひるんではいなかった。

見上げるような巨大な体格、乞食ですら手放しそうなボロボロの服と外套に身を包み、癖のある髪とヒゲは乱雑に伸び、顔の半分を覆っている。

ひと目見ただけで、異様な雰囲気を持った男だった。

そしてその男は、グリーン達のように爆発のあったシオンタウンの中心に足を急ぐわけでもなく、爆発に生命の危機を感じて命からがらにシオンタウンの中心から駆けて逃げようとしているわけでもなく。雄大に、シオンタウンの混乱を背中に受けて満足気に歩いている、とてもではないが普通ではない。

「ピカチュウー！」

グリーンが叫ぶと、ピカチュウはそれに短く鳴き声で返事をし、すぐさまに軽快なステップで、グリーン的一步後ろでその男に怯えるコウタの前に立つ。

「そいつを守れ！」

その言葉に、ピカチュウから一拍遅れて「はい！」とコウタが返事をするが、当然グリーンとコウタの間には認識の違いがあっただろう。

「やあ、やあ、やあ」と、その男は大きく口を開けて言った。不揃いの両の瞳は、その男が何を見ているのかを分からなくさせていたが、嬉

しげに細められている瞼が、かろうじてその男の機嫌の良さを表している。

「神の啓示を受けているわけではないだろうが、それでもここまでの行動を取れるということは、精神世界の中で強く足を踏みしめ、それでいて、傲慢な自意識に陥ってはいないということだろう」

グリーンは、それに何も返さない。だが、いつでもボールからポケモンを繰り出すことが出来るように準備をしながら、その男をにらみつける。

男は続ける。

「神というものは、時に残酷であり、時に祝福も与えるが、それは仕方のないこと、神の絶対的な意志の前に、私達は、あまりにも力を持たぬ泥人形なのだ。君が神に仇なすモノでなければ、新たな神話を紡ぎ出すここではない新しき概念の中に生誕し、神話の中に生きるべき存在というのは、君たちのような若き少年達であることが、恐れ多くも私が神に乞う願いの一つであったというのに。ああ、悲しい、なんと悲しきことなのだろう」

「あんた、なにもんなんだ」と、グリーンが一時もその男から目を離さずに問う。だが、それについて明確で納得のできる答えが帰ってくるとは思っていなかった。その男の言うことが、今の段階でも何一つ理解できないというのに。

そうしている間にも、シオンタウンの喧噪は広がりを見せ、黒煙はその質量を増し、何かが崩壊する音が聞こえ、緊急時に出動する車両がその存在を主張するサイレンの音が鳴り響いている。

男は、両手を広げ、グリーンとコウタの疑問を受け止めるようにながらそれに答えた。

「我が名は『教皇』クワノ一世。恐れ多くも、穢れを知らぬ神の子が、

穢れ多きこの世界を探るがための指先」

やはり、言っていることの意味が何一つわからない。
「何をした。これは、お前の仕業だろ？」

「やあ、やあ、やあ」クワノが笑う。

「聡明なる少年よ、あるいは君ならば理解が出来るかもしれない。私が導く子羊達は、それを理解するにはあまりにも聞き分けが良すぎるのだ」

クワノは、大きく息を吸い込んでから続ける。

「ポケモンの亡骸を川に流せば、やがてそれは肉と皮を身に付け、再び戻ってくる。シンオウ地方の、愚かな神のまがい物を信じた愚人の言葉だが、これ自体は、間違った考え方ではない。元来、ポケモンの魂は神のみの理解の範疇の中にあるものなのだ」

故に、と、更に続ける。

「ポケモンの魂を、人間がその手に収めようとすることは、神の持ち物を奪わんとする、反逆にほかならない。たとえ神が大いなる慈悲の心でそれを許そうとも『教皇』である私は、それを許すことが出来ぬ。否、私が『教皇』であり、暗闇を探る神の子の指先である限り、それを許さぬことこそが、私の使命なのだ」

当然、クワノの言うことの意味は一つもわかりはしない。

だが、グリーンは、クワノの演説から、一つの可能性を感じ、そして、あわよくばそれがただの可能性で、ただの思い過ごしであることを願いながら、問う。

『『たましいのいえ』なのか』

クワノは、グリーンを気に入ったように笑顔を浮かべて答える。

「やあ、やあ、やあ。勘のいい少年だ。否、聡明な頭脳によるひらめきを勘と片付けるのは、あまりにも敬意に欠ける」

そして続ける。

「さよう、私は『たましいのいえ』に鉄槌を下した」

その言葉をすべて聞き終わるよりも先に、グリーンはボールを地面に叩きつけるように素早く投げ、エスパークタイプの最上格、フリーデンを繰り出した。

『サイコキネシス』！」

同じく、フリーデンが繰り出されると同時に放たれた指示を、彼は忠実に守って実行した。

得も言えぬ感情が、グリーンを支配していた。人間に向かって技を放つ指示など、これまでの記憶の中に無い。

フリーデンならば、それが間違いにならないように、ある程度手加減をしながら、それでいて相手を上手く拘束するような攻撃位を放つことが出来るだろう。だが、そのような保険的考えは、その時のグリーンにはなかった。

だが、間違いは起きなかった。それは、フリーデンが手心を加えたからではない。

グリーンが動いたその瞬間、クワノも同じく身を翻し、外套の中からボールを放り、繰り出されたポケモンが、フリーデンの前に立ってその技を受けたのだ。

その動きの的確さに、グリーンとコウタは思わず目を見張った。

彼らは、クワノが優れたトレーナーであった過去を知らない。頭のおかしな破壊者が、トレーナーとして素晴らしい動きを見せたことが信じられない。

そして、繰り出されたポケモンの異質さも、彼らの思考を一瞬止めた。

無機質なポケモンだった。

太く大きな胴に、短い手足がついているだけのようなポケモンだった。その半透明に透き通った様子と、そのポケモンの周りに纏わり初めた冷気が、そのボディが氷でできていることを予感させる。

顔に当たるかもしれない部分に埋め込まれたいくつもの点のようなもの、音楽を鳴らしているときのオーディオ画面のようになら

なく点滅していた。

「レジアイス」と、グリーンは呟いて、クワノとレジアイスの動きに集中する。

その言葉を、コウタは知らなかった。それが、今自分の目の前に現れたポケモンのようなその名であることかもしれないことはわかるが、彼はその名を知らない。

彼を守るために電撃の準備をし続けているピカチュウも、そのポケモンの正体を知らなかった。だが、あのフーデインの『サイコキネシス』をまともに食らって、少しもたじろぐ様子がないことから、かなりの脅威であることだけを理解する。

「ほう、このポケモンの正体を知るか」

クワノは感心したように頷いて続ける。

「聡明で知識も持ち得る。更に勇気と、実力を持ち合わせるとなれば、我々に歯向かうその心意気も理解できる。神の子が作る新たな世界に連れて行けぬことは世界の損失だが、尤も、君の恐れを知らぬ聡明さは、この下らぬ世界に、ほんの少しだけ彩られた美しい花のようなもの、おいそれと我々に同調するような短絡な生命であるならば、私はそれを美しいとは思わないだろう」

「フジさんはどうした」

「悲観的な主義は、焦りを生み、時として君のような優秀な人間を愚人に変貌させるようだ。何も心配することはない、我々は誰も殺さない。それが、神と神の子の意志である限り」

グリーンに親しみ気な笑顔を投げかけたクワノのスキを突き、グリーンは新たにボールを投げ、カイリキーに交代する。

彼は、おおよそこの世に出回っているレジアイスについての情報は理解していた。こおりタイプで、特殊防御力に強みがある。フーデインを確認してからこのポケモンを繰り出したクワノの判断は、何も間違っていない。

だが、こおりタイプという条件上、格闘タイプには弱みがある。だからこそのカイリキーだった。

『クロスチョップ』！』

カイリキーの使える格闘タイプの技でも一、二を争う大技だった。しかし、それより先にレジアイスが動く。クワノは、グリーンがポケモンを交換し、レジアスを攻撃してくることを読み切っていた。レジアスの動きを察知したピカチュウが、自身の意志でグリーンの前に飛び出した。

『『だいはくはつ』』

カイリキーの手刀が届く寸前に、その指示は敢行された。

巨大なエネルギーが、レジアスを中心に爆散される。

グリーンとコウタの体は浮き上がり、小さく宙を舞って地面に叩きつけられた。

瞬間、彼らは息苦しさを覚えた。内に入り込んだ衝撃が、肺が膨らむのを阻害している。

ゆつくりと、呼吸を取り戻そうとしていたグリーンは、それでも、自分たちへの被害が最小限で終わったことに気づいている。

レジアスの『だいはくはつ』が巻き起こるその寸前に、自分たちの前に飛び出したピカチュウが『リフレクター』でその威力を考えられる最小限にまで抑えたのだ。

巻き上がる砂煙の向こう側からの攻撃に備え、ピカチュウは電撃をほとばしらせながら、その先をにらみつける。

呼吸を取り戻したグリーンが、膝を突きながら体を起き上がらせ、そのサポートに回る。

だが、砂煙の向こう側から聞こえてきたのは。

「やあ、やあ、やあ」

『教皇』クワノ一世の笑い声であった。

「追うのだ。我らを導く、ことわりの会話を」

クワノは、姿を消した。

晴れつつある砂煙の向こう側には誰もおらず。ポケモンもいない。

「コウター！」

それを確認してから。グリーンは倒れて苦しそうに呼吸を続ける
コウタに駆け寄り、上体を起こした。

「大丈夫か」

コウタは一つ二つ咳き込んでから答える。

「大丈夫です。少しびっくりしただけです」

もう二、三咳き込む。

「今のは」

「わからない」

「ありがとうございました」

コウタも、ピカチュウが『だいはくはつ』の威力を抑えたことに気づいていたようだ。

「俺じゃない、ピカチュウだ」

グリーンはピカチュウを手で呼ぶと「よくやった」と褒めながら頭をなでた。

「ありがとう」

コウタも素直にピカチュウに礼を言って頬を撫でる。

素直にそれを受け入れるピカチュウの表情は、どことなく誇らしげだった。

あいつが頼るわけだ、と、グリーンは素直にそう思った。

質量を持っているかのような黒煙は、『たましいのいえ』から天に登っていた。

消防隊や水ポケモン達が、『たましいのいえ』を喰らい尽くそうとする炎を消そうとする度に、それはより力を増して、ごうごうと鳴き声を上げているかのようなだった。

「フジさんー」

メディアセンター以外娯楽無き街で、久々に起きた事件に沸き立ち群れる野次馬をかき分け、グリーンは『たましいのいえ』の前でその消火活動を見つめるフジ老人を見つけた。

野次馬の足元をかき分け、鳴き声とともにピカチュウもそれに続いた。野次馬の向こう側から「グリーンさん！ グリーンさあん！」と名を呼ぶコウタの声も聞こえていたが、それに手を差し伸べるには、野次馬の数が多すぎた。

フジ老人は、グリーンの声に気づいていなかった。ただただ呆然と、黒煙を吹き上げる『たましいのいえ』を眺めている。グリーンの声も、野次馬の興味津々な話し声と同じ元に聞こえていたのだろう。「フジさんー」と、今度はフジ老人の肩をたたいた。老人は、ようやくグリーンが存在に気づいたようだった。

「グリーンくん」

フジ老人は、そういつて言葉を詰まらせた。グリーンが現れたことを、まだ受け入れられてはいないようだった。

そして、しばらくグリーンの瞳を見つめた後に、フジ老人が口を開く。

「すまない」

それは、謝罪の言葉だった。見ればフジ老人は、表情も、体も、今にも崩れ落ちそうであった。

グリーンは、初めそれが何について謝っていることなのか分からなかった。だが、フジ老人の次の言葉でその理由がわかる。

「君とラッタの繋がりを、失ってしまった」

フジ老人は、『たましいのいえ』に祀ってあったポケモンたちの墓石や捧げ物の数多くが、この火災の中で失われてしまっただろうことを謝罪していた。

「そんな」と、グリーンは首を振る。

「あなたが無事で良かった。墓はまた作ればいい」

心が痛んだ、それは心の底からの本心ではない。

そして、それをフジ老人も見抜いている。

「元には戻らない。もう、元には戻らない」

たとえ新しい墓を、前よりも豪華な墓石を作り直したとしても、今までにあった思い出まで作り直せるわけではない。それを、フジ老人も知っている。

グリーンは話題を変える。

「一体、何があつたんです」

「わからない。巨大な男と数人が現れて、私を引きずり出した後に家に火を放った。ただそれだけだった」

要領を得ない説明だった。ほとんどの人間は、その説明で事件の全貌を掴むことは出来ないだろう。

だが、グリーンはそれを理解することが出来た。むしろ、それ以上無いほどにわかりやすい。

「俺も、そいつらに会いました」

「大丈夫だったのかい」

「ええ、こいつのおかげで」

グリーンは足元にピカチュウを指さした。

「彼らは何者なんだ」

「わかりません。ただ、神がどうかと喚いていました」

「神」

フジ老人は一つそう呟いてから、勢いを失いつつある『たましいのいえ』の黒煙を眺めた。

グリーンは、それに沈黙を合わせる。

やがて、フジ老人は思いつめたように口を開く。

「かつて、私は神に背いた」

グリーンは、突然飛び出したその言葉に驚いた。ポケモンタワーの墓守、『たましいのいえ』の慈愛ある管理人にはふさわしくない告白だった。

「最強のポケモンを、作ろうとした。そのために、多くの犠牲も費やした。だが、当時の私は、それは必要なものだと思っていた。最強のポケモンを作り出すための尊い犠牲だと本気で思っていた。魂の重みには、大きな差異が存在すると、私は思っていた」

かつてのフジ老人は、世界の求める理想に手を届かせることが出来る可能性を持つ優れた研究者だった。グリーンは、それを知らない。

だが、当時の彼を知るものならば、彼の言葉を、否定しないだろう。「最強のポケモンに、一つの霊が宿った時、私は、その考えが間違いであることによく気づいた。だが、それは、あまりにも遅すぎた。最強のポケモンの宿る魂を奪えたとしても、それまでに私が奪ってきた魂は戻りはしない」

フジ老人を下から見上げるピカチュウが、その言葉に少し反応を見せた。だが、それに聞き入っていたグリーンは、それに気づかない。「だから私は、シオンタウンに移った。たとえ過去の過ちは消えなくとも、ポケモンの魂を看取ることが、私の残された人生の使命だと思っていた、なのに」

フジ老人の頬を、涙が伝う。

「神は、私をお許しにならないのか」

「それは違うー！」と、グリーンはそれを強く否定する。

「あんな奴が、神を知っているはずがない！ 自分の行為を正当化するために神を語る奴なんてゴマンという。貴方の過去に何があったのか俺は知らないが、あんな奴らのことなんて真に受ける必要はありません！」

過去は知らない。だが、フジ老人のやったことは、崇高なことであつたと彼は思っている。

ただ、その崇高さが、圧倒的な狂信と暴力の前に、無力だったただけなのだ。

暫くの間、二人は沈黙した。

段々と、グリーンは怒りがこみ上げてきた。それはようやくと云っていいかもしれない。これまで起こってきたことに、グリーンの体が、ようやくついてきた。

その理不尽な暴力に、ようやく怒りが湧いてきた。もし、後ほんの少しでもいいから、『たましいのいえ』に居座っていれば、こんなことにはならなかった。

俺がいれば、そんなことにはならなかった。

鎮火されつつある『たましいのいえ』を眺めながら、グリーンはようやく、ラツタと、それに手向けた花のことに考えが向かった。

俺のせいだ。

一瞬、彼の脳裏にそう浮かんだ。

草むらに生き、同種と子供を残し、草むらに死ぬ、そのような一生を歩めば、あり得なかったのだ。死してなお、このような卑劣な破壊衝動に巻き込まれるなんて、あり得なかったはずなのだ。

俺のせいだ、と、彼はもう一度思った。それが悲観的な考えであることは知っている、怒りを向かわせるべき対象は、クワノであることもわかっている。

だが、この悲しみを向かわせる対象は、自分であるような気がしてならない。

フジ老人が呟く。

「魂は、どこに向かえばいいのか」

グリーンも、それを知りたかった。

4―復活のR

1

それは、その研究所が朝を迎えて少ししてからのことだった。

アルフの遺跡に併設されたその研究所には、考古学の専門家、そして、タمامシ大学の学生を含む関係者達が、次々と足を踏み入れる。

彼らの目的は『アンノーン手稿』だった。

半年ほど前に突如無から生み出されるように出現したそれは、優秀な頭脳を持った考古学者や学生、もしくは、未知のものに対する興味が人より強いように出来ているいわゆるオカルト好きな人々を興奮させていた。

大きめの辞書のような見た目とそのとおりの重量を持ったその本は、そのページの殆どが、シンボルポケモン、アンノーンの姿で構成されていた。これまで、アンノーンと古代文明の文字との関係性がほとんど真相に近い噂として囁かれていたものの、それを証明する古代文字が使用された物は存在していなかった。

故に、その『アンノーン手稿』の発見は、考古学業界としては珍しく一般のニュース番組に取り上げられるほどの盛り上がりを見せた。そして、その一部が液晶を通して一般に公開されると、一部の人々は一斉にその解読に取り掛かった。無論、アルフの遺跡に併設された研究所に足を踏み入れる権利を持った人間は、それよりずっと前からそれに取り組んでいたことは言うまでもない。

人々がそれを急ぐのには理由があつた。誰も知らぬ情報を誰よりも早く知り、そして、その頭脳の明快さと閃きを評価されたいと言う欲はもちろんだが、誰もが『アンノーン手稿』の解読は時間の問題で、その競争に参加したいのならば、かなりの駆け足にならねばならないだろうと思っていた。

かつて、ハウエン地方に存在するいくつかの遺跡に存在した六つの点をベースにした古代文字は、研究者達によってその意味をなんとなく解読されるまでに至った。コンピューターネットワークを中心と

した情報化社会は、探求におけるいくらかの手間を省かせていた。

たとえばその意味がわからなくとも、それが文字である限り、何らかの規則性の中で利用されているに違いない。そのような逆算的な暗号解読方法は、この世に存在するいくつもの暗号と呼ばれるものを解読してきた。

故に、『アンノーン手稿』がその意味を解読されるのも遠くはないと思われていたし、特に考古学に詳しくもないのにしたり顔のコメントーターたちも、それらを理由に「いつか解読されますよ」と言っていたのだ。

互いの挨拶もそこそこに、パソコンや分厚い文献にかじりつき始めた研究者達は、嬉しさと苛立ちと悲しみを足して三で割ったような表情を見せていた。

『アンノーン手稿』が発見されてすでに数ヶ月が立つというのに、彼らは未だにその解読の手がかりも掴めないでいた。正しいかどうか分からないのではない、真意が定かではなくともまずはロケットスタートのように飛び出すある程度の予想、指針すらも、彼らには思いついていなかった。

優秀な頭脳がどれだけ考え、時にはお互いの考えを包み隠すことなく公開し合うこともした。それなのに、その文章になんの規則性も掴めない。あるようにも見えるし、無いようにも見える。

パソコンに取り込んだ『アンノーン手稿』のそれぞれのページを眺めながら、研究員の一人は頭を抱えた。もはやその殆どの画像は、脳裏に焼き付いている。強烈な興味は、時として信じられないような記憶力を呼び起こす。

それでも何も思い浮かばないということは、紙面上の問題ではなく、『アンノーン手稿』そのものに仕掛けがあるのではないかと、その研究者は一瞬考え、すぐさま首を振った。

そのような思いつきは、その殆どがすでに実行されていた。例えば日に透かしてみるとか、冷やしてみるとか温めてみるとか、奇抜の極致的なもので言えば、アンノーンとリンクして何らかの新たな文字が浮かび上がるのではないかと実行されてみたが、それもてんで駄目で

あつた。

その原本、オリジナルは金庫の中に嚴重に保管されている。なにか新しいことを言つてその実行のために取り出すことは出来るだろうが、その新しいものが思い浮かぶわけでもない。

インターネットで一般公開されたその一部を手がかりにしている身分問わずオカルトマニア達も、それらの解読の手がかりを掴めないでいた。彼らの母数は研究所に籠もっている研究者の数をはるか凌駕する、集合知が時により高度な知性を生み出す事をいまさら疑うものはいないだろうが、それでも、それは成せていない。

オカルトマニアの中では『アンノーン手稿』の信憑性そのものから疑う声も上がり始めていた。そもそも文字である限りそこに規則性が見られないのはおかしいとか、そもそも突然アルフの遺跡に現れたものが本当に古代文明のものである信憑性が薄く、質の悪いイタズラではないのかとか、いや、むしろ現代人のイタズラであるならばそれこそ文字列に規則性がないのはおかしいとか、規則性あるだろ、とか、ないだろ、とか、そんな感じであつた。

インターネット上で行われたその喧々諤々に参加をしたこともあるその研究員は、はあ、とため息を付きながらコーヒーカップに手をかけた。糸口は見えないが、意外とスポンサーは多い、もう少し時間をかけることは出来るだろうと思つていた。

その時だつた。

突然に研究所のドアが乱暴に開かれた、否、開かれたというよりかは、蝶番ごとふつとばされたと言つたほうが良いかもしれない。

研究者達がそれに驚くよりも先に、今度は窓ガラスの殆どが同時に割り砕かれ、そこから何匹ものゴルバットが研究所内に侵入して、人間たちを威嚇する。

その研究者も低空飛行のゴルバットに襲われ、思わずコーヒーカップを指から滑り落とした。

床に落下して割れたそれは、その研究員のベージュのスラックスを黒く濡らした。

だが、その熱さに研究員が悶える声は、他の研究者たちの悲鳴と、ぞ

ろぞろと研究所の中に侵入してきた黒尽くめの男たちの怒鳴り声にかき消された。

「騒ぐなー」と、黒尽くめの男の一人が言った。

無茶言うなよ、と、その研究員は怯えながら思う。本当に騒がれたくないのならば、静かに扉を開き、不快感を感じない程度の音量で挨拶をし、できれば片手で食べることでできるお土産などを持参して、それでいて手短かに要件を言えればいい。そうすれば、自分たちはとりあえず騒ぎはしないのだ。

だが、研究員にそれを言う義務も権利もあるはずがなく、ただただじっと、その黒尽くめの男たちに怯える一人となる。

その研究員の願いが通じたのかどうかはわからないが、かつて扉と呼ばれていた壁に空いた穴から、今度は統一感のない、否、もし乾いた泥にまみれていることを統一感と呼ぶのならばある意味統一感のある集団が、今度は静かに入ってくる。

その集団は黒尽くめの男たちと目配せをした後に、扉から入ってくる誰かを迎えるように並び、ひざまずいて手を組んだ。

黒尽くめの男たちは、それに冷たい目線を投げかけていた。そのような感情に疎い研究員達も、彼らの間になにか大きな認識の違いがあることがわかる。

研究員達がその理由を考えようとしたとき、彼らの知らぬ、経験したことのない声が聞こえる。

「やあ、やあ、やあ」

それと同時に、かつて扉だったその空間から、ぬるりとその大男が侵入してきた。

それを待ち構えていたであろう集団と同じく、その大男の服や外套も、泥とホコリにまみれている、縮れ毛の長髪と黒々と顔を覆うヒゲも同じだろう。

研究員にしては珍しく社会情勢に興味のある何人かの者は、その大男の正体を理解していた。

『教皇』クワノ一世。

シンオウ地方の価値ある遺跡や建造物を襲撃し、つい先日にはカン
トー地方シオンタウンの慰霊施設『たましいのいえ』を襲撃した集団
の主犯格、その行動に政治的な意図があるかがわからないため
にメディアではまだそう言われていなかったが、その行為を知る殆ど
のものは、テロリズムを想像するだろう。

研究員達は身構え、中には、すでに悲観的な考えに至っている者も
いる。

クワノは言った。

「ゴルバットを鎮めてはくれないか」

黒尽くめの男たちは、渋々といった風にそれに従った。トレーナー
の忠実なる相棒であったゴルバット達は研究員達を威嚇するのをや
め、とまれる所にとまって体を休める。

研究者たちの心境を知ってか知らずか、クワノが続ける。

「心配することはない、かつて最終兵器の引き金を引いた愚かな王と
私は違う。神と神の子がそれを望まぬ限り、私は誰も殺めぬ」

その言葉に安心したものは、果たしてどれだけいるだろう。もしそ
の言葉で身の安全を確信するような人間がいたならば、彼は世界でも
そうそうお目にかかることの出来ない大馬鹿者だろう。

「この長は誰かね？」

クワノの問に、一人の男が恐る恐る、それでいてしっかりと立ち上
がり「私です」と、はるか上に存在するクワノの目を見据えながら答
えた。

研究員達もそれに異を唱えなかった。少し白髪の混じった髪を持
つ彼は、間違いなくその研究所の責任者であった。

「なるほど、精悍な顔つきだ。さぞ素晴らしい功績と、知識を蓄えてい
るのだろう。それがこの汚れた世界で使われたことを虚しく感じる
がね」

クワノは、大きな体を揺らしながら責任者に歩み寄った。安価な床
材を重量感のあるブーツが叩く音が、静寂の研究所内に響く。

責任者を見下ろしながら、クワノが言う。

「私の要求を、聞いてもらおうか」

低く、重力に乗せて叩きつけるような重みのある声だ。

しかし、責任者はそれに怯まず「なんでしようか」と、クワノを見上げながら答えた。その長い人生の中で、ポケモンや肉体を使った闘争に身を投じたわけではなかったが、その長い研究業の中で積み重ねた尊敬は、彼に人間としての格を与えている。

「やあ、やあ、やあ」と、クワノは嬉しげに言った。責任者から感じる威厳を、余裕を持って受け止め、それに感嘆を上げる余裕が彼にはあった。

「君と出会えたことを、私は心より嬉しく思う。この穢れた世界の中にも、健気に咲く美しい花の存在を見つけるのが、私は嫌いではない」そして一瞬沈黙し息を吸い込んだ後に、言う。

『アンノーン手稿』を、こちらに渡してもらおうか」

やはりか、と、責任者を含む研究員達全員が思った。むしろ、この簡素な研究所に、それ以外に価値のあるものなんて存在しない。

渡してしまえ、と、過半数の研究員は思っていた。全てのページはすでにデータ化している上に、これ以上原本から情報は得られそうにない、それで黙ってこの恐怖の集団が立ち去るのなら、従うべきだ。

だが、数で負ける残りの研究員達は、絶対に渡すなと思っている。脅しの前に、知的好奇心が敗北することを、彼らは良しとはしない。

責任者も、概ねそのような考え方だった。乾いた泥でまみれた服を着ている連中にそれを渡して、果たして『アンノーン手稿』がその形をいつまで維持することができようか、確実な本物と確定したわけではないが、確実な偽物と確定したわけでもない。それをこの世から失わせるのは、あまりにも惜しい。

だが、責任者は一瞬歯を食いしばり「わかりました」と一言答えた。過半集の研究者は安堵を、そして、残りの研究者達は僅かな怒りを覚える。

しかし、それは賢明な判断だっただろう。今ここに集まっている研

究員達のための安全は『アンノーン手稿』一冊よりも重いと、責任者は判断したのだ。

責任者は少し恐れながらクワノに背を向け、研究所奥の金庫に向かった。

ダイヤルを合わせ、現れた鍵穴に彼だけが持つキーを差し込み、回す。

責任者がそれを開くと、両手で『アンノーン手稿』を取り出した。黒尽くめの男たちと、クワノたちの集団は、それに釘付けとなる。

大きめな辞書ほどあるその本は、古めかしくも、新しくも見える不思議なデザインだった。

それを手にしたままクワノの前に戻った責任者は、やはりしっかりと彼の目を見据えながら言う。

「二つだけ、質問させていただきたい」

研究所の中がざわめいた、それは研究員たちの戸惑いもそうだし、侵略者たちのざわめきも同じだった。

クワノの信者であろう泥まみれの一人が、半歩身を乗り出してそれを咎めようとした。彼から見れば、研究員達は汚れた世界の住人、それが『教皇』であるクワノ一世に何かを問うことが、彼には許せなかった。

「よいのだ」

だが、クワノはそれを制した。

「構わぬ、問いたいことがあるのならば何でも問うがいい。最も、私の答えをキミが理解できるかどうかは、新たな世界とこの穢れた世界の親和性によつて左右される他ない。だが、それは私がそれを受け取つてからだ」

両手を差し出したクワノに、責任者は同じく両手を差し出して『アンノーン手稿』をクワノの巨大な手の中に収めた。

そして、彼は一つ息を吸ってから問う。

「クワノ教授、一体、何があったのです？　こんな悪党まがいのことをせずとも、貴方が相手なら私はそれを手渡しました」

片手に収めた『アンノーン手稿』を胸に当てながら、クワノは目を

見開いてそれに答える。

「ほう、以前の私を知るかね？」

「私のもとで歴史学を学ぶ生徒たちは、まずは貴方のシンオウ神話学についての書籍を読むことから研究者としての一步を歩むのです」

責任者は、クワノ一世がかつてシンオウの神話学者であったことを知っていた、というより、その世界で長く生きていけば、いずれ必ずクワノの神話学に触れることになる。

責任者のその言葉で、かなりの数の研究員が驚くこととなった。彼らも、シンオウ考古学の権威の一人であったクワノ教授の存在は知っている、だが、それと目の前のクワノ一世とは、あまりにも風貌が、そして、彼らの思うあまりにも理的ではない態度が、自然とそれらを乖離させていたのだ。

そして、クワノはため息を付いた。

「以前の私なら、それを嬉しく思っただろう。だが、もはや私はその言葉に憐れみと、怒りと、憂いしか感じることはない。今の私にできることは、それらは全て嘘偽りであったと、君たちに伝える他ない」

クワノの返答に責任者は悲しみを覚えた。神話など、それが実際にあったかどうかなんてどうでもいい、そこに至るに至った当時の住民たちの生活様式、何が驚異で、何が仲間で、何が恐怖だったのか。それと文化とを結びつけることの壮大さが、その学問の最も興味深いことであると、かつてのクワノならば言ったであろう。

もはや、目の前の男に、かつてのクワノは存在していなかった。

責任者の視線は、クワノの胸に抱えられた『アンノーン手稿』に向かった。巨大な男であるクワノが抱えるそれは、かつて自分たちが持っていた印象よりも小さく見えた。

「あなたは、その本の価値を、理解しているのですか？」

不意に漏れ出した言葉だった。いい切った後に、責任者はつとじてそれを後悔する。

考古学への敬意が、一瞬、目の前の恐怖に勝ってしまったのだ。

過激なテロリストである『教皇』クワノ一世に対して、その姿勢を挑発するような発言だった。実際にクワノ一世の治世がどうかと言

う話ではない、たとえそれが正しくとも、狂人を怒らせれば、何が起きてもおかしくない。

事実、信者達はそれにざわめいた。あるものは立ち上がり、あるものは責任者に怒りを向けた。

黒尽くめの男は、同じく責任者相手に怒りの感情を持ったが、それはクワノが侮辱されたことが原因ではない。

めんどくさいことすんなよ、と、彼らは思っていた。

素直にそれを渡し、素直にクワノを刺激しなければ、それだけで終わる話なのだ。それだけでクワノ達は満足し、それでこの任務は終了。

そんな事も満足にできないようでは、自分たちが上に何と言われるかわからない。

黒尽くめの男達が信者を抑え込もうと一步踏み出そうとしたその時だった。

「価値とー！」

『教皇』クワノ一世が、その長身から地面に叩きつけるようにそう言った。

その声は研究所内に響き渡り、信者も、そして、黒尽くめの男達も、内臓に響くそれにうろたえ、動きを止めた。

そして、クワノが続ける。

「ならば問うが、君たちはこの本の価値を理解しているのかね？ 否、価値だけではない。そもそも君たちは、この本が何なのであるかという事を理解しているのかね？」

研究員達は口をつぐんだ、まるでそれは、若い学生が、ベテランの教員に怠惰を指摘され、押し黙るような光景だった。

その光景をぐるりと眺めてから、クワノが続ける。

「だが、それは仕方のないことなのだ。そもそもこの本は、君たちの理解の範疇にあるものではない。この本こそは、新たな世界を作る真の神話の中に存在するものそのものであり、私とて、この本の価値を全て理解しているわけではないのだ。この本の価値を全て理解しているのは、おそらく神そのもののみであろう」

当然、それは責任者を含む研究員たちには理解の出来ないことだった。だが、責任者は歯を食いしばることではしかそれに対する不満を表現することが出来ない。『アンノーン手稿』が何なのかを解明できていない以上、クワノの言葉を否定することが出来ないのだ。

「質問には答えた。では、これで失礼する」

クワノは責任者に背を向ける。

そして、信者達の間をすり抜けようとしたその時、思い出したように足を止め、言った。

「『だいはくはつ』」

その瞬間、轟音と、地面を揺らす地響きが、研究所を襲った。研究員達はかがめていた身を更に屈める。

そして、砂埃をまとった強い爆風が、割れた窓から研究所に逃げ込んでくる。それらは割れた窓を更に砕き、砂煙とともに舞う。

黒尽くめの男たちはそれに驚いた。それは、彼らには伝えられていない、彼らの知らぬ行動だった。

「野郎……」と、黒尽くめの男の一人がクワノを睨んだ。自分だけではない、自分のパートナーであるゴルバットが、それに巻き込まれたらどう責任を取るといふのか。

だが、クワノの信者達がクワノを守るようにそれに立ちふさがった。彼らもそれらで無事なわけではない、砂埃や砕けた細かいガラスが目や鼻に入ったものもいるかも知れないし、それによって血を流しているものも存在しているかもしれない。

ただ、信者達はその痛みや怒りをクワノにはぶつけない。彼らにとって『教皇』クワノ一世のなすことは全て正義であり、それで自らの身が危ぶまれることがあっても、それはクワノが制裁すべき間違った歴史が悪いのだと、心より思っている。

研究員達は、その爆発が『アンノーン手稿』の見つかった場所『アルフの遺跡』で起こったことを確信していた。クワノが神話や文化を敵視することを考えれば、それは当然のことだろう。

「やあ、やあ、やあ。ごきげんよう、愚かな賢者たちよ。神とその子が

作り出す新たな世界でまた出会うことがあったならば、そのときには、君たちは我々にとって有意義な存在であることを、心から願う」

クワノは、研究所を後にしながら続ける。

「追うのだ、我らを導く、ことわりの会話を」

「いってきます」

「おう、気いつけるよ」

平日の朝、トレーナーズスクールに向かうコウタを、グリーンが見送った。

トキワシティに構えたグリーンの住居にコウタが同居を初めてから、すでに結構な日にちが経過していた。最初はコウタの下宿先が見つかるまでのつなぎとして持て余し気味だった客間を提供していたのだが、中々いい物件が見つからないこともあってグズグズしている内に、もうここでいいんじゃないかという認識が二人の中で一致していったのだ。

二人共それに不満はなかった。特にコウタは、かつて不審者に洗脳されていた経験から、一人暮らしを怖がる傾向にあった。ただのジムトレーナーならば、何を怖がっているんだと言ってもいいだろうが、事情が事情だけにグリーンもそれに苦言は呈さない。客間を提供しているから最低限のプライバシーは守られているし、何より殿堂入りトレーナーと生活をともにすることは、コウタにとってはこれ以上ない経験であり、向上心の強いトレーナーの中には、自らそれを希望するものだっているだろう。

扉が閉まったのを確認してから、グリーンは「失礼」と、ポケギアに向かつて呟いた。

その通話先、シンオウリーグチャンピオンであるシロナは、特にその空白を気にすることなく会話を続ける。

『まさかクワノ先生がカントーに行くなんて、考えてもいなかったわ』『教皇』クワノ一世がカントー地方シオンタウンの『たましいのいえ』を襲撃した事件は、カントー地方よりもシンオウ地方の方で大きく報道されていた。その意見の中には、脅威であった『教皇』クワノ一世とその狂信者が活動の場を他地方に移した安堵や、シンオウ地方が生み出してしまった巨悪が他地方の人々に被害を出したことを恥じるようなものもある。だが、そのどちらも、『教皇』クワノ一世が相

当な脅威であることを否定はしていない。

グリーンの部屋にある薄型のテレビは、全国で放送されているニュース番組を映し出している。大小の差はあれ『いぶんかのたても』炎上という痛ましい事件は、朝のニュース番組の格好の的となっていたが、視聴者の興味を引くために不確定な情報ばかりを流す局もあり、シロナとグリーンは彼らが持ち得る知識から、最も信頼に当たるニュース番組を示し合わせてそれぞれ確認していた。

だが、それでもその事件や、クワノについての明快な情報があるわけではない。

クワノによる『たましいのいえ』襲撃に、グリーンが巻き込まれることを知ったシロナは、すぐさまグリーンに連絡をとった。クワノをよく知る人間として、カントーのトップトレーナーであるグリーンに、その知識を与えようとしたのだ。

グリーンは最初、ポケギアの向こう側にいるのがシロナだとは思わなかった。チャンピオンズリーグなどで出会う彼女は常に余裕のある女性であり、年下であるグリーンに対して姉のような立場から意見することもあったが、今日のシロナの口調や声量は、それまでグリーンが聞いたことがないほどに酷くくたびれた、不安と、悲しみと、焦りに取り憑かれているようなものだった。

「元々、腕のあるトレーナーだったんですか？」

『かなりのものよ、時代が時代ならチャンピオンだったかもしれない』なるほど、と、グリーンは頷いた。動揺していたとはいえ、自らの読みを上回り、そしてレジアイスにポケモンとしての速さを与えたその反射神経とテクニクにようやく納得がいった。

だが、グリーンにはもう一つ、否、本当のことを言えばクワノのことが全てが分からなかったが。その中でも、特にわからないことがあった。

「クワノの目的は、一体何なんです？」

シロナは、その質問に一瞬押し黙った。シンオウ地方の被害からそれを知るものとして、それには答えなければならぬ。

だが、彼女もそのすべてを知るわけではない。しかし、その傾向か

ら、目的を想像することはできる。だが、それは、クワノを知るシロナからすれば、とても信じられないことだった。

『クワノ一世は、おそらくこの世に存在する全ての信仰からなる文化を敵視している。かつて、世界すべての文化を受け入れていた彼からは信じられないことだけど』

「一体どうして」

『それはわからない。私だってそれを知りたい』

突き放すようだが、それにはシロナの苦悩が乗っていた。

瞬間的に出てしまったそれを反省したのか、シロナが続ける。

『だけど、想像はできる。おそらくクワノ先生は、神を信じ始めたのよ、それもすごく、とびきりに、狂ってると言っているほどに』

「それと、文化を敵視することに、なんの問題があるんです？」

『強烈に神を信じた人間にとって、それ以外の信仰は全てまやかしかつということになる。自らが信じる神の力を高く見積もれば見積もるほどに、その思いは強くなるんじゃないかしら』

その説明でも、まだグリーンはピンとこなかった。

『でも、わからない』と、シロナが続ける。

『そんな『ペテン』に引つかかるような人じゃなかった。あの人を信仰的なトリックや詭弁で言いくるめることなんて不可能に近いのに』

そこまで言って、シロナは口をつぐんで黙り込んだ。

同じくグリーンも静かになり、ある考えを頭に浮かべる。

そして、全く同じような考えを、シロナも脳裏に浮かべていた。

もしかして、クワノは本当に、『神』を見たのではないか。

何も本当に概念としての神ではなくてもいい。ポケモンを『神』として崇める地方が存在することも、そして、その信仰がとてつもない力を生むことがあることを、グリーンは知っている。人がそれを神だと信じれば、道端に転がっている石ころさえも、神になる可能性を秘めているだろう。

だが、グリーンは感覚から、そしてシロナはクワノを知る知識からそれを心の中で否定した。あれ程の力と知識を持ったトレーナーが、いまさらそのような根拠のない信仰に走るだろうか。

もしかすれば、その『神』は、本当に力を持っているのではないだろうか。

二人は首を振った、考えすぎて頭がおかしくなりそうさだ。

『ごめんなさい』と、シロナが言った。

『本当は私がカントーに向かつてクワノ先生を止めるべきなのはわかっている。だけど、まだクワノ一世の信者の一部がシンオウで活動しているから、私もここから離れる訳にはいかないの』

「わかってますよ、カントーだって、いいトレーナーはたくさんいますし、警察にも優れたトレーナーがいます。俺だって、次出会ったときにはその気でやります」

あの時、ピカチュウがいなければ負っていたであろう不覚、グリーンはそれを重く考えていた。

ピカチュウがいたのは、たまたまだ。それも、レッド失踪というアンタッチャブルな状況ゆえのもの。それに助けられるようでは、トレーナーとしてあまりにも甘い。

『無理はしないで、手段をいとわない危険な集団よ』

ええ、わかっていますよ。とグリーンが返そうとしたその時、テレビの向こう側、それまで『教皇』クワノ一世の目的についてふわふわとした上辺の議論を放送していたスタジオの、更にその裏方がざわめき始めた音が、伝わってきた。

グリーンとシロナは一旦会話を止める。

そして、画面が切り替わり、厳かな表情を浮かべた初老のアナウンサーの緊張した面持ちが映し出される。

『速報です、今朝方、アルフの遺跡参加所がポケモンの技『だいはくはつ』によって爆破されました。犯行は『教皇』クワノ一世を中心とした武装集団によるものとみられ、併設されたアルフ歴史研究所からは、先日発見された『アンノーン手稿』が、同集団によって持ち去られたと発表されています』

「持ち去る？」と、グリーンとシロナはほとんど同時にそう言った。その後から、ジョウト地方も毒牙にかけた『教皇』クワノ一世の狂気に

感情がざわつく。

しかし、その感情を共有するよりも先に、彼らはほぼ同時につぶやいたそれについて話し合う。

『おかしい、クワノ一世のやり方ではない』

「そうですね、アルフの遺跡を潰すのはわかるが、『アンノーン手稿』を持ち去るのはそれまでと違うパターンだ」

そして、更に議論を深めようとしたその時に、アナウンサーが続ける。

『また、カントー警察局はこの事件にポケモンファイアロケット団が関与しているとみて捜査を続ける方針です』

「ロケット団」

グリーンは跳ね上がるように背筋を伸ばしてそれに反応した。数年前に完全に壊滅したと考えられていたロケット団が、再び復活したというのか。

『ありえないことじゃないわ』と、シロナがグリーンの動揺を察して言う。

『シンオウでもギンガ団の残党を吸収して巨大化した経緯があるし、シンオウ地方とカントー地方の間にある中小地方のアウトローを信者に招き入れた報告もある。カントー地方でロケット団の残党を吸収したとしても不思議じゃない』

それに、と言って続ける。

『持ち去る、なんて手段を取るノウハウは今までの彼らにはなかった。ロケット団のコミュニティを使ってそれを闇に流して資金にすることを考えているのかも』

ありえない話ではないが、とグリーンはそれに相槌を打ったが、心の奥深く、感覚的な部分では、それを否定していた。

資金繰り、それと悪の組織は容易に結びつく、だが、それと『教皇』クワノ一世の狂気は結びつかない。

あれ程の狂気の世界に住む存在が、果たして敵視している信仰的文化財を軽々しく金に変えるだろうか。その行為は、その文化財を誰かに譲渡するわけで、この世にそれが存在する事実が変わらない。それ

を『教皇』がよしとするとは思えない。

その後も二人はそれについて話し合ったが、結論が出ることはなかった。それはそうだが、二人寄ったとしても、狂人の考えなどわかるはずもない。

しばらくしてから、グリーンはポケギアを切った。彼にはまだ時間があったが、シンオウチャンピオンのシロナは多忙なようだった。

その時、グリーンは足元をこそばゆい感覚が襲う。小さく声を上げてそれを見れば、サンダースとの毛づくろいを終えたピカチュウが、グリーンに足にすり寄っている。保護した当初のことを考えると、随分と打ち解けたようだ。

ピカチュウの気分を害さないように一旦それから逃れようとした時、グリーンははつとしてそれに気づいた。

それは、あり得る仮説だった。

幹部を失い有象無象と化していたロケット団、それが新たな指導者を迎え再び一つの共同体、概念として復活した時、ボスであるサカキをロケット団解散に追いやったレッドを恨み、その復讐を果たすことは十分に考えられる。

グリーンは、外出用のジャケットを探した。

ロケット団について何かの手がかりがあるわけではない。

だが、一つ行くべき場所があった。

☆

タママシシテイ、タママシニューゲームアンドアミューズメントセンター。

ピカチュウを肩に乗せてその施設に足を踏み入れたグリーンは、彼が想像していたよりもかなり人にあふれているその施設に驚いてい

た。平日、それも昼間だと言うのに。

かつて、カントー地方で唯一の公的なギャンブル場として栄えていたここは、その裏の顔として、ポケモンファイア、ロケット団の実質的なアジトとしての役割を持っていた。カントー地方で最も人の集まる都市の一つであるタمامシシティのど真ん中に、彼らは本拠地を構えていた。

もし、レッドという名の少年が、実質一人でそこを壊滅させることが出来なかつたら、ロケット団は未だにカントー、更にはジョウトをその裏から支配し続け、もしくはその支配域をさらに広げていたかもしれない。

地下へと続く階段を降りながら、グリーンは居心地の悪さを感じていた。それは肩に乗ったピカチュウも同じようで、しきりにキョロキョロと周りを見回しながら、落ち着かない様子だった。

ロケット団が解散し、悪名と共に抜け殻となったその施設は、数年前にある新興企業がその悪名ごと買い取った。どれだけ悪評が染み付いていようと、この一等地に存在する地下施設付きの物件の価値を、その企業は重視していたようだった。

そして、その判断は大成となる。

その企業は、その物件を、元のゲームコーナー、そして、地下にはアミューズメントセンターとして再開発した。

それも、かつてロケット団がそこをアジトにしていたという汚名を隠すことなく、むしろ、それを全面に押し出すような作りとなっていた。

来場客達は一階のゲームコーナーを楽しみ、もしくは素通りし、あえて狭く作られた階段を伝って地下へと歩む。あえて曲がりくねって作られた地下の間取りは、ロケット団のアジトだったものをそのまま利用しているという噂も広がり、わかりやすいテナントよりも、より入り組んで初見ではとても見つけられないような場所に構えた店のほうがより人気となった。

ロケット団がそこをアジトにしていたと言う悪評を、その施設はブランドへと変貌させた。今ではロケット団の存在を知りもしなかつ

た。否、ロケット団の存在を知らなかった他地方の人間の方が、その施設を訪れることを望んでいた。

身を振るようにグリーンの横を通ったカップルも、その施設の雰囲気には酔いしれているようだった。

地下一階に足を踏み入れながら、グリーンはため息を吐いた。

経済的、もしくはは経営的な理論はグリーンにはさっぱりわからない。だが、グリーンはこの施設に良い感情を抱いていない。

ロケット団だぞ、と、グリーンは思う。

おおよそポケモンを使った悪事の殆どを網羅し、シルフカンパニーをほとんど乗っ取りかけ、あまつさえそのボスは当時世界的に見ても難関ジムであったサカキ、限りのない正義側の人間でなければならなかった男だった。それほどの存在、それ程の悪、一つ運命の歯車が違えば、その理不尽な支配の影響を受けていたかもしれない存在であったのに。それを、こんな風に楽しむ事を、グリーンは理解が出来ない。

それは彼の肩に乗るピカチュウも同じであったようだ。彼は一度レッドと共に死線を切り抜けたはずのそこが、賑やかに人で賑わっていることに戸惑い、それを警戒すべきなのかどうか迷っている。

「今は落ち着いていいぞ」と、グリーンはピカチュウの首の下を指でくすぐりながら言った。それに反応して、ピカチュウは体の力を少し抜いたようだった。

少し、贅肉が増えたかもしれないな、と、グリーンは指先の感触からそれを感じた。太っている、とか、ぽっちゃりしている、とか、そういうわけではないが、あの時、あの時対面したときの印象から少し増えている。

「運動はさせてるんだけどな」と、グリーンは考えを浮かび上がらせるように呟く。

ピカチュウがレッドのもとに帰った後に支障が出ないように、彼はレッドの手持ちであるピカチュウにも自らの手持ちと同じようにトレーニングを積ませていた。そしてカントーポケモンチャンピオンに、ポケモンの管理すらろくにできないやつだと思われたくはなかったし、何より、親友の相棒に鈍ってほしくはなかった。だからトレー

ニングもしつかりこなさせ、食事の管理もしていた。

だが、それなのに、少し多めに肉がついているということは。

これまで気が付かなかったが、もしかしたらこのピカチュウは通常の個体と比べると太りやすい体質なのかもしれない。

一体、どれほどの事をして、このピカチュウはこれより少しシエイプされた体型を維持していたのだろうか。

ああ、まただ。とグリーンは少し苦々しく思う。

自分の中にある固定観念、常識、理論、理屈、計算。一度はトッピを掴んだ、それらの知識。

それをまた、このピカチュウとレッドが乗り越えていく。自分が培った常識の範疇の外の世界を、彼らは知っている。

ふと、グリーンは周りを見回した。あえてそうしているのか、少し薄暗い地下一階ショッピングモールの複雑な間取り、これが果たして本当にロケット団のアジトそのままなのかどうか、グリーンにはわからない。

だが、このピカチュウとレッドなら、それを知っているだろうし、それを嬉しげに耳打ちしてくるかもしれない。なんと書いても彼は、ロケット団を解散に追いやった英雄なのだから。

その英雄が失踪したこの世界で、一体誰が、ロケット団を、カントー地方で活動する悪と戦えば良いのだろうか。

自分、という答えを、グリーンはまだ出せないでいた。

☆

「考えることはみんな一緒ってことですかね」

一階、タマムシゲームコーナー。

地下の淀んだような空気を嫌ったグリーンがそこで出会ったのは、

一人の男だった。

現ポケモンチャンピオンにして、ポケモンGメンとしてカントー警察局と連携を取ることで数少ないトレーナーでもあるドラゴンつかい、ワタルは、やや慥然とした表情で緊張感を放っていた。一応TPOに合わせたのだろう、ポロシヤツを着こなす軽装だったが、心までここに合わせることは出来ていないようだった。

「あまり、好きな雰囲気ではないな」

ワタルは、その緊張を言葉にして表現する。尤も、ワタルというトレーナーが空気を読めないわけではない。むしろ、堅物揃いの新旧四天王に置いて、そのようなノリを楽しむことができる数少ない人材であったが、やはりそれでも、かつてロケット団のアジトであったこの場所を快く思っていないようだった。

「同感です」と、グリーンもそれに同調する。

グリーンの肩に乗っていたピカチュウが、ワタルに向けて挨拶のように鳴き声を上げた。

「お前も久しぶりだな」と、ワタルはピカチュウの耳の付け根を撫でたが、それに楽しげな声を上げるピカチュウとは対象的に、彼とグリーンを交互に見やって悲しげな表情を見せた。

ポケモンGメンであるワタルは、グリーンがレッドの失踪願いを出したことを知っていた。そして、彼もできる限りレッドの足取りを追うために力を尽くしてもいた。だが、それでもレッドの足取りを追うことは出来ない。

「すまないな」

ワタルは、小さな声でグリーンに謝罪した。

「手段は尽くしているんだが、まだ何も」

「大丈夫ですよ。ワタルさんが何も掴めないのなら、おそらく世界の誰も、それを掴めないでしょうから」

ワタルはそれに複雑そうな表情を見せたが、グリーンからはそう言う他ない。

そして彼らは、できるだけ人気のない場所を探した。

おそらくこれから交わす会話、そして、交換する情報は、公共の場

所では憚れるようなものだろうと、彼らは確信していた。

ゲームコーナーから五分ほど歩いた場所にある小さな、それでいて立地が悪いのか誰もいない公園のベンチに二人は腰掛けていた。

「どこまで調べた？」

ワタルが直線的にそう問うた。それは、グリーンへの信頼の証でもあった。

故に、グリーンも直線的に答える。

「サンダースとフリーデインを連れてあの施設を散策しましたが、特におかしいと感じるところはありませんでした。あの施設と今回のロケット団は無関係だと思います」

「そりゃまあ、そうだろうな」と、ワタルは少し汚れを気にしながら背もたれに体重を預ける。

グリーンは、かつてロケット団のアジトであったそこに、再びロケット団が潜伏しているのではないかという疑惑のもとに、そこを訪れていた。

無論、そんな馬鹿なことはないと誰もが考えるだろうし、真っ先にそこに向かったグリーンをあざ笑いたくなるような気持ちも覚えるかもしれない。

だが、その馬鹿なことが起こりうるのが『ロケット団』と言う組織なのだ。タمامシシテイのど真ん中にアジトを構え、大企業シルフカンパニーをヤマブキシテイごと襲撃し、その首魁がトキワジムリーダーであった組織がロケット団と言う組織。

ワタルも、グリーンへの行動そのものを愚かだとは思わない。

「だが、そこをいの一歩に疑いたくなる気持はよく分かる。俺だってそれが目的だった。尤も、カントー警察局は近々あの施設を捜索するらしいが、この様子だと、収穫はなさそうだな」

それは、警察関係者ではないグリーンに対して漏らしている情報ではなかった。

だが、ワタルはグリーンを信頼している。否、それよりも、ロケット団という組織がかつてカバーしていた人脈の広さを考えると、警察関係者の中にだって、確実に信頼できると言っている存在は少ない。実力があり、なおかつロケット団とのつながりがほぼ確実に存在しないグリーンは、ワタルにとって数少ない味方だった。

「ナナシマのアジトはどうなんですか？」

「いや、それも無さそうだった」

ナナシマ、とは一応カントー地方に属するはるか海の向こうにある小さな列島であり、かつては、そこにもロケット団のアジトが存在していた。

「ラジオ塔占拠事件のように、小規模な復活なのかもしれないが。それでも可能性の有りそうなところを一つずつ潰していくのは大事なな」

その方がいい、と、グリーンは頷いた。

さらにワタルがグリーンに問う。

「君は、ロケット団とクワノ一世の集団についてどう考えている？ カントー警察局は、この二つの団体が同化し連携をとっていると考えているようだが」

ワタルは、クワノが『たましいのいえ』を襲撃した際に、グリーンと出会っていること知っている。

グリーンはその問いに少しだけ沈黙して考えをまとめた後に答える。

「連携を取っているのは間違いないと思います。実際にその場にクワノとロケット団がいたんですから。ただ、感覚的に、同化はしていないんじゃないかと思うんです」

「と言うと？」

「あくまでも営利主義だったロケット団と、そのような考えを持たないテロリズム集団であるクワノ一世の集団が同化できるとは思いません。もし『たましいのいえ』襲撃がロケット団の利益になるようなことがあるなら話は別ですが」

「なるほど、それは調べてみよう」と、ワタルはその意見に納得したが、

「ですが」とグリーンが続ける。

「もし、その二つの団体の利害が一致する何かが存在するのなら、それは十分に考えられます。ただ、現段階では、それが見えてこないというだけで」

たしかに、今の段階ではクワノとロケット団の間に接点が見いだせない。

だが、彼らの延長線上に、何らかのものが存在する可能性はまだ十分にある。

「ワタルさん」と、今度はグリーンが問う。

「ロケット団の復活と、レッドの失踪に、なにか関係があるとは思いませんか？」

グリーンの横にちよこんと腰掛けていたピカチュウが、その言葉に耳を動かして反応した。

そして、それまでは落ち着いてグリーンと情報交換をしていたワタルも、それには少しだけ体を反応させて「なるほど」と頷く。

「確かに、それは考えられる。ロケット団ならばレッドに恨みを持っているし、失踪と復活のタイミングも辻褄が合う」

しかし、ワタルはすぐさま「しかし」と呟いて続ける。

「できるのか？ そんなことが」

その言葉に、グリーンはグツと押し黙る。

ロケット団が復活したところで、レッドを拉致することなど、果たしてできるのだろうか。

かつてロケット団を根こそぎ壊滅させたあのトレーナーを、果たしてどうすれば打ち負かすことができるのか。

トキワジムリーダーのグリーンですら、それを想像することは出来ない。

「もし、そうだとしたら」と、グリーンが言う。

「相手は、とんでもない組織だということになります」

ワタルは「うーん」と唸ってそれを肯定した。

あるだけの情報をそれぞれ交換し、ワタルがその公園を後にした後も、グリーンはそこに残っていた。

相変わらず誰もその公園を訪れてはいなかった。グリーンも思わず、その公園の必要性を心配してしまうほどに人の気配がない。

「とにかく、他のジムリーダーとも連携をとって警戒しろ、向こうは何をしてくるかわからない上に実力もある」

ポケギアの向こう側に向かって、グリーンが言っていた。

その向こう側でグリーンの声を受け取る人物、コガネジムリーダーアカネは、何時になく真剣な雰囲気ですぐに頷く。

『わかった、他のジムリーダーにもよお言っとく』

クワノ一世の目的を信仰的文化財の破壊だとするならば、その目標になりやすいのは、カントーよりもむしろジョウト地方だとグリーンは考えた。すでに彼らの中である程度の対策は立てているだろうが、念には念をと、グリーンはアカネと連絡をとった。アカネに伝えれば、その他のジムリーダーにそれが伝わるのに半日とかからない。コウタがトキワシティに来る際に無理やり交換させられたポケギアの番号が、意外な形で役に立った。

「気をつけるよ、コガネシティにはラジオ塔もある。クワノとロケット団、どっちからも狙われかねない」

コガネシティの象徴的建造物であるラジオ塔は、かつてロケット団が占領した事件もあり、更に時を遡れば、ジョウト地方に存在する歴史ある塔を改築して作り出したという歴史的背景もある。グリーンに詳しいことはわからないが、おそらくその根本には何らかの信仰があっただろう。

『わかつとるわ、もしコガネに手を出した時には奥歯ガタガタ言わせるわ』

頼もしい言葉だったが、グリーンは釘を刺す。

「もしものときは無理をするなよ。あいつら本当無茶苦茶やるからな、市民の避難を最優先に、お前も無理はするな、お前にもしものことがあったら、コガネを守る奴がいなくなるんだ」

グリーンは、クワノが放ったあの『だいはくはつ』を思い出していた。躊躇もなければ、一欠片の良心も存在しないあの攻撃が、もし、抵抗することが出来ない人々に向けられたときのことを考えると背筋が凍る。

「狂ってはいるが、実力は確かだ」

もう一度刺された釘に、アカネは少し間を開けてから『わかった』と素直に答え、その後二、三ほど言葉をかわした後にポケギアを切った。真剣だったからだろうか、通話が終わる時にいつも仕掛けてくる悪ふざけはなかった。

通話の終了したポケギアをポケットに戻しながら、グリーンはもう少しそこに腰掛けながら考えを巡らせようとしていた。その後もう一度あのアミューズメントセンターに戻って散策をしてもいいと考えていたし、タマムシジムリーダーのエリカに連絡を取ったほうがいいのかもしれないとも考える。

その時、その公園に足を踏み入れるものがあった。

だが、グリーンはそれを気に止めはしなかった。その公園に誰かが訪れることなんかなんの不思議もないことだ、そもそも、そのために作られたスペースなのだから。それに、ワタルやアカネとの会話のような、誰かに聞かれて困ることを話すわけでもない、頭の中を覗き込まれるならば話は別だが。

だから、グリーンはその人物が乞食のような服を着てヒゲと髪を伸ばし放題の大男でないことをちらりと見やっつて確認しただけで、すぐにそれから目を切った。

だが、その足音は、だんだんとグリーンに近づいてきた。

「隣、開いてるかのお」

少し低い女声に不釣り合いな、強烈な訛りのある声が、グリーンに投げかけられた。

彼は反射的に「どうぞ」と言つて、ピカチュウと共に少しベンチの端に寄つた。

その後、彼は不自然なことに気づく、ベンチは、自分が座っているものそばに、もう一つあったのだ。

ようやく、グリーンは隣に座つた女性に視線を移した。ピカチュウも同じように、グリーンのももに手をついて興味深そうにその女性を覗き込んだ。

グリーンよりかは年上だろうが、それでも若いと言つていい年代の女性だった。軽くかぶつたキャップの中に髪を収納し、タイトなジーンズに包まれた足は生まれ、青い瞳が、ちらりとグリーンを確認する。「あんた、殿堂入りトレーナーのグリーンじゃろ？」

それを言い当てたことに、グリーンは特に驚かなかつた。わざわざ自分を見つけて横に座るような奴だ、それを知つていてもおかしくないし、何より、グリーンはそのような経験を多少はしていた。

「一度、会つてみたかつたんじゃ」
差し出された右手を、グリーンは「どうも」と言つて握つた。

同じようにその女性の右手に触れようとしたピカチュウに、彼女は素早くその手を引つ込めた。

「悪いの、ピカチュウは苦手なんよ」
抑えられた声に、ピカチュウは耳を垂れてすごすごとグリーンの隣に引つ込む。

珍しい人だな、とグリーンは思った。ピカチュウが苦手だなんて、中々そうはいない。

「すまんのお」と、もう一つ強い訛り口調で言つてから、彼女は切り出す。

『たましいのいえ』では、散々だったのお」

グリーンは、その言葉に思わず背筋を伸ばして彼女の方を見た。

「どうして、それを知っている？」

彼女がただのミーハーな野次馬ではないことを、グリーンは理解した、クワノ一世による『たましいのいえ』襲撃に自分が関係していることは、警察と一部のトレーナーしか知らないことだった。それに、

ミーハーな野次馬の第一声の質問が、そのようなものなわけではない。大抵の場合、あの試合のことか、トキワジムでの業務についてである。

グリーンは口調が、敵意あるものに変えられたものに動揺することなく、その女性はそれに答える。

「風のうわさで聞いただけじゃい。あいつらバカじゃけえのお、何するかわからん」

グリーンは、利き腕をボールに伸ばした。彼女がクワノについて何かを知っていることは明白だった。

だが、その女性は「いかんいかん」と、手を振る。

「馬鹿なこととは考えんほうがええ、私は今はあんたの敵じゃないよ。それに、あんたみたいな強いのと戦うのはごめんじゃわ。今日は会いたかっただけなんじゃ、お互いにゴウな事はやめようや。私はあんに悪い感情はもつとらん」

当然、グリーンがそれではいそうですかと警戒を解くはずがない。

その女性は立ち上がって両手を上げながら「わかったわかった、今日はもう帰るけん、そんな怖い顔せんとしてくれえや」と、そのままグリーンに背を向ける。

そして二、三步ほど歩いたかと思うと、思い出したように「そうじゃ」と振り返った。

「もう一つ、聞きたいことがあったんよ」

警戒をしたままのグリーンに問う。

「あんだ、神様を、信じるか？」

グリーンとピカチュウは、それに立ち上がって戦闘態勢を取った。その質問は、明らかにクワノ一世のようなスタンスを持った質問だった。

そして、グリーンが答える。

「いいや、信じてない」

女性は「そうか」と、一つ呟いてから、その青い瞳でグリーンを目

をしつかりと見据えながら続ける。

「私もじゃ、あんなもん、信じるほうがどうかしとる」

彼女は、そのままグリーンに背を向けて、その公園から去った。

グリーンとピカチュウは、その背中を呆然と眺め続けていた。

神の否定が、戦いの引き金だと、彼らは思っていた。故に、彼女が否定を肯定したことに、彼らは肩透かしを食らっていた。

カントーの外れにあるその町は、恵まれない交通状況と、微妙な立地、そして、何かとやる気のない町議会が絡み合い、都会の人間が訪れればその不便さに思わず顔をしかめるような、それでいて、電気が通つてないような本当の田舎かと問われれば、決してそんなわけではない、非常に中途半端な、一戸建てを夢見る家主が、今後の人生における通勤時間と引き換えに土地とマイホームを得るような、そんな土地だった。

当然、そのような土地にある古本屋が繁盛しているはずもない、大抵古本屋というものは、寂れていなければならないほど良いものがあるといメージされているが、その古本屋に足を踏み入れれば、いくつか巻数の抜け落ちたギャグのダサイ漫画本と、やたら数だけは存在する昔流を行った自己啓発本が並ぶラインナップに、それが幻想であることに気がつくだろう。

一人の少年が、その店に足を踏み入れた。

その赤髪の少年、シルバーは、ホコリかぶった文庫本が何冊も積みまれている店頭にしきりに顔をされた。流行ろうという気持ちだが、この店にはない。

大体、こんな無防備に商品を陳列しては、万引きしてくれと言っているようなものだ、と、シルバーはその文庫本を一冊手に取った。

だが、すぐにため息を吐いてそれを元に戻す。数年前に流行った都市伝説をまとめた本など、今更誰が欲しがるというのだ。ただでもないとはまさにこのこと。

尤も、もしシルバーのその様子を見るものがいれば、とても彼が古本を買いに来たとは思わないだろう。赤髪の長髪に、鋭い目つき、あまりお近づきになりたいタイプの少年ではない。

シルバーは店の先へと歩を進める。薄暗い上にやたら斬新に配置された本棚は、まるでちよつとした迷路のようだった。

彼が器用にそれを抜けると、ようやくレジと店主が視界に入る。

「いらっしゃい」

皺だらけの老人は、簡素なパイプ椅子に座って体を震わせていた。年をとって細く弱くなった白い髪はところどころちぎれて跳ね回るように好きな方向に飛び出している、歯が入っていないのだろうか、頬はこけ、モゴモゴと動く唇が、彼が老人であることを表現している。シルバーは遠慮なくその老人の正面に立った。そして、周りに誰もいないことをしつかりと確認してから言う。

「燃料は足りているか？」

とてもではないが、古本屋でその店員に問うような言葉ではない。もしその場に人がいれば、この少年は気でも狂っているのかと、一步彼から離れるだろう。

しかし、その老人はそれにたじろぐことなく答える。

「この店をどこで知ったんで？」

「またまた、たまたま、な」

シルバーの返答に、老人はゆっくりと立ち上がって周りを確認した。そして、誰もいないことを確認するとそれに答える。

「はい。こちらにございますよ」

老人はそのまま杖についてシルバーを先導する。

「さっさとしろよ」

とても博愛精神があるとは思えないシルバーのその言葉は、老人には届いていたが、彼はそれにうろたえることはなかった。

シルバーは、古本屋の奥、老人の生活スペースのような場所に案内されていた。

老人はそこにはいない、シルバーを迎い入れた後に「少し、お待ちを」と言つてそのさらに奥に消えてしまった。

布団が片付けられ、骨組みだけとなっているコタツに手を付きながら、シルバーは「こちらを」と老人に出されていた湯呑に口をつける。弾ける口当たりに、彼はそれに入っていたのが好物であるサイコソーダであることに気づいて「ふん」と、鼻を鳴らし、もう一度それ

を傾けるとゴクゴクとそれを飲み干して、こみ上げるものを我慢した。

その時、部屋を仕切るふすまが勢いよく開き、先程の老人とは似ても似つかない中年の男があらわれ、シルバーの対面に滑り込むように腰を下ろした。

シルバーはそれに特に驚かず、呆れるような表情でそれを眺めている。

「坊っちゃん！」

その中年は、潤んだ目でシルバーを見つめながら感極まつてそう言った。

「私ラムダは、この日を待つておりました。まさか坊っちゃんから、私を訪ねてくる日が来ようとは……」

かつてのロケット団幹部、ラムダは、サカキ無き後のロケット団を再びまとめ上げた大幹部の一人で、その後に起きたロケット団残党によるラジオ塔占拠事件の首謀者のひとりでもある。

ゴールドという少年トレーナー、そしてシルバー、更にはワタルらの尽力によつて失敗に終わったその作戦後、ラムダは得意の変装術によつて警察の追手から逃れ続けていた。もとより戦うより逃げることや偽装、窃盗のほうが得意な性分だ。その生活に疲れることもない。

「二年前、坊っちゃんの目を見たときから、私ラムダは確信しております。ああ、サカキ様が残したカリスマの遺伝子は、確かにここに生きているのだと」

一人で感極まるラムダを相手に、シルバーはため息を付いた。

自分の正体が、この男にバレてからちようど一年ほどになっただろうか。

どこから仕入れた情報でそれを知ったのかは知らないが、ラムダは、シルバーがロケット団首魁、サカキの息子である事を掴んだ。そして、彼はすぐにシルバーと接触し、その忠誠を彼に示したのだ。

当然シルバーは、当初それを受け入れはしなかった。もとよりロケット団を嫌悪し、ラジオ塔占拠事件のときにはロケット団と敵対し

たこともある。ロケット団幹部の庇護など、受け入れるはずもない。

だが、ラムダはそんなことでへこたれはしなかった。「坊つちゃんのお気持ちが変わるまで、このラムダ、いつまでも待つつもりです」と、彼個人のアジトの地図を渡しては「なにか困ったことがあれば、私ラムダ、必ず力になります」と、忠誠を示すのだ。

当然シルバーがそれに頼ることなどこれまでではなかった。むしろ、匿名の情報としてそのアジトの場所を警察局に流したりもした、だが、ラムダが警察に捕まることはなく、ふらりとシルバーの前に現れては、新たなアジトの地図を渡すのみだ。

「ああ」と、ラムダが額に手を当てる。

「湯呑が空になっていますね」

そう言つて素早く湯呑を手にとつたラムダは「いや、いらぬ」というシルバーの声を無視しながらこれまた素早く冷蔵庫に向かうと、今度はサイコソーダの瓶をそのままシルバーの前に起き、器用に片手で栓を抜いた。

「ささ、どうぞぞ」

正直な話、シルバーはラムダの忠誠を今になつては疑つていなかった。

当然、ラムダに対する気味の悪さは残っている。こちらの事は殆ど知られているであろうことに對し、シルバーはラムダのことを殆ど知らない、今の中年オヤジの姿が素顔である保証もどこにもない、先程の老人の姿が素顔な可能性だつてある。その気になれば美しい少女に化けることだつてできるのだ、この男は。

シルバーは、その瓶に手を付けることなく言った。

「一つ、聞きたいことがある」

ラムダは、その言葉に背筋をゾクリとさせ、「はい」と上ずつた声で答えた。自身に命令するその言葉の奥底に、かつてのサカキの姿が思い起こされたのだ。

シルバーは少し緊張感を持ちながらその次を続ける。

その質問は、面と向かつてラムダに問うのは危険であった。

ラムダが自身に忠誠を誓っていることはわかっている、だが、状況

によつては、ラムダがその質問に答えなかつたり、それどころか激昂して襲いかかつてくる可能性もある。自身に対する忠誠よりも、更なる忠誠が、そこにあるかもしれない。

当然、その時は戦うつもりだった。

「お前ら、ゴールドをどこにやった？」

その質問に、ラムダは一瞬顔をしかめる。

ゴールド、とは、殿堂入りトレーナーの一人で、ロケット団のラジオ塔占拠事件を解決に導いたトレーナーの一人である。

そして、シルバーの人生観を大きく変えた、彼にとって大切な関係を持つ人物の一人だ。

だが、少し前ほどから、彼と連絡がつかなくなっていた。俗に言う失踪と言うやつで、ゴールドは急にこの世界から姿を消した。

シルバーは、その事件を追っていたのだ、時に知り合いのドラゴンつかいと連携を取りながら、彼はゴールドの手がかりを探したが、それは実らない。

そこに飛び込んできたのが、今朝の事件だった。

教皇、とか、クワノ一世だか二世だか、アンノーン手稿とか、そんなものはどうでも良かった。シルバーが注目したのは、ロケット団が復活したという情報だ。

ロケット団なら、それがあり得ると考えたのだ、ゴールドに恨みがあり、組織力もある。ロケット団が、ゴールド失踪に関係していることは、ほとんど間違いないと、シルバーは思っている。だからこそ、シルバーはラムダのアジトに訪れたのだ。

そして、その質問はラムダの痛いところをつくはずだったのだ。

だが、ラムダはすぐさま表情を柔らかくして答える。

「はあ、なるほど、今朝のニュースのことですな。確かに、ロケット団ならば坊っちゃんのご友人を狙う恨みがある。この短期間でそこまでの考えに至るとは、流石は坊っちゃん、サカキ様に似て聡明な方だ」

その答えに、シルバーは肩透かしのような感情を懐き、思わず「お前らじゃないのか」と聞き返してしまった。

そしてラムダがそれに答える。

「確かに、それは十分に考えられます。ですがね、今朝話題になったロケット団と、我々大幹部は、全くの無関係と言つていいです。そりやあ木っ端の下っ端が何人か協力はしているかもしれませんが、その大体は、かつてのロケット団とは程遠い」

「どうしてそれがわかる」

「どうしても何も、私のところにもかつての部下から誘いがあつたからですよ、『今度のボスは男の中の男だ』と息巻いておりましたが、くだらない、そんなもの考えるまでもなく拒否ですよ拒否、まあ、そのおかげで私も追われる身になっていくつかのアジトを潰される羽目にはなりましたがね」

そういえばと、シルバーはなんにもしていないのにラムダがアジトを数回変更していたことを思い出した。

「どうして、それに乗らなかつたんだ？」

シルバーはそれが不思議であつた。彼らにとってロケット団の復活は悲願であつたはずなのに。

ラムダは肩をすくめながら答える。

「どうしてって、当然ですよ。我々が望んでいるのはサカキ様がボスとして君臨するロケット団であつて、名前だけの有象無象とは違う。案の定あいつら、田舎から来た狂人の集団と手を組んだりして、くだらない」

「もし」と、一つ言つて続ける。

「もしですよ？ サカキ様が復活し、もう一度ロケット団を再結成なさるのならば、このラムダは命をかけてそれにお供し、必ず運命をとにもするつもりです。もし、その時坊っちゃんと道を違えることがあつても、私はそれを後悔しません。あの時、あのラジオ塔のときも、我々大幹部はそう考えていました。確かに坊っちゃんやゴールドとか言うガキのせいで我々は散り散りになりましたが、そもそも、あの放送をしてもサカキ様がお戻りにならなかつた以上、我々の行く末

は、破滅しかありえなかった。アポロは優秀な男でしたが、サカキ様に比べればとてもとても、いずれ必ず、空中分解していたでしょう。いや、もしかすればあの時こそが、空中分解だったのかもしれない」シルバーはそれに複雑な感情を抱いた。いつまでもそれにこだわらぬくならない男だと思っただが、同時に、素晴らしい部下だとも、つい思ってしまったのだ。

「それなら」と、シルバーが問う。

「その新しいロケット団が、ゴールドを誘拐したのか？」

ラムダはそれに首を振った。

「いや、私はそうは思いません。そもそも、私達大幹部が束になっても叶わなかったのが、あの忌々しいゴールドとかいうトレーナーなのですよ？ 今更有象無象が集まったところで、ゴールドに敵うとは思えません。それに、ロケット団の血が薄いあの組織にとって、ゴールドがそこまでの敵とも思えません」

シルバーはそれに無言を返したが、内心ではそれに納得していた。それを知ってか知らずか、ラムダが続ける。

「良いですか坊っちゃん。私ラムダは、サカキ様と、その血を継ぐ坊っちゃんに忠誠を誓っております。そして、そのサカキ様がいなくなってしまう以上、私は、坊っちゃんしか信頼しません。あなたがロケット団の復活を望むまで、私はいつまでも待ち続けております」

ふん、と、シルバーはそれを鼻で笑ってから立ち上がった。

「弱いやつが群れるのは嫌いなんだ」

幼少の頃からずっと思い続けてきたことを言う。

背中を見せるシルバーに、「坊っちゃん」と、ラムダが声をかけた。「坊っちゃんの考え、私は嫌いではありません。ですが坊っちゃんの考えは、あまりにも弱いやつに厳しすぎる」

「何が言いたい？」

背中越しに問うシルバーに、ラムダが答える。

「坊っちゃん、かつて我々は、何者でも、悪ですら無かったのです。ただただ世間を恨み、反抗し、それでも中途半端なグズが我々だったのです。ですが、その我々に、悪の道を示し、居場所をくれたのが、他

でもない、サカキ様なのです。当然それは裏の道、表には顔向けが出来ず、悪として日の当たらぬ道、人に恨まれ、憎まれるようなことに手を出し、当然のように表の世界から迫害される。ですが、我々にはサカキ様がいた。たとえそれが光の当たらぬ闇の道であっても、サカキ様のために働くことが、我々にとつては、幸せだったのです」「くだらない、それこそ、負け犬が傷をなめあっているだけじゃないか」

「ええ、そうですね、ですがね坊っちゃん。この世はね、吠える負け犬と、吠えない負け犬、そして、たった一人だけの勝者だけが存在するのです。そんなこの世で弱いことを否定しては、辛いですよ」

シルバーは、それに何も返さない、否、返せなかった。

当然、ロケット団のような犯罪や倫理観を大きく外れた行為を肯定するわけではない、そして、それはラムダも前提として語っているだろう。

だが、弱いことを否定すれば辛いだだけだという理屈に、なにか反論することが出来ないでいた。それは、自分自身に心当たりのあることだったから。

シルバーは、弱いことが悪だと信じて生きてきた。そして、弱いことを否定しようとして生きても来た。

だが、彼の人生すべてが勝利であったかと言えば、そうではない、彼は何度もゴールドに敗北し、ワタルに敗北し、エンジュシテイの舞妓たちにも敗北した。どれだけ鍛錬をつもうと、ゴールドやワタルに勝利することが出来ない自分を、彼は誰よりも責めている。

ラムダの理屈は、シルバーのそのような停滞を鋭く指摘していたのだ。

「じゃあな」と、そこを後にしようとしたシルバーの背中に、ラムダが更に言葉をかける。

「坊っちゃん、なにか困ったことがあれば、必ずこのラムダをお頼りください。このラムダ、坊っちゃんのご命令ならば、この命に変えても、それを完遂してみせましょう」

シルバーは、それに何も答えなかった。

5—エンジユの決戦と『神の子』

1

薄汚れたボロ布のような服をまとったその集団は、フラフラと立ち上がりながら、岩と岩の隙間から日の差すその場所の周りに集まった。

『教皇』クワノ一世と共に潜伏するその場所は、薄暗く湿気まみれで、ボロの布のような服にこびりついた乾いた泥の上に湿った泥を重ねるような環境で、とても恵まれた環境だとは言えなかったが、彼らはそれに不満はなかった。同じ状況にありながら、文句の一つも言わずそれを享受する『教皇』クワノ一世を目の前にして、一体誰がそれに不満を唱えることができようか。

悪いことばかりではない、否、隠れ家のそのような状況を不服としないのであれば、むしろ彼らは自分達を恵まれた立場にあると心の底から信じているだろう。クワノの言う新しい世界への歩みは、止まる気配を知らない。

偽物の神を破壊するどころか、神への供物である『アンノーン手稿』の奪取にも成功した。向かう所に敵はなく、何もかもがうまくいく。それは、神の祝福があるからに違いないのだと、彼らは思っていた。そして、その傲慢な発想は、そのまま彼らの気力となり、立ち上がる足に力を与える。

岩と岩の隙間から日が差すそこに、同じようにボロボロの外套を身にまとった大男、『教皇』クワノ一世が、のそりと移動した。その光を彼が一心に浴びることに、信者達はなんの異も唱えない。

「やあ、やあ、やあ」と、クワノは満足げにそう言った。
伸ばし放題のヒゲの中にくっつかある白髪が、陽の光を反射してチカチカときらめく。

「神は」

クワノの低い声が洞窟の不均等な岩盤に反響し、不気味なうねりを帯びて響き渡った。やはり力のある声で、彼は続ける。

『神の指南書』は、神のもとに祀られた」

その言葉に、信者達はそれぞれの声を上げ、洞窟内に鼓動を吹き込む。

その洞窟を住処にするはずのポケモンたちは、その集団に近づけないでいる。彼ら野生のポケモンは、狂気の恐ろしさを、人間よりもよく知っている。

「神と、神の子による新たな世界」

そう声を上げたクワノは目を閉じて一旦押し黙る。それと同時に、信者達も目を閉じ、暗闇の中に自身の思考を投影する。

彼らが思い浮かべているのは、彼らの思う、理想の、新しい世界だった。私利私欲にまみれぬ、平和で、争いのない、素晴らしき世界。

理性と道徳のあるものは、彼らのその理想と、現状の大きな差異を指摘するだろう。

だが、恐ろしいことに、『そうなってしまった』前の彼らを知るものは、彼らのことを善良な市民だと言うだろう。元々の彼らは、争いを好まず、神は平等と平和を望んでいることを信じ、その世界が善であり正義であることを心の底から信じていたのだから。

だが、もはや彼らにそれは届かない、彼らは、この闘争が理想の世界を作るために必要な闘争だとその矛盾を強引に解釈してしまっているし、そもそも、偽りの神々が支配するこの穢れた世界では、彼らの理想の世界など実現しようがない。それは必要な闘争であり、必要な暴力なのだ。

大きく息を吸ったクワノが続ける。

「我々は、また一歩、それに近づいたのだ」

おおおおおおお、と、地鳴りのような信者達の声が、クワノの耳に届く。

彼は、それを嬉しく思い、彼らを誇りに思い、しかし、一つ、悲しく思った。

「だが」と、信者達の声を静し、新たな沈黙が生まれてから、彼は続け

る。

「同時に、私はこの世界の、この世の浅はかさに、まだ心を許すことは出来ていない。偽りの神々はまだ人々の心の中に生き、偽りの歴史と、偽りの道徳の中に生きている」

クワノは両手を広げ、岩盤の隙間から差し込む光の、その向こう側を見ようとする。

そして、信者達がクワノの声を待ったために再び作り上げた沈黙の中で、その決意を、この世界でそれを語るにはあまりにも大きなエネルギーを必要とするその決意、それを、彼はそれを自らにしか出来ぬことだという尊大で高貴な使命感を持って言った。

「子供たちよ！ 私は、エンジュに向かう！」

一瞬、信者達は押し黙った。

クワノの言葉を、理解することは出来ていた、だが、その勇気を、『教皇』クワノ一世が自分たちに見せたそのあらんばかりの勇気を、脳ではなく心に落とし込むことに、時間を必要としている。

だが、やがて、それを成した一人の信者が「おお！」と短く声を上げながら、握った右手を光差すものに向かって突き出す。

そして、それに同調するように、クワノの言葉を心で理解した信者達が、同じように光差すものに向かって腕を差し出す。

その目には、クワノへの尊敬があった。

大それたことだった、その神に手を出すこと、それは、あまりにも大それた、そして、大きな力を、力強い魂を必要とすることだった。

エンジュ、ジョウト地方に存在する一都市、歴史古く、特徴的な建造物と、特徴的な文化を有する都市。

そして、美しく雄大な神話、人々を利用するがために何十にも偽りで塗り固められ、黒く、いびつに光る偽物の神の物語が存在する都市。反響する歓声の中で、クワノが続ける。

「時が来たのだ！ 我々は、カントージョウトにおいて最も声の大きい

く、そして、最も年老いた声を持つその偽りの物語を、ついに、ついに打ち崩すのだ！」

乞食のような外套のポケットに手をつ突っ込んだクワノは、そこからあるものを取り出して、それを差し込む光に向かって掲げる。

「私は、ホウオウが神ではないことを証明する！」

その右手には、陽の光を受けて虹色に輝く大きな羽が握られている。

「追うのだ、我らを導く、ことわりの会話を」

☆

その日、エンジュジムに一人の少年が挑戦していた。

『さいみんじゅつ』

エンジュジムリーダー、マツバがコントロールするゴースは、その指示に従い、対戦相手のサンドを睨みつけて『さいみんじゅつ』を仕掛けようとする。

だが、サンドは軽いフットワークでゴースの視線から逃れた。丸っこい体ではあるが、種族的にはピカチュウやコラッタに近い構造を持つサンドは、一瞬体を横にふってゴースの注意をそらした後に、一気に距離を詰める。

『つばめがえし』！

サンドのパートナーである少年、コウタは、サンドのフットワークに惑わされることなく、むしろその軽さを利用して攻撃に転じる。

トキワジムトレーナーである彼は、トキワジムリーダーであるグリーンとの特訓の末、手持ちの中で最もレベルの高いサンドのスピードとその意志を、なんとか理解できるようになっていた。

サンドの爪が宙に浮かぶゴースを切り裂く、ガスのような体を持

ち、工夫のない打撃や地面タイプの攻撃は無効化してしまうゴースも、鳥ポケモンの翼が空気を切り裂くようなスピードで攻撃する『つばめがえし』を無効化することは出来ないように、表情を歪ませていた。

「もどれ」と、マツバがゴースをボールに戻した。彼はゴースが戦闘不能だと判断したようだった。

もちろん、エンジュジムリーダーのマツバが、特訓で実力を底上げしたとはいえコウタのような少年に実力で劣ることはありえない。

だが、これはジム戦、それもバツジを一つも持っていない少年を相手にしたもの、マツバはこの一連の動きから、コウタの実力がある程度判断し、トレーナーとしての基本ができていることを見抜いた。

「それでは、このポケモンを相手にどう動く」

そう言いながらマツバが繰り出したのは、ゴースの最終進化系、ゲンガーであった。黄色くするどい目でサンドとコウタを交互に見やりながら、大きな口から舌を出してからかうように威嚇する。

コウタは、一瞬それに身構えた。当然ジム専用の実力を制限されているだろうが、それでも三段進化の最終進化系、それも最も厄介なポケモンの一つであるゲンガーが相手となれば、コウタの実力を考えれば仕方のないことだろう。

『『したでなめる』』

そのこわばりを感じたのかどうかはわからないが、先に動いたのはマツバとゲンガーの方だった。

先程のゴースとは比べ物にならないスピードでサンドとの距離を詰めたゲンガーは、その大きな舌でサンドをべろりと舐め回す。サンドはその濡れた箇所を寒気を感じ、体が『まひ』しかける。

だが、それ自体は小さなダメージだった。もしゲンガーが放つことのできる最も強力な技の一つである『シャドーボール』を打ち込んでいれば、特殊な防御力に強みのないサンドは大きなダメージを受けていただろう。ポケモン単体の強さではなく、トレーナーとしての強さ

をみるジム戦では、そのようにあえて技のダメージを絞ることは珍しくない。それに、あえて『したでなめる』攻撃をすることによって『まひ』のような状態異常に対するトレーナーの対応を見ることがもできるのだ。

『つばめがえし』』

しかし、コウタはそれに驚くことなくサンドに指示を出した。ゲンガーが高い素早さを持つという知識はすでに身につけている。吸収した知識は、一瞬身構えると行う行為に意味をもたせていた。

「まあまあだな」

エンジュジム二階席からその試合を眺めていたグリーンは、一つ頷きながらそう呟いた。

彼がトキワジムに来た当初を考えれば、彼とサンドのコンビネーションは目に見えて向上している。まだまだグリーンが満足するレベルではないが、コウタの目が、トレーナーとしての最低ラインに達したことは間違いないだろう。サンドがサンドパンに進化するのを待つてから、オニスズメやコラッタとのコンビネーションを詰めていつでも良いかもしれないと考える。

だが、及第点なのはあくまでもコンビネーションだけの話だった。その戦いの節々に、不満に思うところがないわけではない。

まず一つ大きく問題だと思っているところは、コウタがゲンガーに對して地面技を打つ気配がないところだった。

マツバが繰り出すであろうゴースやゴースト、ムウマの特性『ふゆう』を警戒し、地面技を打たなかったのは、グリーンがコウタにエンジュジムに行くことを告げた一週間前からの予習の成果だろう。

それ自体は何も問題がない。よく研究しているし、ゴーストタイプへの対抗策として、わざマシンと特訓の力で『つばめがえし』を技と

してものにした判断と努力も素晴らしい。

だが、それをどのくらい実戦に落とし込んでいるかと問われれば、グリーンは半分だけと答えるだろう。

ゴースやゴーストと違い、ゲンガーは『ふゆう』の特性を持たない。当然だ、どう見たって、ゲンガーは地に足をつけている。

ゲンガーのタイプはゴーストと地面、サンドならば『マグニチュード』で大ダメージを狙うこともできるし、そんな事をしなくても『じならし』などで弱点を突きながら相手の速さを抑え込むことだってできる。

混乱しているのか、はたまたその知識に確信が持てないでいるのか、コウタはゲンガーにも『つばめがえし』で攻撃している。

コウタはゴースの特性『ふゆう』に対する情報に溺れ、新たに得た『つばめがえし』と言う武器に縛られているのだ。戦いの中でそれは致命的、実際には、知識を実戦に応用することこそが最も大事なことであり、情報はそのためだけのパーツでしか無い。コウタのその行動は、戦いの知識、という点では及第点では無かった。

胸ポケットから取り出した小さな手帳にそのようなことをメモしながら「まあ、ゆつくりとな」と、グリーンは再び呟く。

座学を実践的に応用することを、コウタのような少年にすぐに求めてはいけないのだと、グリーンは理解しつつあった。自分がそれをすんなりと受け入れられたのは祖父の影響と天性のものがあつたからであり、普通はそう簡単には出来ない。

それを指摘するよりも、サンドとのコンビネーションが良くなつていることを褒めたほうがいいのだろうとグリーンは判断した。事実それは十分褒めるに値することだし、彼らの努力の成果でもあつた。

地面技を打たずとも、この試合に勝つことはできるだろう、技の威力を抑えられているゲンガーに対し、サンドの『つばめがえし』の威力も悪くない、いずれゲンガーが力負けする。

思いつきり褒めてやろう、とグリーンは手帳をポケットにしまった。そして、それが不自然でわざとらしいものにならないようにはどうすればいいのかを考える。

グリーンは横にちよこんと座る。ピカチュウは、小さく何度も首を動かしてマツバとコウタの試合を見ている。

一体こいつにはどれだけのものが見えているんだろうな、と、グリーンは思った。

「何も問題は無かったよ」

「それは洗脳のほうでしょ？」

マツバに対し、グリーンは少し笑いながらそう返した。マツバもその笑みの理由を理解しているようで、それに苦笑いを返す。

グリーン達がエンジジムの訪れたもう一つの、いや、最も大きな理由は、コガネシティでの洗脳事件に巻き込まれたコウタの洗脳が、完全に解けているのかどうかを確認するためだった。ゴーストタイプのポケモンに精通し、彼自身にも特殊な能力があるとされているマツバは、悪意を持った洗脳に対するある程度の解決策を持っている。「対戦の方は穴だらけですよ」

一つ目のジムバッジを手に入れた興奮がまだ収まりきっていないのだろう、エンジジムのジムトレーナーとの手合わせに夢中になっているコウタを遠目にみやりながら、グリーンが呟いた。

ようやく思い出したのだろう、コウタとサンドは『じならし』を対戦相手のゲンガーに打ち込もうとしている。

「高望みをしすぎだよ」と、マツバがそれに笑って答える。

「元々の彼を知っているわけじゃないけど、大したものだよ。あのサンドがサンドパンに進化すれば、三つ目のバッジぐらいまでなら行けるんじゃないかな」

マツバの指摘は、おそらく正しい、サンドパンがもとより持っている力を発揮すれば、三つ目のバッジを獲得することは可能だろう。

だが、グリーンはそれに首を横に振った。

「そんなやり方じゃ長くは持ちません、いつかきつと躓く」

ポケモンのポテンシャルに身を任せたトレーナーの挫折は深い。それがカントー地方最強のジムリーダーとして何人ものトレーナーを見てきたグリーンを考えだした。

グリーンがジム戦で繰り出す『すなあらし』と『トリックルーム』を主軸とした戦術は、挑戦者の知識の応用力をはかる目的を強く持つている。事実『すなあらし』による場の状況と、その状況に対するいわタイプのポケモンの特殊な優位性、さらに『トリックルーム』によってより複雑化する戦況に思考放棄する挑戦者は多い。もちろん、じっくりと考えて行動すればそれらに対応できる知識を彼らは持ち得ているだろう、だが、グリーンが実戦に近いテンポで繰り出すそれらに、彼らに対応ができない。その知識を、応用できる段階にないのだ。

故にグリーンは、ポケモンのポテンシャルを伸ばすのと同時に、コンビネーションや知識を増やすことをコウタに求めていた。その意味では、コウタはまだグリーンのと及第点には達していない。

理想が高すぎるかもしれないが、グリーンはその方がより良いと信じていた。

あまり無理をさせるなよ、といったようなニュアンスのことを、マツバが笑いながら告げようとしたその時だった。

けたたましいサイレンの音が、ジム内に鳴り響いた。

その音に、マツバやエンジュのジムトレーナー達は一斉に目の色を変え、身構えた。コウタの相手をしていたジムトレーナーも同じく目の色を変えながらポケモンを手持ちに戻し、コウタはそれに驚きうろたえるだけ。

それとほとんど同時に、一人の男がジムの扉を勢いよく開いて飛び込んでくる。息を切らしたその男は「襲撃です」と、息も絶え絶えに言った。

「クワノか」

その様子から、グリーンはそれが『教皇』クワノ一世の襲撃を指していることを理解した。飛び込んできた男はそれに領き、息を整えようと大きく呼吸する。

「行くぞ」と、マツバが言うと、数人のジムトレーナーがそれに続いて

マツバの周りに集まる。おそらく彼らはエンジュジムの中でも腕の立つトレーナーたちなのであろう。

おそらくそれは用意されていた動きだったのだろうとグリーンは予想する。クワノが信仰の破壊を目的としている以上、彼らがホウオウ信仰の中心であるエンジュシティの『スズのとう』を狙う可能性は高い。エンジュジムリーダーであり、彼自身もホウオウに対するあこがれを持つマツバがその襲撃に備えるのは半ば当然だろう。

「俺も行きます」

グリーンがそう言い、彼の足元にいたピカチュウも鳴き声を上げてそれに続いた。

「助かる」と、マツバはそれを受け入れた。戦力は一人でも多く欲しい状態、殿堂入りトレーナーであるグリーンの存在はありがたかった。

その時、グリーンの背後からコウタが声を上げた。

「俺も行きます」

グリーンはそれに振り返った。コウタは少し緊張の面持ちでグリーンを見つめ、サンドの入ったボールを握りしめている。怯えと、使命感のようなものを感じているような目だった。

「駄目だ」と、グリーンはすぐにそれを拒否する。

コウタは少し目線を下に下げた。グリーンがそれを拒否する理由はわかるし、それを覆すことができるほどの実力がないことくらいは理解している。だが、やはりふり絞った勇気が拒絶されることのショックがないわけではなかった。

それを理解しているのだろう、グリーンは「ピカチュウ」と、足元のポケモンの名を呼び、「コウタにつけ」と続ける。

ピカチュウは小さく短く鳴いてそれに答えると、すぐさまにポジションをコウタの足元に取る。

そして、グリーンはコウタの名を読んでからさらに続けた。

「お前はここに避難してくる住民たちを残ったジムトレーナー達と守るんだ」

数人のジムトレーナーがまだここに残っているというのは、おそらく、エンジュシティの住民たちがここに避難してくることを想定して

いるのだろうか、グリーンは見抜いている。そして、それは正しい。コウタは、それに少し表情を明るくさせ、すぐさまそれを引き締め、「はい」と強く答えた。守られる側ではなく、守る側であることをグリーンが認めてくれたことが嬉しくもあった。

「行きましよう」

グリーンはすぐに彼らに背を向けてマツバと共にジムの外に向かう。

彼は知っていた。

クワノ達の目的が信仰の否定と破壊である以上、彼らにエンジウムへの敵意は存在しないだろう。故に、エンジウムは実質的な避難地帯、コウタがピカチュウと共にそこにいることは、そのまま安全につながる。

その予想は、おそらく正しいだろう。

『ほうでん』！』

グリーンサンダーズが電撃を放ち、それはグリーン達を囲んでいた汚れた服を着た集団が操るポケモンを蹴散らす。

殿堂入りトレーナーのグリーンほどではないが、その集団達は、それぞれ無視できない実力を持っていた。『教皇』クワノ一世がこの襲撃に力を注いでいる証拠だろう。

エンジュシティは、もはや巨大な対戦場と化していると言っても良かった。グリーンとマツバが想像していたよりもずっと多くの信者達が、恐れを知らぬ目を輝かせながら破壊に勤しんでいる。

歴史ある街を守るために対策をされていたのだろう、警察隊とポケモンレンジャーがすでに到着し信者達を相手に戦っていた。彼らは食い下がってはいたが、信者達との戦力は拮抗していると言っている。

だが、マツバとグリーンがその中に飛び込んだことで、戦局は大きく変わろうとしていた。

『『シャドーボール』！』

マツバのゲンガーが、その施設の前に陣取っていたトレーナーのポケモンを吹き飛ばした。それが最も頼れる手持ちだったのだろう、そのトレーナーは親の仇を見るような目でマツバとグリーンを睨みつけ、それでもジリジリと下がってその施設から離れる。

『よし』と、マツバは一つ言っただけでその施設に飛び込み、グリーンもそれに続いた。

「無事か！」

マツバの呼びかけに、ジョーイを始めポケモンセンターの職員たちはそれぞれ怯えた声をあげながらも「はい」とそれぞれ答えた。

その反応に、マツバ達エンジユジムの関係者も、グリーンも胸をなでおろした。それは、職員たちの身の安全に対するだけのものではない、信者達からポケモンセンターを奪う事ができたことは、戦局的にも大きな意味を持つ。

かつて、ヤマブキシティ全体を占拠したテロがあつた。首謀者はロケット団、そのどす黒い野望が、最も世界の掌握に近づいた事件として、世界的に有名である。

ヤマブキシティに本拠地を置くシルフカンパニーの技術を狙つたその事件は、電撃的なスピードで街ごと占拠するという大胆なスケールの大きさと、警察局とポケモンレンジャー協会という二つの戦力団体を内部から操ることによって正義の強行をわずかに遅らせるという緻密さを持ったものだった。事実、小さな癒着を手広く行うロケット団の手法に寄つて、この二つの団体は明らかに初期対応を遅らせていたのである。

その計画に、穴はわずかにしか存在しなかつた。だが、その穴に二人の少年が潜り込み、その事件は失敗に終わる。レッドとグリーンである。

今でも見方によっては完璧に見えるその計画が失敗に終わった要因の一つ、それは、ロケット団がヤマブキシティのポケモンセンターを占拠してはいなかったということ。事実、ロケット団の構成員と激しく戦つたレッドは、ポケモンセンターでポケモンを回復させた後にシルフカンパニーに向かつていた。回復が容易であるというポケモンの利点の一つを、ロケット団は見逃していたのだ。

それ以来、町を対象にしたテロに対する重要な防衛策の一つに、ポケモンセンターの奪還が挙げられることになった。味方を回復し敵をジリ貧に追い込むことのできるその施設は、正義側にとつても悪側にとつても重要なものだった。

「ひとまずは、これでなんとかなるだろう」

マツバはジョーイにモンスターボールを預けながら安心したようにそう呟いた。信者達がこの施設を利用できず、警察局とレンジャーには開放する、自然と物量でこちら側が有利になるはずだ。

エンジユジムトレーナー達と共にセンター外を警戒していたグリーンも、マツバの後にポケモンたちを回復させた。大してダメージを負っているわけではなかったが、そこで回復をしない理由など存在しない。

マツバとグリーンがなにか意見を交換しようとして目を合わせたその時だった。

「マツバさんー！」

開けっ放しの扉から、一人の少女が飛び込んできた。赤の目立つ振袖に、かんぎしで止められた髪、彼女がエンジユシテイの信仰と文化を象徴するものの一つである舞妓であることは説明するまでもなく明らかだ。

だが、彼女を舞妓と表現するには多少の違和感もあった。振袖は着崩れ、足元には泥がついている。かんぎしはなんとか髪の毛に刺さっていると言っていていいような状況で、髪の毛はバサバサと乱れている。何より、額に汗をかき、口を開けて肩で息をしているところなど、彼女らが人に見せていいものではなかった。

「コモモか」

マツバは少女の名前を呼んだ。同じ信仰を持つものとして、マツバとエンジユの舞妓らは親交を持っている。

コモモと呼ばれたその舞妓は、息を切らせながら続ける。

「あの男が、スズのとうに」

その報告にマツバは目の色を変えた。当然、それを想像していなかったわけではない、むしろ、ポケモンセンターを落とした後には、エンジユで最も神聖なその場所に向かおうともしていた。

だが、実際にそれを情報として知らされれば、心が動くのも当然。「行きましよう」

冷静に、グリーンがそう言って一步マツバの先を行った。そして、なんとか冷静を保とうとするマツバもそれに続く。

だが、マツバは顔を伏せるコモモの前で一旦足を止める。

どうしたんですか、とグリーンがそれを問おうとしたが、それよりも先に、マツバは口を開く。

「何があつた？」

マツバは、コモモの利き手にモンスターボールが握られていることに気づいていた。

握られたモンスターボール、そして、ポケモンセンターに飛び込んできたこと、彼女が手持ちを戦闘不能にしているのは明らか、そしてそれは、誰かと戦い、そして敗れたということ。何かを、守れなかったということ。

コモモは、マツバに顔を見せないようにうつむき、声を震わせながら答える。

「踊り場を」

そう言つて一つしゃくり上げるように息を吸つてから、続ける。

「あいつら、踊り場を」

震える声だった、怒りと、悲しみと、悔しさが、およそネガティブな感情のすべてがこもっているような、そんな声だった。

それは、彼女らの本拠地であるエンジユの踊り場が、信者達によって破壊されたのだろうという想像を容易にできる声だった。

マツバは、それに声を無くした。

彼は、エンジユの舞妓というものがホウオウ信仰の中でどれほど重要な役割であるかを最も理解している人間の一人だった。スズのうち、そして焼けた塔を中心としたホウオウ信仰の中で、ホウオウを歓迎し、それを呼び出す伝説を形として受け継いでいるのがエンジユ舞妓だ。

踊りが踊れるだけでは駄目、ポケモンを従えるだけでは駄目、美しただけでは駄目、ホウオウを心の底から信じているだけでも駄目、誰でもがそれになれるわけではない、選抜と、過酷な努力の末にあるのが彼女たちなのだ。

「行くう」

マツバはコモモから視線を切つてグリーンに言った。その直後に、コモモが崩れ落ちたような気もしたが、彼はもはやそれに気を止めなかった。

連れてきたジムトレーナーたちにポケモンセンターを防衛を命じると、マツバは早足でポケモンセンターを後にし、グリーンもそれに続く。

あつていいはずがない。許されていいはずがない。

神を否定することと、年端も行かぬ少女を絶望の中に叩き込むこと、それらが線であつていいはずがない。神を信じないことが、そんなに特権あることなのか。

「あの野郎」

どちらかがそう呟いた。

☆

マツバは、その光景を見て再び言葉を無くした。

スズのとうにつながる『スズねのこみち』その入口を守護するその僧侶は、マツバが知る限り、自分自身を除いてこのエンジュで右に出る者のいない実力者のはずだった。

マツバは彼の強さを信頼していた。クワノがどれだけ実力あるトレーナーだとしても、スズのとうを守る守護者もまた実力者であり、その戦力は拮抗しているものだと思っていた。

だが、その僧侶は、衣服を泥に塗れさせながら、地面に突っ伏して

いた。

グリーンは、それをなんとも言えぬ感情で眺めている。

彼は、マツバほど楽観的な考えをしていなかった。グリーンはクワノの実力を知っていたし、その狂気的な破壊衝動も経験している。並のトレーナーが敵う相手では無いだろうと、彼は半ば予想していた。だが、それを伝えることが出来なかった、どうしてそれを伝えることができようか。

そこに乞食のような巨人はいなかった。まさかここまで来て引き返したとも考えられない。『教皇』クワノ一世がスズねのこみちを抜けたのは明らかだ。

だが、二人も同じようにそれを追うことは出来ない。なぜならば、その道を塞ぐように、薄汚れた服を着た三人の男が立ちふさがっていた。

男たちのうち一人、丸メガネをかけた痩せ型の中年が一步前に出てグリーンたちに語る。

「我らは『司祭』、『教皇』クワノ一世の教えを理解し、人々へ伝える者」マツバはそれ以上聞くことなく『シャドーボール』と叫ぶ。

それと同時に繰り出されたゲンガーが、目にも留まらぬ速さで『シャドーボール』を司祭に向かって放つ。

だが、それは司祭をかばうように現れたポケモン、キリンリキによって防がれる。キリンリキの下半身に存在するしっぽのようなもう一つの顔が、『シャドーボール』を飲み込んだのだ。

「愚かな」と、司祭はマツバを鼻で笑って続ける。

「今日は記念すべき日、我らが『教皇』クワノ一世が、ホウオウを神の座から引きずり下ろす正しき日。偽りの神を崇める愚か者に、その邪魔はさせせん」

これはまずいなと、グリーンは少し表情を歪める。

マツバに対してキリンリキ、この対面は明らかにマツバがゴーストタイプのエキスパートであることを意識した選出だ。ノーマルタイプとエスパータイプを複合するキリンリキにはゴーストタイプの攻撃が効かず、キリンリキのエスパー攻撃は毒タイプでもあるゲンガー

には効果が抜群だ。

勿論、マツバほどのトレーナーがただ相性が悪いからと言って無様に敗北することはない、器用なゲンガーを巧みに操りそれに対応するだろう。

だが、おそらくこの三人の『司祭』は、皆同じようにマツバに対して対策のある者達だろう。そうなれば、少なくとも瞬殺という訳にはいかない。

グリーンは、相棒であるサンダースの入ったボールに手を伸ばした。ここは自分が司祭たちを蹴散らすのが最も効率の良い行動だろう、司祭達も、自分の存在は想定外であるはずだと考えたのだ。

だが、マツバは全く違うことを考えていた。

「行け」と、マツバがスズのとうを見つめながらグリーンに言う。

「ここは、俺がなんとかする」

表情こそ変えなかったが、グリーンはその提案に驚いていた。

勿論、マツバならばこの三人を相手にしても負けることはないだろうと思っている。だが、それ以上の感情がこのその男にはあるはずだった。

マツバは、エンジュの民としてホウオウ信仰を心の底から信じている男。故に、その信仰を軽視し、スズのとうに向かったクワノに対し並々ならぬ怒りがあるに違いない。だからこそ、マツバが自分を先に活かせることが予想できていなかった。

だが、一瞬の内にグリーンはマツバの意思を理解して息を呑んだ。

マツバは、グリーンの高さを信頼したのだ。

一秒でも早くクワノを引き止めたいこの状況、彼は殿堂入りトレーナーであるグリーンに、それを託した。

彼はグリーンの実力を自分よりも上だと判断していた、今ここで自分がこの三人を引き止めてでもクワノに差し向けるべき最高戦力、それがグリーンだったのだ。

冷静な判断だった。そして、限りなく正しい判断だった。信仰を軽視、破壊され、妹分である少女の屈辱を目の当たりにしてもなお、その判断を下すことのできる素晴らしい精神力を、彼は持ち合わせてい

た。

瞬間、グリーンは地面を蹴った。

マツバの判断を、ムダにするわけにはいかなかった。信頼を、期待を、怒りを、グリーンはその胸に感じている。

司祭の一人が、その進路を塞ぐようにポケモンを繰り出した。巨大な体格に分厚い脂肪、ノーマルタイプで特殊防御力に優れるカビゴンが現れる。

『とおせんぼう！』

その巨大な体格は、一人の進路を塞ぐのに十分だった。『司祭』を名乗るだけあって、『教皇』のサポートに関しては理にかなった行動ができるようだ。

だが、マツバはその上を行く。

繰り出されたカビゴンは、その横を駆け抜けようとするグリーンに目もくれず、体を捻ってマツバのゲンガーに向かって『メガトンパンチ』を繰り出した。だが、実体のないゲンガー相手にそれは通用せず、地面を強く叩く。それを中心に起きた地響きが、季節が来ればスズねのこみちを彩る木々の揺らし、その葉が落ちる。

「なんと」と、リーダー格の司祭がそれに驚いた、カビゴンを繰り出した司祭も、まだその理由を理解できていない。

「追え！」

三人目の司祭がボールを手に取り、ヨルノズクを繰り出した。すでに遠くなりつつあるグリーンを、ヨルノズクが空から追おうとする。

だが、ヨルノズクもグリーンを追うことが出来なかった。彼もまた振り返ってマツバとゲンガーを見る。

その時になって、ようやく彼らは理解した。

マツバとゲンガーは、カビゴンに対して『ちようはつ』ヨルノズクに対しては『くろいまなぎし』を放ったのだ。

『ちようはつ』そして『くろいまなぎし』それらは共に相手の興味をこちらにひかせる補助的な技、器用で素早いポケモンであるゲンガーの得意技だった。

「たった一人で、我ら三人を相手にすると？」

リーダー格の司祭が、一步マツバとの距離を詰めながら、血走った目で言った。

『教皇』クワノ一世の腹心として、一匹のネズミを神聖なる舞台に紛れ込ませることは、本来ならばあってはならないこと。

だからこそ、彼ら司祭は、この町のホウオウ信仰の中心人物の一人であるマツバの無様な敗北を捧げることは、『教皇』に対する最低限の贖罪だと感じている。

キリンリキも、カビゴンも、ヨルノズクも、同じように狂気の目線で、ゲンガーを見ていた。

小さくなるグリーンの中を一瞬だけ見やってから、マツバとゲンガーは三人を相手に戦闘態勢を取る。

「何なら、牧師でも呼ぶか？」

その言葉と、ゲンガーが動き出すのは、ほとんど同時だった。

☆

「やあ、やあ、やあ」

スズのとう、最上階。

ホウオウのために開かれた舞台から広がる絶景を眺めながら、クワノは両手を広げて笑った。右手には『にじいろのはね』が握られ、それは、高く登った太陽の光を受けて、風に揺れる度に、きらめくべき光の色を気まぐれに決めている。

「素晴らしい光景だ」

それは、クワノの本心だった。偽りの神の為に捧げられたこの光景を美しいという事は、一見、彼の思想と矛盾しているように聞こえる。

だが、彼はその矛盾に後ろめたさを感じる事など無かった。

彼からすれば、この世界は偽りの神話が支配する汚れた世界だろう。だが、そのすべてが穢れてはいないことを、彼は否定しない、否、彼はそう信じている、心の底から。

この世界すべてが穢れてはいない証拠に、この世界に神と神の子が現れたのだ。故に、この世界にも美しいものはあり、慈しむべき花も存在している。

偽りの神を信じた人々の努力を恨むことはない、彼らはただ無知だっただけ、不安だっただけ、恐れただけ、力がなかっただけ、愚かだっただけ。

この美しい光景を騙し取った偽りの神とその物語こそが恨むべきものなのだ。

この美しい光景を、新たな世界でも作るのだ。本物の神と、神の子に捧げるべきこの美しい光景を。

強くなり始めた風が、クワノの外套をバタバタと鳴らした。こびりついて乾いた泥が少し巻き上がり、それもまたすぐに風の向こう側へと吸い込まれる。

いつの間にか、気まぐれを纏っていた『にじいろのはね』も、風の中に溶けていた。だが、クワノはうろたえない。

太陽の光を受けて虹色をまとった美しいポケモンが、クワノの元に降り立とうとしていた。

縄張りの中に敵意を持って乗り込んできた人間に対し、その、神とも呼ばれるポケモン、ホウオウは威嚇するような鳴き声を上げた。

「なんと醜いのだろう」

ホウオウ信仰の中にいる人間ならば、思わず跪きそうになるその光景を目の当たりにしながらも、クワノは侮蔑の表情でホウオウに吐き捨てていた。

「恐怖と畏れで人を支配し、崇められることでその本能すらも無くし

たポケモンが、まさか本当に、自分が神だとも思っているのか」

いつまで経っても立ち引かぬ人間に対して戦闘態勢を取ろうとしていたホウオウに、クワノはボールを投げる。

スズのとうが一瞬大きく揺れた。現れたポケモン、レジロックの重みに傾いたのだが、その中心に連なる揺れる柱が、その揺れを吸収した。

ホウオウは、レジロックに対して『せいなるほのお』を吐き出して攻撃した。質量を持ちながら、そのすべてを燃やすわけではない不思議な炎は、レジロックに襲いかかる。

だが、レジロックはそれを苦にすることなく受け、両手をホウオウに向けていくつかの岩を発射する。

『とおせんぼう』と、クワノが指示した。

ホウオウの退路を断つその技は、ホウオウを倒してその信仰を破壊したいクワノの執念がこもっていた。

「やあ、やあ、やあ」

スズのとうの最上階まで駆け上がったグリーンが見たものは、グリーンを見て不気味に笑う『教皇』クワノ一世と。

美しい羽をボロボロにし、舞台の上に突っ伏して荒い呼吸を繰り返す伝説のポケモン、ホウオウの姿だった。

痛ましい姿だった。だが、グリーンはそれを不思議には思わない。クワノの実力ならば、それを成すことが可能だろう。

「望まぬ意思がここに現れたことは、私のささやかな願いを、叶えることができなかった子供たちがいたということ。だが、神の意志による再会を、私は歓迎しようと思うのだ」

ホウオウに背を向けグリーンに語るクワノは再び「やあ、やあ、やあ」と言い。何も返さないグリーンを確認してからさらに続ける。「この偽りの神への然るべき制裁、その光景を、私しか脳裏に焼き付けることができないことを、いささか味気なく感じていたところだったのだ」

クワノは、その言葉の先を続けようとした。

だが、それはその先は紡がれない。

クワノがそれを言うよりも先に、グリーンがポケモンを繰り出したのだ。

クワノが悦に入っているそのスキに、グリーンは彼を『かなしばり』や『サイコキネシス』で拘束しようとした。話し合いは通じぬ相手であることを、彼は知っていたから。

だが、優れたトレーナーでもある『教皇』クワノ一世も、それに反応しボールを投げる。もはや彼の意識はホウオウに向かっておらず、それは、ホウオウが実質的な戦闘不能状態であることを示していた。「『だいはくはつ』」

鋼鉄の体を持つレジの一体、レジスチルは、クワノの指示に従って

中央に存在するいくつかの目のような光をきらめかせる。

だが、優れたトレーナーであることは、グリーンも同じ。

『リフレクター！』

それを読んでいたグリーンは、繰り出していたフーデインに指示した。あくまで拘束を狙いながらも、クワノがそれに反応する優れたトレーナーであること、そして、おそらく『だいはくはつ』のような場を巻き込む攻撃をしてくるだろうと、彼は読み切っていた。

レジスチルを取り囲むように、半透明のエネルギー体の板が出現したのと、レジスチルが『だいはくはつ』の命令を全うしたのはほとんど同時だった。

爆発音とその衝撃、そしてそれによって生まれた爆風が『リフレクター』を揺らし、割り、損傷させる。殿堂入りトレーナーとその主力が全力で繰り出した『リフレクター』をそのような状態にする光景が、その『だいはくはつ』のエネルギーの凄まじさを物語る。

だが、『リフレクター』によって、フーデインとスズのとうへの損傷は考えられる限りの最小限で抑えられていた。殿堂入りトレーナーとその主力の全力は、『教皇』クワノ一世の思惑を見事に阻止している。

「やあ、やあ、やあ」

その衝撃の向こう側、クワノはそれに嬉しげに笑っている。

「聡明な少年は不思議なことをする」

彼の中で、グリーンが存在はスズのとうから見渡せる光景と同じ、この穢れた世界の中にある僅かな希望、小さな花。並の相手であれば飲み込まれたであろう自身の実力についてくることすら嬉しくてたまらない。

だが、同時に彼の行動を不思議にも思っていた。

「てつきり、聡明な君はこの偽りの神に対する愚かな信仰の外にいる人間だと思っていた。カントー人である君にとって、この塔にはかけらほどの信仰的価値もないだろう。それに、この塔を守らなければ、

もつと自分たちへのダメージを抑えられたのではないのかね？ 否、そもそも、この信仰を破壊しようとする我々に対して、君が危険を犯す必要もないだろう。正義が義務であることに縛られているのかね？」

その指摘は、おおよそ正しいものだった。

カントー出身であるグリーンは、ジョウトのホウオウ信仰の外にいる人間だった、そして、レジスチルを覆うような『リフレクター』の張り方をしなければ、もつとフリーデンへのダメージを抑えられたことも事実。

「仕方ないだろ」と、グリーンはクワノの動きに注意しながらそれに答える。

「ここを守りたい奴らがいるんだから」

マツバ、コモモ、そして、つながりなど無いエンジュシテイの住人達を思い浮かべながら、グリーンは言う。

彼らが信じたマツバが自分を信じた。塔を守りたいと思うことにこれ以上の理由はない。それが彼の正義なのだから。

「愚かな」

『教皇』クワノ一世は、グリーンへの答えに不満なようだった。

「それは、偽物の信仰に踊らされている人間に踊らされているに過ぎない。聡明な君らしくない、愚かで、救いようのない行動だ。否、聡明である君にそのような愚かな選択を選ばせてしまう偽りの神に支配されたこの世界が、やはり穢れているということなのだろう」

外套を揺らしながら、クワノは二匹目のポケモンを繰り出す。動きの少ないその行動に、グリーンはそれを事前に抑えることができなかった。

『きれいとうビーム』

現れたポケモン、レジアイスが、フリーデンに向かって光線を放つ。だが、すでにそこにフリーデンはいない。

『ニトロチャージ』

グリーンが新たに繰り出したウィンディが、炎を体にまといながらレジアイスに体当たりする。

クワノは、グリーンンのポケモン交代の素早さに、一瞬驚きの表情を見せた。

だが、グリーンンからすればそれは造作も無いこと。

『教皇』クワノ一世は、その言動こそ狂気に苛まれ意味不明だが、ことバトルという面においては普通の、否、並のトレーナーでは生涯手に入れることのできない技術と理を持ち合わせている。勿論、彼のそのような二面性こそが彼をここまで制御不能の存在にしているものであり、もし彼がたいして戦力も技術も持ち合わせないトレーナーであつたら、その狂気をここまで発揮することはできなかっただろう。狂気を推し進めるには、必ず武力を必要とする。

つまり、従えているポケモンこそ異質だが、クワノはことバトルにおいては『限りなく優れている正常』なのだ。

『限りなく優れている正常』というもの、それはグリーンンの領域であり、グリーンンは一度その頂点にも立ったトレーナーである。従えているポケモンを理解してしまえば、後はそこに『限りなく優れている正常』を当てはめるのみ。

レジロック、レジスチル、レジアイス。この三体がクワノの手持ちだと断定した時、特殊攻撃力で戦うエスパータイプであるフーディンに対して、有利な対面を作れるのは鋼タイプのレジスチルかレジアイス。『だいたくはつ』によってレジスチルを失っている今、レジアイスしか残っていない。

ならば物理的な攻撃を得意とするウインディを繰り出し『ニトロチャージ』で自身の速さを強化しながら攻撃する。クワノの中に僅かに残っている理を、グリーンンは的確に予想した。

そして、それさえわかれば。

『だいたくはつ』！』

『ほのおのうず』！』

クワノの指示、対戦において相手にプレッシャーを与え、『限りなく優れている正常』なクワノの領域に引きずり込むための『だいたくはつ』が完遂されるより先に、ウインディは口から炎を吐きだし、レジアイスの周りに『ほのおのうず』を作り出した。相手の周りを炎で覆

い、動きを制限する技だが、グリーンの目的はそれではない。

瞬間、レジアイスの体がふわりと浮き上がり、『ほのおのうず』によって空へと巻き上げられる。ハウオウが舞台に降り立つために開かれているそこを、異質のポケモン、レジアイスが舞う。

そして、ようやくレジアイスが『だいはくはつ』の指示を敢行したのは、彼が空へと巻き上げられたからだだった。当然誰にもダメージが通らず、スズのとくとグリーン達を少し強い爆風が襲うのみ。

それこそがグリーンの狙いだった。『ほのおのうず』によってレジアイスを空へと巻き上げ、再び『だいはくはつ』によるダメージを抑える。クワノのトレーナーとしての動きを完全に予測し、その思惑を再び阻止した。

「もう一つ、理由がある」

空から落下しようとしていた戦闘不能のレジアイスを少し余裕のない表情でボールに戻したクワノを指さしながら、グリーンは続ける。

「気に食わないんだよ、お前らが」

それは、グリーンの中に渦巻く様々な感情を一纏めにした言葉だった。

悲しみもある、憎しみも、怒りも、戸惑いもある。

どうしてそんな感情が心の中で暴れなければならないのか、どうしてそれらを失わなければならないのか。彼ら、彼女らは信じていただけなのに、シンオウ神話を、ホウオウ信仰を、『アンノーン手稿』を、神学者クワノを、そして、魂の救済を。

気に食わないのだ、クワノの存在が、行動が、グリーンたちには気に食わない。

それは、クワノというトレーナーを暴力と言う観点から同じ目線で、否、見下ろすことのできるグリーンだからこそ持つことができる感情だった。いや、例えばクワノの暴力がまだ届いておらず、その恐怖を知ることもない海の向こうの地方にいる自意識過剰なトレー

ナー等はそう思うかもしれないが、それも実際にクワノの恐怖を目の当たりにすれば引つ込む虚勢だろう。

グリーン言葉に、クワノは一瞬あつげにとられたようだった。

だが、すぐさまに彼は「やあ、やあ、やあ、やあ」と息巻いて、更に大きく笑う。

彼は、グリーンのお考えとは真逆のことを語った。

「それこそが、恐怖なのだ」

両手を広げ、続ける。

「それこそが、大いなる知性を目の当たりにした愚人の発想。本物の神を、本物の神話を目の当たりにした愚人は、今まで自分が信じていたことを否定されることを恐れる。偽りを、偽りだと指さされることに恐怖し、それを否定する。君は聡明な少年であるが、それは仕方のないことなのだ、それこそが人が人であることの証明、その防衛本能こそが、人間が人間たる所以。君が気に病むことはない、君が思うのは、この世界が穢れていることの証明でもあるのだ」

一拍おいて、更に続ける。

「ついに、この世界が我々の否定を始めた。それがこの世界が作り出した防衛本能、正しき神話の一部である我々への攻撃なのならば、つまりこれは『聖戦』なのだ。我々がこの世界に打ち勝てるかどうか、神と、神の子は眺めているだろう。ああ、この場に『聖騎士』がいないのが残念でならない。だが、私の力でこの戦いを制する事を、神と神の子は望んでいるのだろう」

クワノは次のポケモンを繰り出した。当然グリーンはそのポケモンがレジロックであると予想し、その出現を待つ。『ニトロチャーシ』によって脚力を底上げしたウインディを居座らせ、先手を取るつもりだ。

だが、繰り出されたポケモンは、レジロックではなかった。レジの

ように直立型のポケモンではない、四足で舞台を踏むそのポケモンへの理解に、グリーンは一瞬を要した。

天に向かって裂けるような鳴き声が、その舞台に響いた。

三メートルを優に超えているであろうその体格は、人間の中でもかなり大きな体格を持つクワノと比べても子供一人分ほど抜けている。その重さに再びスズのとうが少し揺れ、床はミシミシと音をたてる。レジロックやレジスチルに比べてもその重圧は重いかもしれない。白い体とヒゲを持ち、後光を思わせるような装飾が、胴体に存在していた。

「アルセウス」

その語尾に疑問を持たせながら、グリーンが呟いた。

アルセウス、それはシンオウ神話の中で語られる幻のポケモン、曰く宇宙を作ったとか、曰くもう二つの伝説のポケモンを作り出したとか、あまりにもスケールの大きな神話から創造ポケモンとも、その神話の荒唐無稽さから想像ポケモンとも呼ばれる『そうぞうポケモン』だった。まさに伝説のポケモン、それが本当に存在しているのだとこうして目の当たりにしているだけで世紀の大発見、そんなポケモン。「やあ、やあ、やあ」と、クワノは嬉しげに笑う。

「本物の神話を知らぬもの相手にこのポケモンを見せたのは初めての事だが、さすがは聡明なる少年だ、その知識の深さには敬意を覚える。そして、君ならばわかるだろう。シンオウ神話の中で最上位の神であるこのポケモンが、こうして一匹のポケモンとして私に従っているところこそが、シンオウ神話が偽りの物語であることの証明。シンオウ神話が、ただ力が強いだけのポケモンを恐れた愚者が、それを祭り上げることによって自分たちの存在を正当化しただけの存在。それは目を覆いたくなるような偽証、ただ暴力と恐怖だけで神域に行けるといふのなら、恐れ多くもこの私でさえも神を名乗ることができよう。だがそうではない、私は私が神ではないことを知っている。この力を私に与えた神と神の子こそが、本物の神であり、彼らの歩む道こそが新

しい神話であり、新しい世界であることの証明なのだ」

アルセウスが動く。

『じしん』

その巨大な体格が、ウインディを上から踏み潰す。

四足の中では体の大きい方であるウインディを上から踏み潰すことのできるその体格は、ウインディに『じしん』のような衝撃を与える。

タイプの相性は最悪、クワノはその一撃で倒したものと確信する。

だが、ウインディは体を大きく降ってアルセウスを振り払った。バランスを崩しながらも器用に着地したアルセウスは、自らの足を蝕む張り付くような痛みに気づき、クワノもその動きからそれを察する。

『ニトロチャージ』で素早さを底上げしていたウインディは、アルセウスが自身を踏みつけようとする寸前に、グリーンの『おにび』の指しを全うした。

それによって『やけど』状態になったアルセウスの攻撃は万全の状態ではなかった。故に、ウインディはギリギリながらも持ちこたえた。

『バークアウト』

アルセウスと距離をとったウインディは特殊な遠吠えをあげる体勢を取る。アルセウスにダメージを与えながら、相手の特殊攻撃力を落とそうとするグリーンの戦略だった。

状態異常『やけど』によって攻撃力を、『バークアウト』で特殊攻撃力を下げ、脅威を少しでも少なくすることがグリーンの目的だった、先程の『じしん』一つとっても、アルセウスの脅威は十分に感じている。

だが、その目論見は失敗に終わる。

『じしんそく』

ウインディが『バークアウト』を放つより先に、アルセウスの攻撃がウインディに届いた。その巨体に見合わぬ『しんそく』のスピードでの攻撃に、ウインディは倒れる。

『やけど』を負っていながらもその攻撃力、やはり一筋縄に行く相手

ではない。

「よくやった」

そう言いながら、グリーンはウインディをボールに戻した。

ウインディができる仕事は十分にこなしたと、グリーンは判断していた。贅沢を言うのなら『いかく』でもう一段階相手を萎縮させたかったが、それは言っても仕方のないこと。

グリーンはすでにアルセウスの能力の高さを見抜いている。流石は神と呼ばれたポケモンだけあってスキがない。

だが、倒せないわけではない。

一対一の対戦でアルセウスを破るのは難しいだろう、現にウインディはやられてしまった。だが、役割を分担し、それぞれの持ち味を活かせば、倒せない相手ではない。

クワノは笑いながらグリーンを称賛する。

「素晴らしい勇気だ、かつて神と呼ばれたポケモンをも前にしても、己の知識を信じ、それに命をあずけるだけの度量を持つとは」

「あわよくば」と、続ける。

「君がこのポケモンを倒すことを、私は期待している。それこそが、アルセウスが神などではなく、優れたトレーナーが相手であれば地に膝をつくようなただの生物、ポケモンであることの証明になるのだから」

次のボールを宙に放り投げながら、グリーンは多少の気味の悪さを感じていた。

グリーン自身も、アルセウスを一匹のポケモンとして考えようとしていた。かつて神と呼ばれていようが、今自分の目の前に立っているのはただ一匹のポケモンだと考えることで、それを打ち破る戦略を作ろうとしている。

今この時点で、クワノとグリーンは、アルセウスに対して同じイメージを持っている。

その神は、ポケモンなのだ。

グリーンは、新たにフリーデインを繰り出した。両手のスプーンをアルセウスに向かって突き出し、戦闘態勢を取る。

『シャドーボール』

その命令に、アルセウスは忠実に身を構え、額の前に球体のエネルギーを作り出す。

クワノの指示は的確だった。『やけど』状態では皮膚が引きつり万全な状態での攻撃ができなくなるが、『シャドーボール』のような特殊攻撃ならば話は別。しかもそれは、フリーデインの弱点を的確に突く。グリーンはアルセウスの器用な技選択に驚いた。

だが、アルセウスはその攻撃を打つことができなかつた。アルセウスが作っていた球体はふわりとどこかに消え、彼は戸惑うように首を振る。

「なるほど」とクワノが呟く。

『アンコール』かね」

クワノは、フリーデインの催眠術を見きり、それでいて落ち着いている。彼は、ここに来てアルセウスが神としての威厳を取り戻し、自らに反抗したのだという発想を全くもっていないようだった。

フリーデインが敢行した『アンコール』は、相手の行動を制限する催眠術の一つ。技の自由を奪い、直前に出した技しか打つことのできなくなる、使うようによつては強力になる補助的な技。

『サイコキネシス』

畳み掛けようとしていたフリーデインを、アルセウスが再び『しんそく』のスピードで蹴り上げた。フリーデインは床に叩きつけられるように吹き飛び、グリーンはそれをボールに戻す。その威力、どう考えてもフリーデインが立ち上がることは出来ないだろう。

何という威力なのだ、と、グリーンはアルセウスのポテンシャルに驚く、いくらフリーデインがフィジカルに強みがないポケモンとはいえ『やけど』の状態異常がモロに影響する『しんそく』攻撃が、まだそれ程の威力を保っている。

「なんのことはない、この巨大なポケモンの突撃を、止められるものかね」

クワノの余裕を意に介さず、グリーンは次のボールを手に取る。すでに、彼の中で必勝の手順は完成していた。

グリーンがボールを投げ、ポケモンが繰り出される。

アルセウスはまだ姿もはつきりと理解していないそのポケモンに向かって『しんそく』で突っ込む。グリーンが作り出した状況とはいえ、神のイメージとは程遠い、知性の欠片もない攻撃。

その突進に、現れたポケモンは巻き込まれる、鈍い肉の音が響き、スズのとうの床をこする音がする。

だが、その突進は、止まった。

グリーンが繰り出したポケモン、カイリキーは、自分の二倍はありそうなアルセウスの突進を、四本の腕と二本の足を踏ん張り止めた。

勿論それは『やけど』の状態であるアルセウスの力不足も関係しているだろう。だが、神の突進を、カイリキーは止めていた。

グリーンはそれに驚かない。

『あてみなげ』

カイリキーの筋肉が盛り上がり、雄叫びとともに背筋が発揮される。

ふわり、と、僅かばかりではあるがアルセウスの体が浮く。その突進を止める踏ん張りの体勢が、そのままカイリキーにとって最も力を入れやすい体勢であった。

クワノはその次を待った。後ろに放り投げるか、はたまた床に叩きつけるか。どちらにしても、その衝撃で『アンコール』の催眠状態は解けるだろう。相手の攻撃をあえて受けてから投げの体勢を作る『あてみなげ』そのものは甘んじて受け、その次にカイリキーを潰す算段を用意する。

だが、カイリキーの行動は予想外のものだった。

彼は、四本の腕を器用に使い、アルセウスの体勢をひねりながら静かに床に下ろす。

アルセウスも、クワノも、一瞬、その行動への驚きに思考が支配さ

れる。

膝が折れ、低い体勢になつてゐるアルセウスの頭部を、三本の腕が掴んでいることに気づいたときには、もう、遅かった。

『ばくれつパンチ』

カイリキーが持つ全ての筋力、技術、体重が乗ったパンチが、アルセウスの頭部に叩き込まれた。それは、恐ろしい音だった。肉が弾け、声が漏れるような、恐ろしい音。

一見、安定したダメージを与える選択だと思えた『あてみなげ』は、アルセウスの体勢を崩すことによつて『ノーガード』の状態を作り出すための布石。更にグリーンは『しんそく』の威力から、アルセウスがノーマルタイプであることをある程度予測していた。

決定的な一撃だった。並のポケモンならば、たとえタフネスが二倍、三倍あつても耐えることが出来ないような、完璧な一撃。

だが、アルセウスはそれでは倒れない。むしろその衝撃によつて『アンコール』状態から目を覚ましたアルセウスは、カイリキーを振り払いながら再び四本の足で立つ。

『サイコネシス』！

自身の失態を理解したクワノが、それを取り戻そうとカイリキーの弱点をつける攻撃を指示する。

だが、それはアルセウスには届かない。アルセウスに他の生物の常識が通用するかどうかはわからないが、アルセウスは『こんらん』し、足取りはおぼつかなく、ふらつきながら立っているのがやっとという風だった。

『クロスチョップ』！

ダメ押しの指示。

カイリキーは今度は鍛え上げられた脚力を発揮し、床を蹴つてアルセウスに向かつて跳躍する。

そして、鍛え上げられた両腕による『クロスチョップ』が、アルセウスの喉元に炸裂した。

その攻撃で、さすがのアルセウスも膝を折った。床に突つ伏し、時折痛みに呻くような声を上げながら、荒い呼吸を不規則に続ける。

グリーンは勝利は明確だった。カイリキーはすぐさま元の位置に戻り、クワノの次を待つ。

異様な光景だった。

神と呼ばれた二つのポケモン、ホウオウとアルセウスが、二人の人間の前に敗北し、命を取られる立場にある。

本当に、彼らを神と呼んでいいのだろうか。

それを考えてはならない、とわかつてはいながらも、グリーンは思想をそれが支配する。

あの時『ばくれつパンチ』で『こんらん』したアルセウスの動き、あれはまさにポケモンそのものの動きというより無い。グリーンが持っているポケモンへの知識が通用し、同じように作用した。グリーンの中のポケモンと言うカテゴリーの中に、アルセウスは収まる存在だった。

その考えを見透かしているかのように、クワノが語る。

「聡明なる少年よ、これでもまだ、このポケモンが神であると言えると思うかね？ 我々の前にひれ伏し、後はその死を待つのみを彼らを、どうして神と崇める必要がある？」

グリーンは、どうにかしてそれを否定したかった。

優れたトレーナーとして、彼らを上回った事実を変えることは出来ない。その中で『教皇』クワノ一世と同じ視点を持つことが心の底から嫌だった。

「お前が」と、そこまで言いかけて、グリーンは再び口をつぐんだ。自分が返そうとしていた言葉が、より彼を喜ばせることになるだろうと、すんでのところであつた。

グリーンは、アルセウスに対するクワノの戦略を咎めようとしていた。「お前がもっとトレーナーとしての実力を発揮すれば、わからない勝負だった」と、彼は言いかけた。

だが、それこそが、神に対する思想の矛盾そのものであった。

その瞬間グリーンは『神が人間に従うこと』『ことこそが最適であり、それを望もうとさえしていた。』

「やあ、やあ、やあ」

クワノは、アルセウスをボールに戻しながら満足げに笑う。彼は、グリーン思想の矛盾を察している。そして、それが否定しようのない真実であることも理解している。

ホウオウやアルセウスが神域の存在であることと、その神話を信仰することの是非は、実は矛盾しない観点だ。たとえばそれらのポケモンに神としての格がなかったとしても、それを信仰すること自体に罪はない。少なくとも、グリーンにとっては。

だが、その神を信仰しているものは、果たしてそれを受け入れるだろうか。彼らの信仰の根本には、ホウオウやアルセウスが神域であったという事実こそが必要であるはずなのだ。

当然、そこを割り切る人間もいるだろう。表面上は信仰心を見せているように見えても、その実、市場原理主義にまみれた現実主義者。そのような邪悪な人間は、その矛盾に心痛めない。

その矛盾を受け入れられないのは、神を、神話をより強く信仰している純粋な人間、そう、かつてのクワノ自身のように。

グリーンは、それを割り切れない。ホウオウ信仰の当事者ではないのに、否、ホウオウ信仰の当事者ではないからこそ、その信仰者にそれを託された部外者であるからこそ、それを割り切ることが出来ない。神とはなにかなどという、数千年の歴史の中で誰も答えをだすことの出来なかった考えることもバカバカしい問題に、今更頭を悩ませなければならぬ。

「どうするつもりだ」

グリーンは、クワノを睨みつけながらそう凄んだ。都合の悪いことから目をそらすように、クワノを威嚇する。

クワノからすれば、状況は最悪のはずだった。グリーンという優れたトレーナーを相手に、アルセウスと言う最高戦力を失っている。後は拘束されるのを待つのみと言っても良い状況。

その時だった、クワノの表情から笑みが消えた。

そして、不意に泥まみれの外套を翻したかと思うと、その場に膝をついて手を組み、目を瞑る。

そして、言った。

「神の子よ」

「神の子よ」

ハッキリと、クワノはそう言った。

グリーンは、それに身構える。当然、それが素直な命乞いのハズがない。こちらのスキを突いて何かを仕掛けてくる可能性に、彼は備える。

だが、その予想は、背後からの声で否定された。

「クワノ」

少女の声だった。高く、それでいて空気の中を鋭く響き渡るような、そんな声だ。

グリーンはバネ細工のようにそれに反応した。体を捻り背後を確認する。グリーンを守るようにポジションを取っていたカイリキもそれに慌てふためく。

グリーンが見たのは、白いワンピースに身を包んだ少女だった。色素の薄い肌と、金色の髪を持ち、この戦場にふさわしくない細い体。

その背後には、フードで目元を隠した少年がその少女を守るように立っている。その肩には一匹のペラップが止まり、グリーンと目を合わせて狂ったように一つ、けたたましく鳴いた。

グリーンは、跳ねるよにしてすぐさまに彼らと距離をとった。どう考えても味方ではない、少女らとクワノ、その二人から距離を取るように、最上階の出入り口、階段の側へとポジションを取る。

彼らは、それを妨害しなかった。

「ひどい有様ね」

少女が、歩いてクワノの側に近づく。

その時グリーンは、少女の後を行く少年の胸に、彼の体格には似合わぬ分厚く薄汚れた本が抱えられていることに気づいた。

すぐさまグリーンは、それが『アンノーン手稿』なのではないかと予測する。否、もうそれ以外に考えられない。

冷静に努めようと努力していたが、グリーンはその状況に混乱している。

そもそもその少女たちが不意に現れたことがまずおかしい、クワノとの戦いの中、グリーンは常にこの下位へと続く階段に注意を向けていた、マツバが援軍に来るにしろ、司祭達が襲いかかってくるにしろ、何か変化が起これる時には、必ずそこに何らかの動きがあるはずだから。

だが、そこにはなんの動きもなかったのだ。じゃあ、その少女たちは、一体どこから来たというのか。

この混乱を突かれるとまずい、グリーンは優れたトレーナーとしてそう考えていた。だから、混乱する脳内を冷静になるように努めながら、カイリキーと共に戦闘態勢を崩さない。

だが、冷静になればなるほど、この状況が最悪であるという事実が、グリーンを余計に焦らせる。

三対一、クワノがすでに無力だと楽観的な予測をしても二対一。

そして『教皇』クワノ一世のあの態度から想像できることは、あの少女の立場が少なくとも『司祭』よりかは上だということ。それを守護する少年もペラップを連れていることからトレーナーだろう。

最悪だ、勝てる希望が、限りなく少ない。

グリーンの焦りをよそに、クワノは目を見開いて少女を見つめながら言う。

『神の子』よ、私の力不足を、どうかお許してください」

クワノはその少女に許しを請うていた。膝を床についても、まだ同じような目線を持つかもしれないぬ華奢な少女を前に、その狂った男が。

「仕方のないこと、この地には神に仇なす者がいた。それに」

少女はグリーンと目を合わせる。

「さすがのお前でも、あの少年に勝つには『聖騎士』の力が必要でしょうね」

ふふふ、と、『神の子』と呼ばれた少女は笑う。

「クワノ、あなたはよくやった。しばらく身を潜め、『騎士団長』と『枢機卿』との合流を待ちなさい。それが、我が父の意思」

仰せのままに。と、クワノは頭を下げながらそう返す。『教皇』クワノ一世が、そのように素直な返事をできることに、グリーンは驚いた。再び、ペラップが不気味に鳴いた。

そして、少女はグリーンに笑いかける。

「はじめまして、私は『神の子』。我が父、神の知性より生まれた、本来ならばこの世界に存在しないはずの存在」

『教皇』クワノ一世と同じだった。何を言っているのかまるで理解することが出来ない。

少女は続ける。

「素晴らしい戦いでした。クワノとその下僕であるアルセウス相手に見事な立ち回り。神を思うように繊細で、神を神とも思わない大それた戦略。流石はこの世界で最高のトレーナーの一人といったところかしら」

さらに続ける。

「グリーン、私と共に新たな世界に向かいます。私の父も、あなたを歓迎するでしょう」

その言葉は、グリーンにとってありがたいものだった。

勿論、今更彼女らの仲間になるつもりなど毛頭ない。だが、グリーンの中で整理しきれしていない神の問題から、矛先がそれることがありがたい。

それに対する答えは、ハッキリとしている。

「まさか、それに同調するんですか？」

「そうね、少なくとも今のままではしないでしよう。だけど、私達の提案を聞いても、そう思えるかしら」

どうせ都合よく聞こえのいいことを言うだけだ。と、心構えるグリーンに、少女が続ける。

「私達なら、『レッドのいない世界』を作ることができる。それも完璧な、誰もレッドを知らず、誰もそれを疑わない。誰も、貴方の邪魔を

しない世界を、私達は作ることができる。この世界に存在しないはずの私を生み出したその逆、この世界に存在するはずの存在を失わせることなど、我が父にはたやすい。今のよう、ただいなくなるだけではないかね」

その言葉に、グリーンは反射的に言葉にならぬ声を上げた。それはあまりにもわかりやすい動揺だった。

二つの脅威が、今、一つの線になりつつある。

「お前ら、レッドに何をしたんだ」

怒りに声を震わせながら問う。

だが、少女はそれを無視して続けた。

『『レッドのいない世界』彼のいない人生。まさか一度も考えなかったわけではないでしょう？ レッドの存在によって最も損をした人間の一人である貴方が』

グリーンは、当然、それを否定しようとした、当然。

だがその時、舞台に突っ伏していたハウオウが、鳴き声を上げながら体を起き上がらせる。ボロボロになりながらも、その咆哮には、まだ神としての威厳が残っているように聞こえた。

怒りに血走るその目の先には、『教皇』と『神の子』があった。

「やめろー」

思わず、グリーンはハウオウに向かってそう叫んだ。どう考えてもまともに戦える状態になく、そして、おそらく勝てる相手ではない。

だが、神が人間に従うはずもなく、ハウオウは『神の子』に敵意を向けた。

「うざったい鳥ね」

まるでゴミ捨て場にたむろする小さなヤマカラスに向かって言うように気だるげに、まるで危機感なくそう呟いた『神の子』は、ハウオウから視線を切りながら、左の手のひらだけをその方向に向ける。

次の瞬間、体を起き上がらせていたハウオウが、まるで跪くように、再び舞台に突っ伏した。

決して神の子を敬ったわけではないだろう。予想外のことに驚い

ているような表情が、それを物語っている。

『じゅうりよく』か？』

グリーンはハウオウのその様子を見て、そう呟いた。軋む舞台にもがきつつも全く動くことの出来ないハウオウ、その様子は、対戦な中で強力な『じゅうりよく』を使われたポケモンの様子そのままだ。

グリーンはあくまで少女たちから注意を切らないように気をつけながらも、ぐるりとあたりを見渡した。どこかに『じゅうりよく』を放ったポケモンがいるはずだ。神の子を守るフードの少年のペラップでは、その技を打つことは出来ない。

だが、どこにもそれらしき存在はない。

そして、フードの少年の肩に乗っていたペラップが、不快な、けたたましい鳴き声を上げながら飛び上がり、上空から、ハウオウを見下ろす体勢をとった。

まずい、と、瞬間的にグリーンは推測した。すぐにサンダースを繰り出して『かみなり』を放てば間に合うだろうか。

だが、それは出来ない、少女とクワノが明らかに自分の手元に注視している。動けない。

「耳をふさげー！」

それだけ叫んで、グリーンは両手で耳をふさいだ。カイリキーも同じように二本の腕で耳をふさぐ。

ペラップの小さな体からはとても考えられないほどのエネルギー『ばくおんぱ』が放たれた。それは無防備に、それを確認することすらかなわないハウオウに直撃し、エネルギーがその体を貫き、舞台の足を固める柱を何本もへし折る。あまりにも頑丈に作られたスズのとうが、この状況ではハウオウに不利に働いている。どうせなら舞台が崩れて下に落ちたほうが、まだマシだったかもしれない。

グリーンの脳内を、甲高い高周波が支配する。頭が弾けそうになる幻聴をようやくこらえ、グリーンとカイリキーが耳から手を離れた時、ハウオウは、もはや動かなくなっていた。

守れなかった。託されたものを。

その光景に言葉を失うグリーンの視界に、モンスターボールが転

がった。

彼がその意図に気づくより一瞬先に、そのボールからレジロックが繰り出される。巨大な岩のポケモンが、太陽からグリーンを隠した。「やあ、やあ、やあ」『教皇』クワノ一世の笑い声が、まだ続けている耳鳴りの向こうからかすかに聞こえた。

『だいはくはつ』

レジロックとグリーンの間には、カイリキーが飛び込んでくる。だが、それが精一杯。何かをしようと言おう段階には入れない。

グリーンは、せめて体を丸めようと動こうとする。

巨大な岩が、光り輝きながら『だいはくはつ』する。とてつもない爆風は、舞台に倒れる鳳凰の羽根を揺らし、いたずらに七色の光を作り出す。

「我が父の教えを忘れたの？」

爆風にはためく白のワンピースを押さえながら、『神の子』である少女は、『教皇』クワノ一世に言った。

だが、クワノは悪びれもなく「やあ、やあ、やあ」と口にし、続ける。

「あの聡明な少年が、あの程度の攻撃で命絶えることはないでしょう」含みのある言葉だった。死にはしなくとも、少なくとも無事ではないだろうという推測を込めている。

砂煙の向こう側から、少女は目を背けようとした。だが、すぐさまそれに釘付けとなる。

その向こう側には、カイリキーとグリーンが立っている。そして、スズのとうの床も無事。

その前に陣取るのは、黄色く小さく可愛らしい、ピカチュウだった。だが、その目は、刺すような敵意を少女たちに向けている。

「なるほど」と、少女は小さく笑いながら言った。

『教皇』の言う通り、我が父は、彼が死ぬことを望んでいない」

「さよう、それが神の意志」と、クワノは目を輝かせながら答える。目

的を達せられなかったことすら、彼には神々しく映るようだった。

それは、ギリギリのタイミングだった。

突如として最上階に現れたピカチュウは、状況を一瞬で判断し、グリーンとカイリキーの前に飛び出して『リフレクター』を張った。レジロックの『だいはくはつ』の威力を最小にまで押さえたそれは、カイリキーとグリーンを『まもる』。

「グリーン」と、同じくスズのとうを駆け上がったマツバがグリーンのもとに駆け寄った。

「すまない、遅くなった」

大したものだ、とグリーンは他人事のように思う。それなりに強そうなたレーナーを三人も相手にしていたというのに。

「助かった」

グリーンは、ピカチュウとマツバの交互に視線をやりながらそう答える。『だいはくはつ』の危機は当然として、不利な状況も、彼らの登場で多少はましになりそうだった。

マツバは、グリーンが無事を確認すると。今度は舞台の上に横たわるホウオウを視界に入れ、声を無くす。

人生を通してまで信仰する神のその姿を見て彼がどう思ったか、グリーンには想像することも出来ない。

「すまない」とだけ、グリーンは言った。

マツバは、その謝罪に反応しなかった。

「あいつら」

普段の彼からは想像もできないほどに怒りを込めた声を出したマツバは、すぐにクワノ達に目を向けて、ゲンガーを繰り出す。

ピカチュウも、それに合わせて電撃をほとばしらせながら、小さくファイティングポーズを構えた。

少女達は、それになんの動揺も見せない。

それどころか、少女は酷くつまらなさそうにあくびをして、涙を片手で拭いながら言う。

「飽きちゃった」

もう片手は、ゲンガーに向けられている。

『シャドーボール』

その言葉とともに少女の手のひらから発せられた『シャドーボール』は、そのままゲンガーに直撃する。

それを防ぐ指示の遅れたマツバは驚く。当然だ、彼はまだ、その少女が見えない場所から技を繰り出してくる技術を持っていることは知らない。

今度は上空からけたたましい鳴き声が聞こえ、グリーン達はその方を見た。

そこでは、フードの少年の手持ちであるペラップが、大きく息を吸い込んでいる。

『まもる』！』

グリーンの指示に、カイリキーは防御の姿勢をとった。

次の瞬間、内臓が共鳴して口から飛び出してしまいそうになるほどに不快な不協和音を纏った『おしやべり』が、上空から振り下ろされる。

カイリキーはなんとかそれから身を守ろうとし、ゲンガーはその攻撃に倒れる。

だが、全く別の動きをしているポケモンが二匹。

ピカチュウとサンダースが、姿勢を低くして『おしやべり』の攻撃範囲からうまく逃れながら、少女たちに向かって突っ込む。

グリーンはこれが狙いであった。相手に翻弄されているように見せかけ、その一枚上に行く。

殿堂入りトレーナーの相棒である電気ポケモン二匹の『ほうでん』を食らってしまったえば、『教皇』だろうが『神の子』だろうが関係なく無事ではすまないだろう。そうやって捕らえる。それが目的。

二匹のでんきポケモンが少女達に向かって『ほうでん』しようとしたその時、今度は少女が両手を広げる。

『ワイドガード』

それと同時に、ピカチュウとサンダースの周りに半透明の防御壁があらわれその二匹を取り囲む。

二匹は最大の力を使って『ほうでん』したが、全体を攻撃するその

技はすべて『ワイドガード』に吸収された。

「馬鹿な」

グリーンはもう一度ぐるりと回りを見渡して少女のポケモンを確認しようとする。だが、やはりそれを捉えられない。

そして、上空のペラップの鳴き声と不快な輪唱を作るように、もう一つの鳴き声が重なる。

ピカチュウとサンダーの前に繰り出された二匹目のペラップが、小さな翼を振りかぶり『ねっぷう』で二匹に攻撃する。

小さなペラップの攻撃であったが、その威力は絶大だった。同じく小さな二匹のでんきポケモンは、それに吹き飛ばされてラインを下げる。

「帰りましょう」と少女が片手を振りながら続ける。

「『はめつのねがい』」

少女の手の振りに合わせるように、空にいくつも岩のような物体が現れる。太陽の光を受けて鈍く光っていることから、もしかしたら鉱物が混じっているのかもしれない。

「待てー!」と、グリーンは少女に叫ぶ。

だが、少女はグリーンに笑顔を見せながら「また会いましょう」と言うだけ。

「やあ、やあ、やあ」と、クワノが笑う。

「追うのだ、我らを導く、ことわりの会話を」

次の瞬間、少女も、フードの少年も、クワノも、その場から消えていた。二匹のペラップも同様に。まるでそれを生業にしているバリエードの『テレポート』のように。

「追おう」と、マツバはもう一匹のゲンガーを繰り出しながら言った。全く不可能なことではない、マツバの透視的な超能力とゲンガーの能力を使えば、あるいははできるかもしれない。

だが、グリーンは首を振った。

「駄目だ、時間がない」

その目線の先には、宙に浮かぶいくつもの岩がある。

「この技は『はめつのねがい』です、『みらいよち』のように時間差で隕石を降り注がせる大技」

グリーンも、それを実戦で見るのは初めてだった。だが、知識としてはそれを持っている。

星を呼び、いくつもの隕石を降り注がせる大技、千年に一度だけ目覚めると語り継がれる伝説のポケモン、ジラーチのみが使えるはずのその技を、少女がどうやって使ったのかはわからない。

マツバは、その意味するところを理解する。

このままでは、このスズのとうが、隕石によって破壊される。

マツバの信仰心を逆手に取った少女の策は、あまりにも的確だった。

「助けを呼ぶか？」

至極まっとうなマツバの提案に、グリーンは再び首を振る。

「人を巻き込むかもしれません、それに」

再び隕石を見ながら続ける。

「おそらく、間に合いません」

もし『はめつのねがい』が『みらいよち』と同じような時差で攻撃を開始するのであれば、その攻撃が始まるまで、後数分あるかどうか。

助けを呼び、それを待っているようでは間に合わない、それどころか、助けに来た人々を巻き込む可能性もある。

もはや、スズのとうを守るために残された手段は一つしか無かった。そして、二人ともそれを理解する。

それに、マツバは一つ息を吐いてから答える。

「できるか、俺達だけで」

グリーンは、サンダースとカイリキーを交互に見やり、最後にピカチュウと目を合わせながらその覚悟を決めた。

ピカチュウは小さく鳴き声を上げ、ファイティングポーズを作る。

「やるしかないでしょう」

ピジョットを繰り出しながら、グリーンはマツバに言った。

「そうか」と、マツバも残りのゴーストポケモンたちを繰り出しながら

答える。

二人だけで、これらの隕石をなんとか食い止める。

それは、今彼らの目から見える隕石の数を考えれば、とても可能であるようには思えない。

だが、エンジユのシンボルであり、ホウオウ信仰の象徴であるスズのとうを少しでもこの世に残しておくためには、そうするしか無かった。

二人共、その場から逃げるという選択肢は存在しなかった。マツバはホウオウとそれに関係する文化物への信仰心から、そしてグリーンは、託されたものを守ることが出来なかった贖罪の気持ちから。

当然、それが終わった時、二人共が必ず無事であるという確証はない。だが、彼らは逃げる事が出来ない。

ゆつくりと、隕石が動き始めたような気がした。二人のトレーナーとその相棒たちは、それらを迎撃するために力を込める。

その時だった。

突然、舞台の一部が激しく燃え上がった。それは、先程までホウオウが横たわっていた場所。

その光景に、二人は時間がないと知りつつも身構えた。彼らの頭の中にあるのは、先程の少女達。

だが、それは勘違いであることを、彼らはすぐに知る。

激しく燃え上がる炎の中から現れたのは、先程までそこに這いつくばっていたはずのホウオウだった。彼が翼を振るうと、それまで燃え盛っていたはずの炎が何事もなかったかのように消滅する。

二人は、その光景に釘付けになった。

『さいせいりよくか?』と、グリーンが誰にでもなく呟いた。時間を置くことで体力が自然回復する特性『さいせいりよく』が、グリーンの脳裏に浮かんでいた。

「いや」と、マツバはそれを否定してから続ける。

『せいなるはい』だ」

グリーンはその言葉の意味するところが分からなかった。しかし、それは仕方のないこと。

『せいなるはい』それはマツバを始めホウオウを深く信仰している人間だけが知る伝説。ホウオウだけが持ち得る、灰という、万物の最後の姿でありながら、すべてを復活させる神聖な灰。ホウオウ神話を語る中で幾度か登場し、あるものはそれを手に入れ幸福を、またあるものはそれを求めて破滅する、人間には扱いきれないことの出来ないつつもない力を持った聖なるもの。

一度瀕死になったホウオウが、その力によって復活することに、マツバは精神的な動揺を持つてはいなかった。それもまた、ホウオウ伝説の一部であり、真実だった。

ホウオウは、力一杯の咆哮を太陽に向けて放った。広げられた翼が太陽の光をイタズラに反射し、七色の輝きをつくる。

それに見とれている場合ではないことを、二人も、ポケモンたちも理解はしている。だが、ホウオウが作り出す神々しい雰囲気、手が動かない。

ホウオウは、上空に浮かぶ隕石を一目見やると、すぐさま舞台から飛び立ち、口から炎を吐き出した。

その『せいなるほのお』は、スズのとうを狙う隕石すべてを襲い、空は一瞬日が落ちてしまったのかと錯覚してしまうほどに真つ赤に焼けた。

だが、不思議と二人はその熱を感じない、そう言えば、先程燃え上がった舞台にも焦げ一つない。

『せいなるほのお』と、それを眺めながらマツバが呟く。

「悪しき物を焼き払い、正しきものに幸福をもたらす神聖なる火」

その伝説を目の当たりにしていることに、彼は感激している。

その炎は、しばらくエンジュの空を明るく染め上げていた。

「準備しろ」

グリーンはピカチュウと相棒たちにそう言った。それぞれのポケモンは鳴き声で返事し、隕石に備えようとする。

しかし「いや、待て」マツバはそれを制す。

「間に合わなくなるかもしれない」

グリーンは少し声を強めてそう答える。ホウオウの目的がわから

ない、否、本当にホウオウにそれを成せるだけの實力があるのかどうかを、グリーンはまだ信じきれていない。それが、彼とマツバの大きな差。

「せめて、『せいなるほのお』がさめるまで」と、マツバはその光景に釘付けになり続けながら言った。

グリーンは、沈黙をもつて、多少の不満を持ちながらもそれを承諾する。

だが、彼はサンダーすらと目配せをして、もしものときにはすぐに動けるように意思を揃えた。

やがて、空を覆う『せいなるほのお』が消える。

そこにはもう、一欠片の隕石も残ってはいなかった。

「おお」と、マツバはその奇跡に感嘆の声を上げる。

グリーンは、ぐるりと回りを見渡して、本当に隕石が一つも残っていないことを確認してから、ピカチュウ以外のポケモンたちをボールへ戻す。

助かった、そして、助けることが出来た。と、胸をなでおろす。

ホウオウは、グリーンとマツバの前に降り立ち、グリーンに向かって小さく鳴き声を上げる。

それに気がついたグリーンが一步前に踏み出すと、ホウオウは自らの首をグリーンに差し出し、頬と頬をすり合わせるように動かす。

熱く、それでいてなめらかな毛並みを感じた。

そして、ホウオウは舞台から飛び立つ。

彼はスズのとうをぐるりと回ってから、スズのとうから離れる。

抜けるような青空の向こう側に、ホウオウの姿が点より小さく消えていったのは、それからしばらくしてからのことだった。

☆

「なんと礼を言っているのかわからない」

共に『すずねこのみち』を歩きながら、マツバはグリーンに向かって言った。

「君はホウオウとスズのとうを守った。エンジュシテイの人間は、君に救われたんだ」

状況だけを考えれば、それは紛れもない真実だった。エンジュシテイの人間、特にホウオウ信仰に深い関係を持つものは、グリーンを英雄として称えるだろう。

「違いますよ」と、グリーンは答える。

「俺は、ホウオウを守れなかった。マツバさんも見たでしょう？ ホウオウは一度瀕死に、いや、もしかしたら命を落としていたかもしれない、そこから復活したのは、ホウオウの力に過ぎません。スズのとうだって、そのすべてが無事だというわけではない」

重量級ポケモンであるアルセウスとの戦い、そして、ペラップの強力な『ぼくおんぱ』によつて、スズのとうの一部は崩壊している。そのすべてはグリーンの責任ではない、だが、そのすべてを守ることが出来なかったことは、グリーンの中では事実。

だがマツバは、真剣な表情をして答える。

「スズのとうはまた修復すればいい。俺が言っているのはつまり、ホウオウに対する信仰とその歴史が、君によつて守られたということなんだ。形がなく、それでいて脆いものを、君は守ってくれた」

更に続ける。

「今後、我々はもつと実践的な訓練を中心に鍛錬を組む必要があるだろう、自分たちの信じるものすら、自分たちでは守れないようではな」
それに対して、グリーンは頷いた。すべての信仰が武力を持つべきだと考えているわけではないが、『教皇』クワノ一世のような考え方を持った存在が現れた以上、それは必要なことだろう。

「いつでも力を貸しますよ、敵役でもね」

グリーンの言葉に、マツバは少し笑顔を見せる。

だが、すぐに表情を戻してから続ける。

「あの少女は、一体何者なんだ？」

マツバは『教皇』クワノ一世については多少情報を持っていた。だが、あの少女の存在は全く知らなかった。

グリーンは、少し沈黙してから「わかりません」と答える。

「俺も、あいつは初めて見ました。ですが、どうやら『神の子』としてクワノより上の立場であることは間違い無さそうです」

その少女が見せた、超常的な力。クワノがそれまでの自分を捨ててまで『神』を信仰する理由は、それなのだろうか。

グリーンは、振り返って自らの後ろを歩くピカチュウを見た。ピカチュウはグリーン視線に首を傾げ、耳を動かす。

いつ見ても、素晴らしいポケモンだ。

そして、それを思うたびに、もしかすれば、自分が彼のパートナーであったかもしれない世界線が、どうしても浮かび上がってくる。

孫に甘い老人は、イーブイと、草むらで捕らえたピカチュウを、孫が望めば簡単に手渡しただろう。

『レッドのいない世界を作る』

少女が言った言葉が、頭の中を反響している。

そのようなこと、考えて良いはずがない。

だが、その言葉はいつまでもグリーン頭の片隅に居座っていた。

6ークリムゾンレッドの負け犬

1

その日、ワカバタウンのウツギポケモン研究所には来客があった。「うん、いつもどおり健康だね、肌ツヤもいいし牙も綺麗だ。よく手入れしているね」

彼を含めてたった二人しかいないその研究所の所長、ウツギ博士は、目の前のおおごポケモン、オーダイルの体の隅々をチェックしながら、満足げに笑って言った。オーダイルもまた、並のポケモンならば睨まれただけでひるんでしまうであろう強面を緩ませて、それに身を任せている。

その様子を、来客である赤い髪の少年、シルバーは無言で眺めていた。彼は未だに、時折自分に向かって微笑んでくるウツギ博士の神経というものが理解できていない。

かつて、シルバーはウツギ研究所に盗みに入った。それは紛れもない事実で、否定など到底することが出来ない過去である。

紛れもなくシルバー自身の意志で行われたそれは、驚くほど鮮やかな、自身の血筋をなにか含むようなものさえ感じさせるほどの成功だった。窓から侵入した彼はすばやく一つのモンスターボールを手に取り、ウツギ博士を突き飛ばすように振り払って研究所を後にした。その時に盗んだモンスターボールの中に入っていたポケモン、ワニノコが、今こうやってオーダイルへと進化している。

その後、シルバーは精神的な成長の後に、その行動を悔い、その罪を償うために再びウツギポケモン研究所を訪れた。

すべてを精算しなかった。ある少年との出会いと交流を得て、自らの過去を精算しなくなった。

当然、覚悟はしていた。法的な贖罪は勿論のこと、ウツギ博士からの罵倒も、非難の視線も、当然あるだろうと、そして、今や最も信頼のできる相棒となったオーダイルを手放すことも、どれだけそれが耐えられないことであろうと、それもまた当然と思っていた。

だが、ウツギ博士はシルバーが想像すらしていなかった決断を下す。彼はシルバーのボールから現れたオーダイルをひと目見た瞬間に、シルバーからオーダイルを引き離すと言う考えをすべて捨てたのだ。

ウツギは、ある条件付きでシルバーの罪を見逃すことにした。そして、シルバーは今日この日までその条件を守り続けている。

その条件とは、月に一度、オーダイルの検診のためにウツギポケモン研究所を訪れる、というものだった。

なんてことのない条件だった。

未だに戸惑いの残るシルバーの視線を感じながら、ウツギは微笑んでいる。

一目そのオーダイルを見たその時から、彼はシルバーという人間を信頼することを心に決めた。そのオーダイルがシルバーを見る目に、悪人に対する怯えはなかったからだ。当然、それはオーダイルもいわゆる悪に染まっていたからだと考えることも出来た。だが、ウツギはそうは思わず、そして、そう思わなかった自身の感性を信頼した。おとなしそうな見た目だが時にして信じられないほどに大胆、そんな男でなければ『ピカチュウはすでに進化したポケモンである』という仮説は立てられないだろう。

「最近、仕事の方はどうなんだい？」

突然投げかけられた質問に、シルバーは慣れない敬語で答える。

「別に、特になにかがあるわけじゃありませんよ、こいつがいれば負けることはありませんし」

シルバーは、フリーのポケモンレンジャーとして活躍していた。腐れ縁のドラゴンつかい、ワタルの紹介してくる仕事は難しいがやりがいもあり、何より、生活に困らない報酬がある。相棒のオーダイルと一緒にならば、どんなに困難なことだって苦しくはない。

「そう、それは何より」

ウツギは笑った。定期検診のたびに、オーダイルも、シルバーも、健康な姿を見せることが嬉しかった。

シルバーは居心地悪げにウツギから目をそらし、うまいこと考えた

もんだよな、と、ウツギの策略に感心する。

定期検診のたびに、そのような光景がウツギポケモン研究所では見られている。

だが、その日は違った。

その幕開けは、無遠慮に蹴り開けられたドアの音だった。

ウツギとシルバーがその音に驚き、状況を把握するよりも先に、ウツギ研究所唯一の助手である研究員の悲鳴が響く。

「騒ぐなー」と、助手ではない男の声が轟き、蹴破られたドアからぞろぞろと黒尽くめの男たちが侵入する。

シルバーは、その集団に見覚えがあった。否、見覚えどころではない。彼らは、シルバーにとっては因縁の存在。

「ロケット団」

静かに、それでいて強く威嚇するようにシルバーは低く唸った。それに同調するように、オーダイルも口端から牙を見せて唸る。

その黒尽くめの男たち、その胸元には大きくプリントされたRの文字、一見ありえないほどに間抜けな格好にも見えるが、彼らが最も勢いを持っていた組織であった頃は、そのマークはこの世で最も恐ろしいものの一つであった。

突然のことに声を失いながら、同時にウツギは戸惑いを感じていた、彼らロケット団が自分たちを襲撃する理由が何一つ見当たらないのだ。

同じようなことをシルバーも考えていた、世話になっていないことを鼻屑目に見ても、この研究所にロケット団が狙うようなものがあるとは思えない。

「おっと、動くな」

そのリーダー格であろうか、後ろの集団とは少し目つきの違うその男は、助手の腕を片手で極めながらシルバーたちとの距離を詰める。気がつけば、研究所の照明には一匹のゴルバットが繰り出されている。そのゴルバットは鋭い目つきで助手とシルバーたちを視界に捉え、臨戦態勢を取っている。

「携帯獣研究者のウツギだな？」

男の問いに、ウツギは少し震えながら頷いた。大胆な発想と行動を取ることができるとは言え、それはあくまで研究と私生活での話、ロケット団という悪を目の前にしてそれができるわけではない。

シルバーは、ウツギと助手を交互に見比べながら、なんとかロケット団のスキを見つけようと彼らをにらみつける。だが、たった一人のシルバーに対して、ロケット団は多勢、それだけの視線の中にスキは見当たらない。本来、シルバーとオーダイルの存在は彼らにとっては想定外であったはずであろうに、数でそれを制圧していた。

「なに、俺たちも手荒な真似をしたいわけではない。素直に要求に従ってくれば全ては穏便に済ませる」

まさか、と、シルバーはその言葉を信用しなかった。

「じゃあ」と、男が続ける。

「まずはポケギアを出してもらおうか、あんたも、ガキも、お前もだ」最後に腕をひねられながら指名された助手が痛みに呻く。

「そうすれば、彼を解放してくれるか？」

大胆にも、丸腰のウツギはロケット団相手にそう切り出した。

ロケット団は一瞬その提案にざわめいたが、挙げられた男の右腕とともに訪れた一瞬の沈黙の後に、男が答える。

「それはそちら次第」

それ以上は無かった。

「シルバーくん」と、ウツギは白衣のポケットからポケギアを取り出しながらシルバーに目配せした。相手の目的はまだわからないが、ここはひとまず従うべきだろうと彼は考えている。

ウツギとロケット団の男とを交互にみやりながら、シルバーもポケギアを取り出した。

助手の男も、掴まれていない方の手でポケギアを取り出す。

「床に放り投げろ」

男の指示するところを理解して、彼ら三人はポケギアを床に放り投げる、違和感のある行動だった、精密機械であるポケギアを床に放り投げるだなんて。

『「エアカッター」』

それらが動きを止めるよりも先に、男の指示によって動いたゴルバットがそれぞれのポケギアを真つ二つに分断した。『エアカッター』が鋭い切れ味を持つことを考えても、そのゴルバットの實力の高さがわかる。

「話が早い」

ひとまず目的を達成した男は、そう言つて笑いながら助手を突き飛ばした。バランスを崩した助手は驚きの声を上げながら足元をふらつかせ、真つ二つになったポケギアを下敷きにするように突つ伏す。

その間抜けな光景に一瞬目を取られたロケット団の男のスキを、シルバーは見逃さなかった。

『アクアジェット』

オーダイルはその指示を待ち望んでいたかのようにすばやく反応した。すぼめた口から鋭い水流を放つてゴルバットを叩き落とす。

「後ろに！」

ウツギと助手を守るように立ち位置を取ったシルバーとオーダイルは、ロケット団をにらみつける。数では負けているが、シルバーはロケット団を恐れない。むしろ群れることを弱さの象徴と考えている。

撃ち落とされたゴルバットはまだ体力に余裕があつたようで、濡れた羽を震わせながらオーダイルを睨みつけている。

だが、ロケット団の男はそれ以上を望まなかった。彼はポケットから小さなボールのようなものを取り出して、笑いながら言う。

「撒収！」

シルバーがその言葉に驚いているスキに、男はそのボールを床に叩きつけた。途端、研究所は煙に包まれる。

「はあ!?!」

ウツギらと壁を背にするように後ずさりながら、シルバーはロケット団の意味不明な行動を訝しんでいた。

勿論、相手が煙玉を投げたからと言つて脅威が去つたわけではない。その向こう側からゴルバットが不意打ちをしてくる可能性は十分にあるし、それに備えてもいる。

だが、煙の向こう側から驚異の気配は感じない。

『「ごこえるかぜ」』

ウツギらの安全をしつかりと確認した後に、シルバーはまだ少し残っている白煙を処理しようとした。

深く息を吸い込んだオーダイルが冷気を纏った風を吹くと、破壊されたドアから煙が抜ける。

その先は、あれほどいたのが嘘であるかのように、誰も存在していなかった。

一瞬、シルバーはその光景に面食らった、そして、突然思い出したかのように背後の窓に振り返り、それを開けてその向こうを確認する。かつての自分と同じような悪巧みを、ロケット団もしているかもしれないなかったから。

だが、そこにも誰もいない。窓から首だけだったその状況が、あまりにも無防備で危険であることにシルバーが気がついたのはその後だった。

「ふざけやがってー！」

怒りを顕にしたシルバーはオーダイルをボールに戻してロケット団の後を追おうとした、煙玉を使ったからと言って、たったあれだけの時間でそう遠くまで行けるわけではないだろう。

「警察に連絡を」と、そこまで言いかけて、シルバーは自分たちのポケギアが破壊されていることに気がつき、それを不気味に思った。まるでその状況を予測していたかのような。もし彼らがそれをしようとすれば、隣の家まで足を運ばなければならないだろう。もしそれがロケット団の思惑通りだったとすれば。

シルバーはモンスターボールを三つ放り投げた、繰り出されたのはレアコイル、フーデイン、ゲンガールの三体。

「お前とお前はこの二人を守れ」と、シルバーはレアコイルとゲンガーを指さしながら言い、残ったフーデインには「お前はこの研究所を守れ」と指示を出してから、彼は駆け足で研究所を後にした。

二十九番道路。

ワカバタウンを西に少し進んだそこで、シルバーはロケット団達の手がかりを失っていた。それは、ロケット団の撤退が徹底的な計画のもとに行われたことを意味している。

「意味がわからねえ」と、息を切らしながらシルバーが呟く。

シルバーは混乱していた。ロケット団の目的が全く読めないからだ。

まず、何の目的でウツギポケモン研究所を襲撃したのかがわからない、そして、何らかの目的があつて襲撃したのだとすれば、あそこまで簡単に人質である助手を解放する理由もわからない。人質がいなくなれば自分達が多少の抵抗に出るかもしれないことは、強さというものに敏感なロケット団ならばわかりそうなものだ。

シルバーの脳裏に、ラムダの言葉が思い浮かぶ。

新たなロケット団はかつてのロケット団とは全く違う組織である。

あるいはそれは、そのとおりなのかもしれない。だが、仮にそうだととしても、やはり彼らの目的がわからない。アンノーン手稿を奪うことと、ウツギポケモン研究所を襲撃することに、一体何の関連があるのだというのだろう。

深みに嵌りそうになっていたシルバーの思考は、ある声によってかき消される。

「許してやってくれんかのお」

少し低めの女性の声に不釣り合いな、強烈な訛りのある言葉が、シルバーに投げかけられた。

許してやってくれ、それが誰に対して誰のことを言っているのかを理解した彼は、ボールに手をやりながら声の方向に振り返った。警戒しなければならぬ相手だった。

その目線の先には、一人の女がいた。若いシルバーよりかは年上で、青い目が彼を見据えている。短髪というわけではないだろうが、浅くかぶられたキャップの中に、髪の毛を押し込んでいるようだった。

た。

「あいつら、雑魚で馬鹿で根性無しじゃがのお、その性根までねじ曲がってるわけじゃないんよ」

あいつら、というのがロケット団を指していることは明白だった。シルバーはそれを鼻で笑ってからそれに反論する。その女が何者であるのかはその時は考えなかった、ロケット団の肩を持つ時点で、敵だろうから。

「性根はねじ曲がってるだろうよ、弱いくせに群れて粹がってるんだからな」

シルバーは女の腰元を確認する、そこには傷が多いボールが三つほどあった。

はん、と、今度は女が鼻で笑う。

「ずれとるのお、弱い奴らが群れるのは自然の摂理なんよ。性根がねじ曲がっていないからこそ、生きること素直だからこそ、己の身の丈を理解して群れるんじゃ。むしろ、弱いくせに一人でいるやつのほうが、虚勢を張つとるし、性根がねじ曲がっていると思うがお」

女は笑っていた。その逆に、シルバーは表情をこわばらせる。それは、シルバーという人間の生き方そのものを、根本から否定しかねない考え方だった。

「それでも、弱いくせに粹がるよりかはマシだ」

同じことを、強調して言う。

だが、女はそれを受け流すだけ。

「ほんなら、弱いやつは何もせず弱いままで、何も出来ず波に飲まれることだけが、運命なんか？」

「違う、強くなればいいだけだ」

「なら、強いつてのはどういうことなん？ どうなったら強い？ 誰より強くなったら強いんや？ 誰が強いんや？ チャンピオンか？

ジムリーダーか？ それ以外のトレーナーはすべて弱いんか？ たった一人が生き残るまで戦えば良いんか？」

質問の連続に言葉をつまらせるシルバーに、女は追い打ちをかける。

「それで、立派なことを言うあんたは強いんか？」

シルバーは、それに何も返せない。自分は強いのだと、ハッキリと口に出ることが出来ない。ゴールドに、そして、ワタルに負けた経験がそれを言わせない。

だから彼は、論点をずらすことしか出来ない。

「ロケット団は、人に迷惑をかけている」

それは、ロケット団がロケット団である限り、絶対に否定することのできない、この議論においてそれを繰り返すことが卑怯だと感じられるほどの正論だった。正論のはずだった。ロケット団の肩を持つ女が、言葉をつまらせる魔法の旋律のはずだった。

だが、女は止まらなかった。

「それが違うんよ」

論すように、笑いながらそういう女に、シルバーは目を見開く。

「この世つてのはのお、善と悪が存在するわけじゃないんよ。この世は正義と正義、もっとわかりやすく言えば自我と自我、エゴとエゴのぶつかり合いこそが、この世を仕切る厄介な壁なんよ」

シルバーは、沈黙をもってその続きを求めぬ。

「生きるってことは、生き抜くってことは、誰だつて誰かに迷惑をかけたるし、恨まれてもおる。ただ、それがこの社会における正義か、そうではないのか、それだけの差なんよ」

「そんな屁理屈で、あいつらの存在を正当化できるとでも？」

「正当化するも何も、ロケット団の存在は消せんよ。あるいは『新しい世界』の中でも、ロケット団は生まれるじやろう」

「何を馬鹿な」

「馬鹿もなにもないわ、世界つてのはの、すべての人間を救うわけじゃないんよ」

一歩だけ、女がシルバーとの距離を詰めて続ける。

「ロケット団が悪とされたのは、それがこの社会における正義にとつて都合が悪かったからなんよ。ロケット団がポケモンでヒトより上に立とうとすることと、チャンピオンが人の上に立つことになんの違いがある？ この社会の人間はの、ロケット団員のすべてが悪で、

チャンピオンのすべてが善であると盲信しとる。それがこの世界の正義じゃから。じゃから、ロケット団は世界を変えようとする、それは、すべての人間に与えられた権利じゃろうし、この世界に生きる人間にも、それを阻止する権利がある」

じゃがの、と、もう一步距離を詰めたが、女が言う。

「あいつら、やっぱり悪にはなりきれんよ、その証拠に『ガキに手を出さなかった』ボスの教え通りにの」

一瞬、シルバーは女の言っていることの意味がわからなかった。だが、彼女の言う『ガキ』が自分自身を指していることに気づいたその時、彼の頭にカツと血が上る。

シルバーが一步女に近寄ると、牙をむき出しにして威嚇するオーダイルがくり出されたのは、ほとんど同時だった。

「あーあ、出したのお」と、女はため息を付いた。

「あいつらと違って、私は悪いからのお、ガキが相手でも手加減はできません」

女は更にもう一步シルバーに近づき、ボールを投げる。くり出されたのはキックポケモンのサワムラー。

シルバーは、サワムラーの左腕に小さなカバンのようなものが巻かれていることに気がついた、それは、トレーナーがポケモンになにか道具をもたせるときに使うもの、戦略を幅広くするための用意。

気がつけば、お互いのポケモンが接近戦を挑むような間合いにまで、二人と二匹は近づいている。

二メートルを超える体格のオーダイルは見下すようにサワムラーをにらみつける、だが、少年ほどの体格しか無いサワムラーもまた、オーダイルを見上げるようにしながら、その視線を外さない。

「お前ら、何が目的なんだ」

「は、それが知りたきや勝ち取ることじゃの」

オーダイルが動いた。

だが、サワムラーのほうが速い。

右手を振り上げようとしていたオーダイルの目前で両手を叩いて一瞬視界を奪う。そして、そのスキを突いて右足を狙って蹴りを放

っ。

「右！」

オーダイルは視界を奪われながらもシルバーの指示を理解し、右足を上げて『まもる』体勢を取った。

だが、その蹴りは来ない。

代わりにオーダイルの表情を少し歪めさせたのは、左脇腹へのボディーブローだった。

ダメージを貰ったオーダイルは一步下がり、サワムラーも距離をとって間合いを取る。

はん、と、女が鼻で笑う。

「浅いのお」

シルバーは、女を睨みつけながらも、その言葉を否定はしなかった。『ねこだまし』からの『ローキック』、それがシルバーが想定していた連携だった。『ねこだまし』で視界を奪った後に『ローキック』で足を痛めつけ、その後の手数で優位に立とうとする相手の戦略を、シルバーは『まもる』を使うことで無効化しようとした。

だが、サワムラーの『ローキック』はダメージを狙ったものではなかった。その動きを見せることでオーダイルの動きを引き出し、そのスキを突くための『フェイント』。ダメージこそ小さいかもしれないが、左脇腹へのボディーブローこそがサワムラーの本命であり戦略だった。

シルバーはそれを食らった。『ローキック』を見切り迎撃をしていれば、結果としては痛いダメージを与えられるはずだった。

あるいは、サワムラーという種族が持つキックという特性に意識を持っていかれていたのだろうか。

「戻れ！」

オーダイルを手持ちに戻し、新たなボールを放り投げる。

敗走のようだが仕方がなかった、攻撃を当てたサワムラーが望んで取った間合いは、彼の伸びる足が一方的にオーダイルを蹂躪することのできる有利な間合い。

くり出されたゴルバットは、すぐさま上空にポジションを取った。

地面を這うかくとうポケモンには取ることの出来ない高さという概念を有利に使うとする。

『ちようおんぱ』！』

「遅いー」

まだ陽は高い、それによって『あやしいひかり』の効果が落ちることを危惧した『ちようおんぱ』だったが、それはいとも簡単に見切られ、サワムラーは姿勢の低いステップでそれをかわす。そしてその低い体勢はその次に活きる。

『とびはねる』

バネのように伸び縮みする足を活かし、サワムラーは宙に飛ぶ。

地を這うしか無いはずの格闘タイプは、難なくゴルバットを攻撃圏内に捕らえ、両腕で抱えるように彼を捉えた。後は重力に任せるのみ。

『ちきゆうなげ』

真つ逆さまに、サワムラーとゴルバットは地面に激突する。毒とひこうタイプを持つゴルバットにはキックでの攻撃は効果が今ひとつだと理解した上での地面を、重力を使った攻撃。

『どくどくのキバ』！』

シルバーは『ちきゆうなげ』がその見た目に反して勝負を決めるほどのダメージを奪うものではないことを知っていた。まだゴルバットに体力は残っていると考え、その離れ際に攻撃と『もうどく』を打ち込むことのできる攻撃を指示する。

だが、それよりも先にゴルバットは吹き飛んだ。己の意思以外の力で中を舞い、シルバーの足元に音を立てて落下する。

戦闘不能となったゴルバットをボールに戻しながら、シルバーはサワムラーの握られた拳を睨んだ。固く握られた拳での弾丸のようなスピードでの攻撃『バレットパンチ』に彼が気づいたのは、あまりにも遅い。

「あまりにも遅いわ、この場に出して良いポケモンじゃないのお」

その女の言う通り、この一対一の場面だけを考えれば、ゴルバットはあまりに無力だった。鍛え上げられたレベルの差は歴然。

だが、シルバーはそれに何も返さずに次を繰り返す。ゴルバットが良いようにやられたのは間違いないが、それによつて、最も嫌うべき間合いから離れることは出来た。この間合いならば、あいつを自由に暴れさせることができる。

くり出されたオーダイルは、牙を見せながらサウムラーと女を威嚇する。

だが、サウムラーも、女もそれには怯まない。むしろ女はその姿に口角を上げる。

「まあ、良くも悪くも、勝負にしようと思つたらそいつを出すしか無いよのお」

そのオーダイルのレベルの高さを、女も認めているようだった。だが、それを恐れている風ではない。むしろ、その出現を喜んでいるようですらあった。

オーダイルとサウムラーは、お互いに視線を合わせながら少しずつ移動を始める。

当然、サウムラーは今の間合いを嫌う、足を伸ばすことこそできるが今のかなり離れた間合いではかなり無理をしなければ攻撃を通すことが出来ない。強力な打撃を当てることが出来ないのはオーダイルも同じであったが『ハイドロポンプ』などのような遠距離の攻撃を通すことができる分、彼のほうが有利だろう。

しばらく静かな位置取りの攻防が繰り返された後に、オーダイルが動いた。

『まわしげり！』

それを見るや否や、サウムラーが大きく一步踏み込み、体を回転させる。

サウムラーが振り向くように正面を向いた時、すでにその右足はオーダイルの腹部を捉えようとしていた。

見慣れぬ動きから相手を強襲する後ろ『まわしげり』、戦闘に慣れ、そして、それを捉えるスピードを持ち合わせていなければ、それを見切ることが出来ない。大きく踏み込んで距離を縮めてからの一撃、それはオーダイルを仕留めるはずだった。

だが、その巨大なワニを仕留めて戻ってくるはずだった右足は、戻ってこない。

オーダイルは、強かに腹部を打ち付けたその『まわしげり』を、両手で受け止めていた。

女とサワムラーはその光景に一瞬だけ目を見開く。そして、その次を考えるよりも先に、オーダイルがその怪力でサワムラーを引き寄せ、攻撃を受ける寸前に『りゅうのまい』によって引き上げられた集中力と瞬発力は、サワムラーの強襲を捕らえ、力比べで引き寄せするのに十分。

伸ばした足が戻ろうとする力にサワムラーは抗えない。伸びた足を捉えることよって、オーダイルは不利な中距離を無視してそのまま近距離戦に持ち込もうとする。

最初は片足を踏ん張ってそれに抗おうとしていたサワムラーが、ついに力比べに負ける。

一気に距離の縮まる二体のポケモン。

『アクアブレイク』！

シルバーの指示とともに、オーダイルは右腕を振り上げ、そして、水を纏った右腕で、サワムラーを張り倒す。

低レベルなポケモンたちが生きる平和な道路に不釣り合いな地鳴りと地響きが同時に起こる。その衝撃に、オタチ達は一斉にそこから遠く遠くであろうと草むらを揺らし、ポツポツ達もまた、その脅威から逃れようと一斉に空に逃げ出した。

手応えのある一撃だった。近距離からの『ちからづく』な『アクアブレイク』大抵のポケモンは沈めることができる。

だが、女はサワムラーをボールに戻さない。否、それどころか、女はまだ笑っている。

「甘いんよのお」

オーダイルが足元に違和感を感じたのと、シルバーがそれに気づいたのは、ほとんど同時だった。

叩き潰されたはずのサワムラーが、オーダイルの懐に潜り込み、それを持ち上げようとしている。

女が言う。

「人の懐に潜り込むってことは、それだけ相手の攻撃範囲に入るということなんよ、接近戦に持ち込みたかったんは、あんただけじゃなかったんじゃのお」

大技の反動でまだ周りの見えないオーダイルの巨体が、ふわりと浮かび上がる。

シルバーはその光景に驚く、あれだけの攻撃を食らったサウムラーのどこにそんな力が残っているというのか。

「ワレはの、勘違いしとるんよ」と、女が続ける。

「ワレは、この世界だけに自分だけが存在しとると思つとるんよ。自分だけが特別頑張つてると思つとる。自分だけが特別強いと思つとる。自分だけが特別高貴じゃと思つとる。それで、自分だけが特別に、闇を背負つとると思おとる」

歯を食いしばるサウムラーの口元から、一滴の汁が垂れていることに気づいた時、シルバーは彼女らの戦略のすべてを理解し、そして、その結末も予感する。

気がつけば、サウムラーが腕に装備していたバッグの口が開いている。おそらくそこには、一時的に筋力を増強させる『チイラのみ』が仕込まれていたのだろう。

オーダイルの『アクアブレイク』を『こらえる』サウムラーは、残る体力を振り絞ってそれを口にした。

ならばその次は。

『きしかいせい』

最後の力を振り絞り、サウムラーがオーダイルを地面に叩きつける。受け身もクソもない、頭からの落下。

体力が残り少なければ少ないほど威力を増す『きしかいせい』、本来ならば瀕死になっていたであろう『アクアブレイク』をギリギリのところでこらえたサウムラーのそれは、たとえそれがレベルの高いオーダイルであっても一撃で仕留める威力を持っていた。

どこからだ、と、シルバーが歯を食いしばる。

どこからか、あの女の戦略なんだ。

『アクアブレイク』を撃ち込まれるその寸前か、それとも『まわしげり』を受け止めたあのときか、それとも、オーダイルを繰り出したその時からなのか。

一体どこから、あの女は自分を見下ろしていたのか。

オーダイルをボールに戻し、次のポケモンを繰り出す。

だが、そのポケモンに指示を出すよりも先に、サワムラーがそのポケモンに襲いかかる。

『マツハパンチ』

きのみを使い身軽になったサワムラーの『かるわざ』からくり出される『マツハパンチ』は的確にニューラを捉え吹き飛ばす。

あくど氷タイプのニューラに対してチイラのみで筋力を引き上げたサワムラーの『マツハパンチ』、ニューラがどうなったかは見なくともわかる。

シルバーはすべての手持ちを失った。後は相手に背を向けて逃げるか、良いようにされるか、弱者に残された道はそれしか無い。

「期待はずれじゃったのお」と、女はため息を付いてつぶやく。

「あの人の血を継いどるんじゃけえ、もつとやるかと思っただんじやがのお」

その言葉は、限られた人間しか知られていないシルバーの血統について言及するものだった。

シルバーはそれに声を上げようとした、それに触れることに対する不快を主張し、その女がそれを知っていることへの異議を唱えようとした。

だが、それは出来ない。

持ち得る戦力すべてを失った今、シルバーに異を唱える権利は存在しない。何を言っても、それは抑止にはならないだろう。倒れているニューラをボールに戻すスキを見せる権利すら、今の彼には存在しないのだ。

「そんなんじや、なーんもできんよ」

その状況を揶揄するように言い、女はさらに続ける。

「親友を救うことすらできやーせん」

その言葉に、シルバーは目を見開いた。そして、自らの立場も忘れて女に吠える。

「ゴールドに何をした!」

シルバーの刺すような目線を、女は鼻で笑うだけだった。当然。

「言うわけなからうが、そんな義理もなけりや、それができるほどの強さがワレにあるわけでもない。じゃがの、場合によっては考えてやらんでもない」

シルバーが何も返さないのを確認してから続ける。

「ワレ、私らの仲間になれ」

それは、半ば脅迫のような含みを持っていた。

だが、シルバーは「誰がそんなこと」と答える。

「じゃあ、死ぬしか無いの」

サウムラーが踏み込む、ほとんど体力が残っていないはずなのに、その動きのなんと淀みのないこと。

迫りくる拳をゆつくりと捉えながら、シルバーは女の言葉を思い出していた。

なにもできない、そう、何もできず、何もできなかった。自分だけが救われ、自分が救うことはできない。

それは、弱いから。弱いから、何もできなかった。

じゃあ、強かったら何ができた。

強いつて何だ、弱いつてなんだ。

その先を考えようとしていた時、シルバーはサウムラーの拳が寸止めされていることに気づく。

「良くないくせじゃ」と、女はキャップを脱いで頭をかいた。キャップに押し込まれていたくせのある赤毛が、肩まで下りている。

「どうも、弱いやつには非情になりきれんのよのお」

女はサウムラーをボールに戻し、そして、もう一度シルバーに目を合わせる。

「まあ、ワレの気が変わりやあの、いつでも仲間にしちやるわ。私は強いけえのお、弱いやつを守る義務ってもんがあるんじゃわ」

風に揺れる赤毛をキャップで押さえ込みながら、女はシルバーに背

を向け、続ける。

「弱いやつはの、誰かに頼らにやしやーないんよ。弱いのに孤高を気取れば、そいつは何も成せず死ぬだけじゃ、今のワレみたいにの」
シルバーに一切の警戒を持つこともなく、女はその場から去った。

シルバーが倒れるニューラをボールに戻すことができたのは、その女が彼の視界から完全に消えてから少し経ってからだった。

その緊張感から解き放たれた時、彼の心の中にいくつもの感情が堰を切ったように流れ込む。

その感情の中に安堵があることに、シルバーは気づいていた、そして、彼はそれに鼓動を早くする。

「クソが」

自分自身に向けられた悪態は、彼の中に虚しく響く。

自分自身の弱さを噛み締めていた。

あの女の言うことは、正しい。

何もできなかった。

強ければ、もつと力があれば、あるいはゴールドを救うための情報を、あの女から引き出せていたかもしれない。

だが、現実には、打ち倒すべき敵に情けをかけられた。

救えない。

ゴールドは自分を救ったのに、自分はゴールドを救うことすらできない。

「どうすればいいんだ」

その屈辱は、一人で生きてきた少年を追い詰めるのに十分だった。

だが、その屈辱は、誰にも頼らず一人で生きてきた少年に、また別の道を歩ませることを考えさせてもいた。

『グリーンロケット団幹部説』

あるオカルトサイトでは、そのような都市伝説がまことしやかに囁かれていた。

都市伝説としてはそこまで有名なわけではない、例えばゲンガーは元々ピクシーであったとか、ユンゲラーは元々人間であったとか、そのようなものと比べれば、誰も知らないと言ってもいいだろう。何よりその説をおおっぴらに議論するには、実在する人物が多く関係しすぎているし、あまりにもバカバカしいからだ。

だが、全く根拠がないわけでもない、オカルトマニアがその説にハマる理由がそれだ。都市伝説が真実である必要はないが、真実味は必要であるというのが、彼らの考え方だった。

まず、ロケット団がシルファンパニーを占拠した事件がある。後に殿堂入りトレイナーとなるレッドとグリーン活躍によりそれが未然に終わったことは有名だが、その中に、不自然な証言があった一つだけあるのだ。

それは『グリーンがレッドと戦っているのを見た』というものの、勿論それは確定的な情報ではない、ごく僅かな情報を除き、一般の素人のもとに事件の情報など集まるはずがないし、それを真実だと確定する根拠もない。

だが、脳内の箱庭を未だに使い続けているオカルトマニアの一人が、それからこの説を作り出した。

単純な理屈だった。戦うことを対立することと一方的に決めつけた理屈で考えれば、自然とその説が浮かび上がる。

レッドとロケット団が戦った。この二つは対立している。ここでロケット団を悪とおけば、レッドは善だ。

ならば、その善と対立したグリーンは、悪だと、つまり、ロケット団だということになる。そうでなければ、あの事件の中でレッドと戦う理由が見当たらないからだ。

グリーンがロケット団側の人間であったのだと仮定すれば、その矛盾は解決するということ。

さらに、この説には続きがある。もう一つの謎が、グリーンとサカキの関係にあるからだ。

カントー最難関トキワジムリーダーにして、ロケット団首魁であったサカキが、ジムリーダーとして復帰後、レッドとの対戦に敗北したことでロケット団の解散を決意し姿を消したことは有名である。それは今更否定のしようがなく、勾留されたロケット団幹部からの証言からも間違いがない。

だが妙なのは、サカキはレッドに敗北する数日前に、グリーンバツジを手渡している事だ。

もし、グリーンがロケット団と縁もゆかりもないトレーナーであったのならば、サカキはそれをきっかけにロケット団の解散を決意しようなものだ。だが、実際にはサカキはグリーンをスルーしている。

当然、タイミングの問題だとか、二人の少年トレーナーに続けて負けた事が解散を決意したきっかけであったとか、そのような推測はできる。だが、このような都市伝説を考える時、そんな都合の悪い事実は無視するのが常識。

つまり、ここではこのような仮説を立てる。

元々、サカキはシルフカンパニー襲撃が失敗したときのために保険としてある戦略を持っていた。

それこそが、優秀な幹部をポケモンリーグチャンピオン、つまりは自身よりももっと強力な表の顔として君臨させることだったのだ。

その表役として、携帯獣学の権威であるオーキドの孫であるグリーンはうってつけだった。ちなみにその説の亜種としてオーキド博士そのものが、かつてロケット団が抱えていた優秀な研究員たちの一人であるというものや、そもそも四天王すべてがロケット団のお抱えであると言う説もあるが、それは割愛。

サカキは見込みのあるトレーナーであるグリーンにジムバッジを『譲渡』し、ポケモンリーグへと送り出した。だが、更に強力なレッドというトレーナーが現れたことにより、サカキは計画の失敗を確信

し、ロケット団そのものを解散した。

レッドがグリーンに打ち勝ちポケモンリーグチャンピオンとなったあの試合は、善と悪、勇者とロケット団との対立の最終章であった。それに敗北し、チャンピオンの地位とロケット団最後の計画を失ったグリーンは、ボスのいなくなったトキワジムリーダーとなり、自らの不甲斐なさを悔いながら、ロケット団の復活を待っているのだ。

都合のいい部分だけを切り取れば、どんなに馬鹿げた説だつてそれっぽく見えてしまう。現実にはグリーンがロケット団幹部だなんて事実はないし、そもそもそれだつたらその後に起きたロケット団残党によるラジオ塔占拠事件の時にグリーンが何も動いていないのは不自然だ。

だが、どれだけ冷めた目線でその説を否定しようとも、否定しきることが出来ない不自然な部分がある。その説にはあった。そのような不自然さこそが、オカルトマニアたちがこの都市伝説を楽しむ理由の一つでもあった。

一体どうして、グリーンはレッドと戦ったのか。

一体どうして、サカキはグリーンではなくレッドに敗北したことによってロケット団の解散を決意したか、裏を返せば、どうしてサカキはグリーンを見逃したのだろうか。

☆

後に殿堂入りトレーナーとなるレッドが、すべてのトレーナーの模範になるような人並みの正義感の持ち主であったのと同じように、のちに殿堂入りトレーナーとなるグリーンもまたレッドと同じように、否、携帯獣学の権威である祖父の影響だろうか、彼は人並み以上に正義感に優れたトレーナーであった。

だから彼は、ロケット団がシルフカンパニーを占領したという噂を

聞いてすぐにそこに向かった。何も恐れていなかった。旅の中で何度もロケット団のしたつぱに因縁をつけられていたが、彼はその全てに勝利していた。所詮群れることしか出来ないチンピラの集団だと、彼はロケット団を軽蔑していた。

グリーンはロケット団のしたつぱを蹴散らしながら、順調にシルフカンパニーへとたどり着いた。そこからは多少骨のあるトレーナーたちとも戦ったが、後に殿堂入りトレーナーとなるグリーンからすれば、彼らの実力も大したことはなかった。

やがて、彼は社長室へとたどり着いた。ロケット団のボスがそこにいることは、途中追い詰めた幹部から聞き出していた。

恐怖など微塵もなかった、正義はかならず勝つのだと、挑戦したものは必ず勝利するのだと、この世の歴史が勝者によつて紡がれていることにまだ気づいていない少年らしくそう思っていた。

彼は社長室の扉を開いた、その向こうには冷たい目があった。

飛び起きるようにして、グリーンは目を覚ました。

彼は混乱していた。だが、それは激しくリズムを取る心臓にでもなく、どつと吹き出している汗にでもない。

悪夢を見ることには、ここ最近慣れていた。もう何度、夢の中でワタルに勝利しただろうか。

だが、その悪夢を見るのは久しぶり、否、初めてのことだった。どれも知らないはずの、彼のもう一つの悪夢。自分自身だって、それは記憶の奥底に封じ込めていたはずだった。

その封印が解かれた理由は、考えずともわかる。ロケット団の復活は、たとえそれを拒絶しようとも様々なメディアを通して彼に語りかけてくる。それに関連する記憶を、彼の潜在意識が呼び起こしたことは、あまりにもわかりやすい。

気がつけば、起き上がらせた半身を支える腕に、ピカチュウが頬を擦り寄せていた。小さく鳴く彼は、グリーンの心境を、どれほど理解

しているのだろうか。

「すまん」

その頭をなでながら、グリーンは自身の動揺を反省していた。ピジョットも、サンダースも、寝床からグリーンを案じていた。

その動揺を、恐怖を、晒すわけにはいかなかった。

自分はもう、子供ではないのだから。

社会人として、ジムリーダーとして、ポケモンたちの親として、強くならなければならない。

「さて」

不安を振り払うようにベッドから立ち上がって、彼は身支度を始めようとした。

今日はジムに客が来る。

よく知った名、チャンピオンであるワタルからの紹介だった。詳細は伝えられていないが、何かに悩んでいるのだという。

自分が悩む側でいることは許されない。

その挑戦者にしろ、コウタにしろ、グリーンは悩めるトレーナーたちを導かなければならないのだから。

不遜。

目の前にいる少年は、そう称されることを望んでいるのかと思ってしまうほどに、誰も寄せ付けぬような、それでいてそれがまるで許されているような雰囲気を纏っていた。

伸ばした赤毛、ギロリとコチラを睨みつける三白眼。ここがカントー最難関ジムであることをまるで知らないかのような佇まい。

コウタなどは、すでにそれに飲まれかけている。彼はまるで怖いものを見るようにその少年を眺めていたし、耳をすませば生唾を飲み込む音すら聞こえてきそうだった。

だが、グリーンはそれにほんの僅かな恐怖すら覚えてはいなかった。

それは、もちろん彼自身が何も恐れぬ強さを持っていることも理由の一つではあったが。最も大きな理由は、彼のそのような雰囲気の種類は違えど昔の自分を見ているようだったからであった。むしろ、どちらかと言えば恥ずかしい。

「よく来たな」

グリーンは彼に笑いかけて続ける。

「俺はグリーン、このジムの責任者だ」

「……シルバー」

少年、シルバーは差し出された右手を握らなかったが、その代わりに言葉を続けた。

「あんとと戦えと、あいつに言われたんだ」

あいつ、とはワタルのことであろう、この場にはいないとは言え、ポケモンリーグチャンピオンに対し、大した態度だ。

「ワタルさんとはどんな関係なんだ？」

「どうだっていいだろう」

「おいおい、会話のキャッチボールしようぜ」

やはり微笑みながら、グリーンが言った。

別に無理をして作った微笑みではない、彼は本心からシルバーの態

度を微笑ましいものだと思っている。まるでコラツタが必要以上に周りを威嚇するような、それを上回る力を持っている人間からすれば滑稽であるとすら思えるようなものだった。

「まあ、いい。それじゃ早速手合わせするか」

そう言つて距離を取ろうとしたグリーンに、シルバーが言った。

「本気で来いよ」

「ん？」

「俺を試すような真似はやめて、本気のパーティで来い」

どこかで聞いたような提案だった。

だが、グリーンはそれに首を振る。

「駄目だな、物事つてのには段階つてもんがあるんだ。俺に本気を出させたきや、それなりの結果を出さなきゃならん」

不服気な表情を見せるシルバーに、「ああ、そうだ」と、グリーンは続けた。

「まずは、ウチのジムトレーナーと戦ってもらおうか」

突然指さされたコウタは、それに驚きの表情を見せた。

だが、それは不思議なことではなかった。ジムリーダーが挑戦者の實力を見るためにジムトレーナーの相手をさせることは、ジムリーダーの不必要な仕事を増やさないことでもあったし、ジムトレーナーにとつても貴重な経験だ。

だが、コウタにとつてはそれがジムトレーナーとしての初戦、しかも相手が何だか怖い人だ。

そもそも、押しかけるようにグリーンのもとに飛び込んだ自分が、ジムトレーナーとして正式に活動する日が、まさかこんなにも早く現れるとは思っていなかったのだ。

「無理ならいいぞ」

グリーンは本心からそう言った。だが、そう言われてしまえば、もう誰も断れない。

「やります」と、コウタは一つ息を呑みながら答えた。

「別に勝たなくてもいいんだ、ただ、お前を出せる全力を出せばいい」「はいー！」

コウタは納得したようだったが、シルバーはそれには不満であるようだった。

「雑魚だろう、そいつは」

彼はコウタを指差して吐き捨てる。彼から見れば、コウタはそんなのだろう。

「お前もな」と、グリーンは振り返りながら答えた。

その言葉に、顔を赤くしたシルバーが歯を食いしばるほどの屈辱を覚えたことは想像に難くない。

だが、グリーンから見れば、シルバーはそうなのだ。

☆

『アクアブレイク！』

水を纏ったオーダイルの前足が、サンドパンを捉えた。

レベルの違う相手の、それも弱点を突く攻撃、吹き飛んだサンドパンがそれに耐えられるはずもなく、ぐったりとして戦闘不能となる。

コウタはうなだれながらサンドパンをボールに戻す。これで彼の手持ち三体がすべて戦闘不能となった。

片やシルバーは一匹も手持ちを欠いてはいなかった、否、それどころか、彼はこの手合わせに於いて、オーダイル以外の手持ちを繰り出しすらしなかった、その一匹で、コウタを蹂躪するには十分だったのである。

「よくやった」

グリーンのその言葉は、その手合わせに勝利したシルバーにはなく、無様に敗北したコウタに向けられていた。

彼の肩を抱きながら更に続ける。

「レベルの違う相手だった。だが、技の選択に大きなミスはなかったし、何より、戸惑わなかった。大きな成長だぞ」

それは、徹底的な敗北をしたコウタに対する励ましの意味が多少

あつたかもしれないが、その全てが、無きところからひねり出した称賛なわけではない。

相手のレベルが高いことは、繰り出された最終進化系からも想像することが出来ただろう。しかし彼は、それでも諦めず、なんとか戦況を有利に傾けるように努力していたし、ポケモン達にも、その意志が伝わっていた。結果は手も足も出ぬ敗北であつたかもしれないが、初めてあつた時に比べれば、できすぎと言つていいほどの成長だつた。

コウタはその賞賛に複雑そうな表情であつた。当然だ、たとえその賞賛が真実だつたとしても、伴わぬ結果に素直に喜べるものか、努力は、勝利でしか実らない。

「時間を無駄にした」

シルバーは、やはり無然とした表情で言つた。それには、コウタの弱さに対する侮蔑も込められていただろうし、そのようなトレーナーを褒めるグリーンに対してのものもあつただろう。

「さつさと準備しろ」

「余裕がねえなあ」

グリーンはため息を吐き、コウタを下がらせてからボールを取り出した。

強気になるだけのことはある。

少なくともあのオーダーは大したレベルだというのがグリーン
の判断だつた。

あとは、パーティのバランスがどうか。

彼はジム専用に調整されたパーティを選択した。

それで十分そうだつた。

『バレットパンチ』

カイリキーの拳が、ニューラの小さな体を捉えた。

的は小さいが、ニューラの『ねこだまし』をギリギリまで引きつけたことで、それを十分に遂行できるだけの距離を手に入れていた。

進化前であるニューラの『ねこだまし』など、恐れるようなダメー

ジではない。

対象的に、ニューラにとってカイリキーの『バレットパンチ』は十分すぎるほどの脅威だった。鋼のように握りしめられた硬い拳は氷タイプであるニューラには厳しい。しかも、交換先としてその背後に控えるゲンガーにもプレッシャーを与える選択だ。安易に『マツハパンチ』を選択していたならば、交代先のゲンガーに無効にされていた可能性もあるだろう。

舌打ちをしながらニューラをボールに戻したシルバーは「行け！」と小さく叫びながら次のボールを放り投げる。

現れたのはこうもりポケモンのゴルバットだった。それは羽ばたきながらカイリキーの上空に陣取る。

フィールド外からそれを眺めていたコウタは、シルバーの選択の淀みなさ、それでいて選択を間違えぬ正確さに感心していた。

格闘タイプであるカイリキーに対し、毒、ひこうタイプであるゴルバットを繰り出すのは、限りなく正しい選択のように思えた。そりやあ時間をもらえればコウタにもその答えは出せるだろうが、手持ちのポケモンがやられてしまった動揺や、すぐにポケモンを繰り出さなければならぬという焦燥感の中から、その選択を果たしてできるだろうか。

そして、彼はこうも思った。

こんなに強いそのトレーナーに、一体何が足りないのだろうか。

『つばめがえし』！』

『ビルドアップ』』

上空からの攻撃に、カイリキーは上半身に力を込めて備えた。

弾丸のように迫りくるゴルバット、スピードはそのまま彼を鋼鉄のように硬く冷たい刃にその姿を変えさせるだろう。

弾丸が、カイリキーの体を切り裂こうと直撃する。だが、カイリキーはそれに耐えて攻撃の体勢をとった。力を込めた上半身は、彼の肉体を鋼鉄のように硬く冷たい盾にその姿を変えさせていたのだ。

「戻れ！」と、シルバーはゴルバットをボールに戻す。

そして、新たにオーダイルを繰り出した。

これまでのポケモンたちと違ってフィジカルでカイリキーに劣ることのないそのポケモンは、その重量感で地を鳴らすように着地し、カイリキーの前に立ちふさがる。

だが、カイリキーはそれに圧倒はされない。ジム専用の調整されたポケモンとは言え、彼も歴戦の猛者であることに変わりはない。

準備していた攻撃を、そのままオーダイルに打ち込む。

「かみなりパンチ」

振りかぶられた拳が、オーダイルの胴体にめり込んだ。

理屈はわからないが、電撃を纏ったその拳は、水タイプであるオーダイルに効果が抜群だった。

ゴルバットの弱点を的確につきながら、後続のポケモンもケアする選択肢。

コウタはその選択の的確さに息を呑んだ。対戦相手であるシルバーがそれに協力しているはずがないのに、グリーンは自分の思い通りに戦況をコントロールしている。

だが、オーダイルは胴にめり込むカイリキーの腕を掴んだ。

「『ばかちから』!!」

そのまま雑にカイリキーを振り回し、頭から地面に叩きつける。

ちからづくな攻撃だが、それは最も単純で強力な要素でもある。

カイリキーはなんとか身をひねりながら受け身を行おうとしたが、それでも叩きつけられた衝撃に思考がぐらつく、どれだけ受け身に優れているようと、衝撃すべてを消せるわけではない。

「なるほど」

グリーンはそうつぶやきながらカイリキーをボールに戻す。

視線の向こうには、自身をにらみつけるシルバーの目があった。

「大体、わかった」

つぶやかれたその言葉は、シルバーには届かなかった。

☆

対戦場の中央で、シルバーとグリーンは向かい合っていた。

その傍らにはコウタが立っており、その試合を録画したビデオカメラを操作してその中身を取り出している。

シルバーは顔を赤くし、歯を食いしばっていた。

屈辱と、羞恥でいたたまれなかった。

「悪くない試合だった」

そのジム戦は、グリーン勝利にて幕を閉じた。

だが、コウタはシルバーを哀れだとは思わなかった。グリーンという言葉通り、その試合は、彼の圧倒的な勝利ではないように見えた。

シルバーのオーダーは最後まで根性を見せていたし、そもそもシルバーのトレーナーとしての能力も素晴らしいと思えた。故郷であるコガネシティのジムトレーナーでさえ、彼より優れているものはないだろう。彼が不遜な男であることを差し引いても、その能力を賞賛すべきトレーナーだった。

だが、シルバーにとって、その言葉は賞賛には当たらないようだった。

コウタはそれを不思議に思う、もし自分がそれだけの試合をグリーンと行い、そのようなことを言われれば舞い上がってしまうだろう。たとえ負けたとしてもだ。

「どうして」と、シルバーは声を震わせて続ける。

「どうして、勝てなかった」

絞り出したようなその問いに、グリーンが答える。

「お前さんの腕は良い、大したもんだ、バツジは持っているらしいが、そのうち七つは確実に取ることができようだろう」

だが、と言って続ける。

「パーティのバランスが悪い」

ピクリと、シルバーはその言葉に反応した。それは、これまでで初めての反応だった。不遜で、全てを傷つけようとするような雰囲気を持つようとしていた少年に不釣り合いな、それでいてその見た目通りに少年らしい、可愛らしいもの。

「最終進化系ではないポケモンが三匹ほどいたが……それはどうしてだ？」

それは、ゴルバットとニューラ、そしてレアコイルを指していた。二匹ともクロバットとマニューラ、ジバコイルという最終進化系が存在し、基本的にはそれに移行しない理由がない。

「お前ほどのトレーナーなら、造作も無いことだろう」

コウタ、と、グリーンはジムトレーナーの名を呼んだ。

彼が背筋を伸ばしながらそれに返事したことを確認してから続ける。

「ゴルバットとニューラ、レアコイルの進化方法は？」

「はい！ ギョルバットはトレーナーへの忠誠と愛情から、ニューラとレアコイルは特殊な状況下でのレベルアップです！」

「そのとおり、よく勉強したな」

返事を返さないシルバーに続ける。

「知らないわけじゃないだろう？」

その問いに、シルバーはようやく「ああ」と答えた。

「どうして進化させない？」

「ニューラは爪を持ってねえし、ゴルバットは……俺に懐かぬえからだ」

ふうん、と、グリーンは鼻を鳴らした。

「お前、それ本気で思ってるのか？」

その問いに、シルバーは再び押し黙った。

グリーンから見て、ゴルバットがシルバーになついでいないなどありえない。あれだけの戦いをするのだ。例え苦い漢方を使われたとしてもそうそうその愛が薄れるとは思わない。

そして、シルバーがそれを知らぬとも思わない。

だが、シルバーは首を振ってから答える。

「……関係ねえよ、たとえゴルバットが進化しないとしても、他の奴らで相手を潰せば」

「駄目だ、それこそがお前の弱さ、お前がもう一つ突き抜けない理由だ」

いいか、と言つて続ける。

「ゴルバットやニューラのポテンシャルの低さが、お前の戦略の幅を狭めている。コウタ、しっかりメモしとけよ」

彼はジムトレーナーがメモとペンを取り出す時間を作ってから続ける。

「この試合、お前の敗因は、エースであるオーダーイルを中盤で消費しすぎたからだ。もしオーダーイルがカイリキーの『かみなりパンチ』を受けていなければ、まだわからない試合だった。だが、現実はそのを受けれた。どうしてだ？ わかるか？」

シルバーはそれに答ええない。理解できないのではない、理解しているが、それを口にしてしまえば、それを認めてしまえば。

「答えは単純だ、その前のニューラとゴルバットが、カイリキーに有効打を与えられなかったからだ。そして、お前はそのツケの支払いをオーダーイルに頼った……だから終盤で崩れた」

反論しようがないほどに、あまりにも適切な正論の連続だった。そして、シルバーはそれを理解しているだろう。

「じゃあ」と、シルバーは拳を握る。

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ。どうすりゃゴルバットは進化するんだ」

その問いに、グリーンが答えた。

「もう一度やり直せ、ポケモンと、自分と向き合え。お前自身が気づかなければ、状況は好転しない。お前は能力もセンスもある。三年、イヤ、二年もすればそれに気づける」

「駄目だ」と、シルバーはそれを拒否した。

「そんな時間はない、今すぐ強くならなきゃ、俺は……」

「何を焦ることがある。お前はまだ若い、時間はいくらでもある」

「時間はねえんだ!!!」

突然、シルバーが声を張り上げた。彼は右手でグリーンの胸ぐらをつかむ。

コウタはそれに反応し、シルバーを引き剥がすべきが悩んだ。だが、その当人であるグリーンがそれを受けて入れているから、何もし

ない。

グリーンも、その理由がわかるわけではなかった。ただ、今更シルバーが何をしようと、己がそれを処理するのは余裕であろうという強者の余裕が、シルバーの次の言葉を待つ余裕をもたせている。

「今強くならねえと、今すぐ強くならねえと！ 俺は……俺は……」

彼はゆっくりとグリーンの胸ぐらから手を離した。その行動に何の意味もなく、むしろそれが滑稽であることを、彼は理解した。

その両手をだらりと下げながら続ける。

「俺は、ロケット団に勝てない」

ロケット団。

その単語に、グリーンとコウタは背筋を伸ばした。

グリーンは項垂れるシルバーの両肩を掴んで問う。

「どうしてその名前が出た……なんでだ？」

シルバーはしまったと思った。その名をひけらかさそうとしたわけではない。だが、不意に溢れ出した感情が、それを放たせただけ。

だが、肩に感じる力の強さに、彼は痛み以上のものを感じた。

彼は知っている。

レッドという、カントー地方の英雄が、ゴールドと同じく行方不明になっているということ、そして、目の前にいるグリーンという男が、その盟友であったこと。それを捜索していること。

だから彼は、それを言った。

「知り合いが……行方不明になった」

その情報に、グリーンは間髪入れずに問う。

「名は？」

「ゴールド」

「……なるほど」

その名を聞いたのは初めてではない。

一度はジムの挑戦者として、そしてもう一度は、同じく行方不明になったジョウトの人間として、マサキから聞いていた。

「マサキの家に行ったのはお前か？」

シルバーはそれに頷く。

グリーンは、ようやく、ワタルが彼を自分に紹介した理由を知った。大したものだ、たった一人で、マサキのもとに赴くところまで考えが及んでいる。

だが、その先をするにはあまりにも。

「手を引け」と、グリーンは真つ先に言った。

「お前じゃ無理だ」

シルバーはその言葉に目を見開いた。それは、彼のすべてを否定するようなことだった。

「ふざけるな！」と、彼はグリーンの手を振り払う。

「お前にそんな事を言われる筋合いはない！」

「お前じゃ、この騒動の大本である『教皇』の一派とは戦えない。俺達に任せろ、必ずお前の友人も救ってやる」

シルバーは、一瞬それに押し黙った。グリーンは知らないだろうが、ロケット団関係者であるあの赤髪の女との戦いが脳裏をよぎる。

しかし、彼は再びグリーンを睨みつけながら続けた。

「だから……お前が俺を強くすればいいだろうが」

「何の意味がある。それに、俺達に何の利があるんだ？」

シルバーは、一つそれに沈黙を作ってから答える。

それを言いたくはなかった、武器にしたくなかった。だが、今はそれに頼るしか無いように思える。

「俺は……お前らが知らない情報を持っている」

「なんだと？」

「ロケット団について、その内部について……俺は知っているし、知ることができる」

それは紛れもない事実だった。彼はそれをできるだけの人脈がある。

「……それを信じろと？」

「信じなきゃそれでいい」

今度はグリーンが押し黙る番だった。もしそれが本当ならば、シルバーを保護するのに十分すぎる理由であるし、また、彼の世話をする理由にもなり得る。

彼は一つ息を吐いてから続けた。

「それなら……一つ教えろ」

シルバーが沈黙をもつてそれを受け入れたことを確認してから続ける。

「ロケット団は、復活したのか？」

シルバーはその質問を鼻で笑った。あまりにも、彼の持っている疑問が、自分とは違いすぎた。

「いや、あれは復活じゃない。したっぱの構成員はその話に乗ったかもしれないが、幹部たちは関与していないはずだ」

「情報元は？」

「言えない……それは言えない」

「……もう一つだけでいい、何かそれを信じることのできる情報がほしい」

シルバーはしばらくそれを考えた、あとひと押しだった。

やがて、彼は決定的な情報を提示する。

「奴らのまとめ役は赤い髪の女だ。それより上がいるのかどうかは知らねえが、とにかく、赤い髪の女が関与していることは間違いない」

グリーンは、その情報に背筋が震え上がるものを感じた。赤い髪の女、それには心当たりがある。そして、彼女がロケット団の構成員であると仮定すれば、あの日あの公園で起こったことの、辻褄が合う。

目の前の少年は、自らが思っている以上に、この事件に深く関係している。

ここで彼を受け入れようが受け入れまいが、彼はこの件から手を引かないだろう。

「わかった」と、シルバーは頭を抱えながら言った。

「お前を鍛えてやる。少なくとも今以上には」

シルバーはそれに小さく頷いた。礼を言う義理はない。だが、当然ながらそれを拒否する理由もない。

「だが、条件がある」

グリーンはシルバーに手のひらを見せ、それを端から折りながら続ける。

「まず一つ、お前の手持ちの進化の手伝いはしない……俺は大方その原因の目星はついてるが、それをお前には提示しない……意地が悪いからではない、それでは意味がないからだ」

それにはシルバーも頷く。

だが、その二つ目の条件に彼は閉口した。

「二つ、お前には俺の監視下に入ってもらおう。目的が達成されるまでトキワジムトレーナーとして活動してもらおうし、俺の家に住んでもらう」

それは、シルバーがこれまで生きてきた環境というものを考えれば、到底ありえない提案だった。

だが、グリーンは彼のそのような境遇をおおよそ理解していたからこそ、その提案をした。鉄砲玉のような少年なのだろう。監視下に置かねば、いつ単独行動を取られるかわからない。

シルバーはそれを受け入れるまでに時間をかけていた。

絶対的に不服なわけではない、たったそれだけで強さが手に入るのならば、悪くない条件だと言える。

ただ、彼を戸惑わせていたのは、そのような生活に対する圧倒的な経験の無さであった。

これまで一人で生きてきた、これからも一人で生きていくと思っていた。

やがて、しばらく考えてからシルバーが口を開いた。

「……あんたが不安に思ってるようなことはしない……だから、週に何度かは干渉されない時間をくれ」

「まあ、素行次第では考えよう」

「あと、俺への手紙は絶対に見ないでくれ」

「その程度の常識はある」

「それなら、その話を受ける」

そうか、と、グリーンは一先ず安心した。意固地になられ単独行動を取られるのが最も怖かった。

「それなら、ポケモンを回復させたら早速家に帰ろう」

そう言って、彼はコウタを指差して続けた。

「部屋はコウタとシェアしてくれ」

その決定に、シルバーとコウタは、その日最も複雑な表情でお互いを見やったのだった。